

続々 国民同胞感の探求

—36年夏大学生との“第二次雲仙合宿教室”から—

大学教官有志協議会
国民文化研究会
共 編

理 想 社

は し が き

この一、二年の間に、「国民同胞感」という言葉が、あちこちで人々の口の端（は）にのぼるようになった。それは本書の前二著「国民同胞感の探求」および「統編」について、有識者の方々のご推薦がはずかかって力あったためと思われる。とくに小泉信三先生が、昨年毎日新聞の紙上にその読後感をご紹介くださったことが、大きな機縁となったことを心から感謝したい。いずれにしても、このような国民信和を目ざす言葉が、各方面で口にされ拡（ひろ）がってきたことは、国民相互の信頼感の復活再生を願うものにとって、一つの喜ぶべき兆候である。

しかし他方、いまの世界および日本の現状は、指導者、学者、文化人など良識ある人々の知能と捨身をもってしても、なおいぜんとして冷たい対立を解消させることが出来ず、逆にその平和的な解決は、いっそう困難になったようである。こうした精神的な重荷を背負った世界の人々の中には、改めて東洋の哲学、宗教、学間に真剣な関心を示すものも出てきた。ことに東西の交流が気軽に出来るようになるにつれて、欧米の学生たちも、日本の学生と交際して日本の個性を知ろうとする積極的な態度を見せるようになってきた。

国籍を異にする人々の交わりでは、とくに相手方の挙措動作や発言の中に、個性豊かな精神力をさがし求めようとする自然な欲求がある。したがって、国の伝統を軽蔑(べつ)したり、祖国への忠誠心に欠けるような人は、いきおい国際外交の舞台でも、日常の交際においても、相手方から軽侮され、相手にされなくなる。さきごろ(三十七年六月十九日)、産経新聞の社説に次のような一文が載っていた。

「ミュンヘン大学卒業後、世界無銭旅行を続けている西ドイツのフランツ・グルーパーという一青年が、日本の印象記をつづった中で『東京の喫茶店で、ぐうぜん七人の東大生と知りあった。彼らは西ドイツの最近の経済発展を数字や統計で証明したが、その方法や論理は驚くほど明解だった。話はゲルハルト・ハウプトマンの演劇やゲーテ、シラーの伝記にまでおよんだ。その知識は実に豊富であった。しかし彼らは日本のことについては、ドイツ文学ほどくわしくはないことも事実であった』という意味の感想を述べている。

またアメリカの知識人も、日本の留学生はそれぞれ専門の知識をもっているが、日本のことは知らなさすぎる。といい、……欧米人は日本人よりも、その国の文化と歴史にかんする知識は豊かである。……とにかく外国人からこのような欠陥を指摘されたことについて、わたしたちはあらためて日本の教育、学問のあり方をすなおな気持ちで反省し、吟味しなければならぬと思う。……」

この社説と同じように、われわれもまた日本の教育およびいまの学問のあり方について、いくたの疑問点があることを痛感する。ここ数年來、われわれが営んできた「合宿教室」は、若い学生諸君とともにそれらの問題とまともに取り組み続けてきた。合宿は毎年夏一回行なわれすでに六年を経過しており、ことしも第七回目が熊本県阿蘇山麓で準備されている。それはこの世代における一つの行き詰まりを、人の心の持ち方いかんによって解決出来るに違いないと信じて営んできたのである。そしてお互いに信じ合うことが出来なくなったと思ひ込んでいる原因を追求して、それから抜け出そうとする勇氣と努力と、それを励ましあう友情と人の真心とが、そのためにどんなに必要であるかを体験し合ってきた。さらにそのことを学問の研究方法の上に確認し、確認していかなくてはならないと努力してきたのである。

われわれは祖国日本の長い伝統と、祖先の素直な情感とに万腔（くわう）の感謝と敬意をささげた。そして、進取の氣象にあふれた正しい前向き姿勢は、実は、古きものへの深い理解と憧憬（どうけい）の中から、湧（ゆう）然とわき出る「スピリット」「魂」にささえられるものであり、それによってはじめて普遍的な幅広い道が生まれてくると信ずる。そうではなしに、現実の対立の間をさ迷って、そこに国民が信じ合える道をさがし求めても、それは無意味である。対立の根源に向かつて、国民のひとりひとりが鋭い反省を加え努力し合う以外に、時代を打開する方法はないで

あろう。国民同胞感が、全国にくまなく浸透する日を招来させるために、われわれはかく信じ、かく行動しようとするものである。

ここに編集したものは、三十六年夏、長崎県の雲仙に、大学生を中心にして二百名のものが、三泊四日の「合宿教室」（第二次雲仙合宿）を行なったときの記録である。

本書の刊行に当たって、小泉信三先生、小林秀雄先生、木内信胤先生にはそれぞれ格別のご無理をお願いしたにもかかわらず、快くご協力をいただいた。すなわち小泉先生は、毎日新聞および著書「十日十話」に掲載された文章の転載をご快諾くださった。小林先生は、ご講演の原稿は一切活字にすることを許さぬご方針であられるのに、参加学生の一人である国武君の筆記したものに、ご加筆ご訂正くださった。また木内先生には、この春重ねてご講義をいただいたうえ、アメリカへのご出張直前のあわただしい折に、速記をていねいに補正してくださいました。「国民同胞感の探求」の三部作（初編、続編および本書、続々編）の完結に当たって、このお三方のご協力には深甚の謝意を表したい。

つぎに本書の編集については、前二書に欠けている合宿教室の特徴をご紹介することにとくに力を注いだ。参加者たちが就寝したあとで行なわれる「夜の検討会」にかなりの紙数をさいたのはそのためである。その内容を速記をもとにして、ありのままに本書に掲載した。それはいわば、楽屋裏の公開であると同時に、この種の行事を企てられる方々のために、ご参考になることと思ふ。

また本書のいま一つの特色は、参加学生が、帰りがけのわずかな時間に書いてゆかれた「はしりがきの感想文」を紙面の許す限り数多く掲載したことである。乱雑に書かれたものや誤字なども少なくなかったので、文意をそこなわないよう若干筆をいれた。長すぎて一部カットしたものもあるが、賛否いろいろの意見を集めたつもりである。

なおことし八月下旬に行なわれる第七回合宿教室（第二次阿蘇合宿）では、班長、副班長にはじめて学生諸君を当てることになった。その諸君はこのため三月の休みを利用して東京で一週間の学究合宿を送った。さらに八月の合宿教室開始直前の三日間、合宿地における研究生活によって研鑽（さん）することになった。それは「合宿教室」がこれまで四十歳前後の国民文化研究会会員の手で直接指導されてきたことと考え合わせれば、このことは大きな前進ということが出来る。なぜならそれは、まさしく「時代の断層」を具體的に一つ乗り越えたことを意味するからである。この学生幹部への指導制の移行は、決して容易なことだとは思わないが、われわれはそれをぜひとも成功させていきたいと念じている。

昭和三十七年六月三十日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき	一
国民同胞感	小泉 信三……九
学問の興隆のために (正しい研究方法を求めて)	一五
第二次雲仙 “合宿教室” のあらまし	一六
“合宿教室” における講義		
国民同胞感の育成への努力と指向	小田村寅二郎……一七
学問と人生	津下 正章……二〇
EECをめぐる世界の経済と日本の経済	木内 信胤……二〇
学生時代を回顧しつつ現代の学生諸君に	花田 大五郎……二二

吉田松陰を中心とした幕末日本の文化精神……………川井 修治…一五

小林秀雄先生のご講義「現代の思想」……………早大生 国武 忠彦記…一六

“合宿教室”運営の焦点

一 “班別討論”と“夜の検討会”……………一〇一

二 大教協・国文研会員の所見発表……………一〇六

三 合宿教室の総括的所見……………一一五

はしりがきの感想文から……………(七十七編) 一三三

あとがき……………一三四

国民同胞感

国民同胞感

——小泉先生の次の一文は、昭和三十六年八月二十三日の「毎日新聞」紙上に掲載されたものであるが、先生ならびに同社のご厚意により、ここに転載させていただいた——

小 泉 信 三

一二冊の本を読んで思う

「国民同胞感の探求」及び「統国民同胞感の探求」という本が、出版され（理想社）贈呈されたのを、私は注意して読んだ。

それは今日、日本人一般、殊に青年層の間における国民同胞感の喪失を憂慮する篤志の人々が発起して、一昨年（昭和三十四年）と昨年（昭和三十五年）、九州で（一度は阿蘇、一度は雲仙で）青年学生とともにしたその夏季合宿の記録である。その参加人員はそれぞれ約百六十人、二百人、日数は

いずれも四泊五日であり、むろん一〇〇パーセントの成功を取めたとはいえないけれども、しかしはなはだ多くの価値ある収穫をあげ得たことは、たしかと見える。講義と質問、いわゆる班別討論（一種のチュートリアル・システム）そうして、何よりも数日の寝食をとにしたそのことによつて、参加者たる青年（男女）と主催者側の壮年（または老人）とは、互いの理解を進め、直ちに、その心を一にしたとはいえないとしても、たしかに相近づかせたとはいえると思受けられる。

この催しは、川井修治氏その他の大学教官有志協議会、小田村寅二郎氏その他の国民文化研究会の人々によつて企てられたものであるが、この両団体の前者はその名のごとく大学教官中の有志者、後者はそれぞれの職務を持つ社会人から成るのであって、それはともに時間と資力の余裕の少ない人々と察せられるが、現在の日本国民に見る思想的断層、または思想的分裂の現状を安からずとして、あえて私費を投じ、また有志の知友に説いてこの企てに発足することになったのであるという。今年の夏にもさらにそれを続けて行なつたから、その報告もやがて発表されることであらう。

年齢による思想の隔絶

青年と壮年、あるいはそれ以上の年齢者との間に思想の隔絶があることは、それはいずれの国、いずれの時代にも免れがたいことであるが、今日の日本の現状は、法外と称すべきかも知れぬ。そうして、それは結局十六年前の敗戦に帰すべきものが多いと思われる。

終戦直後、よく虚脱ということがいわれたが、たしかに日本国民は敗戦によって精神的虚脱に陥った。心の張りも、人として、国民としての誇りもみな失って、ただすべての価値の否定にわずかに慰めを見出すという精神状態に、多くのものが陥ったのは、ある程度諒（りょう）とすべきところがあると思う。そうして、このような精神状態は、当然マルクシズムのために肥沃（よく）の土壌となる。マルクシズムは、すべての精神的産物を経済生活の反映として説明し、崇高とか壮烈とかいう行為を否定するように見える。また、それは人の行為に対する道徳的責任から解除するように解される。なかんずくマルクスが、人のその祖国に対する愛情を嘲（ちょう）笑して「労働者は祖国を持たぬ。我々は彼らからその持たないものを奪うことは出来ぬ」といった「共産党宣言」の一句は、戦時中誇張された愛国主義によって過度の興奮を強（し）いられ、次いで敗戦によって極度の絶望と幻滅の底に突き落とされた多くの日本人の耳には、一時、かえって快いひびきを伝えたでもあらうと、察しられる。

さらに、常に寝返りの早い知識人というものがある。彼らのあるものは、戦時中しきりに皇国聖戰的言論に精出したのであったが、一たび敗戦に会うと、またたちまち転身して自国嘲笑と宗旨をかえた。心の用意のなかった教育者中の多くの人々が、この変転に遭（あ）って当惑し、動揺したことは、ある程度同情し得る。そうして、学校教科書というものはすべて書きかえられ、日本の少年青年はそのようにして教育されることになった。彼らのあるものが、極めて自然に日本の歴史と伝

統と文化に対して軽蔑（べつ）の心をもって成長するようになったこと、また、それがよいことと考えて、強いて力（つと）めてそれにならうものが出たことも、ある程度やむを得ない成り行きであったといえるのである。

阿蘇や雲仙の合宿教室に参加した若い人々の個々の履歴は記されていないが、その人々の中に、右のような教育を受け、そのような思想の中に成長したものが多くあっても、それは少しも意外ではない。そうして、その青年らと主催者側の年長者の思想との間に越えがたい溝（みぞ）のあることが痛感されることも、一人は避けがたいことであろう。阿蘇合宿の記録の初めに、参会者が、そのような溝を感じて動きがとれなくなった状況が左のように記されている。

「このような思想に関する本質的究明と四つに組んだこの『合宿教室』は日程半ばで思いもかけぬ大きな難関にぶつかってしまった。主催者側と参加者側の双方が、お互いに真剣さを増せば増すほど、意志の疎通がむずかしくなっていた。両者の間には、相互の理解をさえぎる、つかみどころのない空気がいつしか広がっていったのである。それは戦前に教育を受けたものと戦後の教育を受けたものとの間にある『時代の断層』ともいうべきものであった」（『国民同胞感の探求』二三ページ）

断層を取り除く努力

しかし、この苦悩を通じ、やがて戦前派の人々も戦後派の人も、なんとかこの断層を取り除くことは出来ないものかと、同じような謙虚さと忍耐とをもって取り組んで行き、そうして結局「険しいまの世の中にも、時代の断層をごまかすことなく、打破する道のあることが、はっきり実証されたようであった」という。「ホツとした安らぎの息づかいと、かるやかなほほえみが、老いも若きも男子も女子も、参加者のすべてにひとしくうかがわれたのは、四泊五日の『合宿教室』の終幕近くになってからであった」（二五―六ページ）

これは一昨年の記録であって、昨年はまた昨年の問題があり、今年は恐らく今年の問題があることと思われる。既刊の二冊の記録を読んで私の感ずることは、主催者や講師たちの考え方、説き方が常に正しく、また巧みであったとはいいがたい場合もあるが、しかし主催者の苦心と努力が決してムダではなく、最後にはむくいられたとは読者のひとしく感ずるところであろう。この両報告書が普通の意味で面白い読み物である訳でもないのに、第一のものは、出版後三月の間に三版を出し、第二のものも一カ月の間にすでに版を重ねているのは、世間同憂の人の少なくない事実を示すものである。

私はそれを心強く思う。

学問の興隆のために

—正しい研究方法を求めて—

われわれは最初に、日本国民の間に国民同胞としての一体感、信和感をよび戻すために、学問が重要な役割りを持っていることを強調したい。特にわが国の文化科学の研究方法に注目しながら、学問を正しく興隆させることを心から念願し、その研究方法の面においてはつきりした筋道を立てることに努力してゆきたいと思う。

思想、政治に関する学問が、正しい研究方法に基づいて追求されるかどうかは、国家の運命にもかかわる重大な意味を持っている。このことが国民の指導層、ことに教授、学生の間で意外に粗略にされ、等閑に付されてきたことを指摘しなければならない。

そこでまず、われわれが平素好んで使っている「科学的」とか「科学」という言葉の意味を考えながら、数学、自然科学、精神科学の区別と、その研究方法の相違について、簡単に解説したい。もともと、思想とか政治をあつかう精神科学の分野においては、精神科学にふさわしい研究方法が取られなければならないにもかかわらず、われわれは不注意にも、数学的思考法や自然科学的研究方法によって、しばしば思想や政治に関する学問の追求を進めているようである。

科学

形式科学——数学

経験科学——

自然科学

精神科学

右の表のように、科学とは学問ということと同義語に解するのが妥当であって、科学的社会主義などという表現は、表現自体としてもすでに問題を持っていると思う。しかしそれはそれとして、ここでは科学を大別して、形式科学と経験科学に分けたが、前者は純粹理論の学であり、理論それ自体の必然的發展を追求してゆく学問である。それに対して後者は、人間が実際に経験することができる事実關係をその研究対象として追求する学問である。したがって前者は、人間が実際に経験する事実とは無關係に理論を追求するものであるから、形式科学に属する数学においては、自然科学や精神科学に見られない全く独自の性質と研究方法とが存在し得るのである。

たとえば、三角形について考えてみた場合、われわれがノートや黒板の上に具体的に画く三角形は、人間がそれを書くという經驗的な事実を伴っているものであるから、確かに具象性を持っている。しかし幾何学でいう「三角形の内角の和は二直角である」という場合の三角形の内角の和は、さきに書いた具象性を持つ三角形とは關係なく考えられるものであって、三角形がどういう大きさ、どういう形のものであろうと、全く無關係に成立しているものである。いいかえれば、具象的な三角形は一つとして同じものではなく、相互の間に實質的な差異を持っているが、それらの差異を少しも問題としないで、三角形の内角の和が二直角である、とされるのである。それゆえに、このような数学という形式科学は、つねに時間と空間を超越して純粹に理論的な科学として規定され、同時

に純粹に観念的な科学として成り立っていることになる。

さらに幾何学における「点」の定義などは、このことをいっそう顕著に示す例である。その定義においては「点とは位置があって大きさのないもの」と規定されているが、われわれが実際に見ることができる「点」は、どんな小さな点であろうとも具象的な「大きさ」を持っており、決してこの定義でいうように「位置があって大きさのないもの」ではありえない。このように純粹観念や純粹理論を追求する場合と、経験の世界を追求する場合とは、全く正反対の結論が出ることさえあり得るのである。

そこでこのような数学（形式科学）のもつ性質に照らして、その学問体系がいかに膨大でまた整然として体系づけられているにしても、われわれはこの思考方法をそのまま経験的世界——人生の諸事実——の上にも当てはめていこうとすると、時に大きな間違いを起こすおそれがある。

ではどういふ間違いを起こすかという点、たとえばわれわれが平素ほとんど無反省に使い慣れている「多数決原理」も、その一例である。これはもとをただせば、形式科学の数学的な素質から出発しているのであって、このことを頭に入れて考えると、多数決原理の運用には、じゅうぶんな配慮が伴わなければならないはずである。

いうまでもなく数学においては、数の大小が、そのまま価値の大小に等しいと考えられている。

だが、それは観念的な「数」についてだけであって、いざ具体的な「物」の比較になれば、数の大小は必ずしも価値の大小と常に同一であるというわけにはいかない。たとえば五つの銀貨と三つの銀貨のどちらがよいかと尋ねられれば、だれでも五つの方がよいという。しかし人間のきらう蚊（か）とか蠅（はえ）などは、少ない方がよいというに違いない。つまり銀貨の場合と価値が逆になり、価値の大小は数の大小と反比例する。また五つの銀貨と三つの金貨を選択させれば、だれしも三つの金貨のほうを選ぶであろう。このように物の場合では、数の大小と価値の大小とは決して同一ではなく、常に正比例するとは限らない。ましてや人間の意見が相違するときに、どちらが正しいか——どちらの意見がより多く価値があるか——を決める場合、賛成者の多い方が常に正しくて価値がある、といちがいにはいえなくなる。ことに、その討論や議事が、あらかじめ決められたルールに基づいて誠実かつ正確に進められなかったようなときには、多数決によって採決され結論づけられたものも、果たしてどれほどの価値を持つか、きわめて問題になってくる。

もとより、物事を決める場合、多数の人々が良いと判断するところに全体の人々が従うことは、きわめて大切なことであり、それゆえに民主主義体制は常に多数決原理を基盤にして成り立っている。しかし、物事の是非を人間の頭数で決めようとするところに、前述した本質的な無理——形式科学と経験科学との差異に基づく——が、存在しがちであることを知れば、これをどのように排除

し得るかについて、当事者たちの「心の配慮」がじゅうぶんに用意されていなければ、多数決原理を採用した基本精神は、ついに生かされなくなってしまうのである。

さて、さきに多数決原理における議事は、「誠実かつ正確に」進められなければならないといい、いままた当事者たちにしかるべき「心の配慮」が用意されていなければならないと指摘したが、それは一体どういふことであるか。われわれはそれを追求しなければならぬ。

まず第一にいえることは、議事の審議、採決への意志表示に当たって、当事者たちは賛否双方の側とも形式科学的（数学的）思考法から離れて、経験科学的（精神科学的）思考法に立脚する必要があるということである。すなわち、当事者たちは賛否いずれの側も、その同調者の多数を獲得するの目的ではあるにしても、目的のために手段を選ばぬようなやり方は、当事者たちの良識によって堅く戒められていなければならない。すなわち、その議場における冷静な人心の働きを阻害し、あるいは議場を興奮状態にまき込むような戦術をとったり、許された範囲を逸脱した議事妨害の手段を乱用したりすることは、もっとも拒否され排斥されるべきものである。よく全学連系統の大学自治会などで見られるように、適当にアジテーターを配置して置き、表向きはいかにも多くの人々が、異なった角度から賛成ないし、反対の発言をしているように見せかける議場作戦などは、きわめて愚劣なやり方であり、人間を小馬鹿にして判断を誤らせる手段にすぎない。したがって、

このようなことに心を使う人たちの間では、すでに多数決原理の精神は死滅していると見るほかはない。この場合は多数決という結論を得ることだけが目的であって、議題を誠実に審議しようという人間的真面目(まじめ)さは、当初から存在していない場合が多い。だから、その人たちは数学的思考法だけによって、一見多数決と見られる偽りの結論を出そうとしているわけである。彼らはすでに人間関係の問題に、多数決原理を適用する基本的な理解に立っておらず、したがってそれに参加する資格さえ喪失しているのである。別の言葉でいえば、その人々の行動には、学問の研究方法上の混乱と誤りが指摘されることになる。このような学生自治会の集会や会合が、学問追求の場である学園内でも白昼公然と繰り返されるとすれば、それこそ学問への自己冒瀆(とく)であり、真理の探求にみずから唾(つば)するに等しい。それは学問の名において駆逐されるべきものでなければならぬ。ましてや大学の教官までがそれに迎合したり、扇動したりすることが仮にあるとすれば、それは日本の大学にとってこの上ない不名誉であり、学園の権威も完全に地に墜(お)ちてしまったというほかはない。本来学問の府は冷静な人間の良識の場であって、アジテーターの存在や介入を強く拒否しなければならないことはいままでもない。アジテーターによる共同作戦、共同謀議の企図に対しては、これを直ちに見破り、不成功に終わらしめるだけの直観力と勇気が、常に学園に内在していなければならない。

第二に、多数決原理についてわれわれが考えなければならぬ点は次のことである。多数決原理が、その原理を経験科学の世界に適用したことについての慎重な配慮が顧みられないまま、悪用され、不真面目に利用されたことを、人々はいささかも反省せず放任してきた。この結果、驚くべきことには、多数決原理と正反対の意味を持つところの「多数の横暴」「多数の暴力」という言葉を作り出し、それを流行させるに至ったことである。この言葉を作り出し、また使い出した人々は、もともと多数決原理のもつ深遠な意義など深く考えようともせず、その悪用と乱用を考えてきた人たちである。だから、いまさらそれを批判してみてもはじまらないが、その影響するところは、決して無視できないものがあるように見受けられる。

この言葉の意味するところは、本来「多数をたのんで無理押しすることは、横暴であり、暴力に等しいではないか」ということであつたはずである。多数決原理をとっている社会では、このことは確かに戒め合わなければならぬ点に違いない。しかしこの言葉を使い出した人たちは、いつのまにか「多少の不満なら我慢しようが、大きな不満はそうはいかない」といい出し、やがて「そういう場合には、多数の決定に従うことなどもつてのほかだ」と威猛(たけ)高な態度に変わつていった。そのうち自分たちは多数を制する見込みが当分立たないと知るや「多数は常に横暴であり、暴力である」という飛躍した意味を、その中に含ませながらこの言葉を使うようになった。さらに「真理はしばしば少数者側の主張にあつた。歴史がそれを示しているではないか。たとえばガリレ

オのごとく、ニュートンのごとく。だから少数者側の主張も多数者側の主張と同等に扱うべきである。それが人権尊重というものだ」というような言いがかりをつけ、それを正当化しようと努力して来たのである。そして暴力に報いるには暴力をもってすることも許されるべきだとして、少数派は暴力を行使することによって議事を妨害し、それを正当な行為であるかのように宣伝する。それに輪をかけるかのように国立大学の一部の教授までが、それは正当であると側面的に援護し、大新聞がそれらの論文や談話をそのまま掲載するため、そうした考え方がますます流行していく。こうして今日の世相に見られるごとく「少数の暴力」も「多数の暴力」も、ともに多数決原理のもとで両立し得るかのような時代を現出してしまったのである。

しかし、われわれはこの時代をただ暗く悲しく考えるだけが能ではなからう。日本民族は古来から苦難に会えば会うほど、道の本筋を求め直して時代を拓開して来た。この民族が正しさを求め続けた伝統は、同じ民族としてのわれわれ現代の日本人の血脈の中に、またその生命の中に、なお生きと受け継がれて来ているのである。さきにしるしたように全くの行き詰まりを見せている多数決原理の真義についても、われわれは、千三百年の昔にさかのぼって、聖徳太子のご著作の中に、珠玉のような言葉を見出すことができるのである。それは現代人にとって、覚醒(せい)の導きであり、警世の教えであると思われる。敗戦後古典を軽視してきた日本も、このような時代に際

会して、われわれの祖先がたどってきた真摯（し）な求道の足跡に、いまこそ謙虚にして真剣なまなざしを向けなければならない。

推古天皇十二年（六〇四年）太子が制定された憲法十七条の中の第十七条には

「夫れ事は独り断ずべからず。必ず衆と与に論うべし。（議論し合い相談し合う）少事は是れ輕し。必ずしも衆とすべからず。（する必要はない）唯大事を論うに逮んでは、若しくは失あらんことを疑う。故に衆と相弁ずれば、辭（自分のいうことは）則ち理を得ん。（筋道の通ったものになる）」

また第十条には

「忿（心にいきとおること）を絶ち、瞋（顔にいきどおりをあらわすこと）を棄て、人の違（たが）う（自分の考えと違うからといって）を怒らざれ。人皆心有り。心各執有り。（何かに執着をもっているものである）彼是（正しい）とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非（正しくない）とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず。共に是れ凡夫のみ。是非の理（どちらが正しいかということは）詎ぞ（どうして）能く定むべき。相共に賢愚なること（どちらが賢く、どちらが愚かだというようなことは）鑠（金属で出来ている耳輪）の端無きが如し。是を以て、彼の人瞋ると雖も、還（わが）つて（自分をかえりみて）我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従いて同じく挙え。（多数の人たちが良いと判断したことに従っていっしょに行動せよ）」

これら文章は読み方さえ出来て、二、三回繰り返し読めば、自然にその意味はだれにも理解できよう。しかしそこにこめられている作者の心意は、まことに深遠であるが、現代に生きるわれわれにとつても、そのままなずくことのできる道である。聖徳太子がみずからのご体験に基づいて述べられたこれらのお言葉は、いまなお生きた言葉として、今日の時代に生きるわれわれに呼びかけられているような心地さえするのである。われわれはこれらのお言葉の中に、太子がいたずらに高遠な理想を掲げようとせられずに、怒り、いきどおり、反目し合う人間性のありのままの姿を、虚飾なく凝視されて、それを肯定しながら、現実政治に当たられたお姿を敬慕のおもいをもってしのでのである。太子のお言葉はどれ一つとして無理がない。それは平凡に生きるひとりひとりの凡夫として、お互いが目覚め合おうとするごく平易な人生態度の中に、人々が相和し調和することの出来る道をさがし求めようとせられたためであらうか。第十七条といふ第十条といふ、それは多数決原理の向かうべきところを指示して余すところがない。多数の横暴とか暴力とか喧(かしま)しく騒ぎ立てる政治家や学生たち、またごさかしい策略を弄(ろう)して、会議をリードしようとするアジテーターらは、衆議を尽くそうとするこの太子の心意に、何か教えられるところはないであらうか。またこの憲法十七条の各所には、具体的かつ身近かな政治への道しるべが示されているが、とくに最初の第一条には、多数決原理にもっとも大切な要点が、鋭く説き明かされているのを見ることが出来る。すなわち第一条は、有名な

「和を以て貴しと為し、忤う（さからう）ことなきを宗（心がけ）と為す。人皆党（お互いに気の合った）人たちで結合すること）あり、また達れる者少し。」

とあり、後段には

「然れども、上和ぎ下睦びて、事を論うに諧いぬるときは、則ち事理自ら通う。何事か成らざらん。」

と示されている。この「上和ぎ下睦びて」の上下とは、当時の時代についていえば、地位の上下を意味するのであるが、同時に権力の座にあるもの、ないもの意も含めて考えられる。これを今日の各種議会における勢力分野に当てはめてみれば、上は多数党ないし多数派、下は少数党ないし少数派というふうに考えられよう。権力を持ち、多数を制している人たちに対しては「心をやわらげて少数派に当たるように努力しなさい」また、権力の座から離れている少数派の人たちに対しては、「親しみ深い心をもって、多数派と相対するよう努力しなさい」という意であろう。そして「事を論うに諧いぬるときは」とは「そのようにしながら、論議がかわされるとき、その討議にふさわしい態度と内容によって、すべての人々が同じように発言し合うことができるときには」という意味である。ここに「諧いぬるとき」の諧（かなう）という字が言べんに皆の字のつくりで書かれていることは、まことに太子のお心づかいの深さをしのばせるものといえるであろう。「諧」とは、「皆の人が発言する」という意味を示しているのだから、みんなが同じようにお互いの心に思うこ

とを、平等の立ち場において語り合う美しく気品のある会議が想像できるような気がする。

これに続き「事理自ら通う。何事か成らざらん」と結ばれているのは、「そのような会議や討論が行なわれるならば、その会議や討論における結論は、きっと筋道の通ったりっぱな結論に違いないだろう。そうした結論を生み出すことの出来るような人々の集まりであるならば、政治の問題に限らず、いかなる困難な事態に当面するようなことがあっても、その人々の真心と、真心の総和によって、すべてのことが成し遂げられるに違いないであろう」という意味である。その言葉はまことに平明で、柔らかな響きであるけれども、そこにこめられた信念は、実に人生の機微に触れた格調高い言葉として表現されている。

そこで、こうした聖徳太子の思考の仕方は、多数決原理の具体的運用について、このように教示しているだけではなく、さきにしるした学問の研究方法の区別に関しても、きわめて適切な道しるべとなっていることを次に指摘したい。

すなわち太子が推古天皇の摂政（せつしょう）になられた時代は、各氏族間の争闘が激化し、それが朝鮮に派遣されている日本の諸将に反映して、使臣が敵側に内通し、任那（みまな）日本府は太子が摂政に就任される十年前、ついに新羅（しらぎ）に完全に滅亡されてしまう。一方国内では、物部（もののべ）氏をほろぼした蘇我（そが）氏が専横をきわめ、ついに崇峻（すしゅん）天皇を暗殺すると

いう暗胆たる時代であった。すなわち、政治的に見て麻のごとく乱れた時代であった。太子は、内に氏族の専断をおさえ、外に当時の大国、支那の隋(すい)の威圧に屈せず、さらに仏教の採否を決するといふ重大時期に立たれた。このような動乱のさ中に、太子は現実のきびしい事態から逃避することなく、透徹した眼識で悲劇的な時代の様相をみつめられ、よくこれに対処された。こうした太子が、四十九年のご生涯(がい)を通じ、混沌たる人生に統一ある生き方を求め続けられたということとは、後に述べる精神科学の研究方法を、誤りなく体得されていたことの証左にほかならなかった。

前述した科学の分類についての図表に戻るが、形式科学に対して経験科学と名づけたものは、実証科学または実質科学といってもよい。さきにしるしたように、これが形式科学としての数学と異なる点は、研究対象が常に具象性、具体性を持っていることであり、その研究対象は、具体的事実であるという点である。それゆえに経験科学の分野における研究は、常に事実に対応してその問題を分析し研究していくものであって、研究の進行過程において研究者が注意すべきことは、常に事実と合致して研究が進められているかどうか、ということである。このように事実に着目していく態度が大切な要件であるから、架空な観念や、観念だけから引き出される理論を、研究過程で勝手に投入するようなことは、厳に慎まなければならない。同じく経験科学に属する自然科学と精神科学の相違については後述するが、両者ともにその研究について、常に事実との合致を求め、事実と

の照合を行なう点では、同じである。ただ自然科学の研究においては、実験という方法によって事実を確かめ、精神科学の研究においては、その研究者自身の体験によって確かめていくわけである。そしていずれの場合も、その科学において、いかに論理が整然として構成されていても、それが事実関係と矛盾する場合は、その理論構成は誤りであり、真理の名に値するものとはいえない。それゆえに自然科学においては「実験」が、精神科学においては「体験」が、ともにそれぞれもつとも重要な位置を占めることになる。一般には、前者の実験が大切なことは、子どもたちの教育の上でもよく理解されている。だが、後者における体験が、同じように重要視されなければならぬことについては、意外なほどなおざりにされているようである。大学における講義や、有名な教授たちの所論の中にも、この誤りが少なからず指摘されるのはきわめて遺憾である。なお、カント哲学、マルクス主義なども、精神科学分野における研究に当たって、科学性イコール合理性と考えたのは、この観点から大いに疑問視されなければならない。なぜなら形式科学における数学は、全く合理的方法に依存して研究を続けることができるが、精神科学の分野においては、超合理的ないろいろの法則が存在するからである。

次に自然科学と精神科学の差異について説明しよう。研究対象はさきに述べたように人生の事実、経験的事実であるから、根本的な差異はないと見てよい。しかし精神科学は、自然科学の成果

をもその研究対象に総合しとり入れていく点か、やや異なるといえば異なるといえよう。

そこで両者の根本的な相違は、その研究対象にはなくて、その研究方法にある。すなわち自然科学における研究では、その研究の主体者が、主体者自身の「人」を一応除外した心組みで研究を進める。いいかえれば、研究者自身の心に湧(わ)き起こる喜び、悲しみ、苦しみや感激といったようないろいろの感情や精神作用は、その研究対象の中に投影、投入しないように努力しながら、もっぱら、自分を取り組んでいる研究対象そのものを正確に研究しようとする。このため、自然科学の研究に当たっては、研究者に冷静な研究態度が要求されるのは当然である。それは自然科学の研究が持つ基本的な性質から生まれてくる要求である。死体を解剖し、重病人を手術する医者やメスさばきが、血の通わない物体を処理するような冷静さをもっているのも、自然科学者としての研究態度の一面を示しているといえよう。

これに対して、精神科学の研究は、生きている人間自体をその研究の対象とする場合でも、研究者自身の人間心理の動きを、そこに投射しながら研究を進める。たとえば歴史学を研究する場合でも、その時代に生きていた人々——日本歴史においては、われわれの祖先たち——が、どのように情感し、意欲し、行動したか、またその心情はいかなるものであったか、それらのことを出来得る限り正確に、そしてありのままには握ることが、研究の第一の要求点である。そのためには、研

究者自身が具体的に実在した歴史上の時点に没入し、研究者自身の心の中に、その時代の人々の真実の心情を、現実的によみがえらせ、古人の心と通い合うようにしなければならない。そこに歴史上の時点および人についての体験的な握が、曲がりなりにも達成されていくのであって、研究者自身の精神活動が、その時代の人々と研究者の心との間に、活発に繰りひろげられることになる。こうした研究方法は、単に歴史学だけにとどまらず、古典研究や国文学研究においても、同じように要求されるべきものである。また外国文学や世界史上のいろいろの人物について、その著作や言行を通じてそれらを学ぶ場合にも、同じような基本的態度が用意されなければならない。もともとわれわれ人間の生命は、他の生命に触れることによって、はじめて真の意味における生命となるのである。それが生命の原則である。古典を読むことの真義は、古典の生命に触れながらそれを読むことであって、われわれは古典を読みながら、そこにあふれる生命を感得することが出来るようになるなければならない。古典の言葉を通じ、その言葉の魂——言霊（ことだま）に触れ、そこに表現された人間精神に直接触れ、感応することによってわれわれの生命が充実されていくのである。このようにして読書によって著者の真情をくみとり、研究者自身の生活体験の中に吸収同化しながら、学問の追求に当たるのでなければ、精神科学の分野における学問の研究は、決して正確に進めることは出来ない。社会科学、文化科学といわれる諸学問もまた、同じくここにいう精神科学と同一系列のものであることを考えれば、その研究態度、方法も、これと同じであることを知るべきで

あろう。

したがって、昨今よくいわれる唯物史観が、現在われわれが立っている時点における、われわれの思惟と概念にすべての価値判断の根拠を置き、その公式を基礎にして古い時代の時点を、またその時代の人を、その公式分類の中に当てはめて済ましていることや、その時代の特徴をその公式に合致するように拾いあげ、自己の持つ史観の証明に役立たせようとしている態度などは、研究方法論の上から見ても、重大な誤りを犯しているものといわねばならない。精神科学、社会科学、歴史哲学の分野における研究は、本来研究者自身の異常なまでの精神的労苦を伴うものであって、安易な理論構成に頼ることを避け、骨身を削るような努力の累積がなければ完成し得るものではない。

このように精神科学の研究方法を見てくると、この研究成果がいきおい主観的な性質を帯びてくることに、だれしも気づくであろう。そこでこの研究成果の主観性をどのようにして脱却し、客観性の高いものにしていくかは、精神科学の研究における、もつとも困難で、しかも重要な要件となってくる。

まず第一に心がけなければならないことは、研究主体である自己自身が、研究対象全体に対して、常に素直に没入していける用意が必要である。換言すれば、千変万化し、ひとときも静止することのない宇宙人生をその研究対象とするものであるから、研究者自身はその対象の動きに即応し

順応しうるものが大切である。しかもここにいう順応とか没入ということは、その対象に共鳴し共感することのできる博大な精神感情を平素から身につけておくべきことを要求しており、決して付和雷同的な態度をさすものではない。要は人生の諸事実に対処して、その実体をありのままに認識し得ることをいうのである。それゆえに、我執や、排他的独善的な人生態度では、大きな活動、発展は望むべくもないことはいうまでもない。さきに聖徳太子の十七条憲法のお言葉を引用して、「事を論(あげつら)うに諧(かな)いぬるときは、事理自(おのずか)ら通う」という個所を説明したさいに、こうした人生態度こそ、精神科学研究における正しい基本であることを指摘した。それはさきにするしたように、太子が悲劇的な時代に摂政として政治の表面に立たれながら、その時代にひそむ根本的な問題に少しも逃避することなく取り組まれて、そのご一生を生き貫かれたこととにも、まことにりっぱな人生態度として、敬仰されるところである。政治に携わる人々のみならず、学問に従事する人々にとっても、この太子のお言葉の意味するところは、深く内心に味識すべきものではなからうか。

こうして研究者自身の主観を客観的なものにする努力を積んでも、もともと個人の能力には、おのづから限界がある。そこでこれを克服する方が考えられなければならない。その方法は論戦の体験を積むことと、批判精神を豊かにすることである。精神科学における論戦は、論理と体験とを

かみ合わせて行なうものであり、それは自然科学における実験と同じように、主観的な判断を客観的な判断に近づけ、高めていく役割りを果たす。

この論戦にしても批判にしても、精神科学に従事するものは、常に人間心理の微妙な相互の関連を研究するのであるから、一字一句の言葉でも決しておろそかにしてはならない。と同時に、自身の発言についても、相手方の発言や文章においても、一字一句が時に全体的な思想意志を表現していることもあり得るので、論戦や批判に当たっては、このことをじゅうぶんに注意する必要がある。われわれがこの合宿教室で学生諸君と古典の輪読会、読書会などをもつとき、いつも文献を一字一句誤らず正確に読むように指導するのは、こうした客観性のある論戦や批判に従事し得るよう心がけているためである。論戦や批判に積極的に取り組みながら、自己の思想精神を高めていった人々は、洋の東西を問わず数多くある。明治時代の歌人正岡子規が、みずから歌人としての立場に立ちながら「歌よみに与うる書」と題して、当世流の歌人たちの技巧に走り詩的精神の欠如した和歌を痛烈に批判したことなどは、その好例の一つであると見てよいであろう。

次に右の論戦、批判だけでは、研究主体の主観性の打破にはなおおふじゅうぶんである。そこで主観的に痛感したことや、切実に体験した感懐を、客観的に表現する努力が続けられていくときに、その主観性はおのずから整理され統一されていって、そこに客観性を深めていく。それゆえに、詩

歌の創作に従事することは、この意味においてきわめて重要である。個人と個人の精神が、お互いに連繫(けい)を保ち、心の交わりがこまやかに展開していくには、常に言葉が媒介の役目を果たすのであるが、その言葉が、その人の真心に発するものである場合は、その人の情意は、その言葉を介して人々に伝わり、人の心を感奮させ、ゆり動かしていく。しかしその言葉は、単なる表現用語にすぎない場合よりも、発言者の反省を加えた創作による表現である場合のほうが、一段と客観性あるものとなるから、その表現が人の心に通う力はいっそう大きなものとなっていく。詩歌の創作が大切とされ、ことにその中でも、古い昔から同じ形式で伝えられてきた「和歌」の創作が、国民的情意の体験のために、他に比類のない創作修業の道と考えられてきたのはこのゆえである。詩歌の創作、和歌の創作が、国民芸術ともいふべき姿を今日に伝えてきたのは、実は日本文化の客観性への指向の強さを明示するものである。事実日本人は、地位の貴賤(せん)を問わず、老若男女を問わず、あらゆる階層の人々が和歌の道を踏みわけ、長い日本の伝統の中にそれが消えずに、歌い続けられてきたということは、日本人の精神生活が、精神科学的研究方法を正しく歩み続けてきた一つの証左である。概念だけが氾濫(はんらん)し、理屈だけがわがもの顔に横行するいまの時代に、和歌の道が、世人の単なる趣味の道具となってしまう、人生修業のためのきびしい精神生活の求道の道から遠ざけられてしまったことは、まことに残念なことといわねばならない。

なおこうした創作と並行して、和歌の鑑賞に従事することもまた、われわれの思想の鍛錬に役立つ

つてきた。創作と鑑賞が並行して行なわれていくとき、自分の創作した和歌を他の人に示すことによつて、自分の感懐について意見を求めることができる。また示された人も自分の表現の苦しみやさまざまな体験を省みて、その作者の心境の主観性客観性の度合いを指摘し、人生に処する態度や研究方法の誤りを正すことが可能となる。こうしてこの両者間の友情そのものも主観的交友の域から抜け出し、より高い精神生活をめざし相互修練が無限にひろがっていくのである。

以上、学問の研究方法について、いろいろに述べてきたが、いまの時代は自然科学の振興が叫ばれる一方、自然科学偏重が人類国家の精神的危機を招くという声も聞かれる。そうした警告に接して精神科学の復興がしきりに叫ばれてきたのも当然であるが、どのようにすれば精神科学が正しく振興されるか、また精神科学と自然科学とはどのような関連に立って発達していくべきか、というような具体的問題になると、一般にあまり明快な解答が出ていない。

この点についてドイツの詩人ゲーテがいつているように、自然科学の研究は精神科学の行き詰まりを打開する力があることは事実であるが、自然科学への偏重は目に見えざる精神を軽視して、形とか設備とか見える物質のみを対象とする結果となり、そこに起こる精神の劣弱性は、逆に自然科学の進歩をも阻害する。こうして世は挙げて、安易、低俗に流れていき、人間精神の価値が日に日に失われていく危険を感じさせる。われわれはこうした世界的、全人類的な課題を、まともにとり

上げ、ここ六年間にわたって、この合宿教室を運営してきたのであるが、今後ともこの重大な課題の追求を真剣におし進めてゆきたいと考えている。

またそれと同時に、日本文化の開展にささげてきた祖先たちの「志」を、現実にこのいまの時代に受け継ぎ伝える努力を続けるとともに、それを身につける修業に励みたいと念じている。こうした努力や修業の方向は、日本の戦後の教育の基本方針の中には、いまだに確立されていない。それは、学問の正しい興隆を念ずるわれわれの心から片時も離れない深憂の一つである。

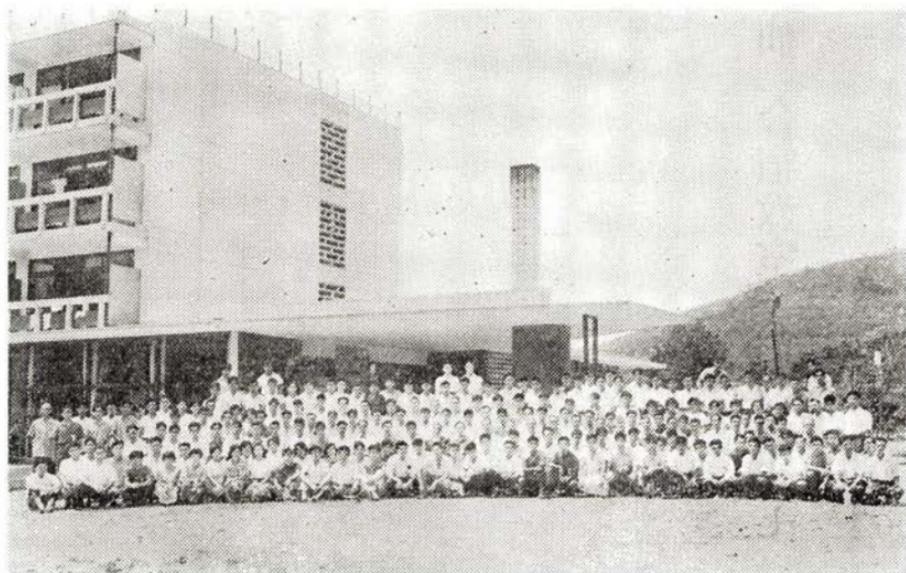
また若い世代の人々との間の年齢と時代の変化による断層についてもしばしば論ぜられているが、年齢が上のものでも、若々しい求道の心を持ち続け励み続ける限りは、必ずそれを克服できるに違いないと信じてゆきたい。

しかしいまの時代は教育訓練がふじゅうぶんなためか、若い人々の間に口先ばかり達者な人々が少なくないが、真の意味で人のリーダーになり得る人が欠けていることも、否定できない事実である。リーダーは人の心の動き、ゆらぎ、喜怒哀楽を、直観的に看取することの出来る広大な精神力を、常にその心中にたたえていなければならぬ。たとえ会合における議事の取りまとめの技巧などは稚拙であっても、人の心を洞(どう)察することができ、友らとともに共感共鳴し得る心を鍛錬することに努力する人でなければならぬ。さらにいうならば、若い人々の中にリーダーたり得る人が欠けているというならば、それはとりもなおさず、リーダーたらしめる「志」を持つ人がき

わめて少ないか、あるいはリーダーたるべき人もつべき資格について無知であるかのいずれかであらう。いづれにしても、自分のことだけを考え、世の荒波をうまく乗り切ろうとする連中には、リーダーになる資質はない。ここにいうリーダーとは、精神科学の研究方法を正しく追求し、かつそれを身をもって実践修業していこうと決意している人を指すのである。いうまでもなくこの「合宿教室」は、日本の将来の各分野において、真にリーダーたり得る人を一人でも多く生み出すことを祈念し、それを目標として営まれていることを付言して置きたい。

(小田村寅二郎)

第二次雲仙“合宿教室”のあらまし



36 · 8 · 15

参加全員の記念写真



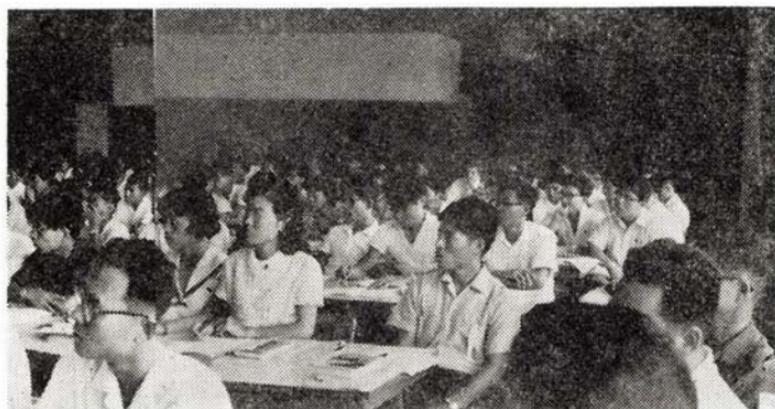
一大教協会員一

八月十三日、真夏の日ざしが山々の緑に照りはえ、高山の冷氣とともに、さわやかな気分を満喫させてくれるここ雲仙の地に、全国各地から参加者の群れが続々集まってきた。旧知の顔を発見して懐しげにあいさつを交わすもの、初めて来た雲仙の山々の静かで美しいたたずまいに目を見張るもの……。こうした和やかで、清らかな雰（ふん）囲気のもとに、第二次雲仙「合宿教室」の幕が開

かれた。参加者全員の内容は

参加者側

- 九州大学…五 福岡大学
- …三 西南大学…二 佐賀大学…一 長崎大学…
- 十一 長崎短期大学…三 熊本大学…十 鹿児島大
- 学…十八 鹿児島経済大
- 学…七 宮崎大学…三 岡
- 山大学…三 高根大学…
- 一 神戸大学…六 京都
- 大学…一 滋賀大学…八



関西学院大学…一 横浜大学…一 東京大学…三 東京教育大

…一 東京水産大学…三 東京都立大学…一 東京薬科大学…二

早稲田大学…十三 慶応大学…三 法政大学…五 立教大学…一

日本大学…一 中央大学…七 東洋大学…三 アジア大学…七

青山学院大学…二 国学院大学…一 明治学院大学…一 玉川大

学…一 高崎経済大学…一 代々木学院…一 修猷館高校…五

中学教員…三 高校教員…八 自衛官(尉・佐官)…三 大洋造船

社員…三 その他…九 計百七十二名(内女子学生十五名)

招聘講師…二 来賓…七

主催者側

大学教官有志協議会…七 国民文化研究会…十八 事務・記録係

…八 計三十三名 総計二百十四名

各班を十四—十六名に分ける班編成を終わって、二時から開
会式が行なわれた。国歌斉唱にひきつづき、われわれのすべて
の祖先の方々、特に祖国日本を防護するため生命を捧げられた
方々の御霊(みたま)に対して一分間の黙禱(もくねい)をささげたの



ち、主催者側大学教官有志協議会を代表して長崎短大、野口恒樹教授が開会のあいさつを述べられた。

野口教授は最近の日本の国内状況には、たとえば日教組からの脱退者の激増や、原水協の分裂などからも知られるように、顕著な変化が現われつつあり、その理由は「目覚めた人たちが、だんだん自信をもって立ち上がって来ている」ことにあり、と指摘された。そして学生運動においても、同じように極左的傾向を脱却して、健全化に向かう動きが芽ばえつつあるようであるが、このような動きを育ててゆくためにも、「今後自覚した学生諸君が、千万人といえどもわれ往かんの勇氣をもつて立ち上がることが大切である」と力説され、この合宿教室では静かに思索し体験を深めることによって、そうした正しい自覚の糧(かて)となるべきものをしっかりとつかむようにと激励された。

ついで、国民文化研究会を代表して熊本県庁に勤務している瀬上安正氏が立ち、第一回の霧島合宿いらい六年間の国文研の

8・14 (月)	8・13 (日)	
		5.30
		6.30
起床・洗面 体操(屋上にて)・朝食		8.00
(講 義) 「世界の経済と 日本の経済(II)」 世界経済調査会理事長 木内信胤		12.00
昼 食	(集 合)	1.00
上記講義につき 質疑応答	班 編 成	2.00
	オリエンテーション 開 会 式	
班 別 討 論	(講 義) 「学問と人生」 熊本大学助教授 津下 正章	4.00
(講 義) 「学生諸君に語る」 大分大学名誉教授 花田大五郎	(講義および輪読) 「国民同胞感の育成への 指向と努力」 国民文化研究会 小田村寅二郎	5.00
夕食・入浴・散歩	夕 食 ・ 入 浴	6.00
(講義および輪読) 「吉田松陰を中心とした 幕末日本の文化精神」 鹿児島大学助教授 川井 修治	(講義および輪読〈つづき〉) —聖徳太子の思想— 小田村寅二郎	7.00
班 別 討 論	班別懇談および班別討論	9.00
		10.00

第六回 “合宿教室” 日程表

(昭和三十六年八月) (第二次雲仙)

8・16 (水)	8・15 (火)
起 床 登山(白雲池一絹笠山) 朝食携行	起床・洗面 体操(屋上にて)・朝食
入浴・休息	(講 義) 「現代の思想について」 文芸評論家 小林秀雄
(参加者意見発表) —合宿総合検討—	上記講義につき質疑応答
感想文執筆	昼 食
閉 会 式	班別輪読および班別討論 テキスト { 「聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業」 吉田松陰「講孟劉記」
昼 食	学 校 別 懇 談
(解 散)	夕食・入浴・散歩
	大学教官有志協議会 } 参加会員 国民文化研究会 } (所見発表)
	班別討論および班別コンパ

歩みの概略を述べたのち、この合宿の目ざすところは、共産主義に対抗する反共理論を参加者諸君に注入する、というようなことではない。合宿は単に知識や理論のあげつらいにとどまるものではなく、心と心との接触、交流の場であるべきであるとして、それは苦しい「修行の場」ではあるけれども、願わくは「一切の心の障壁をとり去って、共に語り、共に悩み、そして共に喜び、共に誓い合えるように持って行ってほしい」と希望した。

最後に、参加学生を代表して早大生の福島宏之君が、このように主催者側の労苦によって営まれた全国学生交流の機会を、じゅうぶんに活用して、最大の成果をあげるべく努力しようと、若々しい決意を披瀝(れき)して、開会式を終わった。

こうして、厳肅な気分の中に開会が告げられ、ひきつづき日程に組まれた諸行事に入って行った。四日間の全スケジュールは、前頁に掲載した表のとおりである。

日程はこの表に見られるようにぎっしりつまっており、遅滞や放恣(し)は許されなかった。平素のルーズな生活態度は、ここでは放棄されねばならなかった。これは多くの参加者に、非常な苦痛を強制するものであったと思われるが、全参加者は驚くべき熱意と忍耐とをもって、よくこの試練を乗り越えてくれた。思うに、精神の緊張は肉体的条件をも克服するのであろう。全期間を通じて一人の事故者もなく、夕食後の自由時間や消灯後の有志の語らいに、濃まやかな友情の絆(きずな)

が結ばれていった。四六時中湧(わ)いて尽きない雲仙の湯が、参加者の疲労をいやすのにずいぶんと役立ったようであった。

諸講師の講義内容については、以下に集録してあるので、それをお読みいただきたい。木内信胤講師のスケールの大きく、内容豊富な講義は、昨年と同様に学生たちを圧倒したかの感があったし、それと対照的に、小林秀雄講師の鋭利精確、しかも含蓄深い講義は、全員を完全に魅了し去ったようであった。両講師とも比較的長い質疑応答の時間をさいて、講義内容の徹底につとめられ、さらに班別討論にかけて、一層深みあるものとなっていた。この班ごとの討論では、単に講義内容への賛否とか解釈とかがとり上げられるのではなく、問題は講義の根底にある判断の立て方を、各自が主体的にどう受けとめ、そしてどのように友人たちに伝えるかがその眼目であった。したがって議題は人生観・社会観・国家観などの多面にわたって展開されるのが常であった。

また、花田、津下両講師の講義は、それぞれの持ち味において、懇切に学生たちの心に訴えるものであったし、小田村、川井両講師の講義および輪読は、学生たちの古典への接触を開導するためのものであった。この方式は、今回の合宿教室ではじめてとり上げられたもので、前者は「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」(黒上正一郎先生著)を、後者は吉田松陰の「講孟余話」の敷衍すつを、一人一人に音読させ、解説を加えてゆくやり方をとった。

二百名を一堂に集めての輪読は、いささか冒険的であると思われたが、この経験を導きとして行なわれた第三日目の班別輪読は、非常な効果を収めたようであった。これは各参加者が輪読と班別討論の時間をもっとしてほしいと、ほとんど一様にいつていることからもうかがえよう。難解な古語で書かれた古典は、現今の学生たちから全く敬遠されている感があるが、雑駁(はく)な知識と放恣な感覚とによって人格分裂を来たしがちな現代人にとっては、ほとぼしる生命の直接的な表現がなされている古典に触れることによって、古典のいのちはわれわれにつながり、失われた魂を奪回する機縁が与えられたのである。この意味でここにその端緒を開こうとこころみたことの意義は、じゅうぶん評価されるべきであろうと思う。

講義のほかに、班別討論、各種の意見発表や懇談が日程に組み込まれており、さらに参加者の就寝後、大教協会員と各班の班長(国文研会員が担当)によって真剣な検討会が深更まで続

一夜の検討会



けられた。それは本書の「〃合宿教室〃運営の焦点」の中に、かなりくわしく掲載したので、それをごらんいただきたい。

こうして、合宿が開始されてから三日目には、班員同士がお互いにうち融け合い、初見の友も旧来の知己のごとく感ぜられるようになった。

夜の班別コンペが、班員相互の親密の度合いを一段と高めたことはいうまでもない。四日目の朝は全員五時半に起床、樹林をわけ朝露を踏みしだいて綱笠山に登った。開けた頂上の視界は、西のかた島原湾を一望におさめ、東のかたにはさし昇る朝日を背景に、紫にけむる雲仙嶽が吃(きつ)立し、その雄大さはたとえようもない。美しい自然の調和は、せせこましい人智のはからいを忘れさせる。きのうまでの思想的苦悩は、すがすがしい自然に触れて、一挙に霧消し、靈妙な悟達へと人間を導く……。山上の靈気を腹いっぱいいつめ込んで、白浪ノ池へ下り、池のほとりで朝食をとる。





帰館後直ちに入浴してさ
っぱりした気分になり、最
後の日程である合宿の総合
検討に入った。

司会者の指示により、三
分間の限られた時間内に、
参加者はこもごも立って所
見を述べた。溢れるような
感慨が語られ、はち切れる
ような充実感が吐(と)露さ
れる。三分間ではとてもい

いつくせないもどかしさを訴えつつ、ともかくここで得た体験を、今後の生活に何としてでも継続し、具体化してゆこう、とする気持ちがあふれた。(これは末尾の感想文と重複するものが多いので、掲載を省略した) この学生たちの意見発表に応じて国文研の小田村氏が別項のような総合的所見の発表を行なった。



ひきつづき、感想文の執筆に約四十分間があてられた。三泊四日のさまざまの体験と感慨を、全員静かに書きつづった。これら感想文のかなり多くは「はしりがきの感想文から」の中に集録されているので、ぜひお読みいただきたい。この学生たちの率直な感想文は、この合宿教室がいまの時代において何を意味し、また参加者にどのような影響を与えたかを、ありのままに表明しているものと思われる。そしてまた

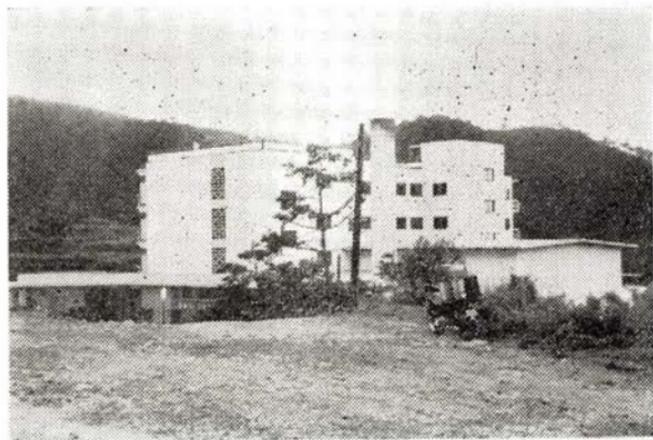
それは、当今の一般学生の思想傾向や生活態度と比べた場合、興味深い対比を示すものであろうし、さらにこの若者たちの心の奥底にある真実の情意には、日本の力強い将来を予見させる何ものが含まれているであろうとわれわれは信じている。

帰途につくバスの時間が刻々に切迫する。あわただしさと、去りがたい思いの中に「君が代」が斉唱され、閉会式があげられた。二年前の阿蘇合宿と同様、再び參觀された日本道路公団副総裁（現在総裁）上村健太郎氏が来賓として登壇され、戦時中の体験を回顧しつつ「義」と「利」の分別について述べられ、

参加者の熱心な研修態度をほめながら「皆さんとお知り合いになった以上、日本のためにこうしたらしいということで、気づかれたことがあれば、手紙でもよいから教えていただきたい。出来る限りのことはしたいし、ご返事も差し上げたいと思っています」と懇情あふれる態度であいさつされた。次に熊本大学の水野武夫教授が立たれ「永遠なる日本民族を皆さんの力で作り上げていただきたい」と切なる期待を述べられ、続いて鹿児島大学の川井修治助教授が「実感より決意に、決意より実行へ」と別れがたい思いをこめつつ閉会のあいさつを述べた。なお来賓として元衆議員議員金原舜二氏、諫早市長野村儀平氏、流れ社主幹林正義氏ほかの方々も全合宿期間来場されて熱心に参観された。

かくて無事すべての日程を終え、全員あすからの力強い決意を胸中に秘めながら、雲仙の山々に別れを告げたのであった。

“合宿教室”における講義



国民同胞感の育成への努力と指向

国民文化研究会

小田村 寅二郎

- 一 合宿のはじめに当たって
- 二 この合宿で「輪読」を採用したことについて
- 三 日本の現状についてのいくつかの指摘
- 四 天皇について

一、合宿教室のはじめに当たって

きのう私はみなさんより一日早く当地にまいり、みなさんがこの合宿に参加申し込みをされた折に記入されたアンケートを拝見させていただいた。それによると、ことしは参加学生のうちの約二十パーセントないし二十五パーセントが二回またはそれ以上の回数に参加された方であって、七十パーセントないし八十パーセント近い方が、はじめての参加ということになっています。参加されたひとりびとりが、どんな考えでこの合宿に来ているのかということ、参加者全員にとって関

心的的になっていられると思われるので、ことし新しく来られた方々のアンケートの中から、いくつかを拾ってご参考までにみなさんにご披露します。

概して、きわめてまじめな感想が多いようです。もともと、はじめからわれわれの会合をけなすような感想を書かれる方はないでしょうが、昨年のような安保騒ぎの最中の合宿では、帰りがけの感想にはまことに痛烈で勇ましいのが出て来ます。「お前たちのやっていることはなんだ」というようなのもあれば、「どうも納めた会費に比べてご馳(ち)走が多すぎる。これはなにか怪しげなスポンサーがうしろについておるのではなからうか」(笑)というようなのも出て来ました。

さてアンケートのなかの感想をご披露しますと、滋賀大学の若尾さんは、こう書いておられる。「いまの世の中には、古いものと新しいものが同居している。しかし、どうも古いものが政治や思想の面で多すぎると思うので、これを打破してゆくことを考えたい」というご意見です。このご意見を拝見したとき、私にはこう受けとれた。若尾さんの周辺には、新しいものと古いものとが併列して登場している。——それは若尾さんだけのことではないのですが——ところが、若尾さんにしてみれば、新しいもののほうは、自分で直接に経験出来ているので理解も早いし、またよく理解も出来る。しかし、古く見えるほうのものは、自分の生活の場で直接経験しないままに目に写ってくる。したがって、よく理解する機会にも恵まれないうし、そのままに価値判断を進めてしまう。そうすると自然に古いものの方は値打ちがなく、新しいものの方がよくみえてくる。そこでこういう感

想が出てきたのであろう、と思われる。そして私はこの傾向は現代学生青年に共通しているものと思えます。

それから、長崎大学の合原さんは「学ぶということは一体どういうことなんだろうか」と、いう疑問を出しています。またその中に「人間性に基づいた教養をもって、その上に専門的な知識を追求したいと思う」と書かれている。これは、やはり合原さんだけでなく、現実の学生生活を真剣に見つめている人たちすべてに共通した感想だと思う。

同じ長崎大学の医学部の千綿さんの感想には「今日の政治・経済・社会及び大学を含めて、現在のあり方が自分にはどうも疑問でならない。なにかが狂っているような気がする。それで、この現象だけを見ないで、その底にあるものを見たり考えたりしたい。そのためにこの合宿に参加しようと思った」と書かれている。

それから、東大法学部四年の斎藤さんは「自分はことし大学の学生生活最後の四年を迎えている。静かに自分の生活を省みると、どうも自分の歩んで来た道は、与えられた学問、知識を獲得することに尽きていたような気がする。こういう合宿に来たらなにかそれと違うものに触れることが出来やしないだろうか」という感想を寄せられている。

また、熊本大学工学部の長浜さんのご意見はなかなか率直ですが「小林秀雄さんの話が聞きたいので参加したいと思う」と書いてあり、ついでそのあと「なんとかかんとかやりながら、みんな実

は浮かない顔をしているように思う。みんな利巧になってしまって、生きてゆく支(ささ)えが足元で崩(くず)れていっているのを、やもやもやした気持ちで眺めながら、自分自身の心の中では少量の毒をひねくり廻しているようだ」とあり、自分の反省ともなく、あるいは周囲の人たちについての様子ともないようなことが書かれている。第三者が地球上の日本にいる人間を見たら、この長浜さんのいわれるような観察をされるかも知れないと、私は思ったわけです。しかしそれとともに、私は長浜さんの文章を読みながら、こういうふうな第三者の見方で現状分析をしてみても、それでは人生に少しも役立たない、それをもっと自分自身の問題として取り組んでいっていただかなければならないと思いました。この社会の中で、一体自分自身はどう生きていくのか、という課題にまともに取り組んでこそ、道が開かれるのですから、長浜さんも、また長浜さんと同じように考えておられる方々も、この合宿を自分自身の修練の場として本当にきびしく自己を見つめ、心を通わず道を見出してほしいと思います。

京都大学の吉田さんのご意見の中には「日本は極端に左右が対立している国の一つだと思う。経済的に繁栄しているように見えるけれども、政治の貧困と同様に、憂うべきことは、拠(よ)って立つ基盤のないことである。どうも政治は行政だけであるし、外交は涉外だけしかないように思う」ということがしるされている。これも非常に鋭いご意見だと思いました。確かに今日の時代は本当の政治がなく、行政だけが政治の形をして横行しているような時代です。また外交も、相手国とツ

バゼリ合いをして火花を散らすような、あるいはまた、魂と魂が触れ合い、そこに新しい世界が生まれるようなものになってはならず、出先機関の細かい経済外交的なものだけになっているような感じがする。こうしたことについても、この合宿で一緒に研究したいと思います。

なお、はじめての方ではないのですが、前回にも参加された東京薬科大学の女子学生、古市さんの感想の中には「いま自分は宗教というものに対する信仰をもっていないけれども、なにか広範な民族宗教的なものが日本になればならないのではなからうかと思う」と書かれてあり、これも大切な問題を提起していると思いました。

このほか、みなさんの感想をひと通り読んでおりますと、みなさんは私ども以上にこの時代を真剣に見ておられる——そのは握の仕方、捉(とら)え方はいろいろですが——そのフアイト、熱意において私ども先輩が、先輩づらをしてみなさんにとやかくいうことができなような激しいものをその胸中に秘めて、この合宿に参加しようとしておられる。その真剣な姿をアンケートのなかにかいま見ることが出来たような気がしました。いずれにしても喜ばしいことです。

一般にこういう研修会で修養的な行事を行なう場合、その日程の中に、座禅とか「行」的なことで、直接に肉体的苦痛を伴うものを加えるのが通例です。こうした行事の持つ意義はまたおのずからあるわけですが、この合宿教室はこんどで六回行なわれる間に、そのような行的訓練を加味しないで来ました。しかし行的訓練がないからといって、この合宿が気楽なものであると思われたら、

とんでもないことです。この合宿には、行的訓練よりも、はるかに精神的苦痛を伴うものがあります。これから始まる四日間の合宿では、激しい労働生活から来る苦痛とか、あるいはきびしい束縛から来る肉体的疲労とは違っているが、しかし疲労、幅の広い苦しさ、悲しさ、喜びというようなものを体験せられることと思う。合宿はいつもいわれるように、年齢の差、学校、学年の差、地位、職業の差といったものは、一切あつてないような生活を繰りひろげます。この世界情勢の中に立っている一人の人間として、この時代をどのように見つめ、どのように考えたらよいかをお互いに研鑽(さん)する場として、合宿生活を送ってゆこうとしますから、二百人おつてもそれが一つの心に寄つて行き、またそれが離れては寄り、寄つては離れてゆくような波が、そこに起きて来ると思う。したがつて、ときには激しい自己保全の欲求、自己存在の意識を強調したくなって、そのために非常な苦しさを感ずることもあるうし、ときには合宿全員でつくりだす一心同体の波に呑(の)まれないように、じつと隅のほうにかたくなってひっこんでしまい、この合宿の中にいながらなおかつ最後まで傍観者の立場で合宿を見ようとしてがんばる人も出て来ましょう。しかし、個人の力をそうしたことでためすよりも、むしろ素直にお互いの心を開き合う方向に協力していただきたいと思うのです。とにかく、なんらかの機縁によつていろいろの違った学校から来られたみなさん方が、こうして一堂に会し、四日間にわたつて思想的、精神的な問題と取り組んで生活するのですから、この厳粛な事実の中からあすの日本を支えてゆく力を生み出したいものです。それゆえに、この合宿でお互

いに心を勞することは、単にこの場だけのことであってはならない。みなさんが学校に帰って九月から始まる学校生活の中でも、それが生かされてくるものでなければならぬ。いままでのちりちりばらばらの生活ではなくして、人間の魂に食い入るような学問と人生への態度を、ここで確立していただきたい。また、ここで確立するのは無理であっても、その契機をつかんで帰ってほしいのです。

話がちょっと傍（わき）道に入りますが、約二週間前に東南アジアの学生諸君が夏休みの旅行で八代市に來た。八代市の市長は昔の五高の先生で、池田総理や佐藤通産大臣などを教えた坂田道男さんという老人ですが、まだ大変お元氣な方です。この坂田市長さんが、せつかく自分の市に東南アジアの学生が來るのだから、みんなで手分けして家庭に分宿させてやろう、ということになった。坂田さんのお宅には、セイロンの学生で京都大学の電気学科に行っている学生とパキスタンの学生で東京工業大学へ行っている学生、それからマラヤの学生で東京水産大学に行っている学生などが泊まった。その学生さんたちの数日間の生活を見られた坂田市長さんの感想を聞きましたので、それをお伝えしましょう。その三つの国の学生たちが、みな一様に持っていた激しい愛国心には、老市長もいたく心を打たれた。彼らがいうのには、とにかく自分たちの国をよくするために、自分たちはいま日本に來ているのだと情熱に燃えて語っていたのです。マラヤの学生のリチャード君という人は兄弟が五人いるが、各国に分かれて留学している。一人はアメリカ、一人はドイツ、一人

はフランス、一人はイギリスに留学している。自分は父親からオーストラリアに留学しろといわれた。日本軍が第二次大戦中にマラヤのあたりを占領していたので、その被害をかなり受けたためでしょう。父親は「日本人は野蛮だ」と考えているので、「日本に行くのはやめろ」といった。しかし自分は「相手を知らないで野蛮だというようなことをいっているのは間違いだと思う」といって、父親の反対を押し切り、日本に留学して来た、というのです。

坂田市長さんがさらに心を打たれたことは、東南アジアの各地から来ている学生諸君の日常生活の規律正しい節度であった。たとえば風呂(ふろ)へ入れてやると、どの学生も風呂場をきれいに片づけて出て来る。自分の濡れた足あとが廊下に残ると、ぞうきんできれいにする。このような行動は、決して一朝一夕に出来るものではない。平素の生活態度が緊張しているからであろう、というお話でした。

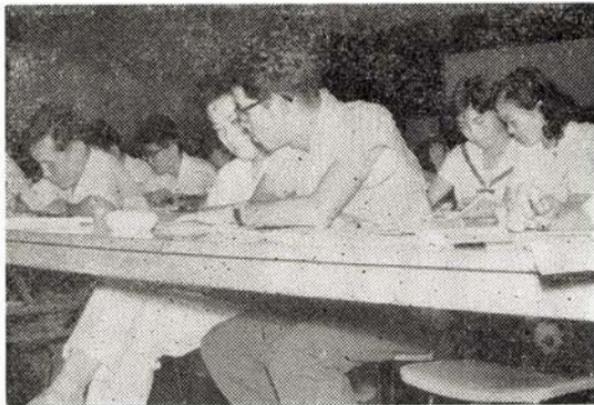
いまこうして同じ時期、同じ地に、東南アジアの学生たちが、このように緊張した気持ちで旅行していることは、ここに集まった諸君とともに、私たちもよく考えたいと思います。彼らにくらべて、この合宿におけるわれわれ自身の言動や行動が、あまりにもみすぼらしいものでないようになりたいと思うのです。

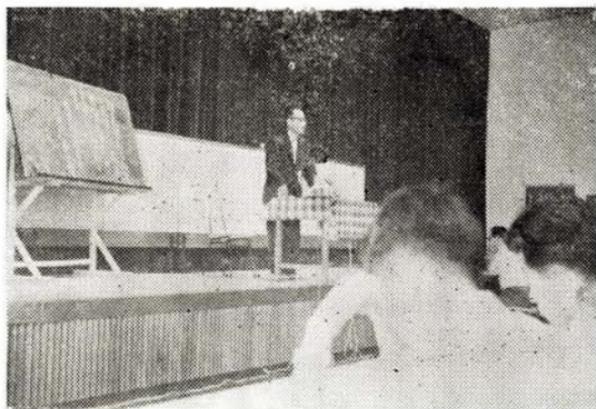
二、この合宿で「輪読」を採用したことについて

次にこの合宿教室では「輪読」とよぶ方法によって、書物の読み方を勉強したいと思うので、それについてお話しします。輪読は一つの本をみんなで学ぶわけですが、一人が数行ずつ声を出して朗読しては次の人に代わります。その読み方が一字でも違えば、誰でもよいからすぐ注意して直してやる。読み方がわからないで途中でとまれば、知っている人がすぐその場で一字なり一句なりを発音する。すなわち、すぐ教えてやるわけです。このようにして数行ずつ代わりながら音読しますから、たいてい正確な読み方ができるようになる。しかしそれから先が大切なことです。というのは、その書物の中に流れる作者の生活感情、生活経験を正確には握するところに、輪読の意義があるからです。輪読は著者、作者の人生観に、輪読参加者が一つになって取り組む勉強ですから、その対象となる書物は、それにふさわしいものでなければなりません。したがってすべての書物が輪読の対象になるわけではありません。たとえば、数学や自然科学など理論的なものは、当然輪読の対象にはならない。また論理的な展開だけの書物、概念的な分析を主とした書物も不向きです。ではどういう書物が輪読に向くか。極端な例をあげれば、バイブルとか仏典とか、あるいは親鸞上人とか日蓮上人の書かれたものなど、宗教的なものは対象になる。作者の生活の中にある宗教的なものを心に偲(しの)びながら、それらの本を読むからです。しかし、宗教的なものでなくとも、文学的、思想的、精神的なものなど、心を働かせ情意を通わせながら学ぶのでなければ、学ぶことにならないような書物が輪読の対象になります。そういうものは人の心から心へ伝わって行く素質をもって

いるからです。その言葉や文章や、さらに文章の脈絡をたどりながら、その著者の心を探求してゆけるようなもの、そしてその内容が奥深い人生の深淵(えん)に触れてゆくような書物が、輪読の対象に最もふさわしいものといえる。したがって、古い日本の古典でも、「古事記」は、その叙述の内容のゆえに輪読の対象になるけれども、ほぼ同じ時代に作られ、同じことを編年体的に書かれた「日本書紀」のほうは輪読には向かない、ということになります。

この輪読に当たって、注意すべきことは、お互いの間における感想の述べ合いが上っ調子では意味をなさない。正しく生きようとする意志と、何が正しいかを謙虚に求めようとする姿勢に立ちながら、その書物の言葉を自分の体験に照らし合わせようとする努力が必要です。また同席者の心境や心組みに常に心を配ることも大切です。だから、たとえば「ぼくはいま宗教の問題を研究中ですから、政治に関することなんかどうでもいい」とか「私は文学をやるうとしているのだから、日本の国民思想の動向がどうなるうと、それは自分の文学の勉強には関係ない」といって、知らん顔をする態度はいけな





い。政治も国民思想も人生と重大な関係がある。文学であれ、芸術、宗教であれ、およそそれが人間の生命を対象にして扱われて、輪読の内容に出てくるならば、それと四つに取り組んでいく心構えがなくてはいけない。輪読は大ぜいの人たちと「ともに学ぶ」のですから、その中の一人でも自

分勝手な心境で、他の人たちの協同研究の態度を無視してはならない。一人の勝手な発言や、自己宣伝的な言い方や、イデオロギー的な固定した説明は、そこでは一切無用、無益でこそあれ、一利もないばかりでなくかえってぶちこわしになります。だから「ともに学ぶ」という学習態度を、心に用意し、心にきめてかかる謙虚な人生態度、勉学態度が、輪読の開始に先立って、同席者のすべてに、一様に要求されるわけです。したがって、少なくとも輪読という一つの勉強の場においては、どんな専門的学問を学んでいる人も、全人間的態度とともにそれに對することが望ましい。

このような輪読の目的が、二百名も集まっているこの場で、果たしてうまく出来るかどうか、私自身にも自信はありません。もともと輪読は二、三十名ぐらゐまでが適当な人数です。

しかし今回はそれをやってみようと思う。きょうさっそく日程どおり夕食後の時間に、まず私が「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」という書物をテキストにして行ないます。明日は鹿児島大学の川井助教授が吉田松陰の書物について行なうことになっています。

なお、この合宿で試みる輪読のやり方は、決してそれが最上の方法であるとは申しません。みなさんが、さらに新しい感覚をもってよりよい方法を見出し、若い諸君に向く勉強研究の一方法としての輪読の進め方を、改善していただきたいと思います。それは現代の大学生活における勉強方法に、一つの新生面を開くことになるかも知れません。もしそうなれば、まことにうれしいことだと思います。

三、日本の現状についてのいくつかの指摘

振り返って日本の現情を考えると、いろいろと考え直さなければならぬ問題がたくさんあるように思われる。まず第一は、敗戦によって日本に革命が行なわれた、と国民みなが決めています。たしかに形の上においてはそれに間違いはない。一つの政治形態が崩壊させられて違った政治形態が出来た。しかし、われわれ日本人自身はその革命を革命的でないもの、すなわち日本人に向いたものにせず、放任したまま今日まで来た。一体このわれわれ国民の態度には問題がないのであろうか。

もともと革命というのは、歴史の断絶です。一つの歴史の流れが中断して、新しいものがそこに生まれて来る。前のものは意味をなさなくなって、新しいものが新しい価値として登場すること、それが革命です。したがって、革命が成功したということは、歴史が切れたことを示し、またもし革命が出来そこなった場合は国が亡びてしまう。しかし日本のような特殊な歴史をもつ国で、伝統が断絶すればそれもまた亡国を意味する。ところが戦後の日本国民には、亡国感もないし、革命感もそれほどはっきり意識されていない。革命とか民主革命という言葉はやたらに使われているが、日本で革命が成就したというなら、革命以前の国は亡びたも同然なのかどうか。国民の認識はその点でもはっきりしていない。ぼっとしたままで時流に流されてきている。日本人の意志はどこへいつてしまったのだろうか。革命を革命たらしめないで、改革ぐらいにとめようとする努力も余りされない代わりに、革命を徹底的に革命たらしめようとすまいき方にも、全国民は同調しようとしていない。われわれ自身にとって、歴史の断絶は死と同じではないかという声も、国民的な共感をよびおこすには至らない。実のところを反省すれば、日本人は講和条約の締結されたその翌日から、その事態に対処して、日本を革命的でないものに転換する必要があった。

ところが、外からいわれるままにそれを鵜呑(うの)みにし、得々として民主主義革命といい、深く考えることなく革命という言葉を使い慣れてしまった。その結果、いまの民主主義革命で安心している人たち自身が、革命という言葉のもつ重大な意味に鈍感になってしまっている。ある人

々は自分たちも敗戦のときに民主主義革命をみずからの力で実行したのだといい、もう一べんこれを社会主義革命に持って行くとうとしている。ところがそれを聞いている側では、あの人はああいう意見をいっているが、なるほどそれでもいいなあというようなことで、自国の運命にかかわることを他人ごとのように傍観的に見ている。この調子で進んでいくと、われわれは敗戦から今日に至った経過を、民主主義革命として是認したと同じように、これから起きて来るかもしれない共産革命に対しても、抵抗力がなくなってしまうと私には感ぜられるのです。

終戦後の日本は実際明らかに国家形態が大きく変わり、一つの革命的なことが行なわれたけれども、われわれは、この断絶させられた歴史を、もし形の上でつなぐことが不可能であるならば、内容的につなぐことは出来ないのか。それを内容的につなぐとする努力は、そこでどういう価値を持ち、どういう意味を持って来るのか。これは取り上げなければならぬ大事な問題ではないかと思ふ。

終戦後いろいろの国家再建方策がとられ、経済はご承知のように急速に成長して来ている。しかし、肝心の思想、ものの考え方に大きな問題があり、われわれのあとについて来る人たちにものを伝え教える教育面では、相変わらず歴史、伝統が断絶されたままの形で教育が行なわれている。それが今日の世相です。

経済のほうはそうではない。国家の経済力がこれだけ復興して来たといったところで、終戦によ

って経済が断絶されて、全く新しい基盤から日本経済が復興したと思っている人は今日一人もいない。国民生活の背後には、われわれの祖先が残していった田畑もあり、山林もある。またいろいろな文化財もあり、精神的、経済的な地位やいろいろ経験を積みかさねてきたこともあった。そういう経験をものにして、それを戦後どのように生かそうかということで、みんなが四苦八苦しながら努力したお蔭で、このように急速な経済復興ができたのではないか。国民のすべてが戦前の有形無形の経験、蓄積の全部を戦後の活動の中に投入したからこそ、このような復興が出来たのです。にもかかわらず、思想と教育に関する面では戦前のものは全く無価値であるといって放棄して、ここで全く新しいものを作るのだといっているのが今日の日本の状態である。

これで教育がうまくゆくわけではない。だから、経済の成長は今後とも伸びてゆくだろうが、それが成長すればするほど、思想の面、教育の面、あるいは国民生活の感情面、精神面はいよいよ不安定を増して行く。これが今日の日本の国内状態の一つのとらえ方だと思ふ。あるもの（経済）については戦前戦後を通じ一貫してものを考えていて不自然に思わないで、他のもの（教育・思想）については、竹のくしに刺しただんごをバラバラにするように切断しなければならぬと決めている。こんなデタラメな状況の中に、われわれ国民はいつまで生活し続けていっているのか。そんなことをしていったらどうなるのか、ということを真剣に考えたい。

それで、結局いまのわれわれ国民は前のものが無価値であった、値打ちがないのだとい切って

いるが、そういつている人たちも、決して新しく出来て来るものがどんなものであるかは掴(つか)めていない。それらの人たちは戦前のものは全部捨てて新しい考え方で教育をし、また、ものの考え方を新しくしてゆけば、きっと理想境が出来てであろうといっているだけにすぎない。その理想境を作ってゆくほうが日本の国民生活を安定させることになるのか、それともいままで十五年間歩んで来た道がおかしいならば、この辺で立ち直り、検討し直して、戦前に積みかさねられた有形無形の精神的遺産を力強く引き継いで、今日もう一度移し植えなければいけないのか。そういう微妙な境目にわれわれは立っているのではなからうかと思う。

教育の基本は常に国民教育の中にあります。幼い子供たちに与えられている教育というものは、いずれの国においても、その国の教育のエキスです。したがって、その国の小、中学校における教育の実体を見れば、その国の教育に関する水準の高さ、内容のすべてがわかるというのはまさにそのとおりです。

さて、さきほどお話しした革命と歴史の断絶ということですが、共産国は共産主義国家になるとき、当然従来の歴史を断絶して革命を成し遂げるわけなのに、不思議に自国の歴史を断絶させないでいるのです。

その一つの好例として、中共の小学教科書の一節をこれから読んで見ましょう。中共は一九四九年に共産革命に成功して、中華民国を台湾に追いやり、共産党の国家になったわけです。したがっ

て、いまの日本人の考え馴れた見方からすれば、それ以前の中国の文化はいまの中共人にとって価値なきものとされていなければならぬわけです。ところが中国ではこういうふうに教えている。すなわち小学二年の教科書には「祖国を愛すべし」という題目の中で、

「われらが祖国中華人民共和国は、光栄にして偉大である。世界においてわれらが祖国は悠久の歴史国家である。数千年来われらの祖先は代々働き続けて祖国の土地を開墾し、拓（ひら）いて美しい田園を作った。太古の昔われらの祖先は稲を植え、豆を植え、藪を飼って糸を紡（つむ）いだ。米、大豆、生糸はわが国の特産物で、みんな悠久の歴史がある。われらの祖先は非常に多くの偉大なる業績と偉大なる建築を伝えてくれた。かれらはそれに非常に多くの大小さまざまな都市を建設した。北京、南京、西安、洛陽、一つ一つの都市はすべて非常に古い歴史がある。われらが今日読み書きする文字は、三千年もの長い歴史がある」

こういうふうに書いている。これと同じ問題で日本の場合を取り上げますと、奈良の東大寺というようなものは、あれは昔の支配者が人民を搾取して作ったのだから、あんなものは値打ちがないといって、小学校の先生が子供たちに教えている。こういう事実、今日でもなお全国各地でたくさん見受けられる。われわれの祖先が作り上げたいろいろな文化的遺産は、有形無形の形で無限に残されているが、それらに対して敬虔（けん）な尊敬の念を払うことが教育の場から消え去ってしまった。この日本の傾向と中共とどちらがいいのかということ、ここでみなさんにいう必要を私は

認めない。中共のようなきびしい共産革命を實行しても、なおその以前の歴史を現在に伝え、結びつけ、つながらせようとしていることをわれわれは一日たりと忘るべきではない。あの万里の長城はそれこそどれだけ多くの人々を使役し、また殺して作ったものか知れない。中共ではその万里の長城をわれわれ祖先の偉大な遺産だと教えているのです。そういうように人間が国家生活を営むときには、どうしても伝統、歴史の尊さを知るのであって、それが自然であり、それを否定するほうこそ不自然でおかしいと思う。

新しい国だといわれる悲しさ、つらさが、こういう形で自分たちと根本的に違う時代の自国の歴史までを全部自分のものだといわせているのかも知れない。ソ連でも全く同じです。ここにソ連の資料も持って来ていますが、ソ連も昔のロシア人のやったことは、自分たちの偉大なる祖先のやったことであるといっている。ピーター大帝が外国を征服したことについても、いまのソ連の人たちは、われわれの偉大なる祖先の偉大なる行動だと教えている。これらの事実を見てもいまの日本がどんなにチグハグなことをしているか、本当に考えなおしてみなければならぬでしょう。

次にこんどの戦争で日本が敗けた前後の諸外国の動きについて、われわれ日本人は当時の具体的事実に基づいて研究し直してみる必要があると思う。それがこれからのわれわれ日本人の平和観、人生観を固めていく上で、大きな関係をもっていると思うからです。

第二次世界大戦の終幕近い一九四五年八月、広島（六日）と長崎（九日）に原子爆弾が落とされて、日本は同月十五日無条件降伏した。その少し前ヤルタ協定、カイロ会談、ポツダム会談で、いろいろの協定や宣言が出され、連合国側の動きはまことにあわただしいものがあつた。一九四二年から四年間にわたつてアメリカ、イギリス、ソ連、中国の四カ国間でいろいろな交渉が行なわれている。ことに一九四三年（昭和十八年）ドイツの形勢がすっかり悪くなつてしまつてから、非常に頻繁に会合が行なわれています。そのときアメリカは、日本を倒すためにはどうしてもソ連を自分のほうの陣営に引き入れなければならない、という考え方に徹底していた。それがずっと最後まで続いて、一九四五年には、日本は完全に戦力がなくなり、到底アメリカ、イギリスその他の連合国を相手に戦争を継続出来ないほどの状況になつたのに、なおかつトルーマンは日本の情勢分析を見誤り、最後まで「ソ連さんいっしょにやりましょう」と呼びかけていたわけです。

これに対してスターリンのほうは、日本と不可侵条約を結んでいる同盟国であるにもかかわらず、ソ連が参戦した一九四五年の三年前から、イギリスに対し、あるいはアメリカのハル國務長官などに対し、ドイツをやつつけて二、三カ月経つたら、あなた方の陣営に入つて日本を叩（たた）くころと思つているのだ、といつている。さらにその間のやりとりで、日本のどことどこはおれによこせ、というようなことを勝手に決めてゐる。ひどいのは蔣介石の中華民國の領土に関することまで、蔣介石を抜きにしてルーズベルトとスターリンで話し合いをやつてゐます。それらに関する記録が

数カ月前、アメリカではじめて発表された。それが時事通信社で出している「世界週報」に出ている。すなわち三回続きの「ヤルタ会議から終戦に至るまで」と「カイロ、テヘラン会議の内幕」という各三回の続きものの中に、アメリカで発表された関係各国間の往復文書が公表されている。これをぜひ図書館へでも行って読んでいただきたい。これは主観もなんにも入っていないのです。日本やドイツを別にしておいて各国が勝手に、「どうしたらソ連は対日戦に参戦してくれるか。日本を負かしたらおれはここを取る、お前のほうはあそこを取れ」とルーズベルトはいうのだから、スターリンはこのときぞとばかりに「あれもくれ、これもくれ」ということで、先に貰うところを決めてしまっている。

こうしたことで、終戦時には、もはや日本の国力は疲弊し切って、敗戦の悲運に遭遇するが、すでにそれよりずっと前に満州、朝鮮、台湾はどうする、北カラフトは、千島はどうする、南洋の委任統治領はどうする、というふうにみんな細かく決まってしまうている。この場合「取り放題」といっていいほど取り放題のことを相談し合っている。日本が無条件降伏をしたとき、その領土をどういう理由付けによって日本から取り上げたいであろうかという大義名分の決定が、実は終戦前後における連合国側の重大問題であった。取りたいものは取るのだが、どういう名目にすればせめて大義名分が立つかという問題です。そこで、戦前の日本は帝国主義的侵略によってそれらの領土を拡張したという理由や、日本の従来の政治体制や国民生活体制は、きわめて封建的かつ

野蛮であつて、それらは新しい近代文化の中においてはきわめて遅れたものである。したがつてその間に行なわれた日本の対外外交政策は間違つていたし、そのときにできた日本の領土は、全部非人道的な侵略行為の所産である、という勝手な理由をつけた。私がみなさんにこの記録を読んでも、ただきたいというのは、その一九四三、四四、四五年と何回も各国首脳が会談しているときには、現在の日本人が日本の過去について反省づらしていつていような封建的だとか侵略的だとかいふことは、ひとかけらも出て来ていないからです。日本からあれを取ろう、これを取ろうとしているときは、ただそれだけを考えていたのであつて、終戦後に付けられたいろいろの理由づけとは違ひ、ただ単に各国間の外交交渉で取り引きがなされておつただけです。そこで、原爆によつて終戦になつてから勝手な理由が付けられ烙（らく）印が打たれてしまつた。その理由の何から何まで全部間違つていゝるとは申しません。けれども、少なくともわれわれはいまから約十八年ぐらゐ前の一九四二、三年ごろの世界各国の動きと日本の歩んで来た道を、もう一度振り返つて見直す必要はないであらうか、というのです。日本の青年や学問に携わる人たちに、それだけのことをする時間がないとは思われぬのです。それも、日本の記録で調査せよと申しているのではない。外国の記録により、外国の元首が発言している言葉がこういふ発表にそのままコピーテーションを付けて載つてゐるのです。そうした正しい史実に基づいて、われわれが現在置かれてゐる環境についてもう一度調べ直し考え直す必要があると思ふ。

このアメリカの國務省から発表された外交文書の中の一つをご参考までにここでご紹介します。アメリカで原子爆弾の製造に成功したとことです。これを日本に落とそうか落とすまいか、という問題がアメリカ国内で大議論になった。これを作り上げるためには、数年にわたる科学者と軍務関係者の秘密作業による協力が続けられていますから、作ったほうは大変な熱意をもって原爆実験をやってみました。ところがこの文書には「すべての関係者」と書いてあるが、科学者、軍人を含めすべての人が想像したよりもはるかに大きい戦術的効果が第一回の実験で出たらしいのです。そこで、こういうものをかりそめにも人間の住んでいる都市に落としていいのかどうか、ということが当然アメリカで問題になったわけです。何人かの人は、日光の大きな杉の木が繁っている山の中に落とせという。ストラウス海軍少将などがその意見です。

日本人は理知的で聡明な人間なことから、日光の山の中に落としても、その被害状況をみれば、それがどんなものであるか、日本人にはすぐわかるはずだということです。またハンガリー生まれのシラードという科学者は、六十八人もの学者の署名を自分で来て投下反対の意見を提出する。それから陸軍航空司令官のアーノルド大將も、最後まで普通爆撃をもって日本と戦えばよろしいという。こういう人が続々と出て来るのです。しかしトルーマン大統領は、自分で最後の断を下す。断を下すというよりも、トルーマンの心境はそのような声に耳を貸す余裕が全くなかったことをその間の記述が明らかにしている。ほかに、面白いといっはいいすぎですが、日本人の知ら

ない間に、日本が料理されていく会談の内容が沢山に出ています。まあ、一度読んでごらん下さい。

四、天皇について

(この項は最終日の合宿教室の総括的所見の中で述べたものであるが、編集の都合上ここに集録することにした。)

終戦になってから、天皇なんかたいしたものではない、つまらない存在だ、という考え方がはびこってきたが、最近の学生諸君は私たちの想像以上に、改めて天皇について考えてみなければならないという気風が強いように見受けられる。しかし、諸君は国家というものを考えるときに、行政的、政治的な機構をもったものとして考察することは誰でもできるが、国民の精神的な拠りどころが国家の伝統の中に確立していたのだ、という話になると、学生諸君は「それは古い」といってそっぽを向いてしまう。さらに天皇との関連において国家のことが語られると、国民主権と天皇統治という二つを矛盾対立するものと決めてしまっておいてそれを考えるから、一層混乱し、面倒になってしまふ。そこでここでは、諸君がこれから先、天皇についていろいろの角度から研究もし、考えてもゆかれることを前提として、諸君が平素新聞やラジオや雑誌などで考え慣らされている天皇后論の角度からではなく、しかも天皇を考える人にとっては決しておろそかにしてはならない大切な点について、ここに若干お話ししたいと思います。それはいわば私の考える天皇論への導入の役目と、天

皇を論ずる面の広範さについての指摘になるかも知れない。

まず最初に申したいことは、いまから六年前、第一回の合宿教室が、鹿児島県の霧島で行なわれたさい、私は講義の中で、天皇についてお話した。それは「混沌の時代に指標を求めて」という表題の合宿報告書になって出版されているが、そこでお話した私の考え方は、今日にいたるも少しも変わっていません。したがって、そのレポートをお読みいただくことをお願いしますが、そのときの話の中で、私は天皇が政治の実権者として組織された戦前の日本の政治形態は、軍事と政治が峻別(しゅんべつ)されており、さらに国民生活の宗教的情操の集約としての天皇の地位が、キチンと整えられていて、私の考えうる限りにおいては、政治学的にみて、最高の制度だと説明してあります。だが、制度がいかに最高のものであっても、精密度の高いものは高いほど、その運営には微妙かつ高度な条件が欠けてはならないわけです。そこでその高度な条件とはなにかといえ、天皇が国民をわが子のように思われるお心と、国民が天皇を親のようにお慕いする心が、両方に存在することが先決条件であるということです。ここにひびがはいれば、戦前に見られたごとく天皇制政治形態は、かえって弊害が続出して、病根にとりつかれたようになってしまいう危険がある、と私はその中で指摘しております。

事実みなさんが想像されてもわかることですが、昭和二十年八月十五日の敗戦の日までは、九千

方のすべての日本人が、天皇とともにこの国を防護し通そうと決意していたわけです。戦争は、天皇のご決断によって終止符が打たれたが、国民が天皇とともに心に誓っていた誓いが、真実のものであったとすれば、いくら敗戦の悲劇に出あっても、急転して天皇軽視の気風が起るわけはない。マッカーサーでさえ、天皇の戦争責任の追求を遠慮せざるを得なかったのに、肝心の日本人自体の中から、天皇軽視の声と行動が起こったではないですか。それが何を意味するかといえば、答えは簡単です。天皇制時代においてさえ、天皇神格化の全国的な光景の中でも、国民の心はいろいろに迷っていたであろうし、天皇への忠誠心が透徹し、確立していたとは、いえない内情があったからです。したがって、戦時中の天皇制政治形態は、外見上の整然さに比べて、その制度にとつて欠くことのできない前提条件である忠誠心の内容において、すでに大きな食い違いを生じていたわけです。このことは必要条件がくずれているのに、政治形態だけがそのまま運営された、ということを意味します。

したがって私は、戦後に天皇制政治形態が否定されたが、その崩壊の芽はすでに戦前からあったのだと考える。しかしそういうと、諸君はすぐに、そうなんだ、天皇制政治形態は封建的な非文明なものであったから、日本人の知性の発達とともに否定されていくのは当然だ、といわれるであろう。ところが、そこが私と違う。私は価値あるものを価値あるものと理解しえなくなった日本国民自体の不勉強といい加減さが、天皇制政治形態のもとで発生していたのだ、というのである。自分

幕府が文武の権力を全部握っていた約三百年間、天皇は政治とは一応関係のない立場におられて、私たちの迷妄(もう)をタナ上げして、対象をとやかくいうのは間違っている、と指摘するのです。私は、ここで詳しくそれを説明する時間を持ち合わせないが、天皇制政治形態の高い価値を認めると同時に、その必要にして前提条件である国民の天皇に対する敬慕の心が、いい加減な状態にある限りは、政治学的にも高度な価値があるとみられる制度も、これを有効に活用する方途はないと思う。したがって、いまの国民思想の状況で、天皇制(政治形態としての)復活を実現してみたところで、弊害百出となるだけでしょう。五十年、百年先に天皇制は復活される価値をじゅうぶんに持っているとは思いますが、形式上、体制上急いで復活しようとすることは、また別の大きな誤りをおかすおそれがあるというわけです。

そこで第二に申したいことは、これからがぎょうここでお話する主眼点ですが、日本の長い歴史の間であって、天皇が名実ともに文武の大権を掌握されて天皇の地位におられた期間は、実はそれほど長期間ではなく、むしろ限られたいくつかの時代だけであった。それはみなさんが日本歴史をお調べになれば、すぐわかることです。明治から昭和二十年の終戦までの約八十年間における天皇制政治形態における天皇だけを考えると、天皇についての諸君の思考は、すぐに政治的天皇しか考えられなくなる。私はそこに問題があることを諸君に指摘したいのです。というのは、たとえば徳川

国民から敬慕され、政權担当者の幕府自体も、常に天皇のもとに自分らがいることを示した。そうしなければ国民感情と幕府とが一致していかなかったからであらうと思われる。それなのに諸君が天皇制について語るとき、明治時代におけるそれも、徳川時代におけるそれも、いっしょくたにして考える。さらにいえば、天皇を語ることと天皇制を語ることとの違いにも気づかないし、天皇制を語るにしても、文武の大権を掌握した立場のいわゆる天皇制政治形態としての天皇制と、臣下が勝手に政治・軍事を支配しながら、なおその上に立てざるを得なかった存在としての天皇の元首的地位における天皇制との違いも眼中におかない。そうした雑ばくな立場でお互いに天皇を論じ合っている、そうしたことが多いのではないでしょうか。

そこで第三には、明治二十三年にいま旧憲法とか明治憲法とかよばれている大日本帝国憲法が發布されているが、明治の四十五年間のうち成文憲法で政治が運営されたのは、明治時代の後半だけだ、前半は成文憲法なしの時代であったことも、諸君が注目すべきことでしょう。したがって明治時代の偉大な日本の近代化は、なにも憲法によってスタートしたのではないことに気づきます。憲法が發布されてから変わったことといえば、国会（戦前は帝国議会とよばれていた）が成立して三権分立の政体が整備された点であり、その他の多くの点はそれまでの日本人の生活の中で、なんらかの意味で合法的に理解されていたことが成文化されて施行されたにすぎない、と見ることが出来る

ます。このことをさらに考えて見ると、従来日本国民の間で妥当と見なされ、納得されていたことが成文化された、ということです。天皇と国民の関係についてこれを考えてみても、三百年の幕府時代が終焉（えん）を告げたということは、国民の心が天皇こそ政治軍事を直接ご担当なさるべきであるという理解に戻ったと見るべきで、帝国憲法の統治大権に関する条項は憲法成立以前に確立していたことを知るべきでしょう。

だからいまの日本が民主主義時代になったといっても、憲法をつくってそれに合致するようにすべてのことを全面的に新規にやり直してきたことは、明治の国造りとは、全く趣きを異にしています。現実にもそこにあつたものを憲法に織り込んだのが帝国憲法であり、新憲法を先に作ってそれに合致するように国造りをしようとしているのが戦後の日本です。二つの憲法を比較する場合でも、このことはよくよく考えに入れなくてはなりません。同時に憲法に関連して天皇を考える場合には、このことはさらに強く念頭に入れるべきことと思います。

また親を尊敬する気持ちも、人を尊敬する気持ちも薄らぎ、祖先を尊敬する気持ちも薄らいだ心境になっている現在の若い人たち、学生たちにしてみれば、自分たちの身近かにおられない天皇に対し、親しい尊敬の心が起こらないのは当然かもしれない。そうした心が起きてくるのをいまの時代がチェックしているともいえる。だから天皇を心から親しく感じ、大切なものとして仰ぐような気持ちになれば、といっても無理があるし、天皇の心を自分の心の中に味わい偲んでみるようにしろ

といつても、なかなかむずかしい。したがってそうした環境の中で、やたらに理論的にだけ天皇制を論議することは、むしろナンセンスではなからうか。

私は最近こういう経験をした。約三十人ばかりの大学生が、私に天皇制の問題についてトコトンまで話してくれといつてきたので、約三時間にわたつてその学生諸君に話をしたところが、話し終わつたら、とたんに一人の学生が「全部反対です」ときっぱりと宣言するようになるのです。その学生は東大生でしたが、非常に素直なフランクな学生で気持ちのいい学生なのです。それですぐその理由を聞くと、彼は「先生のいつている天皇は、古い考え方で考えられた天皇であつて、自分たちはそういう天皇を考えないできている。したがつて先生のいう天皇は、かいてもくわらない」といふ。要するに自分らは天皇肯定という立ち場と全く別世界にいる。だから、別世界にいることを前提として話をしてくれなくては困る、と主張するのです。つまり自分がいる立ち場は、天皇否定の立ち場だ、その否定の立ち場においてもなお天皇が必要なことをわからせてくれなければ困る、とこののです。彼は、私の天皇の話を聞いてくれたのだが、そのスタンドポイントが全く違つているために、個々の説明について反論する方途がないので、一括して「反対です」と叫んだわけです。しかし私は、この学生のような若い人たちが、いまの時代にはたくさんおられることを心にとめなくてはいけないと、自分自身に気づいたのです。そこで、いまの人たちと天皇について語るには、その前にその人たちの心の中に、国家生活を送つていくことについての深い自覚が生まれ、さらに

人間関係の意義が解明され、そのうえで社会生活、国家生活に中心がなくてはならぬ、ということが考えられて来たときこそ、天皇について若い世代の人が目を開いてくるのであろうと思うのです。

第四には、これからのわれわれ日本人が、天皇について考えていくに当たって、何を先に考えていくべきかについてお話しします。私は天皇と国民との間の心の交流において、それが歴史的に認めんと続いてきた日本の個性ともいえるべき点が、一番大切なところだと思ふ。国民はその時代時代によって、天皇に寄せる思慕の度合いに、大きな差異を示しています。とくに戦後の日本においては、顕著な事例がたくさんあるし、学校の教師たちも、現憲法の第一条に示されている国の象徴としての天皇についてすら、あえて教えようとしないう様である。それほど天皇に対する国民の心情は変化を示している。一方、天皇のほうはどうかといえは、いまの天皇が全国民の上を思われる暖いお心については、諸君自身も知っておられるし、またそれを知る機縁にわれわれ現代人は、前時代の人々より一層恵まれているといえると思う。だが、日本の歴史に伝えられた百余人の天皇が同じようなお心であったということにも、われわれは目を注がなければならぬ。天皇という地位につかれた方が、国民の親としてのお心を修業せられて来たことに注目していただきたいのです。私はそれを私の勝手な推測ではない。歴代の天皇はことごとく和歌を創作しておられる。その和歌は御製（ぎょせい）とよばれているが、今日まで正確な文献として伝え残されています。だか

ら私は諸君に申したい。天皇について語り、また論じ合うならば、なによりも歴代の天皇の御製集をひもといてもらいたい。和歌は創作であり、その創作の上では、作者はいつわりの心を表白できるものではないからです。歴代の天皇の御製が、言葉のリズムと脈動する生命をその中にたたえていることを、諸君が読んで学ばれるならば、それが作者の統一した精神の吐露であることは、必ず納得がいくはずで、少なくとも、日本語のもつ言葉と魂との関連性に注意さえするならば、歴代の天皇の御製を読むことによって、歴代の天皇のお心というものに、じかに、現実的に生々しく触れることができる。歴史上の問題についてこれくらい正確な追求の方法は、他にはなからうと思いません。歴代の天皇の和歌が今日まで残されていることによって、われわれいまの時代の人々も、遠い昔の天皇のお心を、直接に経験し判断することが可能です。こうして、われわれは日本に伝えられた天皇という地位と、その地位に立った方々の心に触れることができます。天皇についての論議は少なくとも御製をよみ、天皇のお心を知ってのちに展開せらるべきであると私は思うのです。このような勉強をすれば、天皇のお心というものが、長い歴史を通じて一貫していることに気づきます。もとより天皇も人でありますから、その性格も十人十色であり、いろいろのニュアンスを持っておられる。しかし、そういう人柄の差異にもかかわらず、国民とともに、平和にありたいと思われる強烈な願望や、国民に寄せられる厚い暖いお心は、不思議に一貫したものを示している。万世一系というのは地位についての説明だけではなく、徳の高い内容をその中にたたえているからこ

そ、万世一系の名にふさわしいのである。われわれはすべてのことについて、聞きかじりや、受け売りのような議論をやめて、文献に基づき、文化史的に、正確に歴史と取り組まなければならぬ。

さて第五には、天皇のお心を、われわれ自身が感じとることができるような学問を励み、日常生活の精神的な努力をするに当たって、国民として、どういう心組みをもって天皇のお心に対していくかという問題が出てくる。この問題がすなわち、天皇論議となり、天皇制論議となっていくべき道です。この問題についてもその扱い方、考え方のものが多岐(き)にわたって研究されることになるが、今日は一応この辺でやめたいと思う。ただいっておきたいことは、天皇にたいする自身心の持ち方について何の用意も努力もせずに、やたらに理論的な天皇論議をすることは、もともと順序が狂っていると思うので、この点はじゅうぶん注意されるよう強く要望したいと思う。

すなわち、天皇というものは、日本人的な思考と日本人的な情意によってのみ、もっとも正しく理解され得るものであり、日本人だけが経験してきた天皇について、その経験を持たない外国人の所見を求めて歩きまわることなどは、まったく無意味なことである。天皇は歴史的にも経験的にも、西欧の君主とはまったく異なった存在であった。それゆえにわれわれ日本人は、西欧にはなげ君主が存在し、日本にはなぜ天皇が存在したか、その本質的な差異を知ることから出発しなければならぬと思う。

学問と人生

(田かなづかい)

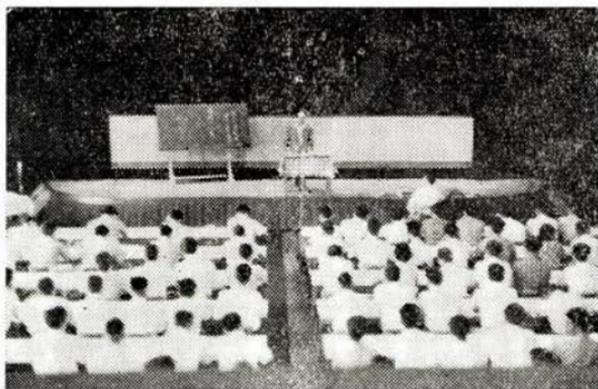
熊本大学教育学部助教授 津 下 正 章

私に与へられました題は「学問と人生」といふことですが、一時間ではとても私にとりまして重荷に過ぎる感が致します。それで、時間の許す範囲において、諸君とご一緒に、かういふ問題について共に学んでゆくといい、そんな気持ちで考へてみたいと思ふのであります。従つて理詰めで「学問論」を披露しようなど毛頭考へて居りませんし、またその必要も認めません。それよりも、要は諸君と私共と、共々に、この数日間、講師の方々や先輩の人達を交えての相互の精神の共感、偽りや見せかけをかなぐりすてた魂の触れ合ひ、さういった雰囲気ふんきの中の生活体験を通して、真実の学問や人生の片鱗ひらを、目敏く垣間かひま見ることが出来るやうに努力する、或は自己訓練おんじけんをすることだと思ひます。

今日やがてこの会場にお出でになると思ひますが、私共大学の教官側を代表して居られます花田先生が、私にお葉書を下さつて、「自分は雲仙の会で若い皆さんに会ふことが、或は今度でもう出来なくなるかも知れない。今年はずひ参加させて貰ふのだけれども……」とさういふお言葉でございました。私は非常に感に打たれたのでございます。既に八十を越えられて、明治以来の日本の移

り行きを、しかと見定めて、大正から昭和の今日まで、最も中正な歩みをされて、大きい国家的な目から見ましても、非常にご立派な仕事を生涯続けていらつした、いはば最高の日本の良識であられる先生が、この会に、もう今度限りでお出で願へないのか、かう思ふと、非常な淋しさを感じるのでございます。勿論来年も先生のご事情が許されれば、是非ともお願ひ致したい気持が一杯でありますけれども、お年を召された先生を、余りに無理をお願ひすることは、何か申し訳ないやうな気も致します。

一期一会といふ仏教の言葉がありますが、私共が、また会ふといふやうな事は、さう易々と希望出来るものではありません。生涯に一度しか会へないと思つて、その一度の出会いを大切にしなければなりません。会つたその時が一番大事なのであります。私共がかうして一年に一度しかない集ひを持つて、ここに相会ふといふことは、実に文字通りの有難い大変な仕合せで、そこには深甚の因縁がある事に思ひ至らねばなりません。花田先生が、この会に参加して、是非諸君に顔合せしたいといふ切なるお気持で、この暑熱の中を遠く大阪から汽車に揺られながらお出でいただくのも、正に先生としては一期一会のおつもりからだ、私には察せられます。先生が生涯をかけて、日本の正しい教育のためにお働きになり、日本の正しい文芸の在り方のために、身を以て国を思ふ丈夫振りの歌の正道を、一筋に歩み続けて居られるそのお姿、お態度の中に、学問とは何なのか、人生の在り方はどうなのかといふことを、実は無言のうちに、教へて下さつて居るやうな気がするので



あります。殊に終戦後の日本の昏迷した学界や歌壇にあつての先生のご存在、ご活動は正に私共にとりまして唯一の灯明台の感があるのであります。阿蘇山での研修会に、先生にお伴して私も中岳の噴火口のほとりに立ちましたが、先生が詠まれた歌に次のやうな一首があります。

とこしへに火を噴く阿蘇は燃ゆるもの有りて噴くなりその燃ゆるもの

火の山阿蘇は永遠に火を噴き、人生における達徳の人は万世に太平を開くといふ。その人の人生が光り輝くためには、不滅の光源を必要とする。それは学問以外の何物でもない筈であります。その学問とは、智識があるとか頭が良いとかいふ程度の才物のそれをさすものではない。人生の情理を悟得した、道を得た、得即ち徳とくの人のシッカと身について永遠に不滅なもの、それは燃ゆるものであり、きびしい求道の鍛錬精神の中から、やがて身につき覺られて来る至高のものであります。その燃ゆるもの、即ち真実の学問をこそ私共は身につくべきもの、これ

なしには人生は全く無意味である、これあることによって人生は永遠である、と教へられたのが、この花田先生の阿蘇の歌であると、私は理解したのであります。先生は「老書生として、共に学ぶために来た」と昨年の会で申されましたが、先生ご自身この燃ゆるものを求めて、ひたすらに燃ゆるものの中に生命をかけて、一步一步、一日一日を高め、また深めておいでになる。それが先生の学問であり、そのままが先生の掛替へのない人生のお姿であります。そしてまた、その私共の身近に居られる先生を素直に仰ぐことが、私共としての最も手近な学問の道であり、この関係をさして東洋流には、これこそ本当の教学教育といふのであります。教への親といひ、教へ子といふ言葉に表される日本古来の教育理念が、ここにおいてピタリと胸に来るのであります。ともあれ、私は諸君と共に花田先生を通して、学問と人生について考へさせていただく機会に恵まれたことを感謝したいと思います。

さて、東洋の学問の考へ方として、人生如何いかにに生くべきかといふ問題、それはいはば人生の指導原理を示すものであります。最も中心をなす、不動のもの、不変のもの、永遠な性質のものといふ意味で経学きんがくといひます。これが原理の学で、その原理が実際の人生でどのやうに実現されたかを究めるきまるのが、人生如何に生きしかといふ実証の学で、史学であります。この二つを合せて経史の学と呼んで、殊に重視して参ったのであります。残念なことであります。終戦後の日本は、この二つの方面の学問に対して、重大な過誤を犯してしまつたのであります。その事は、ここでは触れな

いでおきます。ところで、その経学の対象となる「人生如何に生くべきか」といふ問題を、維新の人物として松下村塾で光った一人であります東行高杉晋作が、

おもしろきこともなき世をおもしろく

と、上の句に詠み出でましたのにつけて、

住みなすものは心なりけり

とかの野村望東尼もとくにが下の句を結んで一首を成して居ります。これは二人の学問教養が渾然こんぜんとして一体となり、いかにも建設的な意慾よくに満ちた人生肯定の歌となったものだと思ひます。高杉が人生の現実的「史学」的な捉へ方で詠み出し、やがて在るべき世界への志向を匂はせる「経学」的段階へ進んだところで、それを承けて、女性としての静かな永遠と理想を思ふ野村の心境が、グッと一気呵成かかに、人生の在りやうはここぞとばかり見事な詠嘆で「経学」的な二人の共感する志を言つて、詩の本領を全うしてゐるのであります。これに対して林芙美子の桜島の文学碑には、

花のいのちは短かくて

苦しきことのみ多かりき

と、かう刻んであります。これは文学的な感傷といふには、余りに痛々しいものが感ぜられま
す。人生の孤独に疲れた弱々しい吐息とでも申しませうか、文芸の一面を担った人の言葉として、
やはり人生の真実を見つめたものに違ひはありません。それで、それはそれなりに受け取りたいと
思ひます。学問の分類の上では、この人間の感情情操面を「集」の学問として居ります。即ち文学
をさすのであります。その外に、それぞれの専門の学問を「子学」といって、諸子百家などといふ
言葉があります。以上の経史子集の学問を四部の学と呼んで、この中のどの一つが不足しても、指
導層としての教養に欠けるものと見るのであります。少しく話が逸れましたが、時代を背負ふ意気
込みのある志士の心構への大きさと、文学のみに生きた人の情念の切なさと、つまりは「心なりけ
り」といふ、それぞれの心柄から来る相違が、こんなにもハッキリ別れるものかといふことが、諸
君にも、わかつていただけるかと思ひます。

ついでながら、熊沢蕃山が詠んだ非常に線の太い、男性としての自信に満ちた心組みを、しかも
清々しくも謳ひあげた今様歌を詠んでみませう。これは黒田節の本歌といはれるものであります。

雲のかかるは月の為め

風の散らすは花の為め

雲と風とのありてこそ

月と花とは尊けれ

この歌になりますと、まことに大盤石であります。いかなる人生の問題に対しても、これを突破出来る心境であると思ふのであります。自らに恃むところの毅然たるものがあれば、即ち東洋の學問でいふ道を知って居れば、かういふ心境に到り得ることを示してゐるものであります。これは単に個人の問題だけでなく、大きくは國際關係についても當嵌められることでありませう。ここに想ひ到る所があれば、終戦後の日本の世相の混乱は、今日見るやうな甚しきまでにはならなくて済んだかと思ひます。自らの國、自らの國語に自信を失つた國民ほど無慙なものはありません。また度外れた過小評價コンプレックスに陥つて、しかも自らそれに気づかないことほど學問無視の態度はないと私は憤りさへ感ぜずには居られません。そのことを孟子の語を借りていへば「學問の道は他なし、其の放心を求むるのみ」といふことになります。弥次馬になり果てて、脇見にばかり現をぬかす、逃げ出し、突っ走つた自分の本心を取り戻すことが、即ち喪失した自己の主体性を確立することが、學問といふものだと教へて居ります。

同じやうにラテンの言葉にも「神が人を亡ぼさうとする時には、まづその思慮を失はせる」とあるさうですし、デルポイのアポロンの宮に掲げられた「汝自身を知れ」といふ言葉も、プラトンに言はせると「分を知れ」とか「やり過ぎるな」とかいふ意味よりも、「ご機嫌よう」といふ神アポロンの挨拶で、その本当の意味は「迂闊に自分を忘れずに、思慮を失はずにあれ」とか「うっかりせず、心が常に健康であることを祈る」といふことのやうであります。

このやうなことを考へて参りますと、今日の日本の政治や教育などの面には、孟子のいふ放心状態が、大手を振って罷通つてゐるやうで、全くの学問無視の有様であり、神どころではありません。自分から自分を亡ぼさうとしてゐる危険な現状になって居ります。国語国字問題の混乱なども、その一つの現れに過ぎません。「明治は遠くなりにけり」などといはれますが、私は單なる懐古趣味などといふことではなしに、今日外人達が非常な熱心さで、明治文化の研究をしてゐると聞きますにつけても、日本人自身もつと真面目に先人の業績に学び、またこれを検討すべきではないかと思ひます。よくよく考へてみますと、国の將に興らんとする時には、やはりそれに応ずる活氣に富んだ学問教育が用意されてあつたやうであります。ここに私が持つて参りましたものは、明治三十三年に発行された坪内逍遙博士の著した富山房出版の「国語読本」であります。当時は尋常小学校が四年で、その上に高等小学校が四年ありましたので、この教科書はその高等科の巻一で、ただ今でいへば小学校五年生用に当るわけであります。その巻頭の文章を紹介してみたいと思ひま

す。

第一課 大日本

我が国は、地図にて見れば、小さき国なり。それを大日本と呼びて、恥かしからぬわけを知れりや。

大とは、形の大小のみをいふにあらず、質のりっぱなるをこそ、まことの大といふべけれ。人についてはば、善き人は、大人にて悪しき人は、小人なり。いかほど、からだ躰大きく、腕力強く、身分高く、財産多く、才智、学問ま優れたりとも、心だて悪しき人は、小人なり、卑むべし。

国もまた、其の如し。いかほど、領地広く、兵力強く、産物多く、国富み栄ゆとも、悪しき事を行ふ国は、小国なり、卑むべし。

小人、悪人とは、自分勝手のみ行ふ者をいふ。大人、善人とは、他人を思ひやる心深く、道理にあかるく、勇氣ある人をいふ。

世界に、国は多けれど、我が国人は、古来、君、親を思ふ心深きによりて知られ、家、国を思ふ心深きによりて知らる。昔の人は、我が国をは褒めて、君子国と称したり。

日本に生れたるを、名譽と思へ。日本に生れたるを、幸福と思へ。我が国は、地図にて見れば、小さき国なれど、善人多く、大人多しと褒められたる国ぞ。大日本と呼びても恥かしからぬ

国ぞ。さりながら、これをして行末長く、まことの大日本たらしむると否とは、ひとへに、国民の心がけによることなるを忘るべからず。

以上まことに堂々たる名文であると思ひます。今日の国語教科書のどこにも、実はこれ程の見識を以て書かれたものは見当りません。さすがに坪内博士が自ら執筆されたものだけに、全文にその学問の匂ひが、馥郁ふくよくとしてただよふものがあるやうに思はれます。しかもこの一文を、よく心して読むならば、そこに日本の学問といふものは、如何にあるべきかと、明白に道破してあることに誰しも気づく筈であります。

この文の中で「日本に生れたるを、名誉と思へ、日本に生れたるを幸福と思へ」と呼びかけてありますが、自己喪失の時代と評されてゐる現代日本の多数の人達には、寧ろこの逆の立場でしか考へ得られないのが実状ではないでせうか。最も悲しむべき病的現象であることは申すまでもないのでありますが、その由よつて来たる所を究めることなしに、徒らいたにその非を責めて、相争ふに止まるべきではありません。孟子のいふ放心を求めることの大事さに気づかせなければなりません。一つのイデオロギーに簡単に身を委まかせ、集団の大勢に安易に乗っかり、自ら苦しんで考へる代りにスローガンの旗の色に甘んじて誘導されるといふだけの人達で、日本が満たされるとしたならば、これはまことに情ない亡国の兆であります。自分で自分の考へを持つ、しかもそれは飽くまでも独断で

はなく、精緻な論理の筋目によって貫かれてゐる、といったゆきかたによらないならば、日本の文化が、個性豊かな、大きく世界の文化に寄与し得るやうな創造にまで到達することは永久に出来ません。経学の中の四書の一つであります中庸には、この消息を教へて「博く学び、審かに問ひ、慎んで思ひ、明かに弁へ篤く行ふ」と述べて居ります。学問の定義として代表的なものを見てよいでせう。論語には「博く学んで篤く志し、切に問うて近く思ふ」とあって、いづれも趣深い言葉であります。人生を真実に生きるためにのみ、学問が存在することを説いてゐる点で、古典の照し出す方向は一つであるかと思はれます。学問は、それ程に切実なものであって、次から次に水泡の如く浮んでは消えるスローガンを追っかけるやうなたわけ者の玩具ではありません。だからこそ孔子も「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」とまで極言して居ります。いのちがけで道を求め、また道を喜ぶ者の叫びであります。孔子は、自分から批評して「私は学問好きだ」と申して居りますだけあって、その言行録である論語一卷は、開巻第一の「学んで時にこれを習ふ、また説ばしからずや」といふ学問の悦びに始まる全巻が、悉く是れ一篇の活ける学問論と称してもよいものであります。

東洋の古典に共通する一つの形式、或は内容といったが良いかも知れないが、その最初のところが一番眼目になる大精神が、先づ結論的に発言されてあります。ですから今日のダイジェスト時代の人達が恂巧に東洋の古典に触れようと思へば、大体書物の初めの部分だけ読めばよいといふこと

になるかも知かりません。論語の第一章は、明かに学問と人生について語ったもので、一部の小論語であると見た学者もある程です。大学は「大学の道は明德を明かにするにあり、民を親にするにあり、至善に止まるにあり」といふのに始まり、中庸には、「天の命するこれを性と、性したかに率したかふこれを道といひ、道を脩おさむるこれを教といふ」とあり、孝経は「それ孝は徳の本なり。教の由りて生ずる所なり」といふ名言が最初に出されてあり、孟子では、梁の恵王が「叟さう、千里を遠しとせずして来る。また將に以て吾が国を利するあらんとするか」といふ所得倍增富国强兵の功利的下心で問ひかけたのに対こたへて「王何ぞ必ずしも利といはん。また仁義あるのみ」といふ徳治主義の王道政治論を浴びせたところから始まってゐるのであります。老荘はじめ諸子百家も大体同様な形式になつて居ります。

ところで、一体人生最大の幸福は何なのかと聞かれたとしたら、誰しも一瞬返答に困るのではなからうか。古人も多くこれを問題として、先輩に聞いたり、自問自答してみたりして、或はこれを詩に歌ひ、また文に綴つづつて居るのであります。それぞれの人の心の高下によつて千百様々の解答が出されてゐるわけでありませんが、先哲の多くは何といつても道を知ることを以て第一の幸福と致して居るやうであります。不案内の土地とか、人氣もない野山、或は高山などで迷つた時、たまたま道に出たり、人があつて道を教へてくれたりした時の喜びは大変なものであります。海や空も、その道を知ればどんな遠くへでも旅する楽しみが得られます。道あつて人はその目的地に到達するこ

とが出来るのでありますが、人間を人間たらしめるものが道であり、道を知ることなしには生理的には生きても、本当に真実の人生を生きたとはいへないのであります。論語の首章に「学んで時にこれを習ふ、また説（悦）ばしからずや」とありますのは本当の人生の生き方、それが道であります。それをいのがけて学ぶのですから、一步一步と高められる人生の日日が幸福感に満たされてゆくわけです。次第に心の友の数が増しゆくことは、いよいよ楽しいといふことになります。孔子が学問することに悦楽といふ二字を用ひて居るのは意味深長なるものがあると思ふのであります。諸君の学生生活において、学問することにおいて、悦び、また楽しむ気持を度々持つことが出来たかどうか。さうした魅力ある時間、感動した瞬間が幾度あったか、そんなことを考へていただきたいものです。といって、それは教師の側に不足をいふつもりではありません。学問することには、そんなに生やさしいものではありません。寧ろ苦しいといった方が当ってゐるかも知れません。しかし、それを不断に継続してゆくうちに、やがて悦びと、更に楽しみとが油然として湧き起つて来るのではないでせうか。しかし、その後にもまた苦しみが来る、更にそれを克服する。その次により高次の悦楽が生れる。孔子は生涯をこの繰返して貫いたものと見てよいと思ひます。さうすれば人生における身上的浮沈、順境逆境といったものは第二義第三義のものとなり、「人知らずして温らず、また君子ならずや」といふ意境がひらかれて来るのであります。これが学問の道であり、また学問に裏打ちされた人生究竟の姿であると考えられます。

かうした孔子の勉強、そしてその好学の生涯を、彼は懐かしげに回顧して、次の如く学問と人生といふ私に与へられた主題に結論してくれて居るやうに思はれるのであります。

子曰く、「吾十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従ひて、矩を踰えず」

EECをめぐる世界の経済と日本の経済

世界経済調査会理事長 木内信胤

木内先生のご講義は合宿第二日の午前から午後にかけて、長時間にわたって行なわれ、参加者に多大の感銘を与えた。それは本書の感想文の中にも語られているが、ご講義の内容は、世界経済の動きを分析説明せられたものであった。そこで本書の出版が遅れたことも関連し、この種の時事問題は、タイムリーであることが大切であると考え、ここには、七カ月後の三十七年三月二十五日、東京青山の日本青年館で舉行された幹部学生特別研修会でのご講義を、それに代えて掲載させていただくことにした。

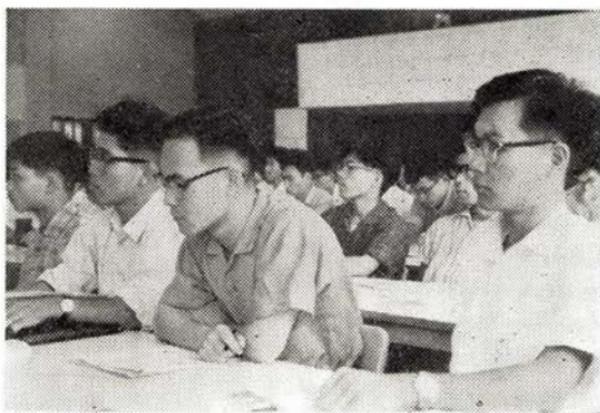
EECについては世間には、誤解、曲解がまことに多い。それを整理することが先決です。そのEECにまつわる誤解、曲解の最もシンボリックなものは何かというところ、英国がEECに加入を申し込んだのは昨年の八月ですが、そうしたら日本の言論界は、まるで英国がもうEECに入ることに決まったことにしている。これが実にいけない。私は英国は入ると決まっていなと思う。結局入らないのかも知れぬと思う。入るにしても準会員式な入り方がある。(準会員ならば日本も入れる。私は日本は準会員として入るといいと思う。)英国も準会員ならばすぐにも入れると思うけれど

も、どういふわけかフルメンバーでなければならぬことになる。これでは入れないのではないかと私は思う。

ところで英国は果たして入れるだろうか、入れないだろうか。入るにしてもいろいろの難点がある。がその難点は何だろうかということを考えるのが、EECを知るゆえんです。ところが世間の言論を見ると、そういうことを一切吹っ飛ばして、英国は入ることに決めている。そういうふうでは、EECは全然わからないといつてもいいと思う。それが申し上げたい第一点です。

次に、英国が入るからEECは強大になる、といういい方をする。これも間違いで、EECは英国が入らないでも十分に強大です。現在の六カ国だけで十分にアメリカに匹敵するようになる。追い越すかも知れない。だからEECとは大変なものです、そのところをそう考えるのが大事です。

第三にEECは排他的だから、それが強大になることは、日本にとって困ることだとみんな考えているが、これも全然違う。その辺のところを正しく理解するためには、私の本の「世界の見方」





にも書いてある「新しい世界」——それは絶対平和の基礎ができている世界だと私は思う——という見方につながるものを考えていただければ、これから申し上げるようなEECに対する考え方がわかってもらえると思う。

まず英国の問題からお話したほうがいいと思うが、英国の加入はなぜむずかしいかということからお話したい。私は昨年ベルギーのブラッセルにEECの本部を訪ねた。そこで私は、ブラッセルの日本大使館で話を聞き、またEECの本部では二人ほど幹部級の人にも会った。そのときの話をするのが一番手っとり早いと思うし、また一番面白いと思う。

私が行ったのは九月でしたが、八月に英国が加入を申し込んだ。そこで私は「英国がよいよ加入を申し込んだそうだけれども、一体入るのか」と聞いてみた。すると誰もがいったことは「入るにしても三年はかかるでしょう」という。そこで私が思うことは、三年かかるということは入れないということと同義語ではないか

ということですが、勘ぐれば、彼らが「三年かかるだろう」というのは、入れないということ、巧みな外交辞令でいっておるのじゃないか、とさえ思いたいくらいです。

なぜそうかと申しますと、そのことを理解するだけで世界の政治とか経済とかいうもののほんとのところが非常によくわかるのですが、その前に、「三年かかる」ということがいかに重大な事かと申しますと、EECは——一九五七年に「ローマ協定」というのが出来て、五八年一月に正式に成立した事になったのですが、最初の一年ははじめからの申し合わせで何も実際の仕事はしないでいた。それで、五九年から関税を下げるといった実際の仕事を始めたのですが、五九、六〇、六一年とやって、いま六二年ですが、これがちょうど三カ年です。ところが、この三カ年の間にヨーロッパの姿というものは一変したようになり、日本でもこれだけ大騒ぎをするようになった。大変な進展をしているわけです。ところが英国の加入が、昨年の九月から勘定して三年かかるとしたら、まだこれから二年半かかるわけです。これから二年半たったら、EECはすぐく先のほうに行ってしまう。だから、それにあとからノコノコ入って来るといふことは、英国にとって非常にむずかしいことであろうと思う。そのことをひとつ頭に入れて置く必要がある。

もう一つ事務局であった話をいたしますと、事務局で偶然に出て来た話では「英国が入る入らないといろいろいうけれど、それは入るのもいいでしょうし、結局は入るか知れませんが、われわれ事務局から申しますと、英国が入って来るのは、何はさておきやり切れない、という気分

す」というのです。何しろたまらない、というのです。だからといって、事務局がそういうから英国は入れないというのじゃない。けれど事務局の人がそういうことをいうのが面白い。そういうところがあるのを知る要点なのです。

ではなぜ事務局の人が「われわれはたまらない」というのかというと「自分たちはこれでようやくお互いに話がバリバリ通じるようになった」——人間同士の話というものは、なかなか通じないのです。同じ統計数字一つ読んだとて、背後事情をすっかり知っておらなければその統計数字の意味はわからない。なにが三%上がった、といってもそのことがなにを意味するのかわかるものじゃないのです。背後事情をすっかり知り、自分の国の三%の意味を知って、向こうさんとの違い、つまり背後事情を知ってはじめて向こうが「三%」といった意味がわかる。統計数字一つ理解するのでも大変な努力がいるのです。それに第一、統計の作り方が違っていたら、並べて考えるわけにいかないでしょう。そこで彼らが、ようやくこのごろお互いの話を通じるようになったというのは、お互いに非常な努力をやって来た、たとえば統計の作り方にしても、差し支（つか）えない限り同じように調子を合わせるといふふうなことをやった、その上で話が漸く通じるようになったということなのです。もともとE E C六カ国の連中は、相互に昔から非常によく知り合っている間柄です。だからこそE E Cを作ったわけですが、それでも彼らはそういう大変な勉強をやって、それで漸くこのごろは話がどんどん通じ合うようになったと考えている。そこへ英国人が、のそっと入って来

るとなると、第一、彼ら同士はイタリー語、フランス語、ドイツ語をみんな平等に使っている、言葉のバリエーションがほとんどなくて何語でもいいということになっている。ところが英国人は、ご承知でしょうけれども外国語をめったに使わず、また下手です。いつも英語で通す。だからE E Cに入ってから来てきつと英語しか使わない。その英国人の英語は、アメリカ人の英語のように率直ではない。何かもって廻ったような言い方をするし、アクセントもオックスフォード・アクセントなどといい気取っている。つまり英国人はおすまし屋なんです。その言葉にはむずかしいニュアンスがあり、それを理解しないとほんとうの意味がわからない、というのが英国人です。だから「あの連中が入って来てあの調子でやられては、なんとしてもやり切れない」という事務局幹部の言い分が出て来るのです。「だから英国はE E Cに入れない」というのではない。けれどもこういうところから、話の面白いところがあるのです。こういうところから、英国がE E Cに入るといことは何を意味するかを知らねばならぬ。

そこで、E E Cというのは日本で理解されているところでは、大体関税同盟的な存在です。関税を下げて、貿易を自由にする、そして単一の経済地域に持って行く、というように理解されている。それはそのとおりですけれども、問題は関税だけではないので、貿易以外に資本と技術のみならず、労働の移動まで自由にしようとしているわけです。そうするのに何が必要かという点、社会

保障、つまり病気になったときの保険とか、失業したときの保険といったものから税金の取り方にいたるまで、大体同じレベルに持って行かないと労働の移動を自由にできないのです。税金が安いから、社会保障がいいから、ということ、ゴソツと人間の移動が行なわれたら、経済的に不合理が生ずるわけです。そういうことがないようにするためには、どの国も同じような調子に、同じようなタイプの税金をかけ、同じようなレベルの社会保障を持とう、ということになる。これは大変なことなのです。EECはそれを、十二年がかりでやろうとしている。そこまで考えますと、これは大変な仕事だということがわかるのですが、だからそれをやるのには、いまのお互いに話を通ずることが絶対に必要だということになるのです。その難事業に彼らは取り組んでいる。EECが出来てうまく行ったと行って、気楽に考えてはならない。それは非常な困難を克服しながらやっている仕事です。それをイギリスを加えてやらねばならないか、言葉とか気分とかの違うのは実にやり切れない、というのです。

ところで話が少し違いますが、面白い話をもう一つしておきますと、それは「英米法」と「大陸法」という問題です。このあいだ高柳賢三先生のお話を聞くチャンスがあつてきたことですが、先生は「憲法第九条」があんなにもめたのは、あれを作ったのが英米法の間人であるところのアメリカ占領軍であった。だから英米法の頭で九条を読めばいいものを、日本人の法律意識は大陸法系だから、大陸法の頭で読むからあのようにゴチャゴチャになったのだ。自分みたいに英米法の頭を

もっている人間として憲法を読めば、九条なんかなんの問題もない、といわれるのです。これをそのまま受け取っていいかどうか、法律論としては私にはわかりませんが、先生はともかくもそうおっしゃった。なぜかという、英米人というのは成文法を作らない国民でしょう。だから、民法、刑法の分野であつたら判例で行くわけです。そういう人間だから、成文の法律を書くことももちろんあるけれども、それを書くときには、きまり切ったことはわざわざ書かないそうです。そして、とくに書く必要があることだけを書くのが英米法流なのだそうです。いわゆる自衛権、他人が攻めて来たら武器を取ってでも守るということ、すなわち脅威があれば軍備を持つということは、どの国でも当たり前のことだからわざわざ書いてないのだ、というのが先生の解釈なのです。ところが大陸法は、何から何まで書く。書いてあることだけで話がわかるように書く。それが大陸法だそうです。その頭で読むと、日本憲法にはそう書いてないから自衛権もないことになる。そこで話が狂ったのだ、と高柳さんはいわれる。その日本憲法論としての当否はとにかく、英米法と大陸法はそれだけ違う。そういう違いがイギリス人とE.E.C.の大陸人との間にあるということを心得ていなければいけない。その他細かいことをいえばたくさんあります。英国の貨幣制度はシリリング、ペンスです。一ポンドが二〇シリリング、一シリリングが一二ペンスですから、一ポンドは二四〇ペンスですね。それを英国人はこれほど便利なものはないといっている。一シリリングが一二ペンスですから、二でも割れるし、三でも、四でも割れる。三人で遠足でもしたときこれほど便利なものはない、といっ

ているのが、イギリス人です。このシリング、ペンスはあるいは今後やめて十進法にするかも知れない。一体イギリスというところは、同じ重さの単位のオンスにしても、金銀を計るオンスと他のものを計るオンスは違うので、全く複雑です。今後シリング、ペンスは止めるか知れませんが、それでさえイギリスの国の中では大抵抗です。もしやりとおすとすれば、E E Cに入るためには止むを得ないことですが、それではマイルやインチ、ポンドやオンスなどはどうするのか、それもやめてメートル法にすることはあり得ないと思う。もしそうしたらアメリカが置き去りになるからです。アメリカ、濠州、ニュージラランド、インド等をみんな置き去りにして、自分だけがメートル法になるということは私には考えられない。メートル法を併用することはあるいはあるか知れない。もしそうなれば、これは日本には非常に参考になることだと思います。私は日本が尺貫法をやめたのは大いに不賛成です。畳一畳ということにしてもそうです。いま日本で不思議に通用している言葉はヘクタールですが、ヘクタールは一町歩と同じだということでヘクタールは平気です。頭の中では一町歩を考えている。一坪は三・三平方メートルですが、建物の面積なんかでもメートルでいっているけれども、多くの場合頭の中では三・三でそれを割って考えている。そうすることを、ものが簡素化して能率が上がるかと思っただけでも、実際変な話です。そんなことで、イギリスの問題は日本にも関係があるのですが、何にしても英国と大陸との関係は実にはずかしい。

そういう気分上——デスポジションといいますか、ものの考え方、気分の相違ということが国と国との関係では実に大事なのですが、そのほかにまだたくさん難問題がある。さきほど社会保障、税金などのレベルを揃(そろ)えるといいましたが、これが英国にとって大問題です。というのは、英国は早く目ざめて社会主義の尖(せん)端を行つた国です。世界がいわゆる社会主義思潮の世の中になって来て、社会主義的制度が採用されるにつれて、英国がその尖端を行つた。それがいまは彼の悩みです。なぜかと申しますと、英国の社会保障の「タイプが古い」のです。アメリカでもドイツでもみんな社会主義の思潮は猛烈に取り入れられました。日本でも最近は大いに取り入れておられますけれども、英国の社会主義というのは、一口にいうと怠(なま)けることを肯定しているようなところがある。おれは働くのがいやだからお前も働かせない、といったようなタイプである。ところがドイツあたりがやっているいまの社会主義の取り入れ方は大体において、働きたければいくらでも働いていい、というベシスで、しかもそこに社会保障がある、というタイプです。だから英国の古いやり方を切り替えて、近ごろのドイツやフランスのやっている社会保障制度に替えたいでしょう。だから、マクミラン等のほんとうの狙(ねら)いはそれで、その切り替えを強行するためにEECに入るといっているのだとみるべきかも知れない。しかし、これが物凄(すご)い抵抗にあうことはもちろんです。イギリスがめでたくEECに入っているいまのドイツのようなやり方にイギリスも変わったら、非常にイギリスはよくなります。しかし私は、ほんとうにやれるかなあと 생각합니다。私

がイギリスは入るかどうかわからないといっているのは、入らないことを希望しているのじゃない。ただ、非常にむずかしいといっているだけです。だからこそ、英国のためには、フルメンバーではなくて、アソシエイトメンバーで入ればよいのにと思っているのです。

なおもう一つ大事なことは、ブリテッシュ・コンモンウェルス（英連邦）というものがある。これは大英帝国、ブリテッシュ・エンパイアといったものの今の形です。英国人は利巧だから、態勢に應じて姿を変えて行く。だから大英帝国は必ずしもなくならないで生き延びている。ところで面白いことは、日本人はアメリカは国が大きいから経済がうまく行く、イギリスは英連邦をひっさげているからいいのだ、と思っている。英連邦の中は「特惠関税」ですから、イギリスに対して濠州が売る場合は無税です。その代わりイギリスの物を買うときは、ほんとに無税かどうか知らないが、少なくとも安くなっている。だから英国はいいのだ、それに対して日本は、ひとりぼっちだ、大東亜共栄圏を作ろうと思っただけでも失敗した。だから日本はだめだというふうに日本人は思っているが、それがまた違うのです。いまは疑いもなく、「英連邦」というものは経済上は英国の負担です。それを背負っている英国は、実につらいと思います。私は十年前前から、あれは負担だから英国というあの島の、本国の人のためをはかれば、英連邦はやめてしまおうのがいい。「スターリンエリーア」というものもやめたほうがいいといつて来た。だから今日は「それ見ろ。いまにして思えば、

英連邦は英国の負担だということがわかったらう。それならいままで英連邦を羨(うらや)ましがった連中は頭を下げなさい」といえることになっているわけです。

しかしその英連邦を実際にやめることができるかというとなかなか出来ない。英国はE E Cに入るためには、英連邦を捨ててしまつて、本国だけになって入れば入り易いのですけれども、事実英国は英連邦を振り切れるかという、それはやっぱり出来ないと思ひますね。これは英国人の性質からいつてもそう急には出来ないでしょう。英国人の性質としてやめるならいつの間にか消滅したようにする。「英連邦はきょう解体だ」などということは絶対しない。そうするとあの重荷であるところのものを、やっぱり何年も背負つて行くわけになる。あるいは二十年、三十年になるかも知れない。その関係からいつても、E E Cにまるまる飛び込むというのは実にむずかしい。

だからそれらのことを考えてみて、英国は入ろうといつてもなかなか入れないのではないかといふことをまず疑つてみて、もし英国がそこまで決心をして、十進法も採用しようし、いろいろのことをやる、英連邦も振り切つて行くだろう、そしてE E Cに入るだろうと考えるなら、それもいい。しかしそこを吹っ飛ばし、英国が加入を申し入れたらもうそれで加入してしまつたかのようにいつている日本の言論界というのは、なんとひどいものであらうかと思ふ。私はあえていうが、そういう態度の人にはE E Cは決してわからない。

その英国のEEC加入について、まず最初に解決すべき問題は、英国が入るとして、なぜアソシエイトメンバーで入らないのか、なぜフルメンバーで入るのかという点について解答をもたなければならぬということです。アソシエイトメンバーならば入れるのに、なぜフルメンバーで入ろうとするのか。私が最初に思ったことは、多分これは英国人の面子シツなのであろう。しかし英国はその面子を捨てるべきだ、というふうに思っていた。ところが最近EEC側が「入るのならばフルメンバーですよ」といっているのだということを、外務省の人から聞いた。これはまだ確かめてみたわけではないが、もしその人のいうのがほんとうなら、それはなぜだろう。不思議といわねばならない。そこで私は勘ぐるわけですが「それはEECのほうでは結局英国を入れないつもりではないか」、そういうふうに気を回してみる。みなさんに申し上げたいことは、ものごとはそのくらいにしないと、わかるものではない。勿論私は、ただそう思っただけで断定はしない。ただ「そうかなあ」とひそかに思いながらじっと事実の発展を見ているわけです、そうするといつかはわかって来る。「そんな簡単なことならば外務省に行つて聞けばいいじゃないか」といわれるか知らないが、聞いてわかるとは限らない。こういう問題になりますと、下手な役人ではなかなかわからない。余計なこと、つまらないことを教えられたのではばからしいし、第一時間がかかってしようがない。そこで、そのうち自然にわかって来るだろうから放つて置く。頭の中に疑問を十も二十ももつて、じつと「そうかなあ」、「ああかなあ」と思つて流して行けるようになるのが大事なことだと思つても

のを読めばそれでわかると思つたら絶対だめです。そのわからないままに、頭の中に疑問を抱えて流すということは非常につらいのですけれども、それを修練しなければだめだと私は思っている。私自身かなり修練しているつもりです。そこでフルメンバーでなければならぬというのは、E E C側がいうことだと聞かされた場合、それはほんとうかな、ということもちょっと疑つてみる。ほんとうとしてもいまいったように勘ぐつてみる。それからもう一つは疑つてみることは、フルメンバーでなければならぬとE E C側がいつているというのは、ひょっとすると外務省の人が勘違いしているのじゃないか、と疑つてみる。どう勘違いしているかという点、もともとイギリスは、ローマ協定が出来たあとでもまだたかをくくっていた。「こんなものは実行出来まい、第一フランスがつまずきとなるだろう」というふうに思っていた。ところがそのフランスがドゴールの出現によつてグンと変わった。いまではフランスはE E Cの中のリーダーでエアハルトのドイツと肩を並べるようになった。これはドゴールになってのフランスが変わつたからですが、イギリスはドゴールの出現に驚いて急にE E Cに接近して、それが実行に入る直前の一九五八年夏に「E E Cを少し手直ししてほしい」ということを申し込んだ。E E Cを手直しして「欧州自由貿易圏」というものを作ろうと申し込んだが、拒絶されてしまった。それでイギリスは、机を叩(たた)いて帰るといった喧嘩(けんか)別れの場があった。一九五八年の十一月です。実は私はE E Cはどんな模様か見てほしいと外務省に頼まれて、五九年の六月に欧州に行ったわけですが、その五九年の六月というのは、

E E Cが仕事をはじめてから半年目、ドゴールのフランスになってからちょうど一年目に当たるわけですが、一九五八年の夏にイギリスは、E E C手直しを申し込んだということを頭に入れながらも問題を考えますと、E E C側はもしかすると、入るならフルメンバーといっているのではなく「手直しは一切許しませんよ。私のほうの建て前は全然変えませんよ」ということをいっているのかも知れないと思う。これを外務省の人は「入るならフルメンバーで」というふうに誤解しているのではないかという気がする。外務省の方には大変失礼な想像ですが、世の中のことはそういうところまで気を回し疑問をもちながら考えて行かないと、ほんとうのところはわかるものではないということ、特にあなた方には申して置きたい。何もかも本を読めばわかるように思うのはいけない、本などというものにはそういうことは書いてありはしない。第一本が出て来るのは二年も三年もあとになる。しかしそればかりではなく、いわゆるエキスパート必ずしも信ずべからずなのです。

それはそれとして、アソシエイトメンバーになるということはどういうことかという、彼らE E Cの六カ国は、少なくとも経済的にはほんとうに国を一つにしてしまおうと思ってやっている。政治的にはわかりません。これも日本人の誤解の一つですが、最近では政治統合もやるのだということに決め込み、欧州がまるで一国になるようなふう、しかもイギリスも入れて一団になるような話をしているが、これは私はそうは行かないと思います。この点を正しくみる見方としては、まず

政治統合というのは程度の問題だということを知ることです。政治統合というのは、やるかやらないか、イエスカノーかかと思っっているから間違うので、政治統合ということは程度の問題で、どこまでやるかということだけが問題だというように見てかかれればわけなくわかる。現に政治統合はすでに行なわれているのです。というのは、たとえば社会保障とか税金とかいうものも同じレベルにしようということは、ある程度政治のやり方を一つにしなければできないことです。だからいまでも相当な程度の政治統合がある。地域外に対する関税を一本にするというようなことも政治的動きですから、その中にすでに政治が入っている。統計の基礎を差し支えない限りいっしょにしてみました。することも政治統合がはじまっていることです。通貨はどうするか、単一通貨にするのかしないのかというようなこと、これは主として経済かも知れませんが、これも政治統合の問題でもある。だから、政治統合をやるのかやらないのかといってみていないで、すでにやっている政治統合はどこまで行くのかというふうにみるのが大切です。いずれにしてもいまより深い政治統合になることは確実です。

終局のところはめいめいの国がE E Cから脱退する権利をもつかもたないか、国防外交というものもほんとうに一つにするか等々ですが、私は政治統合もかなりやるであろうと思う。しかし彼らがほんとうに主権というものを離れるというところまではやらないと思う。そして、いずれにしても、ドイツ民族の民族性、イタリー民族の民族性というものはやっぱり存続して行くと思う。何百

年先のことは知りません。今後われわれが生き、あなた方が生きている限り、やっぱりドイツ人はドイツ人らしく、フランス人はフランス人らしくやって行く。むしろドイツ人は一層ドイツ人らしく、フランス人は一層フランス人らしくなるとさえ思います。その先例がスイスにある。スイスという国は、ドイツ語地域、フランス語地域、イタリア語地域と三地域があるが、政治的には一つの国です。その三つの地域は古来——スイスがああいう一つのかたまりの国になったのは何年前か忘れたけれども、それ以来その地域はそのまま動かないのです、不思議ですね。相互にドイツ語、フランス語、イタリア語を自由に話す人が大部分です。相互に結婚するでしょう、だから家の中でもドイツ語で話しているかと思うと急にフランス語に変わる。「どういうときにドイツ語を使い、どういうときにフランス語に変わるのだ」という質問を私はしてみたことがあったが「いつの間にか変わるのだ」というのが答えであった。しかしそれが「国の個性」の維持ということなのです。だからEECが政治統合の強い合衆国のようなものを作っても、あるいは統合の薄い欧州連邦というようなものを作っても、ドイツ人はドイツ人、フランス人はフランス人という個性は維持され、ちようどスイスのようなことになると思う。

しかし、もう一步突っ込んで考えれば、この政治統合の程度ということは、どっちにしろ大した差はない、大した問題じゃないといえる。なぜかというのと、国の独立性というのは、相互に戦争をやる建て前の世界では大問題である。これは私の「世界の見方」などに書いたことですが、現代の

世界においては、昔「列強」と称した欧州の諸国、それに日本とアメリカとを入れたそれらの国々
はもう相互に戦争はしなくなった。私のように、その事実こそ現代の世界における最大の見るべ
き要点があると思っているものからみれば、すでに戦争をしなくなった国同士である以上、その国
が独立しているようがいまいが、実はそんなに大きな違いはあるものではない。だからスイスの連
邦のように、E E C諸国が、国防も外交もその他の「主権」という名のもとに昔やかましくいった
ことを、みな返上してしまって、個々の国としては独立性を失うとしても、あるいはその「主権」
が各自の手に残るとしても、そう大きな違いをそこに感じなくいいと思う。

それとは逆に、アメリカとカナダが戦争するということは考えられない。アメリカとカナダの経
済の間にはかなりの統合がすでにある。言葉は同じ英語で一本、資本は自由に交際している。労働
はどのくらい自由かよく知らないが、これまたかなり自由である。それでも国は別々なんです。相
互にナショナルリズムもあって、いっそれ別になろうという動きもかなりある。こういうところが、面
白いところなんです、E E Cと対比して考えると。

そこで、フルメンバーの問題に戻りますが、アソシエイトメンバーでいいというのは、第一に政
治的統合まで行くかも知れないようなものにならないで、これを経済問題だけときめ、その経済の
部分においてどこまで溶け合うべきか、その溶け合いの場面を考え、それをどのくらいのペース

で、どのくらい溶け合わせるのか。たとえば労働の移動を自由にするところまで行くのもいい。イギリスの場合なら、そこまでやらなければ無意味かも知れません。それをどういうペースでどういうようになって行くのかを決める。それがアソシエイトメンバーとしての加入というものです。EECの規定には第二三条というのがある。「新しく欧州の国が加盟するには、その新加盟国と旧加盟国との相互の権利義務は、加入のときの条約によって決める」と書いてある。万事その条約の決め方次第というわけです。深く溶け合うのもよし、浅く溶け合うのもよし、どっちでもいいわけです。浅く溶け合うのであれば、フルメンバーではなくアソシエイトメンバーということになる。

さて、そういうふうにEECを知ってみますと、その理解として大事なことは、これはもともと「列強はもはや相互に戦争をしなくなった」という新しい事態に即したものであるということ、政治統合まで行くかも知れないがそれは要するに程度の問題だということ、経済に関しては確かに六カ国だけは一つになるにきまっているということ、ただしそれはたいへん困難な事業であるということ、その周囲の国は必ずしもそうまでしなくてもいいということ、しかし溶け合わせるべきところは溶け合わせたいだろうということ、それにもう一つ大事なことは、もし条約を作ってもその融け合いをやれば、それはアソシエイトメンバーとして加盟するということだが、条約を作らなくても現に先進国間の溶け合いは進行しているということなのです。

この最後の点を説明しますと、いまスイスが加入するという話はありませんね。ところが私がこ

の前スイスに行ったとき(五六年六月)、スイスで貿易の担当局長のような仕事をしている人とベルンで話をした。その人のいうのに「EECが出来てなんのканのといえますけれど、私の国はもちろん入るとはいわない——こちらは永世中立の関係でEECには入りにくいのです。——入る入らないということはどうでもいいので、実際にジュネーブならばジュネーブに立って見てごらん下さい。大会社がたくさんある。その大会社の内幕を立ち入ってみれば、貿易はもちろん資本の交流、技術の交流、人間の交流、等々すごい勢いで進行している。すなわち非常な融け合いが行なわれている。これは入ったも同じことなんだ」といっておりましたが、これはスイスに限らない、入る入らないと揉(も)めているイギリスにしても、また圏外のアメリカにしても、融け合いはすごい勢いで進行している。それはいま申した列強体制がアウフヘーベンされて、人類が一段上の段階に達し、相互にもう戦争をしなくなった以上は、そうなるのが当然なのであって、経済に関してはもちろんですが、ある程度政治的にも諸国は溶け合いつつあるのです。特にその溶け合いを急速にやっているのが先進国であって、後進国もそうなるはずのものであるけれども、そこにはほかにひっきりがあつて出来ないにすぎない。後進国は、第一自分の国がうまく治まらないし、経済もうまく行かないし、レベルがあんまり違うから、いまずぐには先進国との間に溶け合い現象が起こらないだけで、後進国であっても理屈は同じはずのものです。ただ先進国は、黙っておつても溶け合っている、それを条約を決めて、やっているのがEECというわけになります。

そこで出て来るのは、「それでは日本はどうすればよいか」ということですが、日本は先進国ですからもちろんすでに溶け合い現象は起こっている。ただしその溶け合っていることの意味を、チャンと正しく知って、条約で決める決めないはどうでもいいから、自覚をもってその溶け合いを進めるようにすればいい、しかし、条約を作る作らぬは、そう大した問題ではないと心得るべし、単に程度の差ですから。

こういうふうに解釈するのが私の解釈ですが、その点を一番よくわからせるのは、現実にEECに入るつもりでものを考えてご覧なさい、ということです。欧州の国の加盟の場合の規定が第二三七条ですが、その次の第二三八条には、同様のこと、すなわち「欧州以外の国が加盟するときは――加盟したあとの相互の権利義務は、加人のときの条約で決める」と書いてある。ですからその第二三八条を引用して、日本も入りたい、条約を一つ相談しよう、いい条約が出来たら入るし、出来なかつたらやめる、相談だけはしようじゃないか、といって持ちかける。そこで、日本の場合どういう相談が行なわれるかというと、まず溶け合わせる場面は何か、ということを判断する。政治問題はノーですね。経済だけである、経済のうち労働など、これも要りませんね。労働の移動を自由にしようと思ったら、社会保障等を均等にしなければいけない、そんなことは必要もないし早急に出来ることでもない。第一、言葉が違うし、生活の習慣が違うのですから。畳の上にくこうして座っ

て、こういう話をやるということは、彼らには全然出来ない芸当でしょう。だから、こういう局面は、うっかり溶け合ってはだめなのです。そうすると、彼らと溶け合う面というのは、通貨の面ではどうか、共通通貨でも出せば、少なくとも旅行用通貨ぐらいは、それに乗ってもいい。だから通貨面にはちよっぴり溶け合いがあるのです。資本移動も少しはあるでしょう、やってもいいです。やらなくてもいいです。技術交流はあります。人間の往来、ビザなんというものは止してしまってもいいですね。そういうことをあげて行けばまだいくらでもありますけれども、それらは大したことではない。ですから大したことは貿易だけなのです。ところで貿易を考える場合は、三つに分けて考えればいい。原材料、食糧用農産品と、製造工業品、これが三大分類です。

そこで EEC と貿易を溶け合わせるとして、原材料はどうか、問題になるほどのものはないのです。欧州から原材料を持って来るとか、日本から行くというものはありません。ですからこれは問題にならない。

次に農産品はどうかというと、私は農業は強い保護貿易論者です。農業を非常に盛んにしろとはいわないけれども、現在程度の農業規模、日本全国がキチンと耕されて、国民の相当の部分が農村に住んでいるというこの形は、国の精神問題として、国民の健康の問題として、国土の美観の問題として、絶対保持しなければだめだと考える。

英国は昔農業を捨てたのです。そして、アルゼンチンの小麦なんかで生活をするようになったの

です。畑地も大部分やめてしまった結果、どうなったかというところ、国中がみんな牧場になったからかえって美しい英国が出来たと思います。ゴルフなんかをやるのにはじつに都合（つこう）がいい。ラグビーだってそうです。小学生なんかは、なんでもないようなところへ行つてラグビーなどをやり出す。草の生えた平らな遊んでいる地面というのがやたらにある。それは農業を捨てたお蔭です。し、英国の場合は国が大変きれいになったと思う。ところが、いま日本が農業を捨てたら牛も飼わない、酪農品はみんなニュージールランドから買えということになるでしょう。日本で草をはやしたら、草ぼうぼうになってしまう。それもいいかも知れませんが、恐らくは荒れ果てた国という感じになるでしょう。その上みんなが都会に住むという日本になったら、この東京が何倍になるか知らないが、とても非効率で金がかかる国になる。のみならずそれは犯罪の温床になり、青少年の気風はすたるし、とにかくいやな国になります。だからこれからは、経済がこの上とも向上するに従つて、人間の生活はどういう生活がいいのかを考えながら行なうべきです。アパート住まいよりは、やはり小さくとも独立の家がいいわけです。それにはそれ相応の地面があることはありますが、もっと山すそや丘陵地へ行つて住んだらいい。自動車やバイクの出現で、坂を上るのが楽になったのですから。そういう国土計画を考えるべきですけれども、これは大きな意味の生活向上です。生活の問題をそういうふうに考えないで、消費量ばかりで考えるのがいまの経済学です。砂糖の消費量何ポンド以上が高等の国民だという考え方があったが、そういう考え方から出発しているからいけな

いのです。いまは一人当たり国民総生産ということになりましたけれども、それにしても生活というものを消費する物量によって考えようとするのは同じです。そこいらが現代経済学のいけないところですが、経済学は生意気なので、自分のフィールドだけでもを考えようとする。経済学に入らないもので大事なことがたくさんある。人間の生活を考えるときには、それらを合わせて考えるということになるが、要するにそれが私の農業保存論なのです。これが日本の貿易自由化に関して非常に大きなアイテムになるのです。

ところで自由化問題はそれとして、E E Cの場合には、ありがたいことには彼らが農業保護主義なのです。このあいだE E Cが農業に関して取り決めた。それをみると、あの地域は農業の経済単位になることに決まった。概していえば、ドイツの農民の損失においてフランスの農民が得をする。それをよくドイツは承知したと思うけれども、とにかく四、五年かけて農業に関して一経済単位になり、貿易のバイアーなしにすることは決めた。よくやったと思うが、E E C全体は、外に対しては依然たる保護主義です。自分たちは農業をやめてしまっただけで、農業製品は全部ニュージラード、カナダから買う、オランダが牛を飼うのをやめてしまっただけで、ということには絶対にしては、だから農業は彼らも保護主義です。そこで日本がE E Cに加入する場合、農業は融け合わす必要なし、すなわち農産品貿易のことは考える必要なしということになる。もっとも日本の苺(いちご)などを飛行機で売るなどということはあるでしょう。その場合の取り扱い、関税をかけるかけないという

ことなどは向こうも一応作るから、それを取り決めてもいいですが、要するにそういうことを取り決めるのがEECに入ることなのです。

その「入る」ということの理解がどうも日本人は違うようです。日本人は、入るということは原理・原則だと思っている。どこか偉そうなところで入るという原則を決め、入った上で細かい点を決めるのだと思っているのが日本人の頭ですけれども、そうではないので、苺をどう扱うかということを決めるのが入ることなのです。それが決まったら、入ることになるのです。だから、それがEECのやり方ですから、その加入条約を決めるといふ仕事をやってみると、日本とEECとの経済はどうあるべきかということが、すっかりわかることになる。加入条約を詮（せん）議してみると、「はあ、こういうものか」ということになって、日本のあるべき貿易政策も出て来るし、日本対EECのみならず、日本対世界のあるべき関係もよくわかって来る。頭の練習として一番いいのだから、EECに入るつもりで相談をやってみるといふことを、このごろ私は多少からかい半分の方々でいっているのです。

さて農業がそうだとすると、残るものは製造工業品関係だけです。その製造工業品をどうするかというところ、これが「自由貿易」のさばき方になるのです。いまは「貿易自由化」でゴタゴタしていただけますけれども、ほんとうをいうと「自由化」はやってもやらなくてもいいことなのです。国民がいらないといえばいい。ただし国民は、ありとあらゆるものを保護貿易にかけると、それだけ

苦勞しなければならぬ。自動車为例にとると、私がいま乗って来た国産の自動車と同じ性能の外
国製の車は、それを無関税で入れれば三割ぐらい安いそうです。同じ性能のものが三割安く買える
ものを、三割余計払っているから、それだけ生活が切りつめられている。だからもしありとあらゆる
ものに関税をかけて国産化をはかれば、ありとあらゆるものが高くなるから、国民の生活は苦し
く、コスト高となり、その分だけ余計に勉強しなければ輸出がきかなくなる。だから国民のみなさ
んが低生活を覚悟すれば、ありとあらゆるものを保護してもいい。しかし、それはばからしいとい
うことがわかって来たのが「自由化」で、そうわかって来たことを「世界の大勢」と心得べきで
す。自由化は世界の大勢だから、いやなことだけれどもやむを得ずやるというものではない。関税
をかけすぎるということ、保護をしすぎるということが、ばからしいこと、いやなことだとい
うことがわかった国が多くなったのが世界の大勢なのです。ばからしいからよすのです。自分のため
によすのです。しかしばからしいけれども、おれは何かの都合上やるというなら、いまの農業のよ
うな場合ですね、国民の生活上、気分上、保健上、国土美観上、経済問題としてはばからしく損だけ
れどもやる、というならどんな保護をやったとて差し支えない。自由化は自分のためなのですから。
製造工業品、たとえばトヨベツトにしたところで日本人としてどうしても自動車为国産されないと
いうことはいやだ、高くともほしい、是非日本で造るといふなら、それもいい。誰はばかるところ
なく保護にして、すなわち自由化からはずして、少しも差し支えない。誰も文句はいわない。た

だ、国民はそれだけ生活が下るからばかを見る。自由貿易は、そう割り切るべきものなのです。そういうことがわかって来たのが世界の大勢だと知るべきです。

ところが日本では、関税を下げるのは先方から押しつけられて、いわゆる「外圧」で、やむを得ずやることのように思っている。せいぜい、こっちも関税を下げるといわないと、向こうも下げない、下げなければ輸出品が出なくて困るから、それでいやだけれどもやむを得ず下げるのだというふうに自由化を考えている。これは全然違うのです。向こうの関税を下げなくとも生活さえもつと下げれば、もしくは上げないで我慢すれば、いくらでも輸出は出来るのですから心配はいらない。その証拠に、いままでの日本の輸出品は、向こうの関税がどうであろうと、つねに出過ぎて困って来たのですよ。ところが日本は、最近のようにばか成長をやるからそれにマッチするような輸出は、少なくとも当分は出来ないのです。ばか成長という、経済政策の失敗をおかして、輸出が途方もなく増加しなければならぬような状態を作って、なおかつ輸出、輸出と騒ぐ。しかし日本という国は、普通にしておれば、日本の物はいくらでも外国に出て行くのです。というのは、向こうの値段の半値ぐらいで出るものがいまでもたくさんある。いつも、日本人が外から排撃を食うのは、日本品があんまり安いからです。「お前たちは切り込み戦術で来るから困る」といわれる。ワンダラー・ブラウスというのを知っていますか。一ドルでブラウスが出来る、それがアメリカを風靡(び)しうになつて大問題となつた。一年で三十倍というようなふえ方をするのですから。普通は年間に三

割ふえても大増加です。それを三倍どころじゃなくて、三十倍ものふえ方をするのですからね。だから向こうの人は、ひどい警戒心をもつわけです。それだけ出るといふのは、日本品が優秀であると同時に非常に安いからです。だから日本は輸出に困難するはずのない国なのです。ばか成長をしては輸出を困難に陥し入れ、もしくは輸入の激増を招いて輸出、輸出と叫んでいるのが日本だということです。いつもくり返すミステークだが、この輸出はあまり心配しないことにして、困ったらずし生活を切りつめればやっぱり出ますからね。生活との関係だというふうに考えれば、こっちの関税を無理に引き下げる必要はない。

ところで「自由化」ということをそのように心得るとして、E E Cとの交渉の問題に帰えしますと、自動車などに適用すべき原則は、いつかは、無税でもよくなる自信のあるものはそうなるまで保護する、という原則でなければならぬ。どういふ品物を、そういうつもりで関税の保護下におくか。それはお好み次第です。しかしお好みからではなく、もうはじめてしまったから仕方がない、というのが日本の保護品目の大部分なのです。トヨペットの場合でもそうですが、急に保護をやめられてはかなわない。だから、それはそれでいいから、その代わり長くても十五年なら十五年で、無関税になるようにする、という約束をいまからE E Cとしたらいい。いまは乗用自動車には税をかけるけれども、十五年したら無関税にするのだ、あるいは十五年と切らずに、こういう事情が展開したら、という約束でもいい。四割の税をかければ外車は入って来ません。ただし、そうす

るところを甘やかすことになるから、その十五年の間も少しは入ったほうがいい。だから、四割税を取るけれども、こつちが十万台作るときなら五千台はよろしい、二十万台になったら一万台はよろしい、というようにやったらどうですか。少しずつ外部の競争の風を当てるのです。そうしないとトヨベツトは勉強をしないから、われわれ国民としては一層損をする。そういうようなことを乗用自動車に関して欧州諸国と決めれば、フィヤットもルノーもフォルクスワーゲンも喜ぶわけです。彼ら同士はもちろんE E C内部で競争体制になっているが、日本にも競争の風を当てて来る、その競争の風で、トヨベツトが所定の期間内にほんとうに能率を上げるのでなければ、圧倒されてつぶれてしまう。それがいいのです。所定の期間内に、いくら勉強してもどうしてもだめなら、日本人は自動車を作るのが下手なのですから、やめた方がいいのです。その見通しをはっきり与えておくがいい。そうしないとトヨベツトは十分勉強しない。トヨベツトとしても、いつまでも保護関税がなければならぬようなものなら、国民の前に私を保護して下さいとはいえないはずでしょう。昔は、軍事上の必要ということがあったからいえたのです。トヨベツトのためであっても、未来永劫(ごう)保護関税が必要ほどハイコストの商品だとしたら、それは輸出品に絶対にならない。だから、一口でいえば、「輸出適格品にいつかはなるであろうもの」は当座の間は、国民の生活を犠牲にする覚悟で、保護してもいい。ですから、十分恩に着せていいわけです。ところがいまは国民がトヨベツトに恩に着せる代わりに、向こうがこつちに恩を着せている、国産品を作って輸入を防い

ているのだ、自分たちのお蔭を思え、といったような態度ですね。これは明治以来軍国であった時代の経済思想がまだ反省されないうで続いているということです。そしてこの点も、そういうことをしなければ、日本品のコストは全体的に安く、ほかにいくらでも輸出できるものがあるという根本原理を認めないからでもあります。

さて日本がEECに加入する場合には、乗用自動車についてはそういうことを決めるのです。どのくらいの年数を考えるか、どのくらいのペースで向こうの輸入が増大して来るようにするか、結局は関税がなくなつて、ほんとうの自由競争体制になるのだが、その間の情況によるアジャストメントをどうやるか、そういうことをいまから決めておくのが加盟条約です。ところでその同じことを向こうさんがいう。トランジスタラジオ、カメラ等について。まだまだたくさん商品がある。それは向こうにいわせればいい。いま完全に無関税になったら、ソニーは滝の如く欧州に流入して、向こうを風靡してしまうでしょう。向こうのものを潰(つぶ)してしまう。向こうも困るがこっちのためにもよくはないのです。そんなに急に出るといふことはいけないことですし、ソニーばかり威張らしてもしようがないですから、こっちの経済もそれだけ攪(かく)乱されますからね。だから日本全体のためにもよくないし、ソニーのためにもよくない。適当な台数が入って行って、向こうのやつを奮い起したせるわけですが、それがいい。つまり何度でも仕切り直しの余地を与えるわけです。向こうは仕切り直して、今度はここを改良する、あそこを改良する、だから対抗できるはずだとい

うことを、十年越しでやらしてみたいのです。その間もだんだんにこっちの割り合いがふえて行くようにしておく、どうしても仕切り直しが利かなければ、結局向こうは負けて、欧州はソニー一色になるわけです。向こうの国民が「そういう非効率なものもはやめてくれ、日本のものを使おう」といい出すはずです。これが「貿易の自由化」の根本原理たるべきものです。その原理に立ってE E Cと交渉して、ソニー、トランジスタ、ラジオ等々は向こうさんが泣きを入れる、乗用自動車等はこっちが泣きを入れる。それでこの辺のところで作ろうじゃないか、様子を見てもちろん変える余地は残すけれど、これでいこう、ということを書き上げれば、これが加盟条約です。よからうということ判を押せばE E Cに入ることになる。これはアソシエートメンバーですが、それでいい。どこに無理があるか、どこにも全然無理はないのです。貿易というのはそういうふうに分り切るものなので、いい替えれば、向こうの「市場攪乱」は一切いたしませんよ、という態度でやることです。また、向こうに仕切り直しの余地を常に与えながら、こっちが真に優秀ならばやがては風靡する、しかし、仕切り直しの余地はご希望によって何回も与えましょうという態度であるべきです。それは全世界に対して日本がとるべき態度だし、全世界の国がお互いに取るべき態度です。後進国はいまのところ別扱いにしなければなりませんから、これが先進国間の貿易というものだといいっておきましょう。E E Cには加入交渉をしてみれば、そういうところがよくわかります。そう考えないから、E E Cに対して日本人は、あらゆる曲解、誤解をしながら、あらゆる恐怖を抱いてい

るわけです。

一ついい落としがこういふことがあります。EECはブロックでしょう。だから排他的だと考える、これも間違いだということです。排他的といえれば排他的でもある。なぜかという、内輪同士は無関税になりますが、外に対しては関税は下げるけれども少しは残る。その限り内輪同士と比べて差がある。ドイツと日本がフランス向けの輸出を競争したら、ドイツは無税でやれるが、日本は有税だという差です。それをとらえて排他的であるという。ところが、仮にそれが排他的であったとしても、向こうは一つの国になってしまったのですから仕方がないですね。アメリカのテキサスからカリフォルニアに売る、無税でしょう、日本からは有税でしょう、それに文句を付けるのはおかしくはないか。同じことなのです。一つの国の中が無税なのは当たり前なのです。彼らが大きな国になったと思えばいい。そしてその国全体が日本に対して、前より自由になればそれでいいのでしょう。だからEEC全体に対する日本の輸出は、すでにEECが仕事を始めて以来、すなわちその直前の五八年と昨年六一年と比べると、日本のEEC諸国向け輸出は六六%ふえた。その間における日本の総輸出の増加は三六%です。だから、日本は、過去三年間EECに対しては一般に比して倍近くふえている。私のいうような条約を作って加入したら、加入しなくても、その条約を作ったその気持ちで彼らに対処したら、もっともっと出る。いまのアメリカと同じになる。そういう性質のものがEECです。

さてかようなお話をしたのは、要するにもはどういうように考えてほしいか、ということをお話を示しながらお話ししたからです。これはつまり総合的見方ということですが、こうしたお話の中で、ものの見方、頭の使い方、どういうところに味というものをみて行くかといったことが、幾分かはわかっていただけたかと思うのです。そういう目から、日本で普通言論といわれるもの、あるいは学校の講義というもの、あるいは新聞雑誌の記事を見ていただき、その間の違いというものを発見していただきたいのです。総合的ということとは、素人らしい、エキスパート振らないということに通じますが、その違いは世間の人は学者、専門家、エキスパート的たらんとしているが、私はそうでない、とっていいか知らない。私はなぜこういうふうにもものを見、ものを考えるようになったか、そのわけは昨年（昭和三十六年夏）の雲仙の合宿でも説明したしこれからも説明する機会があると思いますけれども、つまり学問のあり方というものが、いま申す違いから出て来るのです。というよりも、私の見方がとくにいいというわけではありません。私の見方は、世界の偉い学者たちと比べてみて違う点は確かにある。それは私が学者ということを標榜（ほう）しないところにあるのです。多くの方は、学者という立場を標榜なさるから、引っぱりが出て来てどうもまづいのですね。部局的にはいいのです。部局的には、それぞれエキスパートに頼まなければだめです。なにもかも自分でやるわけには行かないのですから。しかし、日本とEECとか、日本の貿易政策とか、あるいは新しい世界とは何か、といったことを考える場合には、部局的知識がありすぎ

ると、かえってじゃまです。知識というものは適当に持たなければなりません、必要にして十分に。そして、その全体の総合というものが大事なのです。それこそがほんとうに大事なのです。しかしこのことをあなた方にあんまり早くいうといけない、部局的なことをなんにも覚えなから。だから長い世の中における苦勞の生活が必要なので、一つ二つのことについては、ほんとうにピンからキリまで知っているようだといい。学者であれ実家であれ、人の知っていることはみんな知っていろいろな部局を、一つ二つは持つほうがいい。私は為替銀行に長くいたし、外国為替管理委員会委員もしたから、そのフィールドでは人の知っていることはみんな知っていたつもりですが、それがないとやはりほんとうのことはわかりませぬ。しかし、それとは別に、部局的な知識を越えた総合はどうしたら出来るか。その点をあなた方がこれから年数をかけて追求して下さい。とが望ましいのです。

学生時代を回顧しつつ現代の学生諸君に

大分大学名誉教授 花田 大五郎

私はことし八十歳になりました。ここに参ります汽車の中で、自分の話すことについて腹案を練ろうと横着な考えでありました。ところが、京都から博多まで汽車に座席がなくて立ち通しで、一睡もしておりません。のみならず、一食も一飲もしていない、便所に行くことすら出来ない状態でした。それで、「ずいぶんえらかったでしょう」といわれるけれども、私自身はそれほどでもなく、かえって一つの自信を得たと喜んでおります。どういふ自信かといいますと、京都博多間はちょうど十二時間かかりますね。十二日の午後七時二十二分に京都で汽車に乗り、翌朝の七時五十七分に博多に着くまで、かれこれ十二時間立ち通しに立っておって、その割りにへこたれなかったということは、自分にもまだそれだけの力が残っているのだという自信を得たことであります。(拍手)

まず、京都から博多までの車中のことをなお詳しく申しますと、それは立錘すの余地もないという言葉のとおりで、腰かけはむろんのこと、車内の通路にも一ぱい人が立っているのです。それがだんだんにへこたれて通路に腰を降ろす。そして自分の荷物や何かに寄りかかって眠ろうとする人たちがふえ、シャンと立っておる人間はだんだんに少なくなり、ついに茶褐色かつのシャツを着た若い人

と私と二人だけになってしまった。しかし、その若い人もとうとう午前三時か四時ごろ、隣の車の便所に行つて、そのまま夜の明けるまで帰つて来なかつた。(笑)結局、依然として立つておつたのは私一人でした。

そのほか、ドアとか腰かけに寄りかかり、それに支えられておつた人も、何人かありました。そのうちには婦人もおりましたけれども、しかし顔の色がだんだんに眠たそうになってくる——眠たそうな顔色をしている人、それからあまり元気のない顔をしている人、大体そういうようになつて立っている人はあつても、いぜんとして気力の衰えないような顔をしている人はなかつたようです。私自身はおそらくそういう顔ではなかつたと思うのですけれども、とにかく最後まで立って、しかもあまりへこたれなかつたのではないかと思ひます。

それで、これに関連して思ひ出す話を申します。大塩中斎といつても、諸君はあまりご存じないかも知れませんが、大塩平八郎といつて大阪天満の与力で、天保の飢饉のとき奉行に窮民を救えと騒動を起こした人ですが、その人の著わした書物に「洗心洞割記」というのがあります。そのなかのちょうどまん中ほどに、琵琶湖で大風に遭つた記事が載っている。それは文章もよく相当長いものですが、その要点を申しますと、ある年の六月——これは旧曆ですから、いまの七、八月ごろでしょう——中斎はすこし暇があつたので、門弟や下僕数人をつれ伏見から江州に行き、わが



国最初の陽明学者である中江藤樹が住んでいた琵琶湖の西岸比良嶽の東北小川村に渡って、藤樹のお墓に参り、その遺跡を訪れた。だが荒れた藤樹書院は残っていても、先生の学問、陽明学を講ずる者はない。そこで中斎は感慨を発して次のような詩を賦ふしました。

院畔の古藤花尽くるの時、湖に泛ふかび来り揮す昔賢の碑、
余風比良の雪に似たるあり、流滅して人の此の知を致
す無し。

そして帰りには大溝港から門下生、家僕四人とともにまた舟に乗り、比叡山の東麓の坂本に向かった。正午過ぎごろまでは空も晴れ、波も静かで、風は気持ちよく吹いている程度だったが、小松付近に来たときから、にわかには北風が吹き荒れ、波は狂い逆巻き、湖上の舟はみなどどこかに逃れてしまつて、残つたのは中斎らが乗っている舟だけとなった。鰐津に来たころは、大風が南と北から吹き舟は左右に翻弄ころもされ、何回となくいまも転覆しそうになった。船頭は、こんな天候になるとも知らず、舟を出して済みませんでした。もはや運命だとあきらめざるほかありません。どうぞお許し下さい、としきりにおわびをい

う。門下生や家僕どももみな生きた心地もせず頭痛み、眼くらみ、転覆溺死を恐れている。中斎自身も同様で、危懼の念で一ばいである。ところが、さきほどふと藤樹書院で自分が作った詩を思い出した。その詩で自分は「流滅して人の此の知を致すなし」と詠んでいる。これは「良知を致す人がない」といって他人を責めているのだが、この舟のなかでの自分はどうか。恥ずかしいではないか。こういうときに良知を呼び起こさないようでは、平生の学問に対し、相済まないではないかと思いついた。かつて宋の学者である程伊川先生が涪州に行かれたとき、楊子江を渡る船が大風に遇い、中流でほとんど転覆しようとした。舟中の人みな泣き叫ぶ中に、先生ひとり襟を正して安坐すること常の如くであった。舟が対岸に着いたとき、ある老人が先生に、「みんながあんなに恐れおのいているのに、あなたひとり泰然として恐るる色がないのはどういふことですか」と問うた。先生が「心に誠敬を存するだけです」と答えられると、老人は「心に誠敬を存するのはもとよりよいが、無心なるには若かぬ」といった。先生はこの老人は話せると思われたけれども、老人ははやどこかに行ってしまったという話を思い出し、中斎は大揺れに揺れる舟の中にキッチンと坐わって、伊川、陽明両先生に相對するが如く、また自分の心に良知を呼び起こし、「誠敬を存する」の一念に凝っていた。そして心落ちつくとともに風も波もこわくもなんともないようになってき、そのうち風も波も実際にやみ、夜の十時ごろ舟は無事坂本の西岸に着いたというのです。この体験から中斎は自分の学問もどうやら口先ばかりでなく、本当の境地がわかつて来たように思うというのです。

この記事は、「洗心洞割記」の中でもさきほど申したように文章もよく、また内容もすぐれているため、あの当時の高等学校生であるわれわれの興味を大いに引いたものでした。そのことを私は思い起こして自分の一挙手一投足もそれがいついかなる人にどのような影響を与えるかわからない。いまの伊川先生の舟中暴風に遭った話なども、伊川先生はなにも他人に影響を与えようというようなことを考えられたのではないと思う。しかしそのことが書物に載っていたために、それを讀んだ大塩中齋は、自分が琵琶湖で暴風に遭ったときに、それを思い起こして自分の心の鍛錬に役立たた。私自身の経験というか、ざんげ話をしますと、私は高等学校の二年生のころでした。大分県九重山へ一人で登ったことがあります。九重山にいく途中、いまの筑後川ダムのあるところで、ひどい雷雨に遭った。雷が兩岸の山に交互に落ちる、私の腰がなんだか力がなくなった。「ははあ、これが腰が抜けたというのだろうか、どうも腰に力がない。これじゃいけない」と思いながら、どうもやっぱり腰に力がない。ところが向こうから、カサをさした男の人が、和服の裾すそを端し折って、泰然とやって来る。その人を見て「あの人はこの雷をちっとも恐れたようなふうはしていない」と恥ずかしくなった。そこで私も幾分落ちつくことができたといい経験をした。先方の人はそんなことはなんにも知らないのだが、そういうことを思いますと、人の一挙手一投足が知らない間に他人にどういふ影響を与えているかわからないのだから、自分自身の行動はやはり慎しまなければならぬといふしみじみ考えさせられたことがあります。

私どもが高等学校に在学していたころは修養というようなことをやかましくいっていたが、それは自分の身に付ける、——いろいろな力を自分の身に付けるということでした。そういう点から申しますと、京都から博多まで立ち続けて来たけれども、それほど疲れた色も見せなかったということは、いまの私の年齢からみて、自分ではいささか誇りにしてもいいのじゃないかと思えます。

私の高等学校は熊本の五高でしたが、そこで非常に親しくしていた友人に小島祐馬という男がおった。私とはほんとうの兄弟以上に親しくしておったが、彼は自分の遠足とか旅行というものは、自分がどれだけ歩けるかを確かめるためのもの、つまり自分の歩ける力をためすものであって、物見遊山ものあそびのためではないと平素からいっておった。私もそれはそうだと思っておったが、その小島君がある年の冬休みに、たった一人で上海から楊子江をさかのぼり漢口まで行って来たのです。私はあとになってそれを知ったが、そういう実行力、自分でやりたいと思うことは実行することを、われわれは若いときにやっておったのです。

私も小島君に刺戟されて、その翌年の冬休みに一人で宮崎県を歩きました。そんなことを細かく申す必要もないのですが、あのころはものが安かったから、五円持って一週間宮崎県を旅行した。一泊の旅費が大がい二十五銭でした。冬の日の短いのに、一日平均十一里ぐらい歩いた。冬の日だから午前中は三里も行くともう正午になる。それから午後になって九里十里、一番歩いた日は一日

十四里歩いたが、それでもあまりへこたれずに旅行を終えたのです。汽車の中で立っておるのも同じですが、はじめしばらくはやっぱりしんどいですね。歩いた翌日は足が棒のようになっていて。その足を引きずって、三里ぐらい歩く間は足がまだまだだれられない。だが三里も歩くと、あとは無感覚なような状態で、何里歩いても同じこと、いくらでも歩ける。汽車の中に立っておるのも、二、三時間はえらいですけれども、それをすぎてしまうと、あとは「もう一時間すればどこに着く。あともう何時間」ということで、割りになんでもないですね。そのように馴れるということ、そしてそれに耐えるということ、耐える力を自分の身に付けるということ、そういうことを私どものときはやったのです。それをみなさんもおやりくださいとは申しませんが、その時代の学生——いまから約六十年ぐらい前——はやはりそういうことをやった。話が散漫になるが、勉強は大学にはいつてからでよろしい、高等学校時代にはお互いに人物を練ることに重きを置こう、そういう考えだったので。ですから、体を鍛える、体だけではない、精神を鍛える、そんな考えでしたから、読む書物も自然と修養に関する書物が主でした。

私は昨年も申したが、少しばかり陽明学をやった。この合宿教室できのうあたりしていた輪読ということとはしなかったが、小島君は「洗心洞割記」を愛読しておった。私は言志四録を愛読した。のちに農林大臣、内務大臣になった後藤文夫君は「菜根譚」さいこんたんを読んだようです。その結果を持ち寄って意見を闘わすというようなことはしなかったが、各々書物を読んでなにか得るところがあるよ

うにと心がけておったのです。それから、さきほど私が宮崎県を一日十一里平均歩いたということ
を申しましたが、あのころわれわれの仲間でも、やはりそういうことをやった。たとえ、阿蘇山
に登るのに、あの当時はむろん汽車もバスもありませんから、だれでも熊本から歩いたのですが、
普通の行程は土曜日の午後からでかけると、戸下辺りまで行って一泊し、翌日阿蘇に登り、それか
ら下山しました戸下あたりに一泊して、三日目に熊本に帰るのが普通でした。しかし私どもはそれを
一泊でやろうじゃないかというので、土曜の午後一時頃熊本を出発して、阿蘇山頂まで登ったので
す。山頂で午前一時頃になった。山頂に一泊——一泊といってもあの阿蘇神社の拝殿の一隅に畳が
積んであったので、それを敷きその上に寝ただけで、翌日阿蘇の噴火口を一周して、戸下まで下り、
昼食を食べ、二時から六時まで眠ってそれから熊本まで歩いて帰ったのです。熊本に着いたのはも
う夜の十二時を過ぎておった。

ある時は釈迦院岳に登って——釈迦院岳というのは熊本の南のほうの五箇荘と境するあの山脈中
の一つの山ですが、熊本から何里ありますか、とにかく釈迦院岳に登って帰りに浜町はままちのほうまで出
て、それから熊本に帰ったのですが、日曜の午前八時に甲佐を発って釈迦院岳に登り、浜町の方に
下りて砥用、御船を経て月曜の朝五時まで歩いて、熊本に帰り着いた。どうも二十里ぐらい歩いた
ように思います。そのとき一しょに行ったのは十人内外でしたが、学校の授業を休まんようにしよ
うということ申し合わせていたので、朝二時間ぐらい寝たか眠らないかで学校に出たが、遅刻し

ないでみんな出ていたのです。

それつまりは自分が艱難かんなんに遭つても、へこたれない力を養おうではないか。ということであつたと思う。理屈をいうのではなく、それを実行しよう、そしてその力を身につけようということである。実行力を各自が貯える、勉強するのは大学に入ってからでよい。こんなわけで私は高等学校在学中、学校の教科書などほとんど勉強しなかった。だからといってなにも読まなかったわけではなく、さきほど申した言志四録などは、毎晩自分の日課として読んだ。私は寄宿舎におつたから、自習時間が済んで、そのあと床につくまでの間、三十分か一時間それを読むことに決めた。その読み方は、ほかのことをなにも考えずに精神を集中してそれだけを読むのです。わからんところがあるとなら、それをじっくりと考える。その意味が自分に会得出来るまで考える。そして、それがわからなければ次に進まない。読んでいるうちに私は言志四録に書いてある「敬」という意義が少しわかつて来た。この「敬」ということは、儒教では大事なことであつて、広瀬淡窓などもやはり「天を敬す」ということを自分の教育方針の一つにして門弟を教えた。西郷南洲も「敬天愛人」としばしば額などに書いており、鹿児島市内の城山トンネルの入り口にも額になつて掲げられている。「天を敬し人を愛す」。この敬は天を敬するだけではなく、自らを敬するということの意味がある。自分を敬するということはやはり佐藤一斎の「言志四録」の中にある。自分というものは親から生まれたものであつて親の分身である。だから、自分を大事にするということは、つまり孝行である。それは肉体につい

てのみいうのではなく、心についてもいうべきことである。心は、自分の心は、天の賜である。天の賜であるとは、天の賜である心、陽明学ではそれを良知りょうちというが、その天に通うところの心は、これは天から授かったものである、これを尊敬するのである。その心は今日は健全であったか、きょうも妨げられることなく、無事健やかであったかを、自分で毎日反省する。自ら自己の良心の安否を問うのです。そしてその良心を「自ら敬する」のです。それはどうすべきであるか、そんなことを自分でよく考えているうちに、いくらか「敬」という意味がわかったように思われて来たのです。要するにそれは敬虔けいけんの念を絶えずもつことである。敬虔の念をもって自分のことに当たる。他人とつき合うにしても、すべて敬虔な心をもって処理し行動することである、と自分で気付いたのです。

その結果、非常に体が軽くなったような気持ちでした。いままでいろいろなことで非常に悩んでおったが、その悩みがなくなってしまったという気持ちです。これは私の乏しい経験ですが、私どもはそういうことをいささか勉強したつもりです。

ところで、きのう川井先生がおやりになった輪読ですが、これは私どもはやらなかつたけれども、西郷南洲、大久保利通、海江田信義——この人は当時有村俊斎といっていたように思う——などは若いとき、鹿児島鹿児島の陽明学者である伊藤茂右衛門について学び、朱子の「近思録」などの輪講をや

ったようです。これはいまの世の中の研究方法と全く同一ではなく、それを読んで、そこに説いてある本当の意味、その気持ちを自分も体得する。そして自己修練に役立てた。単に言葉の意味を研究するのではなくて、中に書いてある言葉の本当の意味を自分が体得することをやったと思う。

南洲はさらに佐藤一斎の言志四録を読み、その中から感銘深い文句百余カ条を抜粋して、座右の銘としたが、これが「南洲手抄言志録」で、のちに日向高鍋藩主の秋月種樹が偶評を書き添えて出版しているものです。それは明治二十一年五月のことですが、私も明治三十年ごろそれを読み、南洲がいかに「言志四録」を敬読しておったかを知り、私もそれを読んでみようという気になった。

西郷などが言志四録などをどのように読んでそれを体得したかは私にはよくわからぬが、西郷のいったことを集めた「西郷南洲翁遺訓」とか「大西郷論語」とかを読んでみると、なかなかいい言葉があります。たとえば「人を相手にせず天を相手にせよ。天を相手にして己れを尽し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」という言葉がある。それは人を相手にして「どうもあいつがいけないだ」と人をとがめることはいけないのであって、人を相手にせず、天を相手にして自分の誠の足らないところを尋ねるべきであるということです。また「道を踏み固（ま）るをもつて斃（な）れるの精神で外交に当たらなければいけない」というような言葉もある。言葉は多少違いかも知れないが、意味はそういうことです。正道を踏んで、そのために自分の国が斃れるならそれもやむを得ない。そういう信念で外交に当たらなければならない、ということです。こういう言葉はこれを実行に移すこと

はなかなかできない。たいがい、大臣とか国の外交に当たっているものは、国の利害は考えるが、自分の立脚しているところが正道であるかどうか、というようなことはあんまり考えない。いわんやそれが正道であるならば、国運を賭してもそれを通す、というような固い信念は持たないのではないかと思う。しかし西郷はそういうことをいい、またそれを実行した人である。そういう人物になりたいと志したのが、私どもの若いころの修養であったのです。西郷のそういう言葉を集めた書物も幾冊があるが、そういう本を読んでもみると、陽明の精神を本当に体得しておったものはやはり西郷であって、大久保利通はあれは議論は達者であったかも知れないが、陽明の精神をどこまで体得しておったかは疑問だと思ふのです。

私は、西郷さんが敬読したということが動機になって言志四録を読んだのだが、最初にその本と取り組んだ中学五年生のときは、書いてあることの真意がよくわからなかった。それから五高在学中と卒業後と、少なくとも三回繰り返し読んで読んだが、読んで感心したところには、傍点を打ったり、赤線を引いたりして読んだ。三回も読むと、ちょっと魅力を失う言葉もあり、はじめ感心したほど感心しなくなる言葉もあるが、同時にまた、最初は看過しておった言葉に新しい意味を発見して、「ああ、これはいい言葉なのに見落としておった」と気づくこともあるのです。そのとき「温故知新」、すなわち「故きを温ねて新しきを知る」ということの本当の意味は、古いからといってそれはダメではない。新しさを失ったからといってそれで捨てるべきものではなくて、古いと思っ

ものの中にも新しい意味を発見する。それが「故きをたずねて新しきを知る」ということの本当の意味ではあるまいかと、気づいたのです。

いま申しましたことは、私どもの学生時代の生活の一端ですが、要するに、尊敬する人の精神を自分も身に付けることが眼目であった。このごろよくいわれている道徳教育とか、徳目を並べてそれを遵守する（じゆん）というようなことではなかったのです。なにか自分にも出来る力を自分の身に付ける、自分で体験し体得するということです。そういうことをやろう。それで、結局は、自信をもつことが出来る。そして、自分が正しいということであれば、いわゆる千万人といえどもわれ行かん、「自ら反して（反省して）直くんば、千万人といえども吾れ往かん」という信念と気魄をもつことが大切です。他人の顔色を見、右顧左へんして迷うことなく、自分でこれは正しい、これは間違っていると判断してから、自分がよいと思うことは断乎（ことごと）としてやる。そういう考えがよいのではないか。その一例として、吉田松陰の話をしましょう。松陰は佐久間象山の門弟ですが、象山は開国論者ですから、世界の大勢を日本人はもっと知らなくてはいかんということ説かれた。松陰はそれでは自分がアメリカに行き、アメリカを自分の眼で見に来るといつて、和船でアメリカの軍艦に漕ぎつけ、「おれをアメリカに連れて行ってくれ」と頼んだわけです。言葉が通じないので、おそらく身振り、手真似で頼んだのでしょうが、先方は「日本政府の許可を得たか」、「いや許可なん

か得てない」、「それじゃ困る。日本政府が許可しない者を連れて行くわけにはゆかん」といつて結局追い帰された。そのとき松陰はアメリカ人にどんな影響を与えただろうか。おそらく「日本人はじつにおそるべき国民だ。ああいう決心をもって単身乗り込んで、生命を捨ててやろうという——自分の利益をはかろうというのではない。日本の発展のためにはまずアメリカを視察してやろう、というその精神に驚いたと思うのです。——日本人は支那人やインド人と違って、どういうことをやり出すかわからん。単独でそういうことを考えて生命を捨てて決行する。これはおそるべき国民であることを知ったと同時に、また実際にその力をおそれた。私はこのことが、あの当時アジアをことごとく自分らの植民地にしようとしたヨーロッパ諸国をして、日本に対してはウツカリ手をつかせなかったのだと思う。日本を植民地とすることは出来なかった原因の一つは、やはり吉田松陰によって示された日本人の気魄、意気込み、決死の行動があつたと思うのです。

しかし戦後の日本人の中に松陰みたいな人が果たしているのかいないのか。容易に断言できないが、どうやら心細いような感じですね。みんな腰抜けと見られてもしようがないのではないか。アメリカの日本に対する占領政策には、多分に日本人を骨抜きにしようという意図が織り込まれていた。ところが乗り込んで来てみれば、日本人はすでに気魄を失っておつて、アメリカのいいなりになる。占領政策に迎合さえする。そしてそれを進歩的と考えている。また一部には思想的にソヴェトかぶれして唯物的な物の考え方になり、ソヴェトの思想的指図に従い、その奴隷のようになりな

がらそれを恥辱とも思わず、かえって進歩的だと自負している者もある。そういう人々は、日本人としての魂を失っているのではないか。戦後の日本の一番大事なことは、経済復興、所得倍増も大事であるが、それよりも日本人の失われた魂を再び取り戻すことこそ、一番大事だと思う。生活が苦しくても困るが、しかし、物質生活の向上だけが国の本当の向上でも、国民の本当の成長でもないと思えます。

これは孟子も人間は「飽食煖衣し、逸居して教なければすなわち禽獸に近し」といつている。暖かに着物を着て、たらふく食べ、なにもしないでブラブラしていると、人間は禽獸と同じようになってしまう。人間はそれではいけないので、契きぎという人を、司徒——いまでいえば教育担当官——に任命して、人々に人倫を教えさせた。そこではじめて人倫が行なわれるようになったということが孟子に書いてある。経済状態をよくすることは、人間生活の基礎ではあるが、経済生活を楽にすればそれで人間の全生活がよくなる、人間の使命が達成されるという考え方は、きわめて程度の低いものである。経済生活の上に本当の人間生活、精神生活、文化生活、道義生活などを築き上げてこそ人類の真の進歩があるのだと思う。マルクスが経済生活を基礎だと考えたのは間違いではない。しかしその基礎の上に何を打ち建てるべきかということが、実は残された最も重大な問題であると思うのです。

私は終戦直後「道義日本」、「文化日本」、「科学日本」、「経済日本」を今後は建設すべきであると

いうことを、学生諸君にも話したのですが、その「道義日本」の建設ということは、いま全然閉却されておるのではないか。「道義」という言葉が嫌きらわれているのかも知れませんが、とにかく日本人が、日本は戦争には負けたけれども、かつては「東洋の君子国」と呼ばれたように「道義日本」を建設しようと心掛け、確乎たる信念と誇りを持ってほしいと念願した。しかし私のこの念願は、どうも空ひなしかったようです。「文化日本」の建設、これも東洋の精神文化の粹を集めしかもそれを今日まで持続している日本としては、西洋文化のほかに独自の「日本文化」の建設に努力することが、日本として世界の文化に貢献するゆえんであると考えたのですが、これも西洋文化に圧倒され、萎縮しているようである。学問の進歩も、むしろ大変結構ですが、社会科学の面において、独断や偏見に堕してはならない。また思索の遊戯——ゲダンケンシュピール——に陥つてもいけない。思索の遊戯よりも、動ぜざる精神というか信念というか、それを各自が持つことが大切である。私は今日の日本国民自身が、もう少しほんとうの日本人という自覚を持たなくてはいかんのではないかと思えます。

まだいいたいことはたくさんありますが、マルキシズムについても、私はマルクスはつまらぬ男で、間違つたことばかりいっておるなどは申しません。マルクスは人生の片側だけの説明しかせず、人生の全体の意味はわかっていないのではないかと思っている。だからこれからマルキシズム

を研究する人は、マルクスの欠陥、マルクスの未到のところを見て、そこを補正することが必要だ
 と思う。ただマルクス崇拜に終始するだけでは、日本の学界もはなだ心細いと思う。アダム・ス
 ミスは、もともとグラスゴー大学の倫理の先生でした。ですから、人間生活を物質的と経済的の兩
 面から解明しようとするところも、精神的道徳的の面からは「モーラル・センチメント」（道徳感）とい
 う書物を著わし、経済的な面からは「ウェルス・オブ・ネーションズ」（「諸国民の富」）という書物
 を著わした。道徳を論じた本はほかにもあるが、経済的活動の面から述べた本は他になく、珍しい
 から珍重せられ、経済学の元祖に祭りあげられた。これはアダム・スミスにおいては、人生の両面
 を各々の面から説いたのであって、両方を合わせてはじめて人間の全体が説かれると考えたのです。
 これに反しマルクスは経済生活を人生の基礎であるとし、しかも資本主義の勃興（はつこう）するとき、その窮
 極する所とその弊害だけを説いているのです。しかし資本主義についても、ある英国人——チャー
 ルス・ハンズフォード（Charles Hansford）——は、「資本主義こそ人類に幸福を与えている。社会
 主義のいうことは嘘（うそ）である」とい、「社会主義の誤謬」（The Fallacies of Socialism）という冊子
 を著わしている。彼はその本の中で「私自身かつては熱心な社会主義信者で、カール・マルクス、
 ロバート・ブラッチフォード、ジョージ・バアナド・ショウなどを愛読して、社会主義の理想と
 する国家の理論に対して起こるであろういかなる反対論にも立ち向かい得るだけの経済学、政治
 学、産業史などの十分なる知識を持っていると自惚（うんぼ）れていた。ところが、それから僅か数年の後に、

私は社会主義理論の妥当性に疑問を抱き始めた。そこでこの理論をさらに注意深く自分の経験に照らし、日々の生活の事実^{じじつ}に照らし、人類の自然の性質に照らして検討してみたところ、社会主義理論の基礎は全然誤りであることを発見した。そこでかつて同じ考えであった社会主義者の人々に自分の説を聞いてもらうために、この冊子を著わす」といっています。四十頁足らずの小冊子ですが、れども、そういう着眼は諸君にとって一つのヒントになると思う。

こんな話をじつはもっとしたいのですが、もう時間がありません。私は、アメリカの従属者のようになつておることも、ソ連を本尊のように担^かいで、その下で勉強しておるといふようなことも、日本の学生としては何だかいくじのない話であると思う。外国人よりも自分のほうが偉大になれる、人生全体を見、透徹した識見をもって、外国人以上になろうと勉強すべきじゃないか。日本人の能力を信ずれば、これは出来ないことではないと私は確信する。

私はもう来年はみなさんにお目にかかれるかどうかわかりません。ですから、いろいろとみなさんからもお話を承わり、自分もいろいろといままで考えておったことや、常に思っていることを、もっと申し上げたいのですが、どうも時間がありません。はなはだ散漫なままとまりのないことを申しましたが、日本人の能力を信じ日本人の能力をもっと發揮していただくよう、そういう仕事にこ

れから当たってもらいたいと心から諸君にお願いします。

これは、この中の誰かがそういうことをしてほしいというのではありません。日本人全体が日本人の能力をもっと発展成長させることに対して、お互い同士が協力すべきではないかと思うのです。これまでのいろいろな間違いは、西洋人の糟粕そうぼくを嘗なめることから来ていると思う。だから、各自がもっと日本人という自覚を持つことが何よりも大事だと思えます。（拍手）

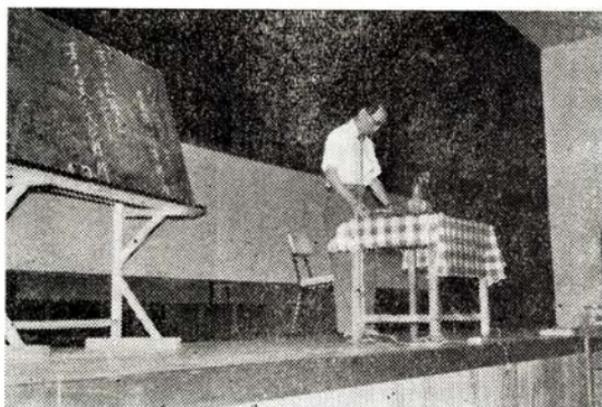
吉田松陰を中心とした幕末日本の文化精神

鹿児島大学文理学部助教授 川 井 修 治

この合宿教室では、古典を読みその息吹(いぶ)きに接することが、重要なテーマの一つに取り上げられている。第一日に小田村先輩が輪読を試みられたのに引き続き、本日は私がやることになっている。しかし諸君の多くは、この種の試みはほとんど初めての経験であるらしく、用語や文体のむずかしさも手伝って、理解しようとする気持ちは十分に持っているながら、どうもなじめないといった感じがあるように察せられる。元来、古典を読むには、長ったらしい解説など抜きにして、直接古典そのものに触れてゆくのが本筋であることはいうまでもない。だがいまいったような戸惑いがあったのではどうにもならない。そこで前段では、古典学習の意義、方法について私なりの解説を加え、後段で時間の許す限り『講孟劉記』を一しよに読み、味わってゆくことにしたい。

一、古典の学習と大学生活

古典とは、長い歴史の風雪に耐えて、今日まで生命を持ち続けたところの、偉大な先人たちの残した記録である。歴史は実に靈妙な淘汰(とうた)作用を持つもので、不純低俗なものはいつしか消



え去ってゆくけれども、純粹でオリジナルなものは、その切実な迫真性のゆえに、すべての人々の心を打ち、後世に至るも価値と影響を持ち続けてやまぬものである。これは何も日本だけに限ったことではない。洋の東西を問わず、いずれの国においても、古典は国民の文化伝統を形成する記念

碑であり、民族の生の典型である。「古典を忘失した民族は、滅亡の途をたどるほかなし」——これは碩学^{せき}トインビーの言葉であるが、実にギリシャ末期のヘレニズム世界以来の歴史は、このことを雄弁に実証している。古いものはつまらぬとして、ろくろくその内容も検討しないで、頭から古典を軽侮し、遠去けようとする風潮が、今日の日本に満ちみちているように見受けられる。このような風潮は文化感覚の喪失、すなわち亡国の兆であると評しても、過言ではあるまい。「古い」ということは、「つまらない」ということと同義語では決してない。同様に「新しい」ものが、すべて「正しい」という保証はどこにもない。いわゆる世の新しいがやたち——その筆頭はかの自称進歩的文化人たちであろう——が、「新しい、新しい」ともてはやすものは、時の推移とともに消えてゆくはかない歴史の表波

に過ぎない。逆に歴史の底を一貫して流れて変わらぬものこそが、常に新しい生命の源泉であると考えよう。その意味で、歴史に残る古典的人格の、人間形成の記録を直接繙(ひもと)いて、その息吹きに触れてゆくことは、実は現在に生きるわれわれが人間の真実のあり方を体得するうえで、最も近道である。私は自分のささやかな経験からしてもこう考えさせられるのである。

ところで、現在の大学生活はどうであろう。大学の学問の中に、いまいった意味での古典の学習が、まともに取り上げられているであろうか？ 勿論それぞれのゼミナルなどでは、外国や日本の古典の講読が行なわれていることは事実であろう。だがそれらは恐らくほとんどが、アカデミックな特殊研究目的のためになされており、本当に人間そのものの形成のために取り上げられる事例は、きわめて少ないのではなからうか。諸君は諸君の大学の講義や演習の中に、人間そのものあり方を追求する意味で古典に接する機会が、実際にあったかどうか、一つ胸に手を当てて考えてもらいたい。私の関知する範囲では、ほとんど皆無に等しいと思う。大体いまの大学は、研究機関としては相当の成果をあげているであろうけれども、教育機関、特に人間教育に関しては、全くその責任を放棄しているといつてよい。学生の思想問題、人生観の問題は全くの放任状態に置かれているだけでなく、このような問題に大学としてタッチするのが、自由の抑圧だと考える風潮が一般的のようである。規模編成から学科の内容、補導の方法に至るまで、およそ教育の場としての配慮を欠いている。大学はもはや人間修練の場ではなくて、就職のための知識と技術と、そして資格を与

える場に墮しており、またそのように割り切っている学生が多いのが実情ではないか。これでは堅苦しい古典について道を求め、先哲の教えを汲んで己れを正すというような刻苦勉勵の道が、いまの大学生活の中から影をひそめてしまっているのも、やむを得ないことかも知れない。

しかしながら、人間と生まれて自己を凝視し、自己を練磨し、自己を確立しようとするのは、理性ある人間の、特に青年特有の本能的な欲求であろう。逆説的ではあるが、ある意味では先人の遺教に触れ、お互いの志を励まし合っているのは、むしろマルキスト学生であるということができよう。彼らは共産党の指定した「必読文献」なるものを熱心に読みかじり、理論闘争に負けても負けてもお互いに温め合って闘志を振るい起こし彼らのいわゆる「聖なる革命」を目標に倦（う）むことなき活動が続けている。下宿に集まって就職やセックスの話に打ち興じ、少しも怠りたとしても趣味や娯楽の世間話に時を消費している一般学生が、これと太刀（たち）打ちできないのは当然のことかも知れない。私も思想内容は別として、それら党员学生のきびしい精進ぶりには、敬意を表することを惜しむものではない。だがしかし注意して観察していると、彼らの当初の動機は、貧しい人々を救おうという人間的なものから出発しているようであるが、時がたつに従ってその態度はトゲトゲしくなり、著しく策謀的になってゆくのがわかる。これは畢竟（ひっきょう）彼らの思想内容に問題がある。すなわち彼らの人間修練は、いわゆる前衛党员としての鑄型（いがた）にはめ込まれた陶冶（とや）であって、とらわれない人間そのものの探求ではないことに帰因する。周知のようにマルク

ス主義の理論の上では、人間はしょせんイデオロギーの道具にしか過ぎず、革命達成というイデオロギーの指示する至上命令の前には、人間が本有的に持っている理性や愛情は沈黙を余儀なくさせられてしまう。そうした理性や愛情は、来たるべき共産社会といういつ到達できるのか知れない理想社会の構図の中にタナ上げされてしまい、現実にはいかにして階級闘争や革命を達成するかという戦術的考慮に腐心せねばならなくなるのである。こうした魅惑的な理想図の看板と、「目的のためには手段を選ばぬ」式の現実の行動との間に、ギャップと空しさを感じてくれれば、彼らにも正しい思想の芽ばえが見られるというものであろう。

これに比べて、西洋では家庭はもとより学校教育においても、キリスト教を基調とした人間観の筋が一本通っているといわれている。大学でも、一番中心となる場所にチャペルが建てられており、多くの学生は静かに十字を切ってから、教室に入るといふ。これは開講まぎわに、アタフタと教室にかけ込むわが国の学生と対比して、大いに考えさせられる点ではないだろうか。宗教というよりも、宗教を求める精神そのものがない。これが現代日本の大学の、そして日本文化の致命的欠陥である。人格の完成とか、教養の充実とかいった言葉は氾濫（はんらん）しているけれども、肝心の人間の実内容が空無化され、低俗化されてしまっている。知識や理論や技術は教授されるけれども、そうしたものを自分自身がどのように受け止め、どのように生かしてゆくかという価値観の問題が、全くなおざりにされている。これで一体筋の通った学問や教育ができるものかどうか、私も

諸君もともどもに自分自身の問題として真剣に考えてゆかねばならぬ事柄であると思う。

それではわれわれの日本には、西洋のキリスト教に匹敵するような精神的価値基準がないのであろうか？ 私はそうは思わない。たとえば家庭における愛情についていえば、確かに西洋のそれよりもこまやかで奥深いものがあるはずである。また、社会における人間的なつながりについて見ても、単に権利義務と契約関係のそれよりも、より融和的な人間関係が、本来の日本の国民性の中には厳存するはずである。西洋の観照的理論的、それゆえに技術的ないし欲望充足的な生き方とは次元を異にした、東洋的道念が日本人の血脈の中に結晶しているはずである。明治の先覚者岡倉天心は「アジアは一なり」といった。「一なり」といったのは、政治的あるいは経済的な一体の意味では決してない。それが仏教——儒教——神道を一貫する影（ほ）りの深い文化的基盤を指すことは、もはや明白である。そうしたものが本来の日本人の伝統の中に厳として存在したのは確実である。にもかかわらずいまではそれが埋もれ覆われている。これが問題なのである。日本が再び根底から立ち上がるとすれば、日本の土壌の上に日本人の心と足で立つ以外に方法はない。祖国を再起させようと祈念するならば、われわれは埋もれつつある自国の文化伝統をもう一度掘り起こさねばなるまい。私に与えられた課題は、そうした文化伝統の結実である古典の一つを諸君とともに繙ぎ、直接古典の文章に触れ、その心を味わってみようということにある。

二、古典学習上の諸注意

次に、それでは古典を読んでゆくにはどのような態度、どのような配慮が必要であるかについて私見を述べたい。第一に大切なことは作者、つまり古典的人格の立ち場に身を置き、その意味を感じ得るといふことである。これは口でいうとまことに簡単なようだが、概念的思考法に慣れている諸君にとっては、なかなかむずかしいことではないかと思う。たとえば吉田松陰を例に引くと、それは封建時代の人間である。封建時代といえば、古い因習に満ちた未開の時代であり、次の明治資本主義の時代によって否定されてしまった。だからして、その古い未開の時代の人間の思想や業績は、今日に生きるわれわれに何の関係があるのか……という類(たぐ)いである。これはマルクス流の唯物史観、発展段階説に特有なセンスであって、このような風潮が現代史学界を覆っているとこゝろから、諸君の多くがそのように感じられるのは、無理もない話であるかも知れない。

だが、このような見方は正規の歴史学研究方法論からしても、大きな間違いであると私は断言したい。こんな見方では、歴史学は成立し得ないのである。これでは、それぞれの時代の価値の建設に注がれた一切の人間の努力は、空無とならざるを得ない。たとえばローマ大帝国の建設であるが、「ローマは一日にして成らず」といわれるごとく、ティベル河畔の渺(びょう)たる都市国家から始まって四世紀半の間、帝国建設のために費やされた幾多の賢人・政治家・雄弁家、そして無名の兵士

たちの辛苦と努力は、実に大変なものであった。しかるにその後はどうであるか。こうして建設された大帝国も、次の四世紀半の間に衰退し、ついに民族大移動の怒濤の中に亡んでしまったのではないか。結果からみれば、これほど無駄なつまらぬことはない。結果という面だけからみれば、すべての時代は次の時代に移る一段階にしか過ぎない。しかし、それをもって帝国建設に費やされた一切の人間の努力をけなして評価することは許されるだろうか？ 亡びたからつまらないと、いつ捨て去ることができらるだろうか？ 歴史学とは、実にその建設の過程そのもの、その経過の中に綴られた愛憎と悲苦の人間の営み自体を、精確には握することを使命とする学問ではなかつたか。

大切なことは、過去の時代の人間の諸活動をできる限り生（なま）のままに知ることである。そのためには、有名な歴史哲学者、文化史家であるデイルタイの「追体験」あるいは「追感」という、傾聴に価する言葉を想起する必要がある。「追体験」、「追感」とは、われわれは現在に生きている以上過去の時代を直接経験することはできない。しかし過去の時代を精確に知るためには、追いかけるようにして、あたかも過去の時代に自分自身を置いたようにして、その当時と同じことを体験し、実感してゆこうという態度である。これは歴史的理解の根本義であるとともに、すべての人生の諸事実に接するさいの、一般的態度であると思う。そしていま、われわれが歴史に燦然（さんぜん）たる光を放つ一個の人格について、その遺文（古典）に触れつつその遺光を汲もうとするときにも、

当然妥当する態度であることは改めて断わるまでもない。

第二に、前項と関連するが、区々たる概念的類別を去って、先人の心を自分の心で知ることが大切である。当今の概念的な学風は、同様にまた一切を概念的類別のワク内にはめ込み、事柄自体の個性や特異のニュアンスを捨象して、抽象された概念だけで理解し操作する傾向を強く持っている。たとえば、昨日説明された聖徳太子を「あれは唯心論者だ」というぐあいに、安易に片づけてしまう。唯心論は、デカルトスピノザライブニッツなどカント以前の大陸哲学の系統を指すものであるが、こういうふうに簡単に物事を割り切ってしまう人たちは、デカルトもスピノザも、従って唯心論の何たるかも知らないで、ただ聖徳太子は「和を以て貴しとなす」と説かれ、精神を重んじられたから唯心論者だというくらいのとこで、こういうことをいうのであろう。太子のご苦闘の生涯を知ることなしにこのように軽薄なワクづけをすることは、思わざるも甚だしいといわねばならない。同様にまた、少しでも国家の意義を強調すると「あれは右翼だ」といい、道義の退廃を慨嘆すると「あれは封建的だ」という。こういう安易な見方が、今日いかに世を風靡していることか。吉田松陰は幕末志士だというと「彼は愛国者で、右翼的で、テロリストだ」と片づけるようなことを、諸君はよもやしないだろうと思うけれども、こういう安易なワクづけはなんとしても除去してもらわねばならない。

それではどうすればよいか。それは「心を心で知る」ということである。われわれの知るべき事

柄、われわれのは握すべき最重要の対象は、区々たる外的説明や傍証的分析ではなくして、古典的人格の心そのものの、その心の高貴さと切実さである。環境の分析は概念の操作で事足りようが、真に個性的なもの、従ってその人格に独自の光を与えるものは、周囲の環境にぎりぎりの線で対決し、価値創造のために大きく飛躍する心の動きそのものである。だからわれわれは古典的人格の内ふところに、その心の内奥に徹入しなければならないのである。そのためには、われわれ自身が片々たる部分的関心にとらわれていたのでは、どうにもならない。われわれ自身がまず、自己の全存在を賭して、全情意的に没入してかからなければならぬ。道元禪師がいわれた「心身脱落」とは、このような境地を指すのであろうか。われわれ自身が、自己の意識や肉体の存在を忘却し果てるほど、無我無心の境地が要求されるのである。私はこのような心構えを「心で心を知る」といささか文学的に表現したのであるが、その意味をよく汲んでもらいたい。「追体験」という言葉自体も、対象に対する広く深い愛情を含んだものであるが、さらに、その上に敬仰の気持ちが必要とする。敬仰の心を抱くことは、何も盲信せよということではない。盲信といい、阿諛追従（あゆついしょう）というのは、内心では軽侮しながら表面はペコペコしている自信のなさというのである。そうではなくて、おのずから湧いて出た敬仰の気持ち、過去の日本を支えてわれわれの手に遺してくれた偉大な祖先たちの努力に対する自然に湧く畏敬の気持ち、それなくしてはわれわれの目に曇りがかかって真実は見通せぬと、私は声を大にして訴えたい。自我万能、批判流行の現代風潮を脱却して、

素ほくにして包容性ある人間本来の心を取り戻せと、私は繰り返し訴えたいのである。

第三に、時代の背景をよくわきまえ、同時に現代的意義を探索することが大切である。古典の書かれた時代と現代とは、いうまでもないことだが、時間と空間の隔たりがある。たとえば文章にしても、耳慣れない用語もあろうし、ニュアンスの違う言葉もある。漢字に弱い当今の学生には、大変読みづらい点もあろうが、つらさを押してよく読み、その文章がその時代に意味した事柄に、深く思いをはせてもらいたい。吉田松陰が生きた時代の背景については、のちほど具体的に述べるが、幕末維新という空前の国難の時代であったことは、諸君も知っていよう。この時代に生きた文人として、また行動人として、松陰の情意の高貴さときびしさは、類い稀なるものがある。松陰に代表される幕末日本の文化精神は、現在戯画化されているような偏狭で低俗なものでは断じてない。それは日本伝来の道統と哲学に裏打ちされた、民族回生の醇乎（じゅんこ）たる精神の燃焼であり、また西力東漸の滔々（とうとう）たる波濤に対決して、取捨と包摂の妙を尽くした、博大な文化精神の奔騰である。詳しいことはあとで述べるが、それをもって松陰の心事を理解する一助にしてほしいと思うのである。

同時に、古典をただ過去のものとして読み捨てぬ配慮も大切である。訓話（くんこ）注釈も大切であるが、われわれが古典を繙くのは単なる骨董（こつとう）的趣味からではなくて、現在に生きるわれわれへの絶えざる示教を求めるからにほかならない。事実、われわれがこの合宿教室で古典の

輪読を行なうのは、案内のパンフレットにも書いてあるように「われわれの祖先は国家的危機にいかに対処して来たか」という第三のテーマに対応するためである。われわれと血のつながった祖先たちが、いかに真剣に祖国の危機を切り抜けて来たかを知ることが、いまのわれわれに事実の教訓を与えると思われるからである。従ってわれわれが、古典から現代的意義を汲み取ろうとする意欲を常に鋭くとぎすまして置くことは、当然の心構えでなければならぬはずである。ところで、われわれは日本の国家的危機の時期のうち、特に文化的危機、すなわち外来文化との接触において、日本本来の精神をいかに護持してゆくことができたかという最も深刻な時期を選び出さなければならぬと思う。なぜなら、われわれは現代こそかかる文化的危機の最も深刻な時代であり、政治にも経済にもまして、かかる文化的危機の打開こそが現代の最も根本的な課題であると思うからである。その意味でこのような時代を過去に求めれば、儒仏の東洋文化との接触が行なわれた飛鳥時代と、西洋の科学文化の渡来し始めた幕末維新の二つの時代があげられることは異議をさしはさむ余地がない。そしてこの史上の二大危機に際会して、日本の精神的指導の任に当たった人格として、聖徳太子と吉田松陰をあげることにも、大体異論はないと思う。このようにして飛鳥—幕末—現代を一線上にとらえるならば、吉田松陰のもつ現代的意義は多言を要せずして、すでに明らかである。まことに吉田松陰の生きた時代は、現代のそれとまさに酷似した様相をもっている。この意味からも、素心をもって古典に触れてゆくという半面、目をわれわれ自身が生きている現在に据え

て、いわゆる問題解決的な態度で読んでいってもらいたいと切に希望するものである。

蛇足だが、古典に接する態度に関連して、一言佐野学氏の言葉を引いて置きたい。ご承知のように佐野氏は、早稲田の先生で戦前における共産党の大立物、十余年の獄中生活で転向した人である。この人に「獄中古典によりて心を洗う」という未発表の遺稿があるが、これは短いけれどもなかなか意味深い文章である。そこには転向の動機は祖国愛への目ざめであったことが、深刻に力説されている。佐野氏はそうした精神的回生の契機を作ってくれたのは、古典への接触であったとして、

「時と共に人間の作った尊いものが亡び去るが、出来るだけそれを保存して、後人に伝えるものは古典と伝統である。時間的には遠い過去に作られたものであっても、古典には民族の新鮮な生命が波打っており、永遠の今がそこにある。……幸いに私の希望は誤らず、古典はその深い生命の力をもって、刻々に私の精神に新しい火を点じてくれた」と書いている。

また「古典の用語は、簡素単純で、その表現方法は論理的思弁的でなくして、芸術的直観的である。古語は現代の雑駁(はく)な用語とは異なり、正しい意義を持ち、含蓄深く迫力があり、人間の行為行動の真只中から生まれ、かつそれと関連しており、あたかも言語に靈のあるもののようにある」といい、さらに

「己れを捨て、心を正しくして、自分自身も古代の単純さと純朴さに立ち還り、事物本源の生

命を直接探求する直観の力を鋭く磨き、尊崇の念をもって古典に向かうことである。西洋的教養の下に養われて来た論理主義や、不可知論的懐疑主義や、自然法的因果主義や、機械論的分析方法は、一擲されねばならない。かくして古典に接すれば、その古めかしい表現の中から、人間の生命の白水が渾々（こんこん）として悦（よろこ）ばしく湧き出すを聞き、わが民族祖先の声と共に、天地の神々の声を聞くことができる」

ともいっている。私は佐野氏の門弟でもなければ、その言説に賛同する者でもない。しかし身を削るような思いで、転向の動機を録された心情には共感を禁じ得ない。またマルクス主義という最も新しい西洋的学問に前半生を捧げられた同氏が、翻って民族の古典にこのような愛情と理解を示された文言は、われわれにも少なからぬ教訓になると思つて、引用したわけである。

三、吉田松陰の生涯と『講孟劄記』の成立事情

まず吉田松陰がすぐれた学者であったことを認識してもらいたい。幕末志士といえ、新撰組と斬り合ったくらいのは認識では困るのである。松陰が安政の大獄で非命に倒れたのは、年齒わずかに三十歳のときであり、物心ついてから文筆活動した期間は、わずか十四、五年間と見るべきであろう。その著作は松陰全集に収められており、部厚い書物十数巻にのぼり、量的にも驚異的といわねばならない。もちろんこの中には講義案や論説のほか、東奔西走、下獄の間にもした随筆や書簡

も含まれているが、いずれも低俗な内容のものではなく、古賢に学び道を求め、同志を励まし時務を説いた高い学問的精神に貫かれている。松陰を学者的志士といっても、決して過当の言葉ではない。松陰の学問は兵学（単なる軍事学ではなく、総合的な国防の学）であり、その養家吉田家は代々毛利藩の兵学師範であった。彼が十一歳のとき、藩公の前で講義を行なって賞賛を博したことはよく知られているが、彼の勁烈（けいれつ）な資質は、家学（山鹿流）を墨守（ぼくしゅ）して師範の座に安住することを許さなかった。平戸遊学、また江戸遊学は、激動する時勢に対する活眼を開かしめ、修学の範囲は経学・史学・文学から洋学にまで広がり、特に江戸遊学の当初には、今後兵学を捨てて洋学に専念すべきことを門下生に書き送ってさえいる。しかしそれも、けっしてディレッタント的知的興味からそうしたのではなくて、松陰の学問的精神の底には、烈々たる時世救済の熱願が燃えていたからである、ということができる。それを知るためには、当時の世界、特に日本をめぐる極東の状況に目を向けねばならない。

松陰が志を立てたのは十六歳の時といわれるが、西暦では一八四六年に当たる。その七年前にアヘン戦争が起こり、老大国の清は英国の軍事力の前に屈服し、ここに列強による極東侵略の幕が開かれた。インドでも英国の支配は着々と進められ、その苛（か）政に対するインドの民族的抵抗は五七年のセポイの叛（はん）乱で打ち砕かれている。日本では開国を唱えた高野長英、渡辺華山などが罪せられた蛮社の獄が起きたのが三九年であり、幕府は鎖国の方針を厳守する自信もなく、四二年には

異国船打ち払い令の緩和を下令している。それに続く数年間は、毎年英米露などの船が来航してこもごも通商を求めており、これが最後にペリーの威圧によって鎖国の扉が開かれるまで続いたのであった。幕府は特に北辺よりする露国の獐猛（どうもう）な蚕食に怖れをなし、四四年ようやく海防や砲術研究に着手し始めたが、泥棒を見てナワをなうの類いで、到底独立護持の堅強な支えとなり得る態のものではなかった。なお国内的に見れば四三年に天保の改革が強行されているが、この拙劣無準備の統制経済は忽ちにして反動を生み、民生を著しく疲弊せしめ、幕府の威信を失墜させた。松陰の時務を論じた著作の中には、制度改革や軍備充実の前に「民生を厚くする」ことの必要を述べた箇所が随所に見られる。これは天保年間の困窮を身に徹して印象づけられたことによると考えられる。ともあれ当時の世界の大勢は、すでにインド、支那の殷鑑（いんかん）によっても明らかかなように、ヨーロッパ諸国による極東侵略の波が日本の岸辺を洗いつつあり、内に確固たる国家的大方針もなく、儉（とう）安と混迷にいたずらに日を空費していたことは、何人の目にも明らかであった。このままにして祖国を滅亡の淵（ふち）に投ぜんか、当時の志ある青年たちが打開の策を求めて挺身蹶（けつ）起したのは、けだし当然の勢いであった。十六歳の吉田松陰もむろんその例外ではなかった。

松陰の立志に直接影響を与えたのは、山田治心気斎という人物であった。この人の示唆（さ）を受けて松陰は、日本をめぐる英米露仏の侵略の形勢を痛感し、幕府の消極的鎖国政策を批判して、日本本来の大積極策を展開すべきことを明らかにした。この一念が安政の屈辱的開港を契機として攘夷

(じょうい)策に結晶したのである。それがさらに国民的統一の中心を、原理的に覇道を行じた幕府の手から、伝来の国民道義のカナメである皇室に移し変えよという尊皇の主張——松陰の尊王思想の芽ばえは、幼時より真面目な敬神家であった実父・杉百合之助の家庭における感化による——と結合して、ここに尊皇攘夷の大道が定型したのである。今日尊皇攘夷といえ、アナクロニズムの代名詞のように見られる傾向があるが、これは、戦後の軽兆浮薄な風潮から見るとであって、決して当時の状況に即した正しい判定とはいいがたい。さきに述べたような危機的状況下において、日本はこれ以外に何をなし得たというのであろうか？ 尊皇とは、いわば西洋の先進諸国がすでに行なつた封建制よりの脱皮・近代国民国家への統一を、西洋流の君権打倒・流血革命の方途によらずして、当時、日本の置かれていた情勢に即応した民族的中心への回帰の方途で行なつたのである。左翼論者は天皇のもとに近代国家への再編成が行なわれたことをもって、封建制を完全に脱却し切れなかったと主張する。(明治以後にも若干の封建的なごりが残つたのは事実であるが、こうした形而下の現象の責任は天皇にあるのではなく、政府を主宰した藩閥当事者の責任である)。だがそれでは天皇への回帰の代わりに、西南雄藩による武力的制圧やクーデターによって再編成が行なわれたと仮定して(彼らの好んでとりあげる農民一揆などは、当時の実状から到底変革の本流になり得なかつたばかりでなく、かりに大規模化したとしても、清朝末期の「太平天国」の二の舞いであり、日本の滅亡を早めたと思かさない)果たしてあのように犠牲も少なく円滑に行なわれたであ

ろうか？ これらはすべて歴史的条件を無視した暴論である。攘夷にしても然り。攘夷とは単純な排外主義（一部の志士気取りの連中のうちにはそのようなこともあったかも知れないが、松陰や橋本左内などの遺文に接すれば、そうでないことは明白である）ではない。それは爪牙（しが）をときつつある当時の列国に対して、民族の独立を保持しようとする国民的気構えをいうのであって、進取の方策をも含めた気宇広大なスローガンなのである。詳しくは、別刷した『獄舎問答』などを読めばわかってもらえると思う。いずれにしてもこの尊皇攘夷の背骨が、松陰の学問の中心に一本通っているのであって、前述したように決して趣味、興味の学者ではなかったのである。

松陰はまた、学問の人であるとともに、行動の人でもあった。このことはすでに、親友江幡五郎との友情のために、脱藩東行した行動にもあらわれているが、ペリー来航以後物騒然たる時期において、いよいよ果断に發揮され、下田踏海の挙にその典型を見るに至るのである。尊皇攘夷という学問的帰結は、松陰を駆って、直ちに攘夷の基本策たる相手を知るといふ行動に、（佐久間象山の示唆によるといわれる）卒先身を挺せずには措（お）かなかった。当今講壇ではとくとくとして左翼革命を説きまくり、実生活ではブルジョア趣味を満喫している似而非（えせ）学者とは、およそ種類が違うのである。だが松陰が国禁を犯して敢行した下田事件は、人も知るように失敗に終わった。「かくすればかくなるもの」と知りながら止むに止まれぬ大和魂」とは、踏海挫折、檻送時の感慨であるといわれている。そしてその後、二十五歳から三十歳に至るまでの年月は、すべて入獄と蟄（ちぢ）居

である。普通の人ならば悲憤慷慨(ごうがい)もし、世を拗(す)ねることもしよう。しかし松陰は逆境に屈せず、常に学問研鑽(けんさん)を怠ることなく、また驚くべきことに、自らは収獄されて動けぬ以上、門弟たちをして一挙回天の行動に出すべきことを教示し督励した。これが大原郷要鷲(が)策と、間部下総守要撃策である。いまはその詳細に触れる余裕はないが、一部でこれを右翼テロと蔑(さげす)むことに対しては、一言して置かねばなるまい。なるほど大原郷には猷策であったが、幕閣である間部詮勝に対しては正理をもって諫(かん)止したあげく、聞かれずとあらば彼を刺し、自らも処決する計画であった。これほどの大事を決心したのは、間部が京都に至るや皇室を抑制し、燃え上がりつつある尊攘の一党に対し、一網打尽の弾圧を行なうこと必至と見て、この力関係を一挙に逆転するためには、非常の手段に訴えるほかに道はないと判断したからであった。確かにこれは尋常の手段とはいわれない。しかし異常なのは松陰の判断だけではなく、世状そのものがすでに異常であったのだ。行為の妥当不当は天が審判を下すことであろう。ここでいえることは、松陰の平素の思想態度より推して、彼がけっして血に飢えたテロリストというような人物ではなく、身体は拘束され憂悶いよいよつのるという特殊な環境のもとで、よくよくの決心を下したのであるとういうことである。いま私は松陰が村塾の門弟達に示した行き届いた撫(ぶ)育、家族との間に交わされたこまやかな愛情について、言及する余裕のないことをきわめて遺憾に思う。

さて松陰の真骨頂は、安政六年の死刑のさいに輝かしい光を放つ。その折の心情は別刷の『留魂

録』に収めてあるので、是非一読をすすめたい。松陰は「至誠而不動者未之有也」の孟子の一句をひっさげ、泰然として司直に対面する。今日の左翼の法廷闘争のように乱脈なものでは断じてない。彼は自分の行動を一切つつまず、司直の及ばなかった事柄をも表白して、正理を主張し抜く。しかし下された宣告は、分を超えて国事を論ずるは不届至極、斬罪という暗黒で冷酷な処断であった。『留魂録』中の「幕府三尺の布衣（ふい）国を憂うるを許さず」とは、万腔（まんくう）の悲憤を吐（と）露した言句であろう。しかしながら取り乱した気配も見せず、獄中で交わった有為（ゆうい）の士の名前を、同志高杉や久坂に告げ知らせて、今後の協力奮闘を祈りつつ、遺言『留魂録』に次の五首の絶唱を書きつけている。

かきつけ終りて後

心なることのくさぐさ書き置きぬ思ひ残せることなかりけり

呼だしの声まつ外に今の世に待つべき事のなかりけるかな

討たれたる吾をあはれと見ん人は君を崇めて夷払へよ

愚かなる吾をも友とめづ人はわがとも友とめでよ人々

七たびも生かへりつつ夷をぞ攘わんころ吾忘れめや

私はこれほど清浄にして痛烈なる人の最期を他に知らない。私はこの遺歌を唱するたびごとに、敬仰と哀惜の念を禁ずることができない。思えば幕府の大老井伊直弼の見識と手腕は一応認められ

もしよう。だが断じて許し難いのは、安政の大獄において幾多有為の士を非命に倒れさせたことである。なぜなら、それは明治以後において幕末の博大にして純正な文化精神を覆没させたからである。それは近代日本にとって、このうななき不幸をもたらしたからである。まことに吉田松陰や橋本左内が明治に生きてあれば、西洋の学問技術の長をとり入れつつ、日本民族の精神伝統を豊かに生長させてゆくことも不可能ではなかったと思われる。しかるに明治藩閥政府を支配したのは、(殊に文教関係では)、いかにせん二流、三流の人たちであった。社会構造の急激な変化は、文明開化の名のもとに、唯物・功利の思想と利益社会的道徳をはびこらせ、精神の本末を失わせてしまった。それでも明治時代には、まだ以前から蓄積されたエネルギーがあった。大正、昭和に至れば、さらにみじめである。われわれが今日、日本の正しい姿を求めようとするなら、われわれは敗戦の原因を顧みなければならぬ。敗戦の原因を知るためには、われわれはさらに根源にさかのぼって、深く幕末明治の日本伝来の文化精神の覆没に目を向けねばならない。かかる意味で、幕末日本の文化精神は歴史の彼方に忘却されるべきものではなく、われわれの精神世界に、再びよみがえらせねばならないと私は思う。もちろんさきほど言及した諸点は、ほんの荒筋だけで、さらに詳しく説明しなければ誤解を招くおそれもあるが、ともあれ私はこのように思うのである。

最後に、時間がないので詳細を尽くせぬが、『講孟劄記』の成立事情につき、一言触れて置きたい。これは松陰が下田の挙に失敗し、故郷である萩の野山獄に投ぜられた折の著作である。獄中の

松陰は倦むことなく学問を続けており、安政三年に読破した書物は五百五冊と数えられているほどである。そしてその端然たる態度と親しみ深い人柄が、次第に同囚を感化し、ここでみなが一しょに勉強することになる。誰は俳句を、誰は書道をというぐあいにして、松陰は経書の講読を担当して、『孟子』の輪読を行なった。その折の講義録が有名な『講孟劄記』である。序文には、朝起きてから夜寝るまで「忽々（こつこつ）孜々（しし）としてかつ読みかつ抄書し、あるいは感じて泣き、あるいは喜びて踊り、自から止む事能わず云々」と書いてあるが、もってその情景を偲ぶことができよう。面白いことには、司獄、つまり刑務所長の福川という人が、松陰の見識と人柄に感服して一しょに聴講する。囚人を先生にして、所長が格子（こうし）の前の廊下にすわって講義を聞くとは、まさにほほえましい光景であるといえるが、これをもつても松陰の感化力がいかに大きかったかを察することができる。そしてまた講義の内容も、もとより字句の解釈にとどまらず、時事を談じ倫理哲学の問題に触れ、若々しい実学の精神が躍動しているのを行間に読み取ることができる。ではいまから、与えられた時間内に、この中の一章あるいは二章を、かわり番に朗読してもらい、私が所要の注釈やら感想をつけ加えてゆくことにしたい。（輪読箇所と注釈など省略）

小林秀雄先生のご講義 「現代の思想」

早稲田大学 教育学部四年 国 武 忠 彦 記

この一文は、小林秀雄先生のご講義を私が筆記して、早大の福島宏之君と東洋大の行武靖枝さんに清書してもらい、先生にご覧いただいたところ、ご多忙中にもかかわらず、ご懇切な訂正ご加筆を賜わり、特に本書に掲載することをご承諾くださったものであります。紙上をかりて編集者とともに先生に厚く御礼申し上げます。(小林先生がご加筆くださった箇所は、かなりたくさんあり、すべて旧かなづかいで書かれてありましたが、文章の統一をはかるために、先生のご了解をえて新かなづかいにさせていただきました)

小林秀雄先生の登壇を、約二百名の参加者のすべてが、今か今かと待ちわびた。私は小林先生の著書は何回となく親しみ、その文章に幾度となく心打たれてきたが、小林氏その人は一体どんな人なのだろうか。またお声はどんな格調を帯びているのだろうか。この合宿教室ではどんなことを話して下さるのだろうか。これほど強く人を待ちわびる気持ちを感じたのは、まことに稀有(けう)のことといってもけっしていい過ぎではないような気がする。それほど待ち遠しい講義であった。

ほどなく現われた小林先生は長身で瘦(や)せているが、その風ぼう、特にキラリと光った目の輝きには、しんのあるたくましさを感じられた。裸(はだか)になったらきつと全身骨張っているかも知れない。しかし小林さんの肉体は、頑(がん)健(けん)そうであり、また柔軟であるように見受けられた。六十年近い風雪に鍛えられ、苦悩を超克してしまったような感じ——一見したお姿は村夫子然としているが、昔の「さむらい」のようなきびしさとともに、自然と人生を求めて遍歴した歌人西行のような面も漂わせていた。また次の瞬間には小林さんのお姿は、ドストエフスキーの小説「悪霊(あくりょう)」の主人公スタヴローギンその人の姿ではないかという空想が湧いてきた。私はそれほど演壇に立った小林さんに見入ってしまった。

小林先生の初期の作品「様々なる意匠」などがもっている特徴が、ここに見た小林さんの姿と重なりあって思い出されてきた。演壇ではしばらくうつむいたまま黙っておられたが、次のように話し出された。

私のは、ほんの雑談です。こういう講演は私はあまり好かないから、みんな断わっています。この会も私は義理でお話しているわけで、自分のことをしゃべってやろうという積極的なものは何も持っていないのです。私も「諸君はみんなお若い」という年ごろになりました。私はいま五十九です。



代ごろですね。だから大事なんです。いまになって考えると「あのころが大事だったのだなあ」ということを痛感します。

私もだんだん年齢というようなものを考えるようになりました。だから私は「隠居」というようなことをこのごろ考えているのです。隠居という言葉だって、もう一べん考え直すといろいろ面白いことがあるのじゃないか、とこのごろよく考えますね。こういう言葉が外国にあるのかなあと思って、英語のとても達者な男に問うたところ「それはカントリー・セントルマン (country gentleman) だ」というのです。だけれども違うでしょうね。隠居というのは非常に東洋的なものじゃな

若いころは、自分の経験に照らして考えると、とても大事な時期です。だいたい私の発想は二十代に出来ています。私だけでなく偉い人のいろいろな仕事を見ても、だいたい二十代で発想ができています。それをあとになってから発展させたり、円熟させています。だから孔子が「三十にして立つ」といったのは本当でしょう。自分の素質を自覚すること、自覚して初めてその素質が形成される時期は、だいたい二十

いですか。隣りに隠居がいて威張っている。いつも叱(こ)言ばかりいっているが、非常に親しみを持たれている。みんなに馬鹿にされているが、なんかあると隠居のところへ聞きに行く。隠居という言葉には微妙なニュアンスがあるようです。孫子が「三十六計逃げるに如かず」といっていますが、これは戦いするとき敵に勝つ方法です。あれはいろいろやってみたけれども、どうにもしようがないから逃げるという意味ではないのです。「逃げるに如かず」というのです。そういう積極的な意味が隠居などという言葉にもあるのじゃないですか。支那の古い言葉に「陸沈」というのがあります。それは陸に沈むということ。海に沈むのなら誰だって沈めるのだが、陸に沈むのはむずかしいぞということです。隠居という言葉にもそのような意味があるに違いない。支那という国はああいう専制的な国家ですから、馬鹿な専制君主にそむいて、隠れた人が本当のことを考え、本当のことをしていたに違いないのです。陸に沈むといっても社会から逃げないのです。カントリイ(Country)に逃げるのではない。だからカントリー・セントルマンではないのです。社会の中に沈み、町の中に沈んでしま



うのです。そして横丁の隠居になるのです。馬鹿な世の中と充分親しく付き合うのです。だから横丁の隠居というものは馬鹿にされながらも尊敬されている意味合いもそこにありますね。

私が隠居のことを考えるようになったということは、年をとったということです。年をとることとものを考えることの間に関係があるのかなのか、そういうことを現代の思想は考えていませんね。「五十にして天命を知る」と孔子は言った。三十では知ることができないのです。「惑わず」ということは三十では駄目なんです、四十にならなければ。どうしてもそこに年というものの秘密があると孔子はいつているのでしょう。思想というものは、人間の考えというものは年齢に関係するのです。もしそれが本当ならば、私がいまや老境に達したならば老境に達した如く考えます。なにも私は青年のように考えない。諸君は青年だから青年らしく考える。だが老年らしく考えることは出来ないのだから、老年を馬鹿にすることは出来ない。今日、老人のくせに青年に媚びて物を考える人が大変多い。年をとったならば年をとらなければわからないようなことをどうして考えないのか。年齢と思想との間には密接な関係があるのなら、そこで思想問題を考えたらどうだろうかと私は考えるのです。このような考えが軽蔑されているのは何でしょうね。これを合理的思想というのです。二に二を足せば四になる。子供でも老人でも四になる。正しいことは青年にとっても老人にとっても正しいのです。それが真理です。だから合理的思想は年齢というものを考えないのです。こういう根本的な考えが現代にはあります。だから老人になっても若々しいことが褒（ほ）められ

る。それでは年をとった甲斐(かい)がないではないか。年をとればとるだけ立派な老人にどうしてならないのでしょうか。

小林秀雄先生の話しぶりはテキパキとしていた。話される言葉の速度が早く、内容がその後を追いかけるかのようであった。そのため、私たちも駈け出さなければならぬ。ただ駈け出すだけならば子供だって出来るが、私たちはそれを理解しなければならぬ。ただ理解するだけではふじゅうぶんである。味わわなければならぬし、感得しなければならぬ。大変つらいことを要求している講演である。私たちがいまの学生は、こういった講演は苦手なのだ。しかし小林氏はいう「私がむずかしいことをしゃべっているのではない。むずかしい実在そのものがしゃべっているのだ」と。私たちは相手がそのもの自体の言葉で語りかけてくるまで待つてることが出来ない。そういった忍耐の修練が出来ていないからだ。私たちが聞き慣れている講演は、聴取者が忍耐しなければならぬなどというものはなかった。講演者が聞き手のところまで降りてきて話してくれるものだった。だがこの講演者はいっかな降りてこない、またそうかといって、上がってこいともいわない。ただこの世の中には簡単に解釈することができない、むずかしい実在がある、というだけなのだ。私たちは、それに取り組んでいかなければならない。そこにはなかなか人に語りがたい喜びがあるんだ——小林先生の顔はそういつているようであった。

ついで小林先生はベルグソンの話を始められた。ベルグソンについて先生は「この人ほど人間の心と肉体の問題を深刻に扱った人はない」と前置きして、次のように続けられた。

心と肉体について私たちの常識はどのように考えていますか。諸君は肉体を持っていて。私というものは、非常に簡単に考えたと私の肉体です。私の肉体は後から突き飛ばされれば前にのめる、そのメカニク的な力に私の肉体は服従します。だが、外からくる私を突き飛ばす外的なメカニク的な原因のほかに、もう一つわたしという原因があって、私の肉体は運動します。そうすると、私の肉体は二つの違った原因があって、二つの違った運動をしていると私たちの常識は考えます。

次にこう考える。私の肉体は空間の一部に制限されて実在するのだけれども、たとえば私の視力は星まで見ることができ、その点、私の視力は私の肉体を越えています、空間的に。そう私たちは常識は考える。それでは時間的にはどうであろうか。私たちは時間的にこの肉体を越えているか、これもやっぱり越えています。確かに私の肉体はここに存在する。だけれども、私には私の記憶があるじゃないか。しかし過ぎ去った過去というものは現在存在しない。けれども私たちは過去の記憶というものを持っている。そこに時間的にも私の精神は私の現に在る肉体を越えている、と私たちの常識は考えます。

ところが科学はそうは考えません。視力は肉体を越えて星まで届くというが、そうじゃない。星

から光が来るのであって、それが目に届くのだ。それが脳中枢に伝わり、そこで意識が生じる。記憶だってそうじゃないか。子供のときのことまで私たちはまざまざと思い浮かべることが出来る。記憶というものは、一番微妙な肉体である脳髓の組織の中に、あたかも録音されるが如く録音されている。そんなら過去の知覚、記憶も、なんら私たちの肉体を越えたものではない。みんな肉体の内部で起こっている現象に過ぎないと科学は説明します。どうしてこう科学と常識は矛盾するのでしょうか。このことをベルグソンは非常に深く考えたのです。

なるほど肉体と精神の間には非常に密接な関係がある。それを科学者がだんだん調べて行くと、酒を飲めばすぐ酔い、クロロホルムを飲まされればすぐ眠ります、というふうにすぐ精神に影響することがわかる。そこで科学者は、人間の心の現象と肉体の現象は、完全に一致、照合していると仮定するのです。だから脳という物質の現象が明瞭になれば、それに随伴するところの心理の現象も明瞭になるはずだ、という確信を抱くのです。だから自由意志というものも、脳髓の組織がまだ明らかにならないところから起こる錯覚であるというわけです。

ベルグソンは次のような比喩(ゆ)を使っていつている。釘(くぎ)に外套(とう)がかけてある。そこには釘を抜けば外套は落ちるといふ関係がある。しかしだからといって釘と外套は平行しているか、一致するか。釘のあらゆる部分は外套のあらゆる部分に照合しているか、釘は外套の機能であるか、そうは結論することが出来ない。肉体と精神の関係もそれと同じだといふのです。酒を飲め

ば酔っぱらう。肉体がなくなれば精神もなくなる。そのように二つの関係は密接だが、私の精神のあらゆる点が、私の肉体のあらゆる点と平行している、一致しているという結論は出せないでしょう。実験の結果、一致するという結論を得たのなら承認もしよう。しかし誰も実験をしないではないか。それなのになぜ、肉体と精神とは全く平行したものであると仮定して仕事を進めているのかと聞くと、科学者は「仮定しなければ科学の仕事は進まないからそうしているのだ、なにも私は肉体と精神が絶対に一致したものであるなんて主張したことはない。科学は事実を観察し実験し測定する方法の上に立っている。そのためには一時的に精神と肉体は絶対に一致すると仮定しなければ、科学のメソッド（方法）は成り立たない。そしてそのメソッドは無制限に発展するものと考えている」という。

ところで、そのメソッドはどのような根拠に立ったメソッドなのであろうか。それが大事なことなのに、科学はそれを考えません。

ご承知のように近代科学は、ガリレオ、ケッペルなどの天文学から始まったものです。近代科学の目的はものを測定することにあります。これは非常に大事なことです。科学は古代からあったが、なぜとくに近代科学というようなものがいわれるようになったかという点、近代科学というのは、昔の人たちがやって来た広大な経験の世界を限定する事によって現われました。実にさまざまな人間の経験を合理的経験に限ったのです。つまり測定という方法に経験を絞ったのです。科学は測定

できない事実は、經驗的事実とは考えないということにした。ところが精神的事実というものは測定可能な事実ではない。自由という精神的な事実は測定を拒んでいます。自由と測定は矛盾した概念です。もし、精神の科学を考えなければならぬのなら、そのような測定を拒んでいる事実を、測定できる事実に置き換えてみるより他に道はない。すなわち精神的事実を物質的事実、脳髓的事実に置き換えてしまう。置き換えてから、こんどは両方に平行が存するという仮説を立てます。仮説を立てて仕事が始まってしまえば、出発点を反省することはもうやりません。精神を物質に置き換えたことは独断ではないか、ということについて科学は反省しません。それは哲学者が考えればよい事だといってすまします。だが、これは哲学者という専門家の専門的問題でしょうか。哲学を知らない常識人も反省さえすれば直面する問題ではないでしょうか。近代の科学は、經驗科学といえども、本当は測定科学と呼ばれるべきものです。測定可能な經驗的事実だけを選ぶ学問です。經驗的事実を測定的事実に置き換えてから出発した学問です。

ベルグソンは「物質と記憶」という著作で、心と肉体の関係を言語の記憶の現象の研究によって明らかにしようとした。これは、たいへん難解な研究で、心と身体とがどのような関係にあるかに関する彼の積極的な仮説は議論の多いところですが、脳髓の作用と記憶の作用との間には、厳密な平行関係がないということは、はっきり証明されたのです。私たちの常識の方が正しい。記憶現象は脳髓の組織の現象を越えるものである。私たちの率直な意識經驗の告げるところは正しいと

いうことになったのです。

ちょうどベルグソンが「物質と記憶」を書いたころ、フロイドが「夢判断」を書いた。これは最近の思想史でたいへん重要な事件といつていいのです。フロイドは、心身は平行するかどうかといった問題に直接ぶつつからなかつた。しかしひどい病人をたくさん扱ううちに、生理的な原因なんかで絶対に説明のしようのない精神病にたくさん出会った。そこで、彼は、従来の生理学を基にして精神病を扱う方法を率直に捨てたのです。精神病の患者は生理的原因なんかどこにもなくて、そういうものからは絶対に説明できない現象に悩んでいる。この事実を容認して、精神には精神的な原因があると仮定して仕事をやってみると、実際に効果があがって来たのである。ここから意識というものを精神と考えていた幻想が破れた。無意識という広大な精神の実在が現われた。精神病の原因が物的なものではなく、心的なものであるという発見は、心理的実在というものに関して、全く新しい立場でわれわれは考えてみなければならぬことを教えたのです。

最近ユングが逝去（せいきよ）した。ユングはフロイドの弟子ですが、私は彼の著作を愛読しているので、一つその話をします。彼は若いころから原始人の心理研究をした人ですが、次のようなことを書いています。ナイル河に娘が三人水汲みに行った。ところが真中にいた娘がワニに食われてしまった。すると土人は、それは河の神様の祟（たたり）だと考えた。ところがわれわれ文明人はそのような考え方を大変軽蔑する。私たちは自然の因果律を前提としてものを考えているからです。

因果律というものは、現代の一つの神聖なるドグマであるとユングはいつております。ある時代にはある種のドグマがある。そのドグマの中にはいつている人は、絶対にドグマを知らない。私たちが現代人は、真中の娘が食われたことを、どう説明するか。偶然だと答えるでしょう。それではそんな事件が起こらなかったことはどう説明するか。それも偶然と答えるでしょう。それでは、真中の娘が食われたことも偶然ならば、他の二人が食われなくても済んだということも偶然ではないか。結局、私たちには説明ができない。偶然だというようになことをいつたら土人は笑います。土人はそれが説明したいのです。だから、土人の方がわれわれ文明人よりも進んでいる、といつてはおかしいか、とユングは問います。

土人の説明は、ワニが真中の娘を食いたかった、だから食ったのだと説明する。実に明快な説明です。というのも私たちと前提が違うのです。土人は偶然の方を大事にするのです。だが現代の科学にとつては偶然ほどこいやなものはありません。諸君の常識にとつては、偶然は説明できないのですが、なぜ諸君は偶然といつて済ましているのか、諸君はそれはいまにわかるだろうと思つてゐる。この原因はあまりに複雑で、私たちの科学では、探求できないけれども、科学の立場では、いづれこれも探求できるはずのものと思つてゐる。偶然といふのは目下のところ、測定不可能な、測定するにはあまりに原因が複雑な事件でしょう。だから因果律といふものは偶然が何度生じても、揺らぎません。神様みたいな頭のいい人が現われれば偶然はないわけです。だから偶然といふものは私

たちの測定の無能力によるものです。そう信じているからこそ、どんなに多くの偶然（事故）にぶつかったても、どんなにたくさんさんの偶然が現われても私たちは驚かないで、それは偶然だといっているのです。偶然だということはこちらが頭が悪いから説明できないということに過ぎない。

ところで、土人は因果律を知らないのか。そんなことはない。知らなければ、土人だって道具すら発明することはできないでしょう。崖（がけ）にぶら下がっていて、手を離せば谷底に落ちるということを知っている。知らなければ一日も生きて行くことは出来ません。しかし、それはあんまり当たり前のことだから気にかけないだけです。だが偶然は当たり前のことではない。だから、それを説明したいのです。だからそれを説明するのに、彼らにとって最も自然で論理的な方法は、ワニが真中の娘を欲しがったに違いないという説明です。したがってワニは、どこそこの山に住む神様から命令を受けたに違いないと説明する。考え方は全く論理的です。ただ物を考える前提が私たちとは違うのです。彼らにとっては毎日起こるような事件は考えるに足りない。それよりも、たった一度起こった異常な事件だけが注意に値するのです。したがって説明を要するのです。これは面白い話です。歴史上で起こった事件は、ただ一回起こった全く特殊な事件です。この全く個人的な事件の、全く個人的である所以（ゆえん）を、科学はどんな方法によって証明出来ますか。

古代人はみんな太陽を拝（おが）んだ。これは人類のどこにもある信仰です。いまでも田舎にゆくと太陽を拝む人がいます。昔の人にとって太陽は聖なるものだったのです。ところが現代人と

つてはそうではない。太陽を神聖だと思うのは、それは迷信です。太陽はかくかくの物質で、核分裂を起こして熱を出している一つの物体であって、何の神聖な力も持っていない。神聖だというのはお前の感情なのだ、驚くのも感心するのも、みんなお前の感情なのだ、心なのだ。そういうものは、お前の感情を太陽に投影したのであって、太陽自体には感心するようなものは何もありません、という。しかし私たち現代人も日の出を美しいと思うでしょう。それは果たして私たちの主観に過ぎないのか。美しいと思う主観を太陽に投影しているのに過ぎないのか。実際に太陽が美しいのではないのか。これは、たいへんむずかしい問題ではないでしょうか。諸君はどう思うか。古代人は全く間違っていたと本当に思えるか。私はきつと太陽は美しいのだと思っている。私が美しさを発明しているのではないと思っています。太陽の美は、単に私の気まぐれなんかではないと考えています。あの美しさは太陽から来ているに違いありません。だけどそれはどっちですかね。これは今日でも非常な難問ではないですか。諸君は単にそう思ってその問題を考えないで根底にさかのぼらないでいるかもしれないが、そうした態度が現代の常識、思想というものです。

以上のことからわかるように、現代の現代風な思想というものには確たる根底はありません。歴史的という曖昧(あいまい)な根底があるだけです。学問的根底も、理性的根底もありません。ただ心理的根底があるといえるだけでしょう。今日、よくいわれるイデオロギーというものの、時代の生んだ観念の形態というもの、そういうものに流されてはいけません。流されることは考えることで

はない。

現代は物的な事実をたいへん尊重して、物的事実から精神的事実をも説明しようという大勢のうちにあります。それは時代風潮に過ぎないということを、はっきり考えなくてはいけない。ベルグソンもフロイドも、そうはっきり考えて将来の仕事の出口を考えた人なのです。物質の存在を仮定することが、精神の存在を仮定することより、正しいとか価値があるとかいう理由はどこにもない。世界の説明に物質の優位を認めるということには、時代の動きという理由があるに過ぎない。歴史的理由があると認識するのはよろしい。だが、この理由にとらわれて物を考えるのは、考えることではありませんまい。ある考え方が、歴史の動きによって自然に生じたと考えるのはよろしい。だが、そのある考え方のうちにあつて物を考えるということは間違いなのです。そのことをはっきり考えてください。

次から次へと移ってゆくお話に、全員水を打ったような静肅さのなかで聞き入った。先生の抑揚ある言葉と、その言葉のもつニュアンスは、一言一言深い響きとなって伝わった。嘆息ともつかず感懐ともつかぬ感激が講堂に満ちていたようであった。

先生は「どこまで行くかわからないから、この辺でとめよう。私はいつでも問題を出したいんです。私はそういう立ち場なんです。私は明治大学で十年ばかり教えていたことがあります、よく

質問時間というものをこしらえました。いろいろ質問をさせるのです。そして生徒が質問をしますと、どうして君はそういう質問をするのか、という話をしたのです。そうすると答えられない。うまく質問するのはなかなかむずかしいですよ。つまり問題がなければ質問しないわけです。問題の出し方が間違っていれば、質問をしたってしようがないわけです。たとえば『自分はどう生活したらいいでしょうか』と質問するようなのは、問題を出していない人でしょう。これは一人人に問うべきことであるのか、黙って自分で考えるべきことではないか。質問は承りますよ。しかしうまく質問をしてください」

これには、どっと笑いがわいた。しかし先生の言葉は、決してからかい半分のものでなく、たいへん重大なポイントを指摘されたことが、全員にピツタリときた。それは人生、学問に対する一つの重大な示唆であったからである。質疑応答は一時間あまりに及んだ。果たして先生が満足された質問であったかどうかは知るよしもないが、先生はその一つも無視されずに、手を取るようになつてお答えになった。

最初の質問は「先生はフロイドの話のところで、生理的なものはあまり精神に影響を与えないといわれましたが、实际生活の中で、全面的にそういうことがいえますのでしょうか」というもので

あった。そのお答えはおよそ次のようであった。

さっきお話したように、生理的なものは、精神と絶対に密接な関係があります。だから生理的な原因から説明することの出来る精神現象は、たくさんあるわけです。だがフロイドは、普通の心理ではなく、気狂いを扱った心理学者なのです。そういう異常な心理を扱い、解剖学的な事実や原因からはとても説明が出来ない症例に悩んだのです。たとえば生理的には全然異常のない健康な男が、どうしても「おれはガンだ」という妄想に苦しめられている。妄想だと自分で知りながら、どこから出て来るのかわからぬ妄想に、日夜実際に苦しむのです。それは生理的なものに違いはないと、あくまでも医者が生理にこだわっていたとき、彼はそれは全く精神的な原因であるに違いないという仮説の下で、その患者に当たっていった。これが、患者との言葉による、問答による精神分析の方法です。すると、そういう妄想は、やはり全く精神的な原因であることがわかり、ある観念の発見、理解によって患者は癒(なお)つたのです。ただ言葉によって患者は治療(ちゆ)したのです。精神病には、精神的、観念的な原因があるという新しいメンソードの成功によって、そこから人間の心は、意識と呼ばれているものとは全く違う実体であるということがわかって来た。

私たちは無意識界という大きな世界を背負っていて、意識というものはそのほんの一部が現実化したに過ぎない。だから魂というものは存在するのであるが、それは意識を越えたものだ、という

ことがはつきりした。この発見は、精神という研究対象に全く新しい視野を開いたことなのです。フロイドは、生理と心理との密接な関係を否定したのではないのです。精神的実在に対して、物的実在に対すると同じ方法をもって対しても無駄である。精神的実在は、今まで考えられて来たより深刻な事実であるということをいったのです。それが、大事なことである。フロイドの様々な新しい仮説ばかりを覚えて、この根本の精神の見方に関する革命を考えないのはいけないことだ、と私はいいたいのです。私たちは心という対象を、もう一べん新しい見方で見直さなければならぬ地点を彼は提出したのです。ここにフロイドの天才がある。フロイディズムの流行が、この天才が思想全体の上に果たした意味を忘れさせているということを、注意したかったです。

次の質問は本居宣長をめぐる問題であった。

「私はいま、江戸時代の思想を学んでいます。本居宣長などの国学者によって古事記、日本書紀を通じて、あらためて古代を認識し直してみようという動きが起った。しかし今日考えてみると、古事記、日本書紀などの持っている不合理な、納得のいかない点を、宣長その他の国学者が気づかなかつたはずはない。ところが、その点を批判せず、いわゆる「没批判」してしまい、それをそのまま信仰した。そこに変態、飛躍があるというような考え方が戦後の歴史書に共通してみられる考え方です。私はいまのお話で、物質の認識にのみ妥当しうる方法が、私たちの意識、精神、あ

るいは思想といったものまでも規制しようという過信の下に現代の思想は動いている、と理解したのですが、その点をもっと具体的に、わかりやすく説明していただきたい」

それに対し先生は、さっきと同じように懇切に教えてくださった。その大要は、

いままでの宣長を論じた学者たちの批判は、宣長の学問の方法の不徹底というところにあります。しかし、その不徹底というのは、現代の学問の方法からいっての不徹底なのです。彼は現代の学問の方法なんぞは意識していません。もっと違った、たとえばあの人の使っている「おおらか」といったようなこと、これは客観的というようなこととは違うのです。現代のいわゆる客観的というのは、科学の方法に規定された非常にはっきりした方法です。宣長の「おおらかにみる」という方法は、今日の科学の経験的方法とは違う。経験的方法に誤りがあったと見てはいけません。彼自身の方法であった。私の関心は、宣長が間違っていたか間違っていなかったか、と聞いていくら論じたって論じ尽くせそうにない、そんなところには問題の要点はない。ただ、宣長がやったことは、宣長がやったように考えることが大事である、それが歴史的態度だろう。宣長のやった仕事を、現代の方法でもって未熟であるとかなんとか、そんな生意気なことはいうまい。宣長はどういう心持ちでやったのか、「おおらかにみる」といったときに、どういうものを考えていたのか、そういうことを調べるほうがいいだろう。そうすべきだと思う。だからぼくはそれがしたいのです。

その結果、宣長は非常な矛盾に陥りました。だがあの人の生き方とか人生観においては、ちっとも矛盾とは感じられなかったのです。なぜかという¹と宣長はある信念に達した。それをあの人は非常に矛盾した形で述べなければならなかったのです。宣長の念願は、あの古事記というものをみんなに読ませたかったのでしょう、むずかしくて読めなかったから。古代のある日本人たちが、どうい²う感情をもって、あるいは思想をもって生きていたのか、ということ³を人々に伝えたかったのでしよう。それがため、無私な態度で古事記を調べ上げなければならなかった。ところが宣長は、そうするうちにだんだんと古代人の考え方にひかれていった。愛着をもっていったのです。もしも、こういう古代人の考え方で、この世の中を生きることが出来るならば、人間としては一番正しいのはあるまいか、あるいは健康なのではあるまいか。現代人みんなが考えていることのほうが、かえって間違っているのではあるまいか。あれほど健康な歌を発想しえた原始的な気持ちには、動かすことの出来ないものがあるのではなかるうか。そこへみんな戻った方がいいのではないか、と考え出したのです。そこから宣長の信念がだんだんと固まっていた。それは、あの人の愛情がつかんだ一つの悲劇なのです。古代人の悲劇なのです。それをあの人はだんだん信仰していった。あの人の仕事は三十年かけた古事記伝にあるのです。宣長の思想が本当に生きていた、どういう意味合い⁴である時代に生きたかということ、今日の考え方に照らして間違っているとか、間違っていないとかいうことは違っています。宣長の思想がほんとうに生きたかということ、どういう意味合

いのものであったのかを知ることのほうが大事なのではないですか。それは文学的な知り方かも知れないが、それはやはり歴史的な知り方でしょう。歴史は、ただ一回しか起こりません。二度と繰り返しません。宣長のやったことの先を、やろうとしたって誰も出来ることはありません。宣長のやったことは科学ではないのです。だから今日の科学の概念を捨てなければ、あの時代に人間がどういふふうに学問をしたのか、ということとはわからないわけです。私たちにとって、あの時代の人たちが、どういふふうに学問をして来たのかということがわかるだけでもいいじゃないですか。なぜこの人間が、いろいろやって来たことに、なぜすじを通そうとするのか、それが私には疑問なのです。人間がだんだん、一つのことによって一生懸命になって行って、ことにだんだん愛着を持ち信仰を持って死んでしまった人の仕事は、それは一つの学問ではあるけれども、一つの芸術品です。私たちはよく歴史的限界という言葉を使うでしょう。限界がなかったらどうしますか。その人を不朽たらしめているものは、その限界そのものだともいえるのです。その人から限界をとってごらん下さい、その人は何もできなかつたはずですよ。そういうふうには生きています。

こうしたお答えが一段落したとき、かさねて本居宣長の宗教性についての質問が出された。宗教には罪悪意識が伴うべきであるのに、宣長にはそれが無いといって物足りないというある学者の見解について、先生のお考えをききたいというものであった。先生は大要次のようにお話しされた。

私はそう考えません。宗教というようなものを、なぜそういうふうに罪悪意識を伴うものと考えるのでしょうか。私は宗教というものを、もっと広い意味に考えています。宗教と宗教のあるドグマとは違うのです。私の叔父は真宗でしたが、ぼくはその叔父を尊敬しています。小学校しか出ていないが、京都に出てきて本屋をはじめたのです。本願寺の前で仏書売り始めた。「門前の小僧習わぬ経を読む」で仏教が好きになった。それで死ぬときには真宗関係の全集である「真宗聖典」を刊行して死にました。非常な信仰をもっていたが、しかしいわゆる罪悪意識だとかそういうむずかしいことはなんにも知らない。議論もしない、人に教えを説くこともない、自慢したこともない。ごく平凡な愉快な本屋のおやじでした。罪悪感なんか一つもなくて、とても愉快にしかも深い信仰ができる見本のような人でした。

だから宜長に罪悪感がなかったから、彼の宗教は不徹底だったなんというのは、俗論だと私は思う。それは人間を知らないということです。宗教は人間的体験なのです。その人その人の信じ方がある。一般的な教義から、この体験を解してはならないのです。だけれども、これは私の考えですから、参考聞いてくださればいい。

ぼくは、昔は文学なんかも割りに大切に思っていた。割りにです。文学のために死のうなんていう熱情は持たなかったが、とにかくいまよりも大切に思っていた。けれども、だんだん経験を重ね

てみると、文学をそんなに大切には思わなくなった。私は昔から指導的理論家などというものを信じていなかったし、私自身も、そんなものを持ったことはない。だけれども、いまは、そういうことを思っています。それから、このごろは、黙っている人を尊敬するようになってきたのです。黙っている人が、しゃべっているやつよりも利巧じゃないかと考えるようになった。知らない人にどんなにえらい人があるか、ということも考えるようになった。ほんとうに信仰の深い人も黙っているでしょう。

またこれも私の意見を参考として聞いてください。江戸の学者、いまの言葉でいうインテリは、大体武士です。身分制度が非常にはっきりしていた時代の武士は碌(ろく)をもらって、なにもすることがないのですよ。武士は食わしてもらっている階級なんです。農民は激しく働いている。だから激しく働いている農民は責任がない。武士は碌をもらっているから、農民、町人を指導する責任がある。だから武士というのはインテリなんだ、という思想になるし、インテリというのは責任を持った階級、特権階級なんです。もしこの責任を果たすのがいやなら、百姓になれば、というわけです。それで、その責任とは、学問をする責任なのです。人生をいかに生くべきかということや他人に教えたり、自分で体得する責任があるわけです。これを免れることはできない。それが山鹿素行などが説いた武士の身分論です。

いまのインテリの態度とはたいへん違うのです。学問をするのは自己の社会的責任だという考え

は、今日なくなってしまうでしょう。学問と道徳とが離れてしまった。それでいいのでしょうか。山鹿素行の思想は古くさい思想でしょうか。これも諸君考えてください。

私は現代の教育についても、人間が出ることが第一だと思っています。どこに現われてもいい。そういう人が現われて来なくては駄目だと思う。なにも日教組問題だけが教育問題じゃない。ああいう団体的問題は、いずれ片づくところへ片づくでしょう。そんな問題が片づいても、教育者個人の問題は片づきはしませぬ。問題はとどのつまり、りっぱな教師が現われるか現われないかにかかっている。私は教師もしたが、教育者の素質に欠けているかと思っっているから教師になれない。

いろいろな人にはいろいろな素質があります。教師としての素質を持っている人は、教師になっ出てくるでしょう。人間は素質というものを反省しなければなりません。これはただ合理的に物を片づけるという事では出来ない問題です。教育の組織問題は合理的に解決出来るでしょう。自己反省は合理的方法では駄目でしょう。

小林先生のお話は、伊藤仁斎が開いていた京都の塾のありさま、また荻生徂徠（おぎせいそくらい）のことなど、いろいろな面に及んでいったが、最後に国文研会員から「民主主義というものが日本の救いになるものかどうか」という質問が出された。これに対し先生は大要次のように答えられた。

民主主義の政治制度という具体的なものを考えることが必要です。民主主義的思想というように曖昧なものを考えてはいけません。民主主義的な制度というものは、封建主義的な制度では、うまくいかないということで、人々が努力して作り上げた具体的な歴史的なものである。現に私たちはそのなかで生活を営んでいる。問題は現実的な運用にある。政治技術にある。日本の救いになるかならぬかは、その運用技術を信ずるか信じないかの問題になるでしょう。

科学者が、新しい仮説を証明するために実験することはよい。しかし、政治家が、新しい仮説の証明をしようとすれば、社会を実験台としなければならぬ。これが革命である。日本は革命を必要とするほど未開国であるかどうかを、考えてくださればよい。

なかなかきびしいご解答であった。すっきり物をいわれる小林先生の真面目に、まのあたり接した思いがした。そして四時間近いあいだ、小林先生とともにいることの出来たこの講義の時間が、いつまでも続いたらと思ったのは、僕一人ではなかったと思う。限りなくうれしい時間であった。それはきっと生涯消え失せることのない思い出となることであろう。

”合宿教室”運営の焦点

——班別討論と夜の検討会——

班別討論と夜の検討会

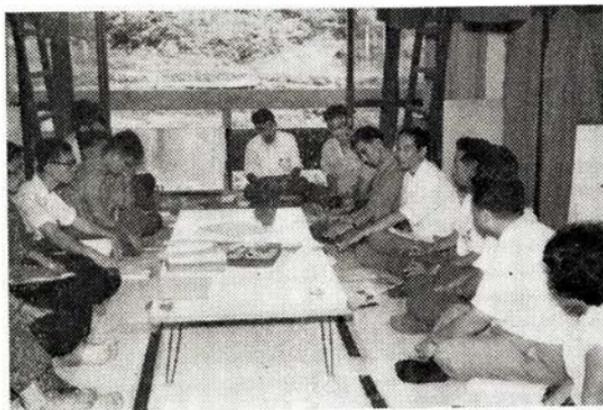
この合宿教室の主要な行事には、前項に記載した各講義のほかに「班別討論」と深夜の「検討会」がある。

「班別討論」の内容は、本書の前々篇「国民同胞感の探求」に詳しく説明してあるので、ここでは割愛するが、それは参加者ひとりひとりの心が、大きく移り変わっていく大切な場である。十、六名の班員が、いま聞いたばかりの講義について所感を述べ合い、あるいはお互いの人生観を語り合う場でもある。

しかし参加者たちは、日ごろ学園で安易な交友態度を自分の身につけてしまっているので、ここでの友の言葉にも、なかなか素直に感応することができない。すなわち人は人、自分は自分、というような隔たりのある立ち場を固執しがちである。これに対して、班長や世話役の任務は、そのかたくなな気持ちを解きほぐすことである。人間が本来もっている素直な心情を引き出してやらなくてはならない。自分が一つのこと固執していることをその学生自身が気づいているならば、それはさほどむずかしくはない。ところが、そういう学生は、自分は自分なりに胸襟(きん)を開いているつもりでいるから、事は一層面倒なことになる。

またイデオロギー的な立ち場に立っている学生も、イデオロギーにとらわれなくてもものを考えるように助言してやっても、自分がこの合宿に進んで来ていることは、とりもなおさず他人の話に身を入れて聞くつもりでいる証明ではないか、と反問してくる。しかし、そのようにいくら強調してみても、その学生が他人の話聞く態度そのものは、少しも開かれてこないことがある。それはすでに自分のもっている思考法のわくで、自分をしばっていることになかなか気づかないからである。したがって、いま聞いたばかりの講義について討論しても、講師たちの講義の背景にある深い人生体験を、討論の対象にはなかなかしようとしめない。逆に講師の話の中のロジックの末端だけを話題にしてしまう。学生たちは、討論の場を無意識的にそういう傾向にもってってしまう。その傾向は習慣的になっていくのかもしれない。

こういう傾向に陥っていくのを、班長や世話役が、お人よしに黙って見すごしているくらいなら、なにもこんなに苦労して合宿を催す意味はない。そのような討論の場は、学園の中に、四六時中いくらでもころがっているからである。班長や世話人たちは、そうした発言に討論の場を放任しておくよりも、班員



のだからでもいいから、真実のこもった体験的な言葉が出されることが必要だと考える。そこで他の学生の発言を促したり、自分でそのことを指摘したりする。そうすると、いい気になってしゃべりまくっていた学生は、とたんに、その話題が転換された意味がわからないで、その班長や世話人の態度は高圧的だと即断してしまう。そうすると班員の間には不満が起こり、その不満は班長たちに対する反発という形をとってくる。そうなると、班の運営はうまく展開しなくなってしまう。班長や世話人になる人たちは、つね日ごろからこのことをじゅうぶん理解して、相手の心の動きに敏感に対応する修練を積んでいなければならないから、その任務はなかなかもって簡単なものではない。

またいまの学生たちは、自分のいいたいことはじゅうぶんに発言する傾向をもっており、自分の心境をどしどし発表するのは、まことによいのだが、他人の話や、先生たちの講義を聞いて、それと自分の考えとを、すぐ対等の立ち場において比較するくせがある。単なる知識的な講義、論理的な追求だけの話や講義に対してなら、その聞く態度や比較の態度は、さほどにポロを出さないで済む。ところが、この合宿が目ざしているような、人間性そのものと取り組む場になると、このような学生諸君の態度は、勝手が違った戸惑いを見せる。というのは、いつもやり慣れた対等の立ち場における比較のくせが先走ってしまいうから、人生経験の藎(うん)蓄を傾けて話してくださる小林秀雄さんや木内信胤さんのお話に対しても、学生たちは「あの人のいっていることは、こうだ、ああ

だ」と結論づけてみなくては気が済まない。そしてよくわかりもしないことを、自分なりにわかったというところを持ってしまおう。割り切れないものを割り切ってしまう、またそのように割り切るのが、学問を学ぶ態度だと決めてかかっている。だから班長や世話人は、こうした学生たちに、その人生态度の軽薄さを悟らせなければならない。これもまた、たいへんむずかしい仕事である。それは話し合いや助言だけで効果があげられるほど簡単なものではない。だが、それに取り組み、さまざまに心を砕きながら、対処してゆかなければならないのが、この場合の班長や世話人である。

こうした意義を持っている班別討論も、ときに怒気横行、ときに和気あいあい、まことに「荒るるか」と見ればなぎゆく波」の様相をくりひろげて、合宿の日々を重さねていく。班員も班長も世話人も、クタクタに疲れ果ててしまうが、お互いの必死の努力によって、やがて共感共鳴の世界、一心同体の信楽（しんぎょう）を味わうことができる。すべての班が同じように成功するとはいえない難いが、時代の断層を乗り越え、イデオロギー以上に尊い精神交流の場のあることを、この世の実在として発見してくれたときは、班長も世話人も、連日の疲れが一举に吹っ飛んでしまい、班員たちも明るい面を輝やかせて、この合宿に参加したことを、いまさらのように喜び合ってくれる。

こういうわけで、この合宿教室のある限り、「班別討論」の存在意義が永続し、また参加者諸君も喜怒哀楽の泉としての班別討論の場を、長く合宿の思い出として記憶に残していつてくれるもの

と思う。

こうした班別討論は、毎日一回から二回でいど持たれたが、参加者が就寝したあと、班長や世話人（いずれも国文研会員）は、大教協の先生たちとともに、その日一日の各班の様子を持ち寄り、全員でその検討に当たった。夜の「検討会」というのがこれである。

したがって班別討論を、もしこの合宿教室の「心臓」というならば、夜の検討会は「血管」の役目を果たしており、この両者が両々相まって運営されていくところに、この合宿教室の一つの大きな特徴があった。すなわち各班の班長や世話人は、十五、六名の各班員たちについて、ひとりひとりの心の動き、思考の方向などを、できうる限りの誠心を注いで指導するが、その一日の結果を検討会に報告して相互に隔意ない批評を交換し合うのである。

大教協の先生方も、おもいおもいに各班の班別討論に出席されておられるので、班長や世話人たちのよき助言者となり、適切な忠言を寄せてくださる。この検討会は毎夜午後十一時前後から始められ、午前二時近くまで続けられた。大教協の先生方の中でも熊本大―水野教授、津下助教授、神戸大―黒岩助教授、長崎大―末吉教授、植木先生、長崎短大―野口教授は毎夜最後まで熱心に同席された。

またこの合宿運営を総合的に研究させてほしい、という立ち場で参加しておられる防衛・教育・

思想ほか社会各方面の人たち（会友）にも、この検討会に同席してもらって、合宿運営を充実させるために協力していただいた。

なおこの夜の検討会では、各班の班長と世話人がそれぞれの班の問題点、また各班が前日と比べてのていど盛り上がりがあるか、あるいは合宿全体がどのように動いているかについて発言し、これを中心に質疑、検討が行なわれ、各人から助言や抱負が活発に述べられた。

以下は第二日目と第三日目の検討会における列席者の発言から要約したものである。これによって「検討会」の内容とともに各班の「班別討論」のもようをあわせてご紹介できると思う。

第二日目の検討会（午後十一時十分開会）

司会者（国文研） 各班の班長から報告していただきますが、きのうと同じように関連事項は自由に発言していただいて、スピーカーに実のある検討会をしたいと思えます。

徳永（国文研） 私の班は昼の班別討論で、木内先生のお話に関連して活発な討論が展開された。たとえば、木内先生の話には資本主義的な先入観があるのではないかとか、国際性とはどうということなのかとかが中心で

した。その後花田先生のお話を聞いたあとでは、本の読み方について、文字を読むということよりも文字や文章にこもっている作者の心を読み取るところに読書の意味があるのではないか、という意見も出た。みんなが単なる知識や専門的な知識を求め合うよりも、もっと深く考え合うのがほんとうじゃないかというような態度になって来ている。ただ、講師の先生のお話は、マルクスの心情すら否定するものが多かったが、これは右翼的傾向を感じさせる、という発言があった。その学生は、マルクスの人間性をも否定するような話し方は、かえっていけないのではないだろうかという意味でいつていたようです。そのことについてはじっくりぶんわれわれも考えてみる必要があるような気がします。これは学生のきき方が悪いというだけでは解決しないことであって、マルクスについての批判には、学生たちが敏感すぎるほど神経をとがらせている傾向が見受けられるからです。

小柳(国文研) 私の班でも昼の班別討論のとき、やはり木内先生の話はあまり楽天的すぎるような感じがしたとか、資本主義に乗っかりすぎているようで、一体あれでいいのだろうか、というような話が出た。楽天的すぎるという批判は、かなり真剣な発言で、ぼくたちの周囲にはいろいろ危機的な要素がはらまれているのに、もう少しそれにピントを合わせてぼくたちの気持ちを励ますような講義がほしかった、というような意見でした。その学生は、木内先生はその点をどう考えていらっしやるのか、もっと突っ込んで聞きたかったが、聞いてもおそらく簡単にいなされそうな気がして聞けなかった、とっています。

また夜の班別討論では、講孟余話の中の大学の序にある「修身齊家治国平天下」という言葉が問題にな

り、それを自分たち学生としてどのように受けとめていったらよいかという点が話題となった。天野貞祐氏の「道理の感覚」を読んだ学生が「あれは道理の感覚だ」というようなことをいったり、いろいろな話が出たが、みんな家族制度の問題とか、家というのはその時代といまとは違うのだとか、そういう空回りの議論がだんだん激しくなった。そこで、私が「みんな一人一人には家があるはずだ、自分の家庭生活というものをどういうように考えているのか」と質問したら、そこでしばらく考えこんでしまった。それからもう一つ、やはり木内先生のお話とも関連するが、みんなの気持ちは、東西両陣営のどっちが正しいかということ、やはり自分には判断力がじゅうぶないので結局よくわからない、東側には東側の理屈もあろうし、西側には西側の理屈があろう、というようないい加減な受け取り方をしているものが、班の中の三分の一はおると思う。両方にいい分はあるにしても、それを傍観的にながめることは絶対にいけない、という意見が出されてから、突っ込んだ議論がいろいろ出て来ている。その点でもっと合宿全体に対しても傍観的な立ち場ではなくて、自分のハダでじかに感じるような生活を、いまから送ろうじゃないかということでは、みんなの意見は一致してきている。

加藤(善)(国文研) 班のふんい気が盛り上がらないので、昼の班別討論では、私の方から「学問と生活」ということについて、各人の体験的な感想を述べてもらいたいという問題を出してみました。すると、こういう発言が出た。「自分は資本主義、社会主義に関心がないことはないが、むしろ自分自身の日常生活を非常に耐えられない思いで暮らしてきた」と深刻な表情で話し出したものがいた。これが端緒(ちよ)になって、

自分が苦しんだことや感激したことなど、体験的な発言が出て、自然に胸襟を開いて話し合うようなふんい気になっていった。また聖徳太子の「不請（ふじょう）の友」という言葉の説明もあり、昼の班別討論は非常によかったと思う。

夜は講孟余話の序説をもう一べん全員で読み返えし、国をよくするということはどういうことか、君とか国とかいうことはどういうことなのか、君というのは天皇を指すのか藩主を指すのかといった問題から、福沢諭吉の「学問のすすめ」の中にある独立の精神ということも話題になり、運命共同体ということは具体的には一体どういうことなのだ、という発言や、親子、家庭などの話が出て班の気持ちは盛り上がりつつある。しかしまだ気になるのは、どこまで一体突っ込んで行けるだろうかということでした。

宝辺（国文研） どこまで突っ込めるかというのは、どういう意味ですか。

加藤（善）（国文研） 学生自身が人生問題に対して真剣に取り組んでいく態度が、どうしたらもっと強く生まれて来るだろうかということでした。

川井（国文研、大教協） 夜の班別討論は私が全体講義をしたあとなのでやりにくかったのですが、思い切った話のし方をくぐり、さしでこういうふうに話をしたのです。ある学生から「この合宿では体験的に知るところということが大事だとよくいわれるが、それは一体どういうことなのか」という質問が出て、それがテーマの

中心になった。それで、ほとんどの班員がかなり突っ込んだ自分たちの経験を話し合った。

山田(国文研) 私の班の班別討論は非常に知的な論議に流れがちなのですが、しだいに「学問するための志」というところに近寄って来るように、いま一生懸命に努力しています。参加二回目のある学生が「この合宿に来ると、自分がいままで習ったことが全部否定されるような感じがしてたいへんさびしい」と述懐していた。それを聞いたときは、私もちょっと、いじらしい感じがしましたが、いまはもう一度立ち上がって勉強しようという気持ちを取り戻しているようです。

坪井(国文研) 木内先生のお話をめぐって討論したが、全体として講師の人物評価論みたいなものが班別討論の中心になってしまって、班長としては意に満たなかった。講義内容についても、非常に透徹した予言を聞かされて、心酔したふうで「自分は一体どうするのだ」ということが、どこかへいつてしまったような空気があった。総合的にいって他人の言葉の受け売りというかこうでやりとりしている傾向がある。「自分の言葉で話をしなければならぬ、自分の体験から離れてものをいってはダメだ」と注意した。的確な言葉で、自分の意志を相手に伝えることの出来ないもどかしさをみんな感じてきている。

中田(会友) 私が同席した班では、内気な人の発言が見られなかったように思う。内気な人は自分を強く主張しようとするのですが、なかなか適切な言葉が見つからないようだ。だからこの班の討論は和気藹々(あい

あい)という状況ではあったものの、その中でなにか苦しんでいるように見られる人が一人二人いた感じがありました。

宝辺(国文研) 木内先生のお話については、やはり消化難という面が見受けられます。ただ「非常に驚いた、こんなお話を聞いたのは初めてで、これから一生懸命に考え直そうと思う」という素朴(ぼく)な感想が高校生から出された。こういった素朴な感想が、実際のところ多くの班員の偽らない感想ではないかと思う。中に一人こういう受け止め方をしたのがいました。それは研究方法論のところでも「総合的直観」とおっしゃった言葉が耳に残っている、という発言でした。また二人ほど木内先生のとらわれない立ち場が印象に残るといって、あれだけの論を展開されたその方法論について、非常に興味をもって討論していた。

しかし夜の討論では、講孟余話をこの合宿で輪説にとりあげた意味がなかなかわからず、積極的な感想が出なかった。松陰の言葉が深く心にとまった、ということにはならなかったようです。

黒岩(大教協) 川井先生の講義の前段はじつにすばらしかった。しかし後段で論語の言葉を出されたが、論語よりもっと日本人として出すべきものがあるのではないかと思った。たとえば本居宣長の「玉鉾(たまぼこ)百首」などのほうが適当ではないかな。吉田松陰をあのままポツと出したら、向こう側を向いている若い人たちは、吉田松陰という言葉だけでどういうように受け取るかといったようなことを感じたのです。

ある右翼の団体の人ですが、私がこの合宿に来るといったら、国文研の合宿へはゆくなと止められたので

す。「あなたはもうちょっと大きくやるべきだ」とその人たちがいうわけです。しかし、私は「なにをいうか」といって、「国文研ほどはつきりいってすばらしいものはないと思う。なぜならば、一方だけに向ききりになっている人たちに正しい方向を知らせようとしている、それが同胞感の探求なのだから」といってここに来たのです。

司会者(国文研) 右のほうで「行くな」というのは、われわれが左だからという意味ですか。

黒岩(大教協) そうでしょうね。左の人たちはあなた方を右だということです。だから、右左から叩かれ出したからこれはほんものだと思います。(笑) だから、右翼だけからもち上げられたのではウソだ、また左からだけでもち上げられてもウソだと思います。小林秀雄さんとか木内先生というような人たちが来てくれるこの会はすばらしい存在だと思う。

岡本(国文研) 私の班はさいわい、中学と高校の先生方が班員として参加しておられ、非常に優秀な方たちです。その先生方が中心になってよくやってくれております。班のふんい気も討論内容もきのうよりはきょうの午前中、午前中よりは午後というようによく来て、特別にこの人がどうだというようなことありません。ほとんど全員が発言しています。

昼の班別討論で、哲学専攻の学生から「哲学をやめよう」と思っていたが、この合宿に参加してお話を聞いて

いるうちに、もう一度哲学をやって見ようという気になり明るいものを感じた、それで非常に嬉しかった」という話が出ました。昼の班別討論は主としてきのうからの講義を中心とした討論ですが、昨年も参加した女子学生が「木内先生はきょうのお話で、精神文化というものが最後にはまた復活して来る。それだから歴史と哲学が非常に重要な役割りを占めて来る、というような結論を出されたが、昨年のお話にはこういったものはなかったように思う」と発言した。それが契機となって、自然科学と精神科学との違いについて活発な討論が進められた。

夜の討論では「吉田松陰が講孟余話を書き残したということ、私ははじめて聞いた」とか「松陰という人は学校の歴史課程で詳しく教わっていなかったので知らなかった」という発言などもあったが、古典を研究させるには、現代の学生がそれを生かすことが出来るように指導していかなければいけないのではないかと思った。しかし古典を再認識して、日本人としてのあり方をもっと深く掘り下げていくべきだということ、「日本人」というような言葉が、夜の討論には自発的に出て来たことは、やはり一つの前進だと思えます。

加藤(敏)(国文研) 私の班はきのうもちょっと報告しましたが、非常に進んでいるグループと、そうでないグループとに分かれてしまったような感じを受けます。それで午後の班別討論の最後に、この班が進んだグループと低いグループに分かれてしまったのでは、班生活は意味がなくなってしまうのだから、夜の班別討論までに君たちで相談して共通のテーマになる根本的な問題を決めておいてくれ、とおきました。学生たちが相談して出したテーマは「学生生活と学問」、「人生と学問」というテーマと「愛国心と天皇制」とい

うテーマでした。そして前者については、相当体験的な言葉が各人から出て来て、ほとんど全員の発言があった。それらの発言を聞いていると、ある学生がいった発言を、ほかの学生が出来るだけ理解してやろうという努力がだんだんと見られて来た。それで自分のもっている知識とか、学校差とか年齢差とかいうものにこだわりなく、まったく平等な気持ちで、自分の偽わらない生活経験を出し合っていたようです。次の「愛国心と天皇制」についても、同じような態度で討論が続けられていった。そこであすの日程に組まれている班別輪読については、ぜひじゅうぶんな時間をつくってもらいたい、という意見が全部から出ています。

植木(大教協) 私が出かけていった班は、あまりにも彼ら自身から離れすぎた問題がとりあげられ、論じ合っているような気がしたのです。もう少し具体的に、自分たちの身近かなものから考えさしていったらどうかと感じました。すこし次元が高すぎはしないだろうかという気がしました。

小柳(国文研) あのとき植木先生に御助言いただいたのでとても助かりました。あれでずいぶん空気が変わって来ました。

小田村(国文研) 合宿運営の全体に関連して、みなさんの研究課題にしていきたいことがあります。それは班別討論の運営の仕方について、その方向を当初から整えてゆく必要がありはしないか、ということです。おそらく来年からということになるでしょうが、まず第一に、第一回目の班別討論を開始するに当たっ

て、いかにすれば班別討論を最高度に能率よく運営出来るかについて、参加者全部に説明すべきではないかと思う。その要点としては、日常自分自身の腹にしまい込んでいた人間として苦しかったことをいい合おうじゃないか、というようなところから始めてもいいかも知れない。苦しかったことがなければ、とてもうれしかったことでもいい。とにかく直接自分が痛感し、体験したことをいってもらおうようにする。そうすると、なにもいわないで黙り込んでいる人がきつと出てくる。そういうときにみんなでその人に発言を求め、もちろん強要してはいけないが、なにも発言しないということは、その人の心組みや気持ちがある人たちにわからないわけですから、全体の意志疎通のために、また団体生活の融合のためにそれを求めていけば、きつとその要望にこたえてくれると思う。貴重な時間ではあっても、どうしても発言しない人には、みんなでも十分でも待つてあげてもいいと思う。率先して発言する人よりも、なかなかものをいい出さない人のほうが、深い考え方であったり、たくさんの疑問を持つたりしていることが多いからです。もしこうしたやり方が順調にいけば最初の班別討論で、討論の方向と内容が確立していくのではなからうかと思うのですが。そして班員同士がお互いに許し合える限度でスタートし、それからいろいろの討論をはじめようとしたらどうでしょうか。

岡本(国文研) これは理科系統の学生ですが「国民同胞感の探求」を読んで、それが合宿へ来る機縁になったという学生がいました。

黒岩(大教協) 「国民同胞感の探求」を読んで、ずい分もやもやしたものが解明されたということを開きますから、国文研の方々はほんとうに自信をもってやられていいのじゃないか。

関根(国文研) あすはちようど終戦記念日なので、終戦のご詔勅などいまの学生たちは知らないだろうから、みんなに読んで聞かせて上げたらどうでしょうか。

小田村(国文研) 終戦のときの天皇のことを話すことと、詔勅を読んで聞かせるということとは一応別問題であるように思われます。あのご詔勅は、いつの時代にか将来の日本国民がそれを読んで心を打たれる時期が来ると思いますが、しかしいまの学生の生い立ちと環境を考えれば、詔勅を読むことには気分的な抵抗だけが先立ちましょう。

黒岩(大教協) 私はいまのご提案を聞いて、ご詔勅を印刷して配布していいじゃないかと思う。「きみたちはこういうご詔勅をよく知らないだろう。八月十五日の終戦に当たってこういうご詔勅が出たのだ」ということで、資料としておやりになっても……。吉田松陰の文献も配っておられるのだから、知らせる意味ではないと思う。

小柳(国文研) 終戦のことをみんなでのぶことは大事なことですけれども、その気持ちがこの合宿の場には

んとうに生まれてくればいいのだが、まだそこまでいっていないと思います。

津下(大教協) 天皇については、みんなのレベルが非常に低いようですね。

岡本(国文研) いまのご詔勅の問題ですが、それをあす持ち出すことは、相当な決意、冒険的に近い決意をもってやるというなら、やりようはあると思う。それで合宿のふんい気が一つの中心を得て盛り上がる一面も出て来るかも知れませんが、同時に脱落していくものもかなり出て来やしないでしょうか。それを覚悟した上でやるのなら別ですが、合宿の運営面で逆効果にならないければよいと思います。

小田村(国文研) われわれは敗戦の具体的な意味を痛切に考えて、敗戦による国家的な損失をいつの日にか全国民が冷静に自覚しなければならぬ。その意味では、敗戦の日を国家的な雪辱の日として確認する話をしたり、または慰霊祭的な時間を設けて黙禱でもささげるかして、敗戦の民族的な痛苦をいまの時代によみがえらすことができるならば、ご詔勅を読んで当時の天皇のお心をしのぶことは意義があるが、理解しかねる気持ちでいる学生たちに読んで聞かせるだけでは、きわめて無責任なことになりはしないかという気がします。そこで、黒岩先生がおっしゃったように資料として渡す問題を検討しなければならぬのですが、ご詔勅を読んで、私ども自身が敗戦の日の思いをよみがえらしながら、その気持ちを参加者に伝えることが出来ればいいが、残念ながら相手の気持ちを考えると相当困難だと思います。

津下(大教協) ご詔勅問題について自信がないというのに、ただそれを渡したり、読んで聞かせたりすることは無理かも知れませんね。

小田村(国文研) 資料として渡してもおそらくいまの学生はほとんど読めないし、また読む気がしないというものもあると思う。だから渡す以上は声を出して読み方を教えてやらなければならないでしょう。そうすると、その文章の意味からその時代の国際情勢まで説明する必要が出て、相当の時間をかけなければ徹底を期すことはむずかしい。ちょっと時間をさいて黙禱したり、ご詔勅を奉読したりというわけにはいかないでしょう。それで結論としてはたいへん恐縮ですが、こういうことにさせてくださいませんか。せっかく関根さんからいい意見が出されたのですが、学生たちとともに奉読することは、来たるべき時代まで待ちたい、しかし私たちは、その終戦のご詔勅を拝したときに心から泣いた経験を持っている。いまは私たちだけから奉読するに留どめることも、大きな意味があると思います。つまり私たちだけでいまの若い人の分まで心にこめて、ご詔勅を思い返さなければならぬほど「時代の断層」が出来ていることを、このさいわれわれ自身の心に痛切に残したいと思います。いまの人たちといっしょにそれができないという国民的悲劇が、ここに確認されるわけですから、この討論が出たことの意義をお互いの心に残さなければならないと思います。いかがでしょうか。そういうことにさせてください。

津下(大教協) あと二日みなさんと行動をとることを楽しみにしていましたが、急用ができあす朝ここを出発します。熊大からきた学生は、白紙の状態で来たのがほとんどですから、中には反発したり、言葉を変すようなものもいるかと思いますが、それでも、みんな熱心に参加したいという希望で来た人たちです。私のほうの学校を卒業して就職している人たちも「あの合宿へ行ってほんとうにわかって来た」といって、喜んでいきます。若い人たちですからうまく表現出来ずに反対な表現をしてお手数をわずらわすようなものもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

司会者(国文研) 最終日の日程については、いろいろ検討すべきものが残っていますが、だいぶ時間もたち、あすの行動に差しつかえることになりそうですから、一応検討会はこれで終わります。(午前二時)

第三日目の検討会(午後十一時十分開会)

司会者(国文研) コンバも終わって、みんな静かに就寝しようとしているようですが、あと一日を最高度に盛り上げるためにいろいろご助言などいただきたいと思えます。一班二、三分でいどの時間内で各班の様子をおうかがいしたい。

吉田(国文研、大教協) 私のところはとげとげしい対立のようなものは全然解消しています。ただ、やっぱり

まだ上わすべりの感じがあります。しかしみんな来年もう一度来て一しょにやりたい、という気持ちになっているようです。

個人的に一人どうも全体に溶け込んでやって行こうという気持ちのないのがおり、一人だけ取り残された感じでした。

小柳(国文研) 私の班は愛国心とか、戦争の問題などが出て、午後の班別討論のとき、みんなが発言したため、蜂(はち)の巣を突ついたような状態になった。みんな隣り同士で話し出すし、司会者が取捨つかないということになった。それでこう活発になってくればよくなるなあと思ったのですが、討論の時間が切れて中絶の形になった。ところが、さきほどあんなに話したがっていたものが、もう次のコンバの時間になると、全部ストップしてしまい「議論なんてよそうや」というようなふんい気に戻ってしまう。このままでは、せっかくな一枚皮がはがれかかったところで、またもとに、癒(ゆ)着(つ)けてしまっておそれがあります。

いまのところ正直に言って、こうすればいいようぶという自信がありません。

川井(国文研、大教協) 合宿の方針をよく検討し直す必要があるように思う。つまり、考え方、表現の仕方に慣れないものを無理に引きずって来て、文句なしにやり込めてしまうことのないようにしたい。それが私自身の反省です。というのは、班員の中に私のことを「こわい」というものがいて、ものがいえなくなるといいます。これまでの合宿の持って行き方が、全然間違っているとは思いませんけれども、段階を追うこと

を深く考えないで、短兵急に無理に突っ走ったという気がしてきます。

小田村(国文研)　いまのお話は川井さん個人だけのことでですか、それとも全体についてでしょうか。

川井(国文研、大教協)　両方なんです。私の班のことが直接原因ですが、小柳君その他の班から出された意見からも、あるていど同じことが想像できるような気がします。非常に高度なものを要求するあまり、どうしてもやはり無理が出て来る。漸を追ってやるやり方を今後どう具体化すべきかについては、いまずぐにはいえませんが……。相当幅広く考え直す必要があるように思います。

山田(国文研)　ことし私の持った班は、みんな合宿のふんい気に溶け込んだという点で成功したように思う。隅のほうに隠れているようにしたり、あるいはひねくれた白い眼でじっと傍観的に見ている人は一人もいないところまでいったようです。ただ、あれだけ学生としてはショックな話を聞いているのですから、猛烈な反発や抵抗があっただけなところですが、それが案外ないところが非常に不安なわけです。もっと混乱したり悩んだりするところがあるといいのに、とても明らかでなごやかなふんい気なので、どうもわからず、自分の影響力がどこまで浸透しているのかわからんという気持ちです。

宝辺(国文研)　私のところは、最初私がへやにはいりましたところ「今夜は宝辺さん、引っ込んでいてください

い」というので「なにをいうか、私は班別討論をお世話しなければならぬと思ってこの合宿に来ているのだから、そういうわけにいかない」とやや憤慨していった。しかし学生たちは反抗的にそういうのではなく、切々とした表情と言葉でいうのです。そこで私もこれは考えなくてはいけないと感じたので「それは一時間ばかり君たちでやってみたまえ」ということにした。

ところが、それは私のほうの負けで、結果は非常によかった。たとえば、きょう小林秀雄先生が「正しいことなんというのは子供だってわかるさ」といわれたことや「自分はこれが正しいと思つたことはない」といわれた言葉などが、議論の対象になって話し合いが進んでいくうちに「正しいということはもっともらしいということとは全く違うんだな」とか「小林さんはいろいろな意味の関連のもとに、そのことをいわれたのであって、その言葉だけを切り離してしまつて論じてはならない、そのことをいわれた前後のニュアンスを尊ばなければいけないのではないか。つまり、正しいことは子供でもわかる」というふうなテーゼだけを問題にしてはだめなんじゃないか」というような発言が出て、それが班員諸君の共感を呼ぶ結果になった。それで私は自分の不明を感じるとともに、よかつたなあと非常に喜んだわけです。

坪井(国文研) 珍事が一つあったのでお知らせします。なかなかみんなと融け合わない学生が一人いるが、この人は「誰がこういった、誰それがああいった、何の本にはこう書いてある」というようないい方ばかりしている。ほかの学生から「君はどう思うのだ」、「あなた自身の考えていることはどうなのだ」というような質問が集中した。それで自然と一人だけ別になっているような形になった。ところがたまたまコンパの

始まる前になくなったのです。班員が全部そろったので「じゃあほつほつ始めようか」というときになって来ない。そこでコンバは、しばらく待とうということになり、みんなロップを伏せた。五分たち十分たち、二十分たっても姿が見えない。三十分ほどすぎても来ないので、みんなで手分けして探そうということになった。風呂場や便所から屋上まで探し回ったが、どうしても見つからない。よその班のコンバはたけなわだというのにかげずり回って探したすえやつと風呂の中にいるのを見つけ出した。最初探しにいったときは風呂にいなかったのだが、みんなで手分けして探したときには風呂にはいなかったのです。ご当人にしてみれば、孤独感に包まれた苦しいひとときだったに違いない。この一人が、なぜみんなから離れて一人で風呂の中でじっとしていたかは、あえて誰も聞かなかった。だが、みんなが自分のことを心配してこんなに探してくれている、こんなにも自分のことを思ってくれていることを知ったご当人と、見つかってよかったという班員の気持ちは、いわず語らずのうちに通い合っていたようです。そのあとは、ご当人の言動が、誰れの目にも「さっきとは全然違うな」という感じを与えていたし、ご当人も「自分の気持ちはほんとうに一段と開けたような気がする」といっていました。

加藤(敏)(国文研) あすの小田村さんの講義では、人の言葉に触れて、それに触発された思いを正確に分析していく方法と、その思いを正確に表現していくための正しいものの考え方、見方を、ぜひその中に示していただきたい。私自身、班の指導に当たっていてまざまざと力の限界を感じているので、あすはぜひそういう点を補っていただきたい。最終日ですから私自身もできるだけ努力して行きたいと思っています。

瀬上(国文研) 私の班にいつも「発言することはない」といって、殻に閉じこもったような学生が一人いた。ところが、彼は小林先生のお話を非常に正確に聞いていたことがわかった。小林先生の言葉を具体的に引用して、自分の感想を述べたので私は非常にびっくりしたので。

司会者(国文研) 大教協の先生方もご意見をどうぞ。

末吉(大教協) 昨晚の検討会でも、班のふんい気が盛り上がらない、あるいは少し調子が低いとか、こちらの指導する態度としてはどこまで突っ込めばいいのか、というお話をききました。今晚も同じような悩みが発表された。問題を持たなかった学生に対して問題をデスカッションさせようとしておられるが、プレイボーイもなければシャイボーイもない。(注)プレイボーイとシャイボーイの説明は後述の質疑の中にあります)そしてデスカッションを活発にしていくことは、こちらの運営の技術いかにかかっていることで、私はいまでも出来るのではないかと思う。

私はことしはじめてこの合宿に出席して気づいたことがあります。それはなにも私が利巧ぶっているのではなく、一般的の問題ですが、班別討論、グループセッションがあったら、必ずゼネラルセッション、総合討論、全体討論がなければいけないということです。しかるにここにはそれが無い。総合討論はなくてただ講義を聞かせる、そしてその講義の材料によって各班で班別討論やフリーデスカッションが行なわれている。しかし、普通の常識的なやり方ならば、グループ別のフリーデスカッションや班別の討論が持たれたら

らば、われわれのところではこういうことが問題になったのだということを発表させる総合討論——三十分でいでもいい——の時間を作ってやる必要があるはしないだろうかと思う。班別討論でやったことを、総合討論に持ち込ませ、学生を壇上にあげて三分なら三分、五分なら五分と区切りをつけて発表させる。そしてだれが適当な方が司会なさって、壇上の学生とフロアの学生の間で質問の取り交わしを二、三やらせる。こういうようなやり方をリーダーシップトレーニングとか、またメンバースhipトレーニングとかいってアメリカやイギリスでは盛んにやっている。まずデスカッションのメソッドから教え、そうしたやり方があることを教えるべきだと思う。

班別討論のさいに無言の人がいたら、その人が発言するまではかの連中を押えて発言させない、といった小田村さんのご感想もあつたようですが、水を飲まないという馬を力をもって川の中に引き入れても決して馬は水を飲もうとしない。だから方法としては、やはり飲もうとしない馬はノドがかわいていないので、まずその馬のノドをかかわせることが必要である。それには汗をかかせるまで走らせる。そうすれば川に連れて行かないでも自分から川のほうに走って行って「水を飲ませてくれ」といつて来る。こういうふうになればナチュラルな動作が生まれて来ると思う。

したがってこの合宿の運営の仕方、グループデスカッションがありながらゼネラルセッションといった報告会があつて、壇上とフロアとのやりとりや、報告に対する質疑応答が行なわれる必要があるはしないか。講義を聞いてグループデスカッションだけをやる。しかもその報告や検討は全体に対してはなくて、国文研の方やわれわれだけが承知しながらやっている。そうすると、一つの班の十四、五名から二十名だけがその班の間

題を知っているわけで、十一班あるとすれば、一班だけはみんなわかるが、ほかの十班は他の班のことはわからない。ゼネラルセッションがないために「おれたちが出したような問題はないのか」あるいは「他の班ではなにが問題になったのか」ということが、他の班の学生にはわからないだろうと思う。重ねていいますが、班別討論があるなら総合討論もなければいけないのではないか。

それから、もう一つ申したいのは、この合宿は研修会であって、学生に勝手にしゃべらせるところではない。だから国文研のいき方が、共産主義に反対であるならば、学生が抵抗を感じても、抵抗を感じるままに押し付けて、国文研の信ずるところを述べ、共産主義を徹底的に粉砕していく。いい方は違うにしても要するに、コンミニズムがあつたのでは国民同胞感を探求することは、どうしてもダメだ、共産主義を爆撃しないまでも、厚いベトンの壁でさえぎって、それを聞かせないようにしながら、われわれは国民同胞感を探求するのだといって、あくまでも教えていくのか、その辺がはっきりしていないように見受けられる。今後この点をどうしてゆくのかというのが私の一つの疑問です。それから、彼ら学生のもっている違った意見にしてもまず引き出しておいて、それに対してこちらのほうで答えてやる、そしてそれをほぐしてやるというような作用がここでなされるべきなのか、それとも君たちには自分の認識や見解はあまりしゃべらせない、国文研のゆき方が国民同胞感探求の一つのヒナ型なのだから、われわれがそれを教示してあげるからあなた方はそれを受け取って帰ればいい、というゆき方なのか、どうもその辺が不明です。私としてはほんとうに問題をもってここに集まっているものに対しては、たとえコンミニストであろうとも、彼らにフリーに発言を許しながら、班別討論や総合討議を持たせる、そしてやがてはパネルディスカッション（注Ⅱ対立意見を持

つ数人の代表者が、合宿参加者の前でその意見をお互いに論議し合うことでもやらせてみる、そのチェアマン（議長）は、国文研の適当な方をお願いする、というようなやり方でゆけば、学生は黙っていても、さっきのようにノドをかわかした馬になりますので、飲めといわないでもガブガブ満腹するまで水を飲むのではないかと思う。

ここに私の大学の学生指導を担当しておられる植木さんもおいでのになるが、三千名ぐらいの学生をしょつ中そういうふうにして扱っています。ここではそういうトレーニングが一つも行なわれていない。毎年いまのようなやり方でやるのであれば、マンネリズムに陥ってしまいはしないか、したがって、リーダーシップトレーニングとか、またはメンバーシップトレーニングとか、グループダイナミクスとか、少し足りないのではないかとも思われる。これはあるいは妥当な批判にはならないかも知れませんが、この会の発展のために苦言を呈した次第です。植木さんは京都大学で一カ月、またほかの所で一週間というふうにして研修を受けたのです。私も東京で約二カ月、京都に一週間、徳島に十日間、九大では三カ月間も図書館にカン詰めにされて、グループディスカッションのメソッドを米国人から鍛えられたわけです。これはやはり学生補導としてのパーソナリティー形成に関する一つのテクニクです。テクニクを持たない補導職というものは役に立たないのだという見解から、私どもは約五、六カ月の研修を文部省からいわれてやった。文部省はそのような研修が済んで単位をとったものを補導課長なり、学生課長、あるいは学生部長にしているのです。国文研の方たちは、日ごろ学生に講義をしておられる立ち場でもないし、また教官と学生という関係でもないので、いま私が申したようなことをされてはどうかといっても無理かも知れませんが、しかし、みなさ

んが大きな目的に向かって発展の歩みを続けておられますので、このような理想的な合宿の持つ意義、いいかえれば、おれたちはお互い裸になって本当に結び付いていこう、それは理屈じゃないのだ、おれのはだ合いの感じがわかるか、そこに友情が生まれ同胞感が体得されてくる。われわれは本当に日本人なんだ。共産主義者は祖国はソヴェートだというけれども、われわれは日本人じゃないか、だから自分らのはだ合いの暖みは日本人の暖みなんだ、お前に触れて見たがやっぱり君も日本人の暖みをもっているじゃないか、これは理屈を超越した日本人の感触ではないのか、そういう感激を学生諸君になんらかの方法で持たせていったらどうであろうかと思う。大切な今夜の時間を勝手な論議で費やしました。ご参考にならないかも知れませんが、蛇(だ)足として申したわけです。

小田村(国文研) 末吉先生、どうもありがとうございました。私どもの気づかなかったいろいろの方法などについて懇切にご説明していただき、大いに参考になるご助言であったと思います。それで二、三質問させていただきたいのですが……。

その一つは、グループデスカッションで議題が決まっている場合とそうでない時とありますが、いずれの場合でもゼネラルデスカッションが必要ということですか。

末吉(大教協) 議題は講義の中からグループのチェアマンであるみなさんが「きょうの講義に関する中から一つのテーマを引き出そうではないか、一応どんな問題がありますか」と切り出して、そのファクターとかエ

レメントをまずチェアマンの方がガイダンスされるわけです。「きょうの講演はこういうエレメントでこんなファクターがあったが、私たちの探求すべきファクターに当たるものはこういうふうなものではなからうか。諸君はどういうふうに感じましたかということ、まず意見を出させて見て、そこで討議する問題をピックアップする。そしてその中からどれをデスクッションのテーマにするかについて話し合う。「これはだれかゼネラルセッションのときに報告してもらおうのだから、しっかりやってもらいたい」というふうにすれば、プレイボーイもシャイボーイもないでしょうね。プレイボーイというのは、鼻くそばかり丸めて知らん顔をして、あまり討論に参加しないような学生で、シャイボーイというのは恥ずかしいという劣等感であまり発言せず、やはりそのメソッドの中にはまらないものをいうのですが、そういうようなものが一人もいないようにダイナミックに運営してゆかなければいけない、そのためには、つねにチェアマンが心してそういう運営をやってゆくということなんです。

小田村(国文研) 全員に対してなされた講義でもその内容のいかんによっては、そういう取り扱いがきわめて困難な場合もありはしないでしょうか。

末吉(大教協) そういう場合は、国文研の方がグループ別のチェアマンをされるわけだから「諸君の希望はありませんか」とか「私はこんな問題をもっているが、諸君はどうだろう、この中からどれを取ろうか」というように発言されて、やっぱり彼ら自身が主体的に持ってゆくような適当なやり方をしていただきたい。わ

れわれが大学でやっている学生のデスカッションの場合は、いつもそういうようにしています。

小田村(国文研) 今度の合宿でみんなが苦労しているのは、学生が発言をしないということそのものではなくて、なぜ発言しないのであろうか、ということをしつこく考えていくこと、また発言はするが、その発言が概念的な理論的な展開に終わって、その本人の生活体験的なものに結び付いた批判や発言がなかなか出てこない、という点などです。人はおのおの生活体験を持っているわけなのに、その体験と別なところで平面的な発言がなされ、意見が交換されている、そこに問題点が伏在していると考えているのです。

末吉(大教協) わかりました。それならば注文があります。学生が知りもしない哲学の問題、むずかしい哲学論なんかを説いて、それだけでデスカッスの種を見つけようとするから間違いないのです。そういう場合には、小林先生の話は話として済ませ、グループデスカッスをやる前に、さきほど国文研の方たち——五、六人の方がやったような意見発表をして、その二つをまとめてそのどれにしようかということにすれば、必ずまとまります。だからあんまり飛躍したものであってはいけません。きのうの木内先生のお話やきょうの小林先生のお話だから、問題をグループ別に探そうとするから非常に理論的な高踏的なものになってしまつて、討論が進まないのではないかと思えます。したがって、私の要望したいのは、国文研の方がほんとうにご自分の体験を「自分たちはこんな体験をもっている。君たちは一体どうするのだ」といった率直な話でいい、必ずしもむずかしい高遠な哲学論を討論する必要はないと思う。あるときは哲学論を聞かせてそれから問題を見

つけてもいいし、それから、これではむずかしくなると思ったら話題を切り替えたらい。

もう一つ、小林先生のお話に関連して、国文研の方が別の角度から学生時代の体験をお話してもらう方法もあると思う。また全然違った問題を国文研の方からお出しになってもいいと思う。学生の考えている具体的な問題、学生運動の問題なんかについて話されてもいいですね。

小田村(国文研) たとえば、きょうの場合私たちを含めて全参加者が、小林先生のお話から各人各様に受け取ったものの中には、全心的な感動を受けたものもいたであろうし、また一言でいうならひとすじの人生の道が話されたと受けとったものもあったと思う。私たちが望んでいるデスカッションの対象としては、この上なく有難い内容のものであっただけに、そのお話を聞いた人たちの間で、私たちがしてもらいたいと望むデスカッションの中心は、学生諸君のひとりひとりの人間としての素直な感懐なのです。それであのお話のあとで、われわれ国文研のものが意見を發表して、学生たちに討論の対象を選択させようというようなことは、せつかくの大切なふんい気をぶちこわしてしまうも同然だと思われ、とてもそのようなことはやれないと思います。また国文研のものが小林先生のお話を解説して学生たちに示したりすれば、学生たちは押し付けられたような気がして、息苦しいふんい気がかもし出されてくると思います。そこで、末吉先生からさきほどお教えいただいたデスカッションの方法については、私たちが改めて研究させていただきたいと思いません。同時に末吉先生にも、こうした人生観のギリギリの問題に突き進もうとしているこの合宿の討論の性質をお考えいただいて、さらに、いろいろ教えていただくようお願いしたいと思います。大ぜいでする議

論、討論の場だけで、すべての問題が整理されるものではないと思います。ひとりひとりが胸にしみ入るように、また心に感動するように、そしてそうした切実な体験を通じて、歴史の生命に触れ、古人の心を知るようになっていくことを主眼にして、今日ご提出いただいた問題を、国文研としても一つの課題として研究を進めていきたいと思えます。ありがとうございます。

司会者(国文研) この問題については、末吉先生と小田村さんにまだほかにもお聞きしたい方もおられると思いますが、時間が過ぎていきますので、それはまた別の機会にゆずることにして、水野先生のご感想をお願いします。

水野(大教協) 私はことしは忙しくてゆっくり参加出来なかつたので批評は出来ないのですが、みなさん方はあまりにも効果を狙(ねら)いすぎているのではないか、焦(あせ)られておられるのじゃないかと思う。精神的な問題について効果を焦せりすぎるくせが日本人にあるのではないか。ドイツのエーゲー会社では、縁の下にたくさんの学者がいて、はじめて成果が上がっている。縁の下の力持ちを大切にしておくのです。そうしてはじめてよいものが結果的に出て来るのであって、私はみなさんがここであまりに効果ばかりを狙われるのではなくて、この合宿が将来日本に連鎖反応を起こすようなものになってゆくことが一番重要なことではないかと思う。そのために私はいつも宗教的なことをお願いするのですが、われわれの学校で学生たちに情操教育をしようとしても、道徳の話をしてダメで、人間というものを精神的な面で教育しなければ

いかんということです。

たとえば、ケネディが大統領になって宣誓するときには、あの大きなバイブルの上に手をおいて、自分に神に誓ってアメリカのためにやるといふ。いまの学生が結婚するとき、聖書を読んだところで、うわの空で読むのであればなんにもならない。やっぱり自分は何かに誓って、ものごとをやるという気持ちを持たせる、それを私はこの合宿でやっていただきたいと思う。文化の基礎に流れるものはやはりその民族の宗教心なり精神だと思えます。私はさきほどインドネシアの話をしたけれども、彼らは本当に若いながらも、講義の時間でもお祈りの時間が来るとお祈りをするというふうに、常に心のよりどころをはっきり持っている。

イスラム教の連中も、打たれようとたたかれようとやはり一つの強いものを持っている。ところが終戦後の日本は、物は作り上げたけれども、見えざる思想の蓄積、あるいは精神的な生活の蓄積をいかにして大きく働かせるかということの基礎をみなさんが作って行かなければ、私は本当の日本人は生まれて来ないのではないかと思う。これではみな無宗教的な人間になってしまって、唯物論ばかりの世の中になってしまう。しかしものの方、考え方というようなのは、祖先から受けついでたものであって、本当のものの見方、ものの考え方はどこからかヒョッコリ出て来たものではない。われわれの祖先から引きつがれてきたものの見方、考え方は、やっぱり日本人の精神の中に生きていると思うので、それを蓄積し偉大なるものにする基礎を作っていただきたいと思うのです。

いまの学生に一番欠けているのは、宗教的な情操であります。昔は人々はみな仏さまや神さまに祈念したのですが、そこに本当の日本人として進むべき道を見出したと思うのです。そういうような考え方を持って

来させなければ、さきほどからも議論があったように、この合宿で学園とはまるきり違った講義を聞かせても、二日や三日の間でみなさんの期待をされているようなものが生まれてくることは、非常にむずかしいと思います。

しかしみなさんが学生の中にはいって行って、見えざる力を培っていただければと——私は実際そうなっていると思う——念願しております。だから、ここに見えた現象形態だけをとらえないで、ここでみなさんが熱意をもって指導されているその姿が、結局学生の心に通っていくのではないかと思います。

だから、やっぱりみなさんが情熱を傾けて学生を指導し、日本民族をりっぱなものにしてゆこうというその気持ちと熱意が、本当の効果をもたらすものではないかと思えます。ですから、一人でもりっぱな日本人を作り上げようというその熱意が、みなさんの運動の本当の中核ではないかと思う。そういうような意味で、心のよりどころを培うのにはどうしたらよいかということについて、今後ともご研究願いたいと思います。

司会(国文研) ありがとうございます。(午前二時)

二 大学教官有志協議会 国民文化研究会 会員 所見発表

第三日目の夕食後には、主催者側として「合宿教室」の運営、指導に当たって来た大学教官有志協議会と国民文化研究会の会員がこもごも登壇して、全参加者にその胸中の思いを訴えた。

熊本大学教授・農博・水野武夫先生

水野先生は、まず平素から持論とされている「氣」についての解明から口を切られた。そして天
地万物の正しい姿にわれわれが「氣がつく」ことが大切であると語られ、とくに人間のありのまま
の不完全、不具足な姿に気づくことの重要さを述べられた。そうしてこそ、われわれの心の中に一
種の宗教的情念——敬虔(けん)な反省と熱烈な求道心——が湧いて来るはずであり、このような心
情こそが、この合宿教室を支える基盤であるべきだと説き始められた。

ついで日本の現状に触れられ、いまの日本は、一部で極端な劣等感を国民の間におおるような言
論や所説が横行しているが、日本人が本来もっている潜在的な能力は、すばらしいものであってそ
れは戦前も戦後も変わらないものである。しかし、この日本がいま混乱と低迷に陥っているのは、
最も重大な国民生活の要点であるところの、精神が失われてしまっていることに原因するといわ

が予見されるはずであると切言された。

また「少しく大風呂敷をひろげるが……」と前置きして、ソ連が月世界にペナントを打ち込んだくらいことは、われわれにとってけっして驚くに当たらない。これなどは、五十億光年（一光年〓九兆五千六百十九億二千七百十キロ）の広大な範囲に拡がる宇宙に比べれば、まことに微々たるもので、これで宇宙の問題が解決されたなどというのは、トンでもない錯覚であり、僭（せん）越であると言われた。さらにそれと同じように「見えざる心の世界」についても、知られざることがはなはだ多いことに気づかねばならない。ことに、古事記に示された日本民族の神観や、儒教の東洋



れ、さらに「国民のすぐれた能力を統御し、有効に發揮させるべき精神が、その方向づけとともに失われてしまっている」ことを指摘された。そして要は「いまのようなことであって果たしてよいのか？」と、聞く人たちの注意を喚起され、さらに、もしこのことに国民が気がつき、全国民の融和と協力の体制が築き上げられるならば、将来の日本はもはや戦争などの手段によることなく、平和のうちに気宇広大な発展

的倫理道徳については、いまの人たちはそれを学んでみようともしないで、捨て去ってしまった感じが深いと言われ、いまはやりの「民主主義」についても、平板安易な理解に留どまっている人々の多いことを歎かれた。そして、いまこそ日本民族は、みずからが受けている冷厳な試練に耐え抜いて、活発でしかも厳正な精神活動を振るい起こし、もって将来に対処しなければならぬ、と熱をこめて語り続けられた。その中に適度のユーモアを交じえながら、参加学生に訴えられた。

神戸大学助教授・文博・黒岩一郎先生

黒岩先生のお話は、元気のいいご発言からはじまった。

この合宿における数日間の、参加学生の思想的精神的な苦闘に対しては、同情を禁じ得ないが、なお一言あえて苦言を呈したいと冒頭されて「人の話を聞く時には、おのれをむなしくして、謙虚に受け入れる態度を、つとめて身につける必要がある」と力説された。浅墓な知識や体験から「おれはこうなんだ」と決めてかかったり、意にそわないからといって背を向けてしまうのは、あたかも「富士山の二合目の視界から、富士山の全容を知った」と思い上がるようなものである。小林先生が講義でお話されたベルグソンについてみても、空間の「有」と「無」のほかに、それを超越した「空」の体得がなければ理解できないはずであり、またたとえば、ルソーの「民約論」にして



も、一知半解のまま、自由だの平等だのと騒ぎ立てるのは、ルソーの真意を知らざるもはなはだしいものといわなければならぬ。仏教に「真ならざるものを信ずる、これを狂という」という言葉があり、また「信じて解（げ）なきは無明（みょう）を長ずる」という言葉があるが、いまの世相の狂騒めいた時流とひきくらべて、こういう言葉が示している人生の道にも、どうか、とくと心を留めてほしい。そうした落ちついた省察と体認の修練を行なうのが、この合宿教室の課題ではないか、と言葉鋭く訴えられた。

そして人間存在における空間と時間の相即（この二つが「経と緯として組み合わされてこそ全し」）について触れられ、こうしたところから、先達（せんだつ）が残された古典の重大な意義が生まれて来ると述べられ、仏教の「信・住・行・向・証」という東洋的な学問と人生態度につき、蒞著を傾けて話された。ついで今後も、この混迷した社会状況のさ中において、いろいろと壁に突き当たり、思い悩むこともあるであろうけれども、その場合でも決して輕易に妄動することがないように努力してほしい、と要望され「どうかこの信・住・行・向・証の弁証法的な展開を身に

つけ、その正しさを身をもって実行して、この日本を建て直していただきたい。これからの日本は、諸君の日本なのだから……」と結ばれた。

続いて国文研会員が立ち、各人もいおもいに、参加学生諸君に激励の言葉を述べた。そのうちから五人の人たちの所見を次に掲載する。

正成と芭蕉のこと

修猷館高校教諭 小柳陽太郎

さきほど班別の討論が行なわれましたが、そのさい私の班では、きょうは八月十五日の終戦の日なので、それに関連していろいろな感想が述べられた。それらの話を聞いていて、つくづく感じたことは、たしかに今度の戦争についての反省ないし批判は、相当正確に論じられている。日本だけが悪かったのだ、というような感情論は影をひそめて、アメリカが犯した罪悪についても、正しい批判が行なわれているし、また日本がたどって来た道についても、冷静な反省が行なわれている。しかし、一番大切なものが欠けている。欠けているといえはいいすぎかも知れませんが、稀薄であると思いました。

一番大切なもの——それは敗戦という歴史の事実を、自分自身の意志の問題として、正確に受けとめようとする身構えであると私は思います。それが感じられないのです。戦争という事実が分析されている。しかし、その分析とか批判とかが、何か学生諸君の生活とは別のところで論じられているのです。「このような見方もある」というように。これでは重大な敗戦というものが、諸君のそばを通り抜けてしまっただけで、諸君の心はそれによって何ら傷つくことがないのです。すなわち敗戦ということが諸君の意志の問題となつてこない。極言すれば、私はそのような感想を持ちました。たしかに、私たちの世代では、戦争がのびきならない体験的な事実だったけれども、いまの学生諸君にとっては、まだものがつく前の遠い過去の物語りにすぎません。それはわかります。しかし歴史に触れるということは、そのような生の体験の有無の問題ではありません。では歴史に触れるということ、歴史につながるということは、一体どのようなことなのか、簡単に申したいと思いません。

太平記の中に、楠正成がはじめて後醍醐天皇に召される有名な個所があります。この時天皇は笠置の山に身をかくしておられるが、自分を助けてくれる武将が一人もいない、全く自分の周囲はすべて絶ち切られてしまったという思いで、天皇はひどく苦しんでおられる。その時正成が夢のお告げで天皇の前に現われ、天皇に次のように申し上げます。

「合戦（がっせん）の習ひにて候（そうら）へば、一旦（たん）の勝負をば必ずしも御覽（ごらん）せらるべからず。正成一人未だ生きてありと聞こしめされ候はゞ、聖運（せいん）遂（つい）に開（ひら）かるべしと思（おぼ）しめされ候（そうら）へ」
私はこれを読むたびに、歴史のすべてが、正成という一人の人格の中に集中して生きているということ

を痛感します。「正成一人未だ生きてありと聞こしめされ候はゞ」というのは実に大胆不敵な言葉です。しかし、その時正成の心の中には歴史の全重量とでもいうべきものが、のしかかっていたに違いありません。その痛感がこの言葉を、実に厳肅なものとして生かしていると思います。もう一つ例をとってみますと、松尾芭蕉のこれも有名な次の言葉です。

「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其の貫道するものは一なり」

この言葉を同じ芭蕉の「終に無能無才にしてこの一筋につながる」という言葉とあわせて見てゆけば、ここに芭蕉の歴史感覚というものがはっきりわかってくる。芭蕉の目の前にあったものは、この「一筋のもの」であり、そこにすべてのものが集約されて生きているのです。すなわち「一筋」に集中されてはじめて歴史が生きてくるのであって、散漫に並べられたものは歴史の素材ではあっても、歴史そのものではない。芭蕉はこのような感じたと思います。

正成と芭蕉というのは実に奇妙な取り合わせのようですが、そこに共通して見られるものは、歴史のすべての重みを支えて生きてゆくきびしい先人の姿です。歴史に触れること、歴史につながるということは、このようなことではあるまいかと私は考えます。

歴史を受けとめるものは結局自分以外にはない。戦争の問題でも同じことです。戦争の事実をいかに詳しく調べあげても、そこにばらまかれたうわさ話や臆測をどれだけかき集めても、そこに自分が生きていなければ——その歴史を受けとめるのは自分なのだという痛感がなければ、歴史というものはわからない、見えてこな

いものだと思えます。

国民的感動を取り戻そう

若松高校教諭 山 田 輝 彦

私は高等学校で国語を教えていますので、よく生徒諸君に「徒然草」を教えます。「徒然草」の中には、繰り返して人生ははかないものだ、人の生命はいつ絶えるかわからないということが書いてあります。皆さん方もお習いになった方はご承知と思いますが、心戒という聖人は、いつ死がやって来るか、いつも死を待機して、ゆっくりとしりを落ち着けてすわっていることも出来ないで、中腰でおったということが書いてあります。若い生徒諸君はなんて奇妙なことを言うといった顔をして聞いていますが、この話は実に象徴的であると思えます。

私は学生時代から、非常に体が弱かったものですから「いつ死ぬだろうか」というようなことを始終考えておりました。死に直面した時に、何かやはり自分の生命を托して死ぬものがほしいと、痛切に考え続けていました。

人間の生命がはかないということは、事実をつきつけられなければなかなか実感出来ないものです。私の家は北九州の若松にあります。近くに住んでいた火野葦平さんは、去年の一月二十四日の午前四時ごろ急死しました。私は葦平さんが死ぬ八時間ぐらい前まで、いっしょに酒を酌（く）みかわしていたのです。精悍（か

ん)で力にあふれた人が、突然亡くなったという事実は、私には言いようのないショックでした。人生がはかないという言葉は、そういう衝撃を受けて、初めてなまなましい実感として膚に感じる事ができたわけです。話がそれましたが、そういう人生だからこそ、自分の生命を托すものがはしかつたのです。その生命を托すものは必死に考え続けましたが、それは仏でもキリストでもなく、私にとってはやはり日本の生命というものしかないわけです。国家というものは権力機構だとか、民衆を抑圧する機構であるとか、いろいろなことがいわれますけれども、そしてそういう一面もたしかにあらうとは思いますが、もう一つ、国家は国民がその生命を托すべき永久生命を宿していると考えております。

ところが、その国家というものはどういう状況に置かれているでしょうか。日教組は「君が代」「日の丸」を否認する方針で動いていますが、最近、卒業式で「君が代」を歌おうか歌うまいかということを職員会議の議題にして、多数決で否決してしまおうという事実が起こっています。「君が代」を否認する人々は「主権在民の新憲法下、君主の長寿を祈念する歌はおかしい」とか「戦争の暗い記憶に結びつくからいけない」とかいう一片の論理や感情論で、長い国民的な経験を一挙に否定しようとするのです。そして、そういう主張を肯定する雰囲気のみながっていることも事実です。これは実に恐ろしいことです。生徒たちは在学中一度も、国民的感動というものを経験しないまま、放砂のようにばらばらな気持ちで「社会」という集団の中に送り出されてゆくのです。教育の現場でこういう事実に出会ったとき慄(りつ)然たる思いに駆られます。個人の恣意を人間解放の名で肯定することが、果たして生徒にとって本当の親切なんでしょうか。まして、それが階級理論による支配への一段階であるとすれば、国家における教育の位置は実に異常だと申すほかはありません。

われわれの生命を托す国家は、現代こういう苦悶の中にある。誰が考えても実に異常な雰囲気である。どうぞみなさんの中で、そういう状態が変だなあ、少なくとも、どこの国でもやっている普通の状態ではないとお考えでしたら、どうか正しい普通の国に引き戻すために努力をしていただきたい。そういう方が一人でも多く世に出ていただければ、私たちがやっていることもやり甲斐があるという気持ちになります。

心 知 る 友

静岡県、山林経営 岡 本 弘 之

心する友とかたれば心なごみながる涙とどめかねつも

この歌は故三井甲之先生が、大正七年「友に」と題して、お作りになった歌であります。

思えば、短い人生の過程において、悲しいにつけ、うれしいにつけ、本当に心を許し合った友を得るか得ないかということによって、その人の人生が心豊かなものになるか、あるいは空虚なものになるかが決定されます。しかも、富や階級を越えた同信の友情は、決して単なる智的観念論の遊戯や、安易な生活感情の中からは生まれてこないということを断言できると思います。

私もかつて、みなさんと同じように学生生活を経験しました。そして教授と呼ばれ、博士と呼ばれる先生方から、講義も受けましたが、いかに人生を生きるべきかという指針について、深い感銘を受けた記憶のないことを非常に残念に思います。他面、スポーツあり、享楽ありの多彩な学生生活の行事のうちには、行きずりの

交際もあつたように思われます。しかし、しょせん、そうした学生生活の中からは、本当の意味の人生観、世界観は確立され得べくもなく、青年学生としての悩みは増大するばかりでした。むしろ、そうした大学のあり方というものに限らない痛憤を覚えたことを、私はいまもって忘れることができません。

今日、皆さんが、この合宿に参加されたと同じように、私も当時、満たされない思いを胸に抱いて、いくたびか青年学生の合宿に師を求め、友を求めて参加しました。そして未知だった者同士が、何日間かの起居を共にして、お互いに白刃をもって切りむすぶような気持ちで友に接し、まぶたを泣きはらして生きることのむずかしさを語り合いました。いってみれば、私は私の学生生活において、特別な知識や処世術は会得しませんでした。が、何回かの合宿生活で、本当に心を許し合い、語り合うことのできる数々の友を得ることができました。こうして真に人生を生きてゆく過程において、点滅するすべての現象に対処して、正しく判断し、理解する基礎をかち得たように思います。

あるいは、今日の時代では、そうした生き方はきわめて要領の悪い生き方として、笑われるかもしれませんが、それでもなお、私はかつて学生時代における合宿で、師友先輩に手厚く導かれ、そこで確立された私の信念を、血の通う友情にささえられて、一生貫き通すつもりです。それが私なりの人生であり、日本人としての生き方と信じています。

きょうは八月十五日であります。私もかつて、南太平洋の戦場を転戦した経験を持っておりますが、弾丸雨飛の戦場においては、なれあいの友情は許されません。もちろん、合宿は戦場とは異なりますが、つながりを求めて苦悩する生命のたたかいに、平時、戦時の区別があらうはずはありません。

合宿もあとわずかになりましたが、どうかみなさん、勇気を出して絶叫してください。堅く手を取り合い、まぶたを泣きはらしてでも語り合ってください。そして、そこに生まれる友情と体感によって憎悪と対立の時代を乗り越えてゆき、国民同胞感を拡大してゆくならば、きっと輝かしい日本の将来が約束される、と私は信じております。冒頭にご紹介した「心しる友と……」の歌と同じ作者、三井甲之先生の歌を朗（ろう）読（よ）してごあいさつに代えたいと思います。

今にして目さめて思へうつし世にわれ一人ならずいのちはつながる

「^よ剋^{おも}く念うて聖となる」

下関、宝辺商会 宝 辺 正 久

私は班で黒上正一郎先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を輪読した感想から申し上げたい。維摩経（ゆいまきょう）の中に「魔怨（まえん）を降伏（こうぶく）し諸（もろもろ）の外道（げどう）を制す」という一節があります。これに関して、支那大陸の諸師はおおむね、弁論をもって徹底的に魔怨ならびに諸の外道を説伏した、理論でもって説伏したと解釈しています。それに対し、太子のご著作維摩経義疏の中には、「諸の外道」というその「外道」について「外道は正道を求むと雖（いえど）も但（ただ）悟執（ごしゅう）ありて宗に乗（そむ）く」とあり、外道つまり道にはずれた衆徒は、正道を一生果命に求めていくのだけれども、我執我見のために、概念的理解に低迷して、いつの間にか大道にそむいていくと説かれており、聖徳太子

は非常に内面的、心理的な解釈をなさっています。

この一節を読みながら、私の班の班員の多くが同感しうなずきあったことは、ここにいわれた「外道」とは、私たち自身のことではないかということでした。この率直な共感と理解とお互いの表白を、私はこの上なくうれしく感じました。

読書を通じて、あるいは人の言葉に接して、それを単なる概念的理解に終わらせるだけでなく、身にひきつけて思うこと、それが正しい学問（精神科学）の態度ではあるまいか。聖徳太子ご自身も、外来の仏典に対するに、当時の日本の内外の事情から強く必要に迫られた国家統一を国民教化の面に求められ、ここに魔怨も外道も単なる宗敵としてではなく、国民生活の具体的な阻害者として、みずから強い謙抑の態度をもって対処されたと思われます。この人生態度が、仏典の解釈に当たられて、さきに述べたような反省の告白のお言葉となつたと思います。外道とは自分のことではなかったかと私たちが気づいたことは、太子ご自身の深いお志しに触れることであり、一般的には日本の古典の中に生きて伝えられた尊い生命に触れて、われわれの心が開かれたということでありましょう。それはまた、この本の著者である黒上先生というすぐれた求道者の導きにもよるのですが、諸君自身の敏感な求道心と「剋く念うて聖となる」という太子のお言葉が、諸君の体験の中に摂取されたということになると思います。

短時間の輪読でしたが、きわめて大切なことをいっしょに経験したことを非常にうれしく思います。身にひきつけて「剋く念え」ば、言葉の内容が千年を隔てておっても生き生きと感じられるし、同様に剋く念えば言葉の緊張弛緩（ちかん）の度合いも理解できてくるし、さらにその内容の正邪を直接判別することができるよ

うになり、おのずからこうした力がわれわれに備わってくるのでありましょう。私はそれをこのうえとも諸君に期待し、それをみなさんといっしょに切磋琢磨（せつさたくま）していきたいと思えます。

ところで、私たちがふだん見すごしていること、間違いを間違いと気づかないでいることも「剋く念わ」ない結果である場合が多いのではないのでしょうか。日教組の倫理綱領を例にとってみましょう。日教組は最近、柔らかな調子に書き替えた改定版を出していますが、その綱領前文のところを比較してみますと、改定前は「これまでの日本の教師は、半封建的な超国家主義体制のもとで、屈従の倫理を強（し）いられてきた。日本の社会体制が、まったく違った観点から再建されねばならぬ今日、われわれはこれらの因習をたちきり、新たな倫理をもたねばならぬ」としてのされている。これを改定版では次のようにいっています。「私たちは敗戦という大きな代償をはらって、やっと手中にした民主主義と平和を危機におとし入れる心配の濃い単独講和に反対してきました」

前者は露骨な戦間的階級史観に立っているために、やがて識者にその非が指摘されましたが、後者の「敗戦によってやっと手中にした民主主義と平和」という思想表現に対しては、そこにたいへん大きな問題が伏していることを見すごしていることはないだろうか。なるほど戦争が終われば平和であるから、戦争と平和は社会現象としては交替する。しかしそのような普通のとらえ方に便乗して価値観をもちこみ、戦争と鋭く対立する平和という抽象的な概念だけが強調されていることを、見のがすわけにはいかない。遠く日清、日露の戦役を戦い、近くは大東亜戦争を戦った日本国民は、果たして好戦国民であったのか。国家の独立を守るために、またそれによって保たれる日本の平和を願ってこそ、それらの戦争を戦って来たのではないのか。こうしたこ

とを無視して、観念的な「平和」という言葉を持ち出して、一体なんの意味がありますか。経験的な国民体験を無視して、全く新たな理念を作り出すことは恣意にほかならない。身にひきつけて烈く念えば、このような言葉には、明らかに別の意図がかくされていることが推察されます。

また「烈く念う」とは、ひとりおもうことです。類型に従っておもうことではない。ひとりして思う切実さが、実は他の人々の共感を呼ぶことになり、やがて同胞感につながっていくのだと思います。

精神交流の意義

山陽電軌、会社員 加藤善之

私は下関の山陽電軌という交通会社に勤めております。私の会社はしょっちゅうストライキをやるので有名です。そういうことで時々新聞面をにぎわせますから、あるいはご存じの方もあるかとも思います。その会社員の私が、なぜこうして毎年この合宿教室にはせ参じて来るか、それをお話しましょう。

会社の勤めというのは、実は人間生活としては非常に冷ややかなものです。「メカニズムの非情さ」というような言葉も流行していますので、みなさんも想像できることと思いますが、実際にその中で生活している私などにとっては、これは本当に深刻なもので、時には頭をかかえたくなることもあります。一体これが血の通った人間の生活なのか、と嘆息せざるを得ないような、およそ非人間的な場になってしまっているのです。

会社内でも、やはり社員の間向上についての教育は重視されています。それは仕事の上の知識や技術的な

面では効果がありますが、人間同士の交わりを真実味あふれるものにするような効果は、ほとんど期待できません。会社内のこうした産業教育は、科学的・心理学的な分析方法に基づいているのでしょうが、実際のところ、微妙な人間の心の動きや、他人のまごころに感応する力を養なうには、全然役立っていません。

それをしようと試みることもなく、手がつけれないままに放任されています。ただ単に人の心の動きの傾向性ぐらいを抽象的に取り扱うていどですから、一応の人間関係はうまく調整できるように見えますが、内心からその人々を納得させることにはならないのです。したがって、心の底から共鳴し合う友情をそこに芽ばえさせることなどは、とても不可能です。これはおそらく、どこの会社でも同じではないでしょうか。

ひとりびとりが人格的に確立されていて、正しい人倫関係の中に組み入れられていれば、こういう教育方法も意味があります。西洋ではもちろん完全ではないでしょうが、各人が自律的に自己を処理してゆく生活慣習が定着しているといわれているので、それでもいいのかも知れません。しかし日本のように、自我の弱い国民性をもった国民に、むやみにこういった方法がとり入れられて来たのですから、たまったものではありません。人倫は空白化されてしまい、その代わりに欲望と利己が置き替えられてしまったところに、すなわち人倫の根底を失ったままで、機械的な方法が適用されるだけなのです。しかも、一見気のきいた用語と巧妙な論理に紛飾されていますから、人々はそれがりっぱなことだと思ひ込んでしまいます。

こんな状態ではたまらない、もっと心に張りを与えてくれるような感動がほしい、こういう気持ちで模索していた三年前の私の前に、突然現われたのが、この国文研のつどいでした。私は共産主義者が扇動をこととする実情を、会社の身近な同僚たちの行動を通じて見聞しています。戦術的余りに戦術的なその生活態度、そこ

には誠実な苦悩などはなく、概念的に割り切ってしまった安易さだけがあり、それらにほとほと嫌悪を感じてきました。国文研にはそういう作爲的なところがない。そこでは、相手の人格と立場とを尊重しながら、自分の運命と祖国の運命とを一つに結びつけようというすがすがしい一念がある。それゆえにこそ二十年來の友情が保たれて来たのだと思います。私はそのことに心からの感動を覚え、三年前からこの国文研の中に飛び込んで来ているわけです。

諸君はいまここで合宿開始らしい精神的な非常な苦しみの中におかれておられる。しかし、私をしていわしめれば、学生にとって心の問題、精神内容そのものの問題に取り組むことが、どんなに大切なことであるか、これははっきりしています。むしろ私のように、わき道を通して国文研にたどりついたものよりも、いち早くこういう機会を持たれた諸君を、私はうらやましいと思います。余すところ幾ばくもありませんが、心残りなくこの合宿を送られることを切望します。

三 合宿教室の総括的所見（合宿最終日）

小田村 寅 二 郎

いよいよ四日間の生活を終え、お別れする時間が近づいてきました。

さきほど、一時間近く諸君のいろいろなご意見を聞かしていただきましたので、みなさんがまだ聞き足りないという点についても触れたのですが、わずかな時間しかありませんので、出来る限り時間を詰めてお話ししたい。（なお「天皇」について述べた部分は、編集の都合から前掲の講義の中に集録しました）

まず第一に、なんの機縁もなかった方々と四日間にわたって親しくまた楽しく生活できたことを、みなさんとともに喜びたい。しかし、ひとりびとりの心の中で、この合宿から感じ取られていることは、千差万別だと思ふ。また合宿運営についての適切なご指摘などもあったようですが、これは私どもが拝聴しなければならぬ点だと思ふ。私どもも合宿教室の運営についてなお検討すべき問題が多々あることを感じています。昨夜の検討会でも長崎大学の末吉先生から、ゼネラル・デスカッションを各講義の直後に行なうべきではないか、というご意見が出されています。この合宿は「お互いの心を開く」という大きな課題と目的をもっているわけですから、この合宿教室でのゼネラル・デスカッションについては、さらに末吉先生にご研究をお願い申しあげたいし、私どもも研究しなければならないと思ひます。

一方、みなさんがゆっくり考える時間や話し合う時間がほしかった、といわれるのはもったもですが、この生活がいままで諸君が経験した生活と非常に違って、日程に追いまくられたにしても、日程に無理があるといっているだけではないかと思う。われわれはいつも自分のペースで世の中が渡れるものではないからです。ここでの生活や勉強の仕方は、諸君にとっては、いわば突然ぶつつかった他流試合のようなものだと思います。しかし人間はどんな場において人生の対決があり、その対決を通して学んでいかなければならない。諸君がこの合宿でひきずり回されたという感じを受けたにしても、諸君自身はやはり、ここにあるよいものは余すなくキャッチしなければならぬし、その心組みとファイトとを用意していなければならぬのだ、というふうに考えてもらいたい。人生は一瞬一瞬が他流試合でもある。したがって、このことは、なにもこの合宿だけのことではなく、常に心得てほしいと思う。相手の話し方や教え方がまずいといっていたのでは、得るところは少ない。そうした意味で、いついかなる場合でもファイトと心構えを用意し対処していただきたい。

それはそれとして、きのう黒岩先生が、富士山に登るのに二合目か三合目について、富士山全体がわかったようにいうのは大きな間違いだ、二合目なり三合目に自分がいま立っている、ということをよくは握して発言もし、研究もせよといわれた。まことにそのとおりだと思う。しかし同時に、諸君に見れば、自分は二合目にいるのに、八合目あたりの話ばかり聞かせるではないかという不満もあったであろうし、また同じ二合目といっても、富士山への登り道は表口にも裏口にもある。自分は裏口の登り道の二合目にいるのに、表登山道の二合目の話ばかりされるから、どうもピンと合わないという感じの人もいたと思う。

しかし、その人たちにとっても、表口から登っている登山道が二合目からどのよう三合目に行き、またさらに四合目、五合目に達するのか、また頂上に行く道はどのようなものであるかは、少なくとも謙虚に観察する機会があったはずだし、それを心に感じとる契機もあったはずだと思うのです。もし諸君の中に、自分が裏口から登っているのに、表口から登っている人たちばかりの話をさせられるからちっとも面白くない、一方的だ。したがって、この合宿は全部つまらんと決めてしまつて、最後までそういうがんこな判断を立てたままの合宿生活を送られた方がもし一人でもいたとしたら、私どもはそういう方々に対して「君はわからなかったのだからそれでも仕方がない」というふうな無責任なことは申しません。

そこで、かりにこの合宿に全面的に反発を感じた方がおられたとすれば、次のことを心に留めていただきたいと思う。この四日間の合宿をもう一度振り返つて、自分は登山道の裏口に立っていると置いていた人も、表道を手でいる人たちの姿を正確に見る方法はなかったのか、それを道筋が違うからといって、自分が全面的に反発を感じたというその人生態度の中に、人間としての偏狭性というか、とらわれ、執着というか、それらのものに禍いされていたことはなかったか、ということについて、ぜひ再考していただきたいのです。

といひますのは、考え方が違えばこそデスクッションが必要である。いろいろと違う道を登つておればこそ、その道が正しく頂上に行くかどうかを確かめるために、諸君はここに集まつて来たと思うのです。したがつて、表道を通つている人が間違ひなく頂上に行くかどうかというふうな裏口から見ることもできるはずで、もし自分の立っている立場に固執したくて裏口からどうしても見たいというのなら、その生き方、見方があると思う。しかしそれと同時に、自分たちが登っている道は、果たして間違ひなく裏口からでも頂上に行け

るかどうかも、それといっしょに考えていくことを怠ってはだめです。大切な問題点はここにありません。道そのものだけを見て、それが気に入ったとか気に入らないとかで、反発したり反感をもったりするのは、人間のこざかしさであり、偏狭さです。行く道は違いますが、間違いなく頂上に着くことができるかどうか。みんな頂上に行くつもりで、いろいろな道を歩いているが、どの道を行けば人間が幸福になり、正しく楽しい社会が出来るのか。いま富士山の頂上にたえた人間の理想に向かって、果たしてたどりつけるのかどうか。そこが大事な問題のはずです。その可能性に照らしてこそ、いま自分が歩んでいる道を検討し、さらに緻（ち）密にそれを見直す機会こそ、この合宿であったと私は思う。だから、裏登山道を歩いている人に、横の道をゆけとか表口の道をゆけとはここではないわな。それぞれの歩いている道、またその歩み方、登り方が正しいのか、誤っているかは、各人が考えなければならなかった問題のはずです。いいかえれば観念的、理論的に人生を決めたり、スローガンの人類的平和を叫んでみたところで、この世界に幸福が訪れるものではない、それでは富士山の頂上に到着できないのだということ、はっきり知ってもらいたいです。

次に、先刻の学生諸君の意見発表の中に、われわれの人生で一番大事なのは感情なんだ、という意味の発言が、二、三見受けられたことについて、私の意見をいっておきたい。結論を先にいえば、それは少し雑駁なとらえ方だと思ふのです。観念的、概念的なものがまずいことはいうまでもない。しかし、情意的な生活態度が正しく保たれることが必要であるにしても、それを概括してしまって「感情が大事だ」といってしまつては、また問題が新しく起きてしまう。感情のあり方、生まれ方、発露される内容そのものに問題がある。つまりそ

の人の情意感覚が正しければその人の歩む道は正しくなるわけです。どうかそこをとらえていただきたい。感情そのものが大事なんだ、というふうに考えることはきわめて危険です。やはり一番大事な問題は、人間としてどのように生きてゆこうとするか、自分個人、自分の対人関係、対社会関係における自分の歩み方、対処のしかた、それらの態度を意志的に決定することにあると思う。そうすると、感情が大事だということではなく、むしろ意志が大切なことになりはしませんか。別の言葉でいえば、意志を定め、意志を整えていこうとするスピリット、それが大切なのだということになりはしないでしょうか。そしてその意志、スピリットを、自分の日常生活にどのように持続させていくか、さらに、その持続を可能ならしめるためには何が必要なのか、そこが大切な問題になってくるように思います。同時に必要なことは、意志を鍛えることです。さらに意志を貫くことです。さらにその意志を支えていこうとすること、これを伴わないでただ意志をもつと試みてきたところで、意味をなさないだろうと思う。

そこで、意志を鍛え、貫き、支えていくためになが必要かということになり、そこでこの合宿で大きな課題として提出している友情の意義がクローズアップされて来ます。友だちというものが必要になって来るということです。だから諸君の間で平素友情とか友だちづき合いとか、簡単にいっているその「友」ということは、軽薄な交わりでの友と、ここで求められてくる心の友、道の友、学問の友とは、全く異なるものであることを知ってもらいたい。正しい友情の支えというものが、人生にとってどんなに必要なものになって来るか。そこにも気づいてもらいたいです。

まだ申したいことはたくさんありますが、時間もないので、最後にお手元にプリントして差し上げた一つの

詩を、みなさんとともに朗読しようと思います。この作者の三井甲之という方は、正岡子規門下の歌人です。いまから七年ばかり前に亡くられました。

詩の題は「沁刻」(しんこく)です。これは大正十五年の作で、題名の意味はしみじみと心に感じた思いをここに表白したいという意味でしょう。詩のなかの二、三の言葉を説明しますと、五のところに「世界に向かつて、世界文化単位日本の使命を宣言せよ」とうたっています。「世界文化単位日本」という言葉ですが、ここでは日本を行政単位としては握しているのではない。文化単位というのは、世界にはたくさん文化がある、そのうちいくつかは「単位」としての特色と特質をその中に持っている。日本の文化は、西洋文化といわれるもの、またそのほかのいくつかの特徴ある文化と同じように、単位たるの資格と内容と資質を持っている、という考えに立っての言葉なのです。すなわち世界の文化に積極的に貢献してきた主体性を認識しての表現であって、けっして排他的な表現ではありません。その点を心に留めて読んでゆきたい。

また、はじめのほうに、「祖国日本を礼拝(らいはい)し、しきしまのみちを、うたひあげ」とあります。「しきしまのみち」というのは和歌のことです。「祖国日本を礼拝し」という言葉は、はじめて聞く方もあろうと思う。この言葉の背景には、長い日本の歴史を貫いて、祖国のために生死したすべての祖先たちの愛国の情が、積もり積もって一つの生命になっている、という考えがあります。日本という国家には、永遠なる生命があるという考えです。だから政治的に見る国家とは全く別に、生けるもの、生命あるものとしての祖国が考えられているために、礼拝するという言葉がしるされたものと思う。

さらに「礼拝す」という言葉について説明しますと、私どもが相手に対して心を寄せるときに、目に見える

対象に対しては「愛する」という言葉を使うのが普通ですが、目に見えない仏とか神とか永久生命とか、またわれわれの亡くなった祖先たちが残した精神生活などを心に思い敬うときには、日本人が古くから使いなれた表現用語としては「愛」という言葉でなくて、敬するとか、祈る、拝むとか表現したものです。三井先生もそういうことで、ここに「祖国日本を礼拝す」とよんでいると思います。結局、祖国日本を愛するといえ、現実にわれわれが生きている日本だけがそこに浮かび上がってきましたが、目に見えないもの、長い間蓄積され伝えられてきたもの、それらのすべてを含めて心を寄せる対象に考えられているわけでしょう。

私は詩の朗読はうまくありませんが、これから読みます。みなさんもこの詩を心に味わいながらいっしょに読んでいっていただきたいと思います。

沁 刻

一

さびしい冬が来た。

土、石、木の枝、森、山脈、空の雲、すべてあきらかに目にうつる、さびしい冬が来た。

水上から水は流れ、行く手には山脈に夕日がてらす、さびしい冬が来た。

言はぬ思ひをほゝゑむごとき、うちにいのちの沁^しみゆくさびしさ、見よ、道のべの水田には、小草のびたり、みどりの若芽、冬とはいへど日のとる水田に、みどりの小草、さびし小春日。

三井 甲 之

二

うつし世はかなしきゆゑに、詩にきざむ、いのちの律動、ものみな枯れて、残るは地熱、祖国のいのち。
 ことある時は、あらはれいづる、しきしまのやまとだましひ、今の世の乱るゝゆゑに、息づきて、やうやく目さむるいのちの律動。

三

一ときもやすむひまなきいのちのかなしさ、防護のたゝかひ、やすむひまなし。戦ひ、戦ひ、進み、進め。

枯草原にふみ入れば、ふみしだかるゝ、その音のひびくしづけさ。みだれにみだるゝ、この世のありさま、今こそ、ひそめるものらの、むらがりて立つべき時よと、めぐる大地に、しづかに立てば、さびしからずや、空をゆく鳥の影さへ、まれなる夕。しづかにくるゝ天地の呼吸か、しづまる夜の歌をきかずや、悲ししらべを。月てりわたり、芝生の上に横たふ木かげ、小枝のうれにも、うたふそのこゑ。

四

有明ありあけの月とゝもにあくる夜の戸をくれば、稲をこく機械のひびき、遠くには自動車の警笛ひびく。
 人のつとめをつとむるときに、不安失すべし。

にぎやかに、ことほぎうたへ、貧しく苦しくつとむるわれらも、み国をまもる祖先たそのみ霊に、目には見えねど現うらしきいのちに、わが身をささげ、わが身をわすれよ。

五

しかしして、いま、宣言せよ、ほがらかに、世界に向つて、世界文化単位日本の使命を。

あらゆる苦難をあつめてせおい、いかならむことにあひてもたわむことなく、
わが立つ大地、――

祖国日本を礼拝し、しきしまのみちを、うたひあげ、よみつたへ、そこに生るゝ、現しきいのちの無窮の
進動、

そを

もろむけて

われら現し身に

いそゝがしめよと、

われらは

ともに

ひとしく

礼拝す

祖国日本を、

祖国日本を。

(大正十五年作)

はしりがきの感想文から

——ここにおさめた感想文は、合宿最終日の解散式の直前に、あわただしくまとめられたものの中から選んだものである。すべての参加者のそれぞれ体験した感想が、素直に書かれている。紙数の関係でここに掲載できなかったものがたくさんあるが、心をこめて書いてくれた参加者のすべてに、深く感謝したい——

学 生

- 来てよかった、ありがたかった……………長崎大一年 合原俊光……………二六九
- 暗中模索から脱出して……………鹿児島大三年 垣内拓……………二七〇
- 学問への意欲がこんこんと湧いてきた……………早大四年 三浦義信……………二七〇
- 遍歴から脱皮した喜び……………熊本大三年 平木節子……………二七一
- なにかしらほのぼのとした気持ち……………鹿児島経済大二年 小田原幸広……………二七二
- 語り合いの重要性……………東京薬大二年 古市洋子……………二七三
- いまの世にそうざらにないつどい……………宮崎大二年 徳田順作……………二七四
- 何のために学問をするのか……………早大二年 高木義雄……………二七五
- 人間の内面の問題が扱われている……………福岡大四年 藤吉和彦……………二七五
- 自分自身が白紙に戻された……………岡山大四年 岡隆夫……………二七六
- 耳に残る「温故知新」……………佐賀大一年 瀬戸靖子……………二七七
- 人生を正しく生きる闘志……………早大一年 山本博資……………二七八
- 求めよ、さらば開かれん……………長崎大一年 山浦英明……………二七九
- 全面的には賛成しかねる点もあった……………東大一年 大塚陸毅……………二八〇
- 友情の上に思想の展開を……………九大三年 政岡紀典……………二八〇

- 信じ合って生きて行こう……………法大二年 松浦正昇……………二六〇
- 苦しいときには、この合宿を思い出そう……………鹿兒島大二年 内野健吉……………二六一
- 前二回は少なからずショックを受けたが……………九大三年 村山光……………二六二
- 日本に生まれたことの喜び……………鹿兒島大一年 阪本千穂……………二六三
- 知らぬ間に友人が出来た……………早大一年 今村宏明……………二六三
- 天皇の本質に触れてもらいたかった……………慶大二年 西岡正堯……………二六三
- 胸がしめつけられるような気持ち……………修猷館高二年 今林賢郁……………二六四
- 事実をみつめて判断していこう……………九大一年 平義和……………二六四
- 班長は人間的に味があった……………中大三年 益満靖夫……………二六五
- 合宿に来るのには勇気が必要だった……………鹿兒島経済大二年 福田重人……………二六六
- 国を愛する国民性を……………鹿兒島大四年 七夕照正……………二六七
- 落ち着いて語る人に愛着を感じる……………慶大三年 大城俊彦……………二六八
- 価値ある自己を生み出そう……………玉川大二年 杉光慶子……………二六八
- 経済学の研究方法について……………法大二年 福島正美……………二六九
- 前途に光明が開けてきた……………鹿兒島大二年 古森正興……………二七〇
- 同感などタツくらえと思ったが……………熊本大二年 長浜隼人……………二七〇
- にじみ出てくる深く澄み切った感じ……………修猷館高二年 小田部順一郎……………二七一

- 事物の実性をみつめたい……………島根大二年 小山安正……………二二一
- すぐには納得できないが……………長崎大一年 千綿国彦……………二二二
- 心の結ばれた同胞がふえていく……………明治学院大四年 森 純英……………二二三
- 裏付けのある発言をすべきだ……………早大一年 仲 和俊……………二二四
- 日本人には天皇が必要なのだ……………長崎大二年 尾形紘行……………二二五
- 医学と哲学は元来不可分のもの……………九大一年 木田浩隆……………二二六
- さらに強い友情のきずなを求めろ……………早大三年 福島宏之……………二二七
- 学校差へのコンプレックスが解消した……………高崎経済大三年 琴田泰之……………二二八
- 得がたい感銘のかけに要望したいこと……………東大四年 斎藤正治……………二二九
- 自分の心の窓が開かれた……………西南学院大三年 吉村兵吾……………二三〇
- 自分で消化することをしなかった……………鹿児島経済大三年 八木 忍……………二三一
- 諸先生方とひびぎを交えて話し合いたかった……………都立大四年 古賀信孝……………二三二
- 求めて来た同じ日本人を探し得た……………教育大一年 池田恒夫……………二三三
- 精神面の訓練に多大の暗示……………滋賀大三年 若尾信久……………二三四
- 今後の勉強へのよき導き……………東洋大二年 末吉伸市郎……………二三五
- 自分は人間を信じたい……………早大二年 山崎芳信……………二三六
- もしこの合宿に来ていなかったら……………熊本大三年 川添設代……………二三七

- 日本を愛することがわれわれの使命……………法大二年 引地 康夫……………三三
- 古典の講義がよかった……………亜細亜大二年 亀井 孝之……………三四
- 確固とした勉強の基盤を立てたい……………熊大三年 坂田 道子……………三五
- 人間のまごころに触れた気がする……………鹿兒島経済大一年 鮫島 健治……………三六
- 言いたいことはただ一つ……………立大二年 石井 公子……………三六
- 悲壮感にあふれすぎている……………滋賀大三年 肥田 興一……………三七
- 空理空論に陥らぬようにしたい……………熊大四年 坂本 孝一……………三七
- 正しい方向を見出すために真剣に討議しよう……………東大一年 下村 徹嗣……………三八
- 全学連が学生のすべてではない……………日大一年 千葉 昇……………三九
- 総合性と意志と……………岡山大四年 三宅 将之……………三〇
- 人生観の焦点が小さすぎた……………修猷館高二年 井上 慎一……………三〇
- 世界の歩みや政治に目を向けよう……………長崎大二年 西崎 道教……………三一
- 真実なものに対処する決意を得た……………鹿兒島大三年 村永 直美……………三二
- 自分の考えを外に表明すべきだ……………鹿兒島大四年 鳥飼 克美……………三三
- 未知の人に隔たりを感じなかった……………神戸大一年 村木 貞之……………三三
- 心を支える「何ものか」が暗示された……………鹿兒島経済大二年 蓑毛 長英……………三四
- 自分の意見を的確にいうことのむずかしさ……………鹿兒島大四年 羽田 光子……………三五

帰省してからよく考えてみたい……………神戸大二年 小林 邦 宏……………三六
 学生時代最後の合宿参加を終わって……………鹿児島大四年 湯通堂 義 弘……………三六

一般参加者

学生諸君もりっぱだった……………大分県 商業 三重野 悌次郎……………三七
 やはりまことの友が見出された……………熊本県中学校教諭 牧 野 祐 児……………三八
 本当に楽しく過ごした……………大洋造船株式会社 高 橋 亨……………三八
 視野を広く思いを深く……………神奈川県高校教諭 中 村 昭……………三九
 自分に何か鉄ついを下されたような気がする……………神奈川県高校教諭 梶ヶ谷 一 郎……………三九
 三つの感想……………神奈川県高校教諭 亀掛川 博 正……………四〇
 十年二十年後の光となろう……………会友・熊本県自由文教人連盟 谷 鉄 馬……………三二
 清みなふんい気であった……………会友・熊本県中学校教諭 古 市 庸 夫……………三二
 傍観者の態度の卑怯さを意識……………鹿児島県高校教諭 白 尾 達 哉……………三三

来てよかった、ありがたかった

長崎大学（経）一年 合原俊光

私がこの合宿に参加させていただいて、最も強く感じたことは「来てよかった。実にありがたい」ということです。その有難いと感じたことのうち一番大きなことは「勉強したい」という意欲をかきたててくださったことです。実際いままで漢（ばく）然と考えてきた自分の学問観、学問に対する態度というものが、いかに不安定で幼稚なものであったかを、つくづく反省させられました。自分の周囲の言葉から批判し、攻撃するだけでは、何ら社会的な役には立たない、まず自分自身の現実の、また未来の「生き方」というものと絶えず真剣に取り組んでいくんだという決意を固めて、きょうから勉強していこう。そして学園に帰ったら、一人でも二人でも、このような真剣な態度で勉強にいそむ心からの友を得るように努力したい。それには確固たる意志を貫き、支えていくだけのゆるがない決意が必要である。心から腹を割って話し合うことのできる友を、この合宿教室の中で得たことは、さらに大きな喜びであった。

暗中模索から脱出して

鹿児島大学（文理）三年 垣内拓

「暗中模索に一条の光明を得た」——これが四日間の合宿を終えて、身にしみて感じた実感です。しかし、それまでには痛いほどの心苦しい重圧感に悩まねばなりません。自分の過去二十年の生活が、いかに不安定な漫（まん）然とした空しい日々であったか——まったく恥じ入りたい気持ちです。私はこの合宿生活で、

団体生活の楽しさ、きびしさに心打たれました。元来なまけ者の自分は、もっとこうした一種の束縛(はく)の中に身を置かねば、自分自身の未熟さもわからぬし、日本人でありながら自分の祖国に対する考え方もまともでない、という愚かさにも気づきもしないと思いました。自分がいかに無力で、微少な存在であるかは、うすうす感じていたが、(それ故この合宿にも参加したのですが)それを徹底して思い知らされました。しかも自分もその気になれば人後に落ちずにやれそうだと、いうささやかな希望を見出したわけです。大地に足をしっかりと踏まえながら、しかも物事を大局的に見るよう努力し、自己を磨くため不断にこの合宿の感銘を大切にしたいと思います。もちろん全部が全部わかったわけではないのですが、そういう気概、気魄を持つとともに一条の光明をほのぼのと感じた「雲仙合宿」でした。

学問への意欲がこんこんと湧いてきた

早稲田大学(文)四年 三 浦 義 信

私は自分自身のこと、日本のこと、世界のことについて、いろいろと考え続けて現在に至ってきたが、いままで自分が考え、また行なってきたことについて、ある程度の自信は持ちながらも、この合宿における諸先生のお話によって、今後の自分の勉強に対する自信が一段と深められ、学問への意欲がこんこんと湧いてきたような気がします。いままでいろいろなことに悩み苦しんできた私ですが、この合宿におけるさまざまの体験によって、今後の勉強と人生に大きな転機を得たことを心から感謝しています。

遍歴から脱皮した喜び

熊本大学(教)三年 平 木 節 子

長い間私は偽らない自己、理想と欲望という、本当の自己のみに関するものをめぐって悩み闘ってきました。しかしふと気がついてみると、自分は一個の人間であるとともに、社会の一員であるということ忘れていた。自分の属している社会環境に対処する自己を持っていなければ、本当の人間ではないと気づいたのです。このときこれまで私たちが学校で受けた教育は、自分が日本という民族共同体に属しているということを見せつけてくれなかったし、その中における態度を暗示してくれるものさえほとんどなかった。この会では、これをすどく教えられ、社会の中における自分の自覚、取るべき態度などを知り得たと思います。一年前に参加したときには、この合宿で聞かされるのが、何となくむずかしく、民族意識とか国家とか愛国心などが、頭の中に一種の定義のように入ってきました。その時にはそれで感動していたのですが、合宿から帰ってみると、友だちにそれをつつかれて、やはり地についていない観念的理解にすぎなかったと感じました。そしてそのときから、日本の国家、国柄、国体などを、私たち自身の人間の本性と考え合わせてみなければならぬと思いがちでも、それらがいかなるものなのか、その存在理由さえわからなくなりました。今回はその疑問をかかえたままです。徳太子の「和を以て貴しと為す」という言葉、ならびにそれについてのお話などでした。これがいまままでの疑問をとくカギではないかと思えます。謙虚な気になって人間が行ない得る「和」、それを感じ得たことは、私の得た最大の収穫でした。輪読の形をとって講義してくださったことも、たいへんありがたく思っています。

なにかしらほのぼのとした気持ち

鹿児島経済大学(経)二年 小田原幸広

私はこの合宿で、右か左かを議論するのではなく、それを超越した、同胞感の探求を聞き取った、もちろん聞けなかったわけではない。全体討議、講義、その他国文研の諸先生から大いに聞かされた。ただ最初の二日間は期待が大きかっただけに、少々落胆したような気持ちでした。しかし二日目の夜の班別討論で、小田村先生のお話を聞いているうちに、なるほど自分は誤った態度をとっていたな、という気がして大いに反省しました。

この合宿での学問的な収穫も大きかったが、それ以上に人間的な面で、大いに自分の欠点を見出したことを非常にうれしく思い、何かしら心がほのぼのとしたような感じます。今後も大いに勉強して、少なくとも一人前の人間になるように努力しようと思います。

国文研の先生方や大教協の先生方にはただただ頭がさがり、感謝の念でいっぱいです。

語り合いの重要性

東京薬科大学二年 古市洋子

昨年の参加で、自己の精神形成への足がかりをおぼろげながら感じとって東京へ戻った。だが、これだけの自己への刺激では、帯にもたすきにもならない状態であることに気づいた。遠方ではあるが、再度参加して一段と明確なものをつかみとろうという気持ちと、小林秀雄先生のお声を直接聞きたいという願望にかられて来

た。しかし、私の参加した班別討論は、心の触れ合いというものにほど遠いものだった。精神形成への努力、精神的支柱を求める努力と、真剣にものを考えようという熱意が欠けていた。班別討論の時間が短かった理由もあろう。だが、ことしが最後の参加になろうという自分にとって、今回の参加に少なからぬ期待をかけていただけに残念であった。しかし自分の精神的支柱について、以前より明確なものをつかんだことは確かであった。それは日本人であることをしみじみと味わうため、みずから卒先して勉強し、今後それをバックボーンとして社会生活を営みつつ、その生活自体を精神的支柱にするというのが、一番自分に適した方法であるということであった。忙しい学生時代に、張り切つてがむしゃらに専門外の本を読むこともよいが、ない時間をさかねばならない自分にとっては、それは非常にづらい。それでいまずぐにはやれなくとも、一生の課題としてやっつけていこうと思う。

少々気になったのは国文研の方たちが、女性を軽視されているのではないかという気がしたことである。この理由はこの会の大きな目的の一つが、心底において触れ合う友を作ることにあるのなら、女性同士で話し合える正式な討論時間を用意していないのは、どういうわけかということだ。

私は三晩通して六、七時間ぐらしか睡眠時間をとらなかつたが、張りつめていたせいか、身体は元気であつた。友らとの語り合ひは、睡眠時間をきりつめて連日続けられたが、とくに女性同士で話し合うのでなければ、スピリットを鍛え、志を貫くための励ましの友を得るのは非常に困難なことであるように思う。しかしそういうものを求める心、努力がなければ、いくら時間があっても駄目であることは百も承知しています。女性の社会的重要性、子供の大切な教育に携わる女性、後世を背負う子供を教育する女性の、この会への参加の重要性に目ざめていただきたいと思います。

いまの世にそうざらにないつどい

宮崎大学（農）二年 徳田順作

こんどは二度目の参加だが、前回と同様多くの未知の人々と語り得たことを喜んでゐる。私はかねがね「私たちに自由があるのか」ということを考えていた。私が信ずること、真実と思うことを素直に言えば、すぐ世間の人や友人たちは、それを政治的イデオロギーと結びつけて敵対関係になってしまふ。そういう風潮がいまの社会には充満している。息苦しいことだ。それで多くの人は口をつぐんでしまふ。口を開けばものさびしいことになるからである。こういうところからは国民同胞感は決して生まれてこない。そういう点で国民文化研究会の合宿は実に意義があると思う。何も自分の思う事を包みかくすことなく、人間と人間がぶつかり得る機会は、いまの世の中、学生生活の中にも、そうざらにはないからである。

何のために学問をするのか

早稲田大学（政経）二年 高木義雄

私はこの合宿に参加して学問に対する指標を与えられたように感じています。

参加の動機は、学問の本質を究明するといった根本的なことではなく、二つのイデオロギーの対立の渦中であつて見失われそうになっているもの、すなわち「国」ということについて学びたいということにあつたのですが、こうした問題を超越して、学問をする心構え、なぜ学問するかということを明確といわないまでも、そのアウト・ラインはとらえ得たと感じています。

私は当初、この会の目的とするところが、失われそうな「国民同胞感」の研究、日本には日本の伝統があるはずだからそれを研究しよう、というところにあると思っていた。またたとえそれだけであっても、いままでも気づかなかったか、あるいは潜在的には気がついていても現代思潮に押し流されて、あえてそれに対して目をつむっていたかはわからないが、ともかくこうしようした国民として当然考えねばならぬ問題と取り組もうとして参加した。もちろんこうした気持ちからだけではなく、一抹（まつ）の不安もあった。というのは私たちの世代は、これまで受けてきた教育の影響もあるだろうし、また社会情勢にもよると思うが、「国民」とか「国家」とかいう言葉に、何かしらレジスタンスを感じるのです。私自身正直に言ってそうだった。そうした気持ちを感じるからそれではいけない、何も学んでいないのに既成概念で断定するのではないと思ひ、これを解決しようとして参加した。

参加して確かにこうした点はよく学ぶことができた。しかし私にとっての収穫はさらに大なるものがあつた。前述したとおり学問に対する心構えといった事柄、あるいは本当の友情とはどういふものであるかを体得したことであつた。書物を読めば知識が増す、だが知識の多いことと人間的に完成されていくこととは違う。そうしたことも、強く心に感じた一つであつた。

人間の内面の問題が扱われている

福岡大学（商）四年 藤 吉 和 彦

私はことしは静かにまた虚心胆懐に、皆さん方の意見を聞きたいと考えてやってきました。昨年の合宿は三池争議、安保闘争と問題多い年の合宿であつたので、必然的に現象面の政治問題が中心であつた。しかるに、ことしは一応国内が静かであるため、本年の合宿は人生の中心問題、生き方、友情、禅など人間の内的形成の問題

に重点が置かれたように感ぜられ、実に愉快でした。政治も経済も国際政治も、すべて生々しい矛盾を内包する人間そのものが動かし、またそれによって人間ひとりびとりが左右させられるのであるから、人間として最も大事な問題について論じ得られたことはこの上ない喜びです。私も大学四年で学生生活最後の合宿なので、ここにお互いの心のふるさとを確認して、これからの人生を生きていきたいと念じています。またこの合宿の体験を人生の教訓としたいと考えています。

自分自身が白紙に戻された

岡山大学（法文）四年 岡 隆 夫

この四日間、私はどれほど多くの収穫を得たか計り知れない感じがします。木内先生からスケールの大きなものの見方、総合的な握の仕方をしなければならぬこと、また小林先生からは独得のしかもそれが最も適切であると思われるものの考え方を教えていただき、いかに私自身がスケールの小さな人間であるかを、本当にえぐるようにきびしく悟らされ、自分自身が全く白紙の状態に戻されたように思われました。ここで力説されたことは、日本国家の健全なる発展と日本独得のすぐれた文化を築き上げる大目的と理想に向かって邁進すべきことであり、そのためにはまず、私自身を鍛え上げ、私自身の内心の信の確立に向かわなければならぬことでした。またそのためには絶対にくじけない意志を養うことが必要であり、一刻一刻の機会をのがさず、世の荒波に流されてしまうことなく、寛容な度量と宗教的な修練を積みながら、私自身の人生態度を培（つか）か）って行こうと思っています。

耳に残る「温故知新」

佐賀大学(教)一年 瀬戸靖子

この会に初めて参加しましたが、まず自分の勉強の足りなさがしみじみとわかり、いま目がさめた感じではないです。これからは新聞をじっくり読み、日本と世界の情勢を知らなければいけないと思っています。私は班で何の反応も示さず、もっぱら聞き役であまり発言もせず、班の方々に迷惑をかけてすみませんでした。教えを受けるものはおのれをむなしくして聞かなければと思ひ、男子の社会的な見方や思想を聞き、なるほどそういう面もあるのかといろいろ感心させられました。この合宿で多くのことを学び、また感じとったわけですが、特に花田先生の「温故知新」というお話が強く耳に残りました。これまで私は友だちと人生面について語り合うというようなことは全然なかった。しかるに、合宿が終わろうとする現在、何事も体験を通して素直に自分の考えを主張できるようにならなければダメだと痛感しています。また熊大の方では月に二回ほど集まり、不安や悩みなどをざっくばらんに話し合い、勉強する会を持つことに決定したそうであらうと、思っています。二日目あたりまでは緊張感で窮屈なようでしたが、だんだんと友だちもでき、「よかった」と思う気持ちでいっぱいです。

人生を正しく生きる闘志

早稲田大学(理工)一年 山本博資

三泊四日、講義、討論の連続で本当に身心ともに疲れた。しかしこの疲労は、快いものとして感じられ、心

の底から人生を正しく生きようとする闘志が湧いてくるのをおぼえる。

諸先生や先輩の方々の話を聞くと、自分の不勉強がしみじみと感ぜられ、頭の中がバラバラになるような気がした。しかし今後の自己の学問の方法や態度、人間としての生き方のキッカケがつかめたようだ。この合宿中に最も強く感じたことは、自己（個人）が人間としてどのように生きるか、またどうあるべきかということについて、ともすれば外に向けがちな目、あるいは力（これらは若い私たちとしては大切にすべきものではあるが）を、もっともつと自己自身の中に注ぐべきだということであった。

なおこの合宿に参加するまでは、ここでは何か教義めいた理論などを押しつけられはしないかという一抹の不安があったが、現在この疑いもきれいにぬぐい去られたことは、なによりうれしい。

求めよ、さらば開かれん

長崎大学（医）一年 山 浦 英 明

大学に入學してはじめてのうちは何も気づかなかったが、しばらくするうちに自分の心の中にすぎ間があることを感じた。これをなんとかして解決しようとしたのが、参加の大きな動機です。いままで身近かに聞くことがなかったいろいろのお話を四日間にあたって諸先生方から聞き、僕の心の中には大きな変革が起こった。いま思うと、それまでの自分は何もを考へる態度が、あまりに浅薄であったようだ。入学早々の私が、学生生活の中にこのような世界が存在していることを知り得たことは、何という喜びだろうか。僕自身は、この合宿である先生の言葉の一端から次のことを感じた。要するに最も頼りになるのは自己のみだ、これをしっかりと正しいもの総合的なものにしなければならぬ。そのためにはあらん限りの努力を惜しむべきではない。求めよ、さらば開かれん”であると思う。

全面的には賛成しかねる点もあった

東京大学（教養）一年 大塚 陸 毅

私が合宿に期待していたことは、他の学生たちが現在の日本をいかに考えているか、その一端なりとも知りたいということであった。期待どおりとは行かぬまでも、自分とは違った考えを持つ人たちに接することができ、大いに得るところがあった。私自身、まだまだ不勉強のため、諸先生の講義をじゅうぶんに消化し得なかったが、まだ全面的には賛成しかねる点もあった。その一つに天皇制の問題がある。私は合宿参加前からこのことにはとくに関心を持ち、国文研の方々がいかなる見解をもっておられるだろうかという点を注目していた。しかし先生方の意見は僕の意見と対立するものであった。それはいままで自分の考えていたのとは全く異なった意見であり、現段階の私には残念ながら納得できない。ただ今後、さらに深く考えるための材料を提供していただけたことには感謝している。一層良く考えてみたいと思う。

友情の上に思想の展開を

九州大学（法）三年 政岡 紀興

私はこの合宿にこれという動機もなく参加した。しかし、いま三泊四日の合宿を顧みて、おおいに自分にプラスになったと思っています。何しろはじめての経験なので、最初は不安と希望とが交錯した。そのうちとくに班別討論をはじめ、班の毎日の生活を通じて心が開けてくるような気がしてきた。生きる喜びというの
は、こういうことかも知れないと感じた。私はこれを機会に、この合宿で得た友だちとおおいに心を通じ合

たいと強く感じたわけですから。そのようなことに努力しながら、思想なり考え方を論じ合うことが大切であり、またそれでこそ議論はより有意義なものとなると信じます。

信じ合って生きて行こう

法政大学（法）二年 松 浦 正 昇

まず、第一日目の小田村先生の時間に、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の本を輪読したとき、私は久しく忘れていた古典に触れさせられた。そのとき現在の世の中の道義の混乱、当たり前のことか誤って通っていることに思い当たった。それというのも、皆が日本をふり返えてみようとしなからず、日本の精神文化に立ち戻ろう、という気持ちが欠けているからだ、と私は多少興奮のおももちで自覚したのである。

次に私は木内先生のお話を聞き、先生独自の大局的なもののかみ方と考え方が、先生の自信のあふれた講義の中からとうとうと流れ出てきたのはただ感服させられた。また小林秀雄先生も同じような面を持っておられた。ニュアンスこそ違え、そのお話の中に小林さんの人格がにじみ出ており、ただただ感心せざるを得なかった。この会には自分自身を鼓舞する意味から来年もまた参加してみたい。というのもあまりにも自分の無力感を味わったからです。それに、人間同士が信じられないといわれている今の世の中で、国文研の方々がお互いに深く信じ合って、行動しておられる姿をまのあたりにみて、強く心を打たれたからです。宗教という信仰の形態はなくとも、信じ合うことはできる。この社会を形成しているのは人間なのだ、信じあって生きて行こうと、強く感じさせられた次第です。

苦しいときには、この合宿を思い出そう

鹿児島大学（農）二年 内野健吉

私は今度の合宿に参加できたことを大変意義のあることだと思う。いままでの生活を振り返ってみて、私自身知ろうとせず、学ぼうとしない無気力さであったことをつくづく痛感させられた。こんどの合宿に来ていままでも知らなかった、また誤っていた点を教えられ、またここに集まった学生諸君が、いかに真剣に学ぼうとしているか、また学びとっているかを知り内心恥ずかしくなった。しかしそのとき、われ知れず、おれも負けていられるか、というファイトがこんこんと湧いてくるのを覚えた。これから自分が苦しみ悩んだときには、いつもこの三泊四日間の貴重な体験を思い出したい。

前二回は少なからずショックを受けたが

九州大学（経）三年 村山光

私は現在自分自身を見失っており、自分の考えることにもなんとなく自信が持てない。日々が何か空白のよう感じられ、それがまた非常につらい。私がこの合宿に参加したのは、このような空白感を埋める機会になればと思い、また先生方のご熱心な言葉に、何かきっかけを見出すであろうと考えたからです。現在私はこの合宿が空白感を埋めるための進路を指示してくれたと思っています。私はこんどで三回目の参加ですが、この会はイデオロギーを越えたものであり、日本人としての同胞感を、和または友情の形で求めて行こうとしていることは、じゅうぶん理解し得たつもりです。これが私をこの合宿へ足を向けさせたものであり、もしも

このことがなければ、前二回の合宿で少なからずショックを受けた私はとうてい参加出来なかつたと思っています。

日本に生まれたことの喜び

鹿児島大学(教)一年 阪本千穂

私は自分が日本人であり、日本に生まれたことについて、これほどの喜びと誇りを自分自身の実感として味わったことは、かつてなかった。これほどすばらしい国である日本を愛することなしには、世界における立派な日本人として、さらには正しい人間として、生きていけるものではないと考えさせられた。ほんとうに素朴(ほく)な人間らしい感情、それが素直な祖国愛であろうと思う。

また諸先生方の真心あふれるご講義をお聞きしたときに、そのご熱意、真剣さに心を打たれた。何事に対しても真剣で誠実であること、これこそ人々の心に何かを訴え感動させるものだと思う。このような会に参加させていただいたことを心から感謝します。

知らぬ間に友人が出来た

早稲田大学(政経)一年 今村宏明

合宿に対する私の期待は大きかった。

国民同胞とは何だろうかということ、また来たるべき新時代の指導原理とはいかなるものだろうか。そしてまたどうしたら本当の日本を、そして世界を作ることが出来るだろうか。

合宿が終わりに近づいている現在、私の頭の中は諸先生方の言葉や同じ班の友人の言葉でいっぱいである。私はそれらの一つ一つを一人で静かに考えたい。学問に対する私の今までの態度が、あまりにもいい加減であったことをいまさらのごとく反省した。

私は東洋の精神的文化を深く勉強してみたいと思う。日本国家の本来の使命を考えそれを実践したい。天皇の本質をも古典を通して感得したい。このようないろいろのことを、私は日を追うとともに一つ一つ解決してゆくだろう。

知らぬ間に一人の友人が出来てしまった。これを真の友情に高めるためには、なお時間を必要とするだろうが、僕はそれをかちとるために努力するつもりである。

この機会を与えてくれた皆様に感謝する。

天皇の本質に触れてもらいたかった

慶応大学(法)二年 西岡正堯

はじめてこの合宿に参加したのであるが、内容はすばらしいものであり、まさに将来の日本を背負って立つわれわれにひしひしと迫るものがあった。特に木内先生の総合的見地からの世界の見方には、現状を知る上でも、またいままでの考えを反省する上でも、はっきり理論的裏付けを示していただいたような気がした。ただ皇室、日本の国体の本質について小田村先生が最後にかなりはつきりいわれたけれども、もっと深くいかに皇室の尊厳が大事であり、明治天皇が日清、日露戦争の当時とられた態度や、今上天皇が今次大戦の終戦のときを示された態度など厳然として歴史に残されている事実をもっと深く解明、指摘していただきたい。

胸がしめつけられるような気持ち

修猷館高校（高校生）二年 今 林 賢 郁

私は大学生の方たちのなかに、とくに入れてもらって参加した数名の高校生の一人ですが、感想を一言でいうならば、いまの私の心は昂（こう）奮躍動しています。胸がしめつけられるようなたとえようもない気持ちでいっぱいです。単なるイデオロギーの問題をはるかに超越し、人間の本質に触れたような気がしてなりません。赤裸々な人間像をとらえることができたことをうれしく思い、そしてこれが将来に永続することを望んでやみません。ひいては、これらの人々によって（もちろん私自身もこの中へつき進んでいきます）誇りある日本民族の伝統を、そしてその魂（精神）を奪回できるものと確信します。私自身現在はいきり目には見えないけれども、おそらくこれが祖国愛かもしれないと思うものが、私の胸中に燃えさかっていることを、この合宿の最後に告白して感想にかえたいと思います。

事実をみつめて判断していこう

九州大学（法）一年 平 義 和

大学に入学して約百日、聞くこと見ることすべて自分の心を満たさぬものばかりだった。そのとき、この合宿のポスターをみて「これだ」とこおどりした。合宿の記録「国民同胞感の探求」正統二冊を読み、かねて自分が考えていたことと合致した点を見出し、これはすばらしいという感銘を受け、参加を決意した。合宿に参加してまず感得したことは、国文研の人たちが日本の現状を憂え、それを是正しようと激しい熱情を持っている

るということであった。「これはボヤボヤしておれないぞ、しっかりしなければ……」と心身の引きしまる思いがした。私がこの合宿で聞いた講義は、それ以前に何らの予備知識もなかったもので、四日間では消化できなかった。しかし先生方の講義をほとんどそのまま自分の心の中に素直に受け入れることの出来たのは確かである。この自分の心の中に受け入れた講義を、これから先しっかりかみ砕き消化し、自分の信念を確立していこうと考えている。この合宿で獲得したものは第一に、物事を考えたり、言ったり、行なう場合に、自分のこれまでの体験に即して行ない、事実をしっかりと見極めて物事を判断してゆく。第二に、日本のこれから進むべき方向は、日本の歴史をしっかりと見極めて決めるべきである。(このことは自分もかねてから考えていたが、ここで確かめられた) まだ他にもあるが——わずか四日間、何か漠然としてまとまりがつかないので、出来ることなら来年もまたこの合宿に参加し、さらに確かめてゆきたい。不満に感じられた点は、もっと班別討論が欲しかったことである。本当の友人は、こういった討論を通じて作られるのではなからうか。また討論に油が乗ろうというときに、時間がきてやめなければならなくなることが残念だった。古典を読むときの注意は良かったが、どんな本があるのか具体的に教えてほしかった。

班長は人間的に味があつた

中央大学(商)三年 益 満 靖 夫

自分はこの会に大きな反発を感じながらやって来た。しかしその内容に触れるにしたがって、自分が日ごろ思っていたことが改めて新しい実感としてとらえられ、見直されて自分の中に入って来た。自分が反発を感じたのは、当初この会が右寄りのように感じられたからだ。しかし事実はそうではなかった。ぼくらの班長は人間的にも味があり、人の意見をよく聞き、皆とともに考え、解決への道を開いてくれた。ぼくらは日本国民と

して生まれた以上、よき伝統を守り、さらにそれをよりよきものとして次代に引きつぐべきだと思う。もし自分がアメリカに生まれたならば、アメリカ国民として生きてであろう。このことを思いつつ、そういう認識で周囲の人々に伝えてゆきたと思う。

合宿に来るのには勇気が必要だった

鹿児島経済大学（経）二年 福田 重人

われわれは学園内の騒々しさのために、自分を見つめることに無頓着になりがちである。少なくともきまでのぼくはそうであった。ぼくがこの合宿に参加するためには、その意味で勇気が必要であった。

連日試験に追われ同級生との勉強の競争を考えると、個人的にはいかに「人間」をつくることの重要性を感じていても、どうしても世の中の競争に負けてしまうのではないか……というあせりと不安が先に立って、この合宿で取り扱っているような問題に飛び込むことはできなかった。そしてこのことはおそらく自分ばかりでなく、一般の最大の悩みでもあるように思われる。

ぼくはこの合宿でとくに多くの知識を得たとはいえないかもしれない。いなむしろそういう面では、何もかもわからなくなってしまう。しかし何もわからなくなるほど、いままでのぼくの勉強が、なんと浅薄なものだったかを悟ったようである。また各地の大学の人たちと話し合っていくうちに、結局ぼくは大学では大きな顔をしているけれどまだまだ小さかったんだ、というなんともいえないようながなくさびしい、それでいて力強い体験をしたと思う。そして学問以前にもっと大切なことがある、それを学ぶことが本当の人生を生きるための出発点であることを痛感した。身をもってこのことを知り得たことをたいへんうれしく思っている。

国を愛する国民性を

鹿児島大学（文理）四年 七 夕 照 正

三度の合宿参加を通じて、私の心の底に深く残ったのは「温故知新」ということと、真の友を得たということでした。

「日々是新なり」という言葉があるが、この新しさを学び知るためには、どうしても古人の生き方、人生観を学び知らなければ、何のために人は生きているのかということをつい見失いがちになる。私はこの合宿を通じて聖徳太子のお言葉を学び、万葉集、金槐和歌集などの歌や、松陰の熱烈な祖国愛に生きた姿を知ることができた。また学園では、やろうとしてもやれそうにない「輪読」という貴重な体験もした。班別討論、輪読を通じて、班友との心の接触をはかることができた。友の真剣なる姿が頼もしく、まるで竹馬の友の如く感じられ、限りなくうれしい合宿だった。

私は現代に生きる青年として、いかなる心構えを持ち、いかなる使命を果たすべきかということが大きくわかってきたような気がする。今後はこの大きな使命感に従い、今日のこの志を忘れる事なく、ともすれば孤立しがちな心を友情交流の世界に投じて、友と励まし合いながら初志を貫くために努力したいと張り切っている。いまこう書き綴っていると、何かしら古人がそうせよと励まし、応援しているような錯覚をおぼえるのです。

在るべきものが、自然な在るべき姿で、在るべき所にあることが大切である。日の丸を掲げ、国歌を斉唱し、古人に黙禱（とう）をささげること、人を愛し、国を愛することが、国民の誰にとっても当然なことであるというような国民性を培（つちか）ってゆくように努力したいと思う。

落ち着いて語る人に愛着を感じる

慶応大学(文)三年 大城俊彦

私ははじめてこの合宿に参加した。たいへん有意義だったと感謝している。小林秀雄先生の講義、その他の先生のお話も謙虚な気持ちで耳を傾けた。現在の日本は確かに混乱している。学問が浅薄なために国を害する方向に走っているのである。しかも悲しいかな、日本の教育界は相対立している。そこで考えられることはわれわれ学生に勉強しやすい環境を与えてくださることだが、この合宿はその意味でまことに有意義なものだと思ふ。また大事なことは学問の方法論をじっくり研究することである。大部分の人は日本を愛している。しかし愛し方の方法論において異なっている。そこで混乱が生ずる。私はいまなにも知らない。世間のうわさに耳をかさず、直接東西の古典にぶつかることしよう。世の中には直接原典を読まず、ムード的にまた、利害を前提においてえらそうなことをいっている人が多すぎる。なにもわめくばかりが能ではない。落ち着いて静かに語る人に愛着を感じる。学究的態度に終始したこの合宿が、直接吉田松陰その他の原典を学ぶべきことを教示してくれたことを感謝する。

価値ある自己を生み出そう

玉川大学(文)二年 杉光慶子

あらゆる講師の方々の个性的なよさをもった講義と、豊かなスタッフでこの合宿が進められたことは、たいへんな驚きとともによるこびでした。私は現在東京である宗教団体の学生部員として生活していますが、これ

まで持ち続けてきた信念と日本人として考えてきた生き方が正しかったことを、この合宿で認識させられた。同時に、こんなに多くの真剣な学生が存在していたことを知って本当によるこびを感じ、感激しました。自己のうちにある内的な魂の叫びに従って、素直に行動し、より高いものへの自己没入から、新しく本当に価値ある自己を生み出すことにつとめようと決意しました。

経済学の研究方法について

法政大学（経）二年 福 島 正 美

私は経済を勉強する者の一人であるが、木内先生が経済学は、思想・政治・宗教など広い幅をもたせながら勉強しなければ、とうてい真の経済学にはならない、と講演されたことに深い感銘を受けた。小田村先生が説明された聖徳太子の「自行外化（げけ）を憶して以て心を調伏（ちようぶく）すといえども、若し自他の二境を存して修業せば、修する所広からず物と苦楽を同じくすること能わず、ゆえに勸（すす）めてまさに著（じやく）を離るべしと明かすなり」という言葉は、自分の日常生活、学問的態度に関して、たいへん有意義なものとなった。

前途に光明が開けてきた

鹿児島大学（医）二年 古 森 正 興

私は平素歴史をみるさい、原因、結果という単純な思考方法ですべてを見、すべてを知ったかのような気になってきた。だが、再びこの合宿に参加したいまは、それだけですべてが解決できるのか、それで歴史が理解

できるのか、また文化の何物であるかを知りうるのか、因果律の適用の無限の繰り返しだけで、果たして人間が理解できるのか、ということに強い疑問をいだいています。そして、この次元にとどまる限り、あらゆる認識は一面的なものに終わるのではないかと感じてきたのです。合理性というものを超越した、東洋文化という世界観というものが何となくわかってきたような気がし、日本人でありながら日本文化をいまままでほとんど身辺に感じえなかった私にとって、前途に光明が開けて来たような気がしています。

同胞感などクソくらえと思つたが……

熊本大学（工）二年 長 浜 隼 人

私はこの合宿に初めて出席した。正直に言って、パンフレットや「国民同胞感の探求」という本を読んだとき、一番心をひかれたことは、社会を見るときの立ち場や、現状の経済的政治的なのかみ方であった。体験による国民同胞感の体得ということがもしてできるのならどんなにうれしいことだろう！ だが、そんなことを公然と発表するようなお粗末な精神で何が同胞感だ、そんな同胞感などクソでもくらえと思つていた。ところが、ここに来て皆さんと一緒に生活していたら、そんなことを考えていた自分はずかしくなった。やってみなくちゃあ、ほんとにわからないと思つた。これが私の一番大きな収穫でした。青年らしく（他人に対する思いやりも必要であるが）若々しい情熱に迫られたらやってみるまでだ、そしてそれは出来るのだとハッキリ感じた。学校に帰ったら、ぜひ実行しようと思ふ。

にじみ出てくる深く澄み切った感じ

修猷館高校（高校生）二年 小田部 順一郎

ぼくの今の心境は「ここから帰りたくない」ということです。高校生として参加し、講義の内容はほとんどわからなかったけれど、何かもうこの合宿の全体からにじみ出てくる深く澄み切った感じを、この全身に受けているからです。ここにはいろいろな人が集まったけれど、この合宿を真剣にすごそうと思う気持ちが満ちあふれていた。僕には大きな経験、大きな喜びだった。そしてすばらしい幸福感を味わった。「帰りたくない」、しかし一年すればまた会える。この合宿の心を自分の心としてすごして行こう。また会うその日まで。

事物の実性をみつめたい

島根大学（文理）二年 小山 安正

この合宿に参加する以前、自分は自分なりに学生生活、人生問題、国際政治、人類の将来などについて、ある程度の心構えぐらいは持っていたつもりでした。しかしいま振り返ってみると、それは周囲のムードの中に埋没してしまっていて、気づかぬ間に「学生生活とはこんなものだ」という気持ちになっていたようです。だがこれではいけないと思つて、ここに来てみようという気になった。しかしここに来るについては、冒険的な恐ろしさもあった。だが合宿生活では、日がたつごとに、心に感ずるものがあり、学生諸君や先輩の方の心をこめたお話を打たれました。事物の実性を見つめて物を考えることの大切さを、肝（きも）に銘ずることが出来たような気がします。これがこの合宿での私の最大の収穫だったと確信しています。まだ疑問な点もある

り、来年までの一年間みっちり勉強し、解決の道を求めて再出発したいと念願しています。

すぐには納得できないが……

長崎大学(医)一年 千 綿 国 彦

初めて合宿教室に参加して、非常に驚いたことが二つある。

一つは、主催者の方々のご熱心さ。これほどまでも思われるほどご熱心であった。

もう一つは、参加者の方々及各講師の講義を聞いて、おれはよくわかったぞというような顔をしていること。あれだけの講義を聞いてみんな理解し自分のものにするには、四日間の期間では短かすぎると思う。また自分と違った考えや、自分には受け入れられないと思うようなことだつてあるはずだ。少なくとも私たちは、自分というものを持っている。だから講義全部に心を打たれたり、全部そうです、それとおりですなんていえるはずはない。あそこはどうだ、こうだと考えるはずなのに、講義全部に感動して、いままで自分の持つてきたものを捨ててしまおうとするのはいけない。もっと時間をかける必要がある。でなかったらこの合宿教室の講義に感動したものは、まったく異質の講義にも感動してしまふことになるだろう。「全学連の中の間違っている連中」と、「何でも感動する連中」とは、自分で考えることのない人たちだと思ふ。ぼくはこの合宿教室の講義には相当批判的である。いや、ぼくのまわりのものすべてに批判的である。批判して正しければ、少しづつ時間をかけてそれを取り入れたい。正しいということは自分の心で正しいと思うことであつて、外からいくらこれが正しいといわれても、自分の心で正しいと思わなければダメなのだ。ぼくは参加者の方々、何でも感動する人たちにならないことを祈っている。来年また参加させていただきます。

心の結ばれた同胞がふえていく

明治学院大学（経）四年 森 純 英

四日間の合宿を終え、ただほんとうに良かったという言葉以外にない。縁によって結ばれた同胞があすからお互いに手を取り合ってゆく、その機縁を作ってくださいと主権者のみなさまに心から感謝します。こうして心の結ばれた同胞が年ごとにふえ、そしてその一人一人が各自の持ち場で世の中の灯明になっていくとすれば、混乱と分裂のおそれある祖国も、やがて明るく力強い国家となるに違いないと信じて疑わない。私たちの心の奥底にひそんでいる歴史的な生命を、じゅうぶん心のなかくみとり、そこから湧き出てくるスピリットをもって、人生という彫像を正しく、美しく、清く刻んでいきたいと思う。あすの社会を作るために、真剣な取り組み方をしていく覚悟である。

裏付けのある発言をすべきだ

早稲田大学（理工）一年 仲 和 俊

正直に言って、合宿を終えようとする現在は、何も判断がつかなくなったようなほんやりした気持ちです。それは次から次に続いた講義にも原因があるが、少々いままでの自分の考えに少なからぬひびが入ったことが原因していると思う。東京に帰ってじっくりと考え直すつもりですが、この会に参加して確信したこと、つまり、自分の前々からの考えが正しかったと思っただけ三つあった。第一は裏付けある発言をすべきだということです。これは木内先生の講義を聞いてるときとくに強く感じた。このことはいまの学生、一般人も含め

て欠点だと思ふ。なぜ推測だけで軽々しく口に出すのか。はっきりした裏付けがあるならともかく、感じたことをすぐ口に出す。実に遺憾です。第二は何よりもまず個人を確立することが先決だということです。確かに日本のことを考えることは日本国民の義務です。しかし順序が違っていると思う。まず自分を真の人間、真の日本人にし、その中に真の同胞を見出す。そうすれば自然、各個人は日本のことを考え、日本はよくなると思う。第三には西洋の学問を盲目的に近い感度で崇拜している現代日本で、日本古来の古典に親しむことはきわめて有意義なことだと思ふ。以上三点たいへん有意義でした。

日本人には天皇が必要なのだ

長崎大学（経）二年 尾形 紘 行

期待と不安で迎えた第一日、津下、小田村先生のお話を聞き、自分の考え感じていたことと全く一致していたことにびっくりし、妙なことに反発さえ感じてしまった。いままでは独創的だとか、ひとりよがりだと思っていた自分の考えが、自分以外の人と完全に一致したことが恐ろしくさえ思われたからでした。この気持ちは二日目まで消えないままだったが、反省が深まるとともに、孤独だった思想に喜びを感じ、誇りさえ感ずるに至り、今後は確固たる自信をもって、この思想を進めて行こうと改めて決意しました。また合宿の全日程を通じてとり上げられた天皇制の問題について、ここに集まった多くの友らがその存続を願いながらも、すべての日本人に、天皇制度存続の正当性を論理的に裏付けることが出来ないのは、あまりに学術的な論理を強調することにあると思ひました。天皇の存在は、その存続についての論理の正当性いかによって、正当になるというものではなく、日本人が必然的に肯定してきたその感情の中に、大きな意味があるのだと思ふ。一言にしていえば、われわれ日本人には天皇が絶対必要なのです。

医学と哲学は元来不可分のもの

九州大学（医）一年 木田浩隆

参加者名簿を一覧すると、文科系の人たちが圧倒的に多いようです。おそらく、理科系の人たちは、自分の探究するものと、この合宿で追求するものとは違うのだ、と思っっているためでしょう。実は自分もいままですのように考え、何か不安めいたものを持ちながら、合宿に参加していたのですが、今回の合宿の途中で「医学と哲学は元来不可分のものである」という先覚の言葉を思い出す機会を得た。これには、実にうれしいというか心強いものを感じたのです。「医学」を「科学」と「哲学」から切り離してはならない——これは適当な言葉で表わし得ないのですが——医学を学ぶことは「人の道」を学ぶことでもあると思います。蛋白的なもののみが医学にあらず、ぼくはそう信じて、少なくとも教養部の残り一年半は一生懸命に精神的な面を追求します。それと同時に、無関心な理科系の連中に大いにこのことを伝えたいと思う。ぼくはいま、国文研のめざすものは一体何かなどというようなことは考えません。真剣な話し合いの場を提供してください以外に何か特定の目的など、この場には少しもないように思われます。人の誠実というものに触れるだけで満足でした。本当に先生方有難うございました。

さらに強い友情のきずなを求め

早稲田大学（法）三年 福島 宏之

ことしの合宿は参加学生も多く、考え方も総体的に穩健で、人のいうことも一応聞いてみようという人が大

部分でいい傾向でした。夏季合宿経験三回目の自分にも、多くを考えさせ決意させるものを与えてくれた。木内先生、小林先生のご講義をはじめ諸先輩方のご意見発表も、私どもに何かあるものを訴えかける力を持っていたことは事実です。だが、これだけが目標であるなら、単なる講習会でも間に合うのではないかと思います。か、寝食をともしながら、お互いの心を開いて話し合う、そしてそこで強い友情の絆に結ばれる、これこそ合宿教室の大きな目標であったはずです。例年に比べて日程が一日短かった理由もありましょう。しかし、私たちが何を求め、何をやらねばならぬかということ、もう少し理解してもらえたら、日程の組み方にも、もっと違ったものが出たはずです。私はこの国文研の合宿でしかできないものを、もっと追求すべきではないかと思う。

講習会的ふんい気からわき起こった決意は、参加学生にとって一つの重大な精神生活における転機にはなっただと思いますが、それは弱くてもろいものです。この合宿を心の底からわき上がるような国民同胞感の体験の機会にと願うのは、私があまりに効果だけをねらう浅薄な考えをするためであらうか。

学校差へのコンプレックスが解消した

高崎経済大学(経)三年 琴 田 泰 之

現在の青年学生は、人生の進むべき道しるべが定まっていないうに見受けられる。自分もその一人であるが、この合宿に参加した動機も、いまの自分の心の中にある空虚なものを、少しでもとり除くことができればという気持ちからだだった。その結果は、この合宿に参加したことによって、人生の進むべき道しるべが明らかになった、とまではいかないけれども、何かしら漠然とではあるが、自分の未来に光明がさしてきたような気持ちがあります。また自分は平素学校差に対するコンプレックスを持っていたが、こんどの合宿でこの問題は完

全に解消された。というのは、一つの班の中に数校の学生がいて、それらの学生と腹を割って話し合うことができたためである。わずか三日間の合宿生活だが、それはいままでの自分のすべての経験に匹敵するほど有意義なものであったと思う。

得がたい感銘のかけに要望したいこと

東京大学(法)四年 齋藤正治

さきほどの意見発表のさい、私は次の三点を述べた。すなわち

- (一) 若い世代が虚心胆懐に考えの場を持つことが貴重であること。
- (二) 物事を考えてゆくとき、まず手近な問題から始めて、あるいは国家とか社会とかを論ずるさいにも、身近な実感的事実から始めて、考えを進めてゆく態度が重要だと思われること。
- (三) どうしても分析的な思考方法に慣れ、それが身につけてしまった自分には(それが今日の若い世代の実情かと思うが)その分析的な思考方法に基づく社会科学、自然科学をどこまでもつき進め、その判断の確かさを歴史的事実という鏡に照らして検討したうえで、どうしてもそのような方法による解決ができぬ問題を、はじめ直感的な思考方法で解決したいと思う。しかし直感的な思考の分野と分析的な思考の分野と二元的に考えようというのではない。直感的な思考は、分析的な思考で解決できぬと知ったときの直感にこそ、意味があると思うからだ。

この合宿に参加して、いくたの得がたい感銘を得た反面、前記(一)と(三)の点につき不満を感じたことは否定できない。短時日という時間的制約の中に、あまりに多くのことを期待しすぎたため無理もないと思うが、それがかえって、各個人が自主的に問題を疑問と考え出した瞬間、あるいはその直前に、諸講師、指導員の親

切すぎる見解表明が、若干この自主的直感を妨げなかったであろうか。それはまた(一)に述べたせつかくの考えの場としての集まりの意義を低めていなければいいかと思う。

自分の心の窓が開かれた

西南学院大学(商)三年 吉村兵吾

初めてこの合宿に参加したいまの自分の頭の中は、少なからず混乱している。

最初の講義で、その場の異常なふんい気なふれ、驚きと感銘とで、自分の甘い感で合宿に参加してきた軽い気分はどこかへ姿を消してしまった。しかし日程が進み、合宿のふんい気に慣れてくるに従って、だんだん自分というものを取り戻して来た。あと三十分少々でこの合宿も閉幕となるわけだが、いまの自分は合宿参加前の自分とは違うのだということが、確信をもっていると思う。諸先生の講義によって、自分も前々から痛感していた自己というものの確立、および信念などについて少なからず心の窓が開かれたと思う。自己を確立して、世の諸々の点をみつめていくということについても、深く考えさせられたものがあり、きびしく指摘してくださった諸先生方に深く感謝している。

自分で消化することをしなかった

鹿児島経済大学(経)三年 八木忍

私はこの会に参加する前は、社会、政治、経済をながめる場合、あまりにも一方的で、ある事項に関して表裏一体としてみることをしなかった。このことはいまの学生の思想に共通した危険点であると思う。相手の話

が自分の持論と正反対なとき、最後まで聞く寛容さを持たなかったとともに、それを自分自身で完全に消化することをしなかった。以上が第一の感想である。

次に私はこの会に出席して、誠にはずかしいことであるけれども、教養というか知識というか、そういうものについて、自分のいままでの考えの浅薄さをつくづくと思い知らされた。

諸先生方とひぎを交えて話し合いたかった

東京都立大学（法経）四年

古賀 信 孝

講義をはじめとして合宿全体がすばらしかった。私たち日本人として当然考えなければならぬ問題を、こうした機会に、しみじみと考えることができて本当に喜んでゐる。現在の日本には、社会風潮に流されて自主性のない人間があまりにも多すぎる。これはそれを教えてくれる指導者が少ないことと、各自が自己を静かに考えることをせず、お互いに深味のあることを話し合える場もないからであろう。この合宿は日数こそ少なかったが、短期間でそれを実行した。もちろん不満な点もないわけではない。（たとえば国文研の方や大教協の先生方とひぎを交えて話し合う機会が少なすぎたことなど）しかし、現在を出発点として、今後この合宿の意義をじゅうぶん味わって推し進めていきたいと思つてゐる。

祖国、歴史、皇室の問題は私たち日本人にとって心のよりどころである。これらのことが、ここで真剣に扱われ論じられたことは、人間の生き方の根本に触れた意味で、深く感謝したい。

求めてきた同じ日本人を探し得た

東京教育大学（理）一年 池田恒夫

この合宿を振り返ってみて、時間のたつのがなんと短く感ぜられたことか、またその短い間に何といろいろなことが自分について起こったか、驚くばかりです。

私はこの会にはじめて参加したが、それ以前に長い間暗黙のうちに求めてきた同じ日本人というものを、ここに探し得たとしみじみと感じた。祖国を思う人々の集まり、この合宿では当然真剣な議論がかわされた。そして全く見ず知らずの人が、自分の体験を通して教え導いてくださったことに深く感謝している。ただもう少しお互いの交流の場がほしかった。班別討論などにもっと多くの時間をかけるべきではなかったか。しかしまだ自分はほんの未熟者だということ、しかも、私たちが浮動し不安定な日本を、これから背負って立たねばならないと感じたとき、痛切に自分の責務を反省させられた。私は努力を通じてのみ、自分の人間形成が進められると思う。

最後に私はこの会がその本質を失わないで、大きく発展することを希望する。なおこれまで私が見たり聞いたりしてきたいろいろな会は、その目的のために一方的な意見だけを話し合うことが非常に多かった。その点この会はいろいろな意見が交流されており、非常によいと思う。

精神面の訓練に多大の暗示

滋賀大学（経）三年 若尾信久

私ははじめてこの合宿に参加した。それゆえ、その趣旨などじゅうぶんわからなかったが、先年の合宿記録などを読ませていただき多少知ることができた。私は大学入学いらい、大学にはいつて勉強することが、実社会へ出てから有利であるという風潮の強いことに少なからぬ不満をいただき、精神面の訓練の必要さを痛感していた。私はそういう面で苦しみ悩み、いろいろ考えて日々を送ってきた。私はこういう状態だったので、これらの点をみなさん方が如何に考えておられるかを、班別討論でも問題とし、また諸先生方のご意見にもじゅうぶん耳を傾けた。この四日間を顧みて、私はこれらの問題で多大の暗示を得たことを確信し、帰省後、日数をおいて考えてみたいと思う。またそのほかいろいろの点で学生として、考えざるを得ない問題を提起していただいたことを心から感謝したい。

今後の勉強へのよき導き

東洋大学(経)二年 末吉伸市郎

現在の日本の大学教育には(とくに中央の私立大学では)心の友を求めるところのできるようなことは全然なく、この合宿のような生活環境の中で、数日間勉強することができたのは、私にとってたいへんありがたいことだった。いまの日本の学生運動が無軌道に走っているのも、このような合宿で静かに自己を見つめる機会がないからだと思う。だからこれから世界の大国日本を背負うわれわれ青年にとって、ぜひ今後この合宿を続けてもらいたいと念願する。この合宿のように精神力を集中して勉強させられたことは、私にとってこれまで一度もなかった。参加者たちのりっぱな発言も、今後の勉強へのよき導きとなったことを深く感謝している。

自分は人間を信じたい

早稲田大学（法）二年 山崎芳信

現在の自分の心境は、まさに心満たされた思いである。自分は昨年に続いて二度目の参加であるが、昨年自分がこの合宿で感じたことに比べ、ことしの感銘の度合いは幾倍になろうか、計り知れないものがある。常々自分は心の空虚感に対してある種の恐怖感を感じ、また悩みを抱いたこともしばしばあった。実に自分にとって最大の価値をもつと考えられるものは、心の充実感にはかならなかつた。自分は現在でもそう思っている。心の空虚感、われわれ学生のみならず、真剣に自己をみつめ人生を考える人たちにとっては、必ず襲われるものであると確信する。そこで自分が真心から、国文研の方々や大学教官有志協議会の先生方に対して感謝の意を表したいと思うのは、この心の空白感に悩むわれわれに、よりよき話し合いの場、真剣な検討の場を提供してくださったことである。自分はこの合宿が、イデオロギーを越え、真に日本民族としての同胞感を感じ、かつ日本の将来を憂える人たちが、本当にフランクに話し合うための場であると信じている。ただ単に講義を聞き、イデオロギー論争をやり、反対のための反対をしたり、自分の知識を切り売りするような合宿ならば、こんなにも多くの学生が集まることはなからう。自分は人間を信じたい。人間はどんな悪人でも、本性は善であると信じたい。常に疑心暗鬼な気持ちで人に接していれば、自己の向上を期すことはできないし、人類の幸福もそこからは生まれてこないと信ずる。自分は現在のような張りのある充実した気持ちで、この涼風の地震仙を去ることができることを本当に幸福に思う。友よ、またきつと会おうではないか。

もしこの合宿に来ていなかったら……

熊本大学(教)三年 川 添 設 代

いままでの生活には、希望も目的もなかった。しかし合宿に参加してほんとにうれしい。私は大変よい友だちと合宿を共に過ごすことができ、生きる希望が明確に出てきたのである。講義中も、討論中も居室にいるときも、私の不明な点をすべて明らかにしてくれるし、講義における重要な問題は、すべて指示していただいた。この友だちと先生の講義によって、私の目的は定まった。私は一人ではない。私は敬愛する天皇を中心とする日本国民の一人である。日本国民として、祖先の切なる願いを実現する責任と未来の日本を建設する責任がある。どうして虚無感などにひたっていられよう。この責任にこたえるために、私はまず第一に、自己の人格の完成を目ざさねばならない。講義された諸先生や班指導の方々、多くの友だちから、私の人格を完成させるために役に立つと思われる言葉が発せられ、それが私の心に刻みこまれている。これらの言葉は、いままで希望も持てずに大水に流されていたような私の心にとって、地底からわきでてくる清水のような言葉だと思う。何年かかるかはわからないが、やがて日本中の泥水が洗われて、清水だけになるよう一生懸命努力しよう。もしことし私が合宿にこなかったら、一生生きがいを持たぬつまらぬ人生を送ったことだろう。主催者の方々はじめすべての人に感謝します。

日本を愛することがわれわれの使命

法政大学(経)二年 引 地 康 夫

人間が人間であることに変わりなければ、どんなに世の中が変わらうとも、その歴史の根本を流れるものがあると思う。ぼくも、君も、あなたも、白人も、黒人も、黄色人種もみんな同じ人間、同じ仲間ではないだろうか。私は以前からこのような考えを強く持っていたのであるが、この合宿でその考えの中に現実逃避の面をたぶん持っていた、ということに気づかされた。つまり現実の日本そのものの中に、ものの考えの基盤を持つべきであったのに、それを人種というあまりにも大きなものを持ってきていたのである。現実の日本、自分の国の人々を愛し、国土を愛するという、もっと自分の身近な、そしてもっと重要なことが、われわれの大きな使命であることをこの合宿で知ったことは、本当にぼくにとってうれしく喜ばしいことであった。

古典の講義がよかった

亜細亜大学(商)二年 亀井孝之

正直に言って講義の内容はまだ理解出来ていない。しかし、やはり合宿にきて良かったと思っている。講義や班別討論で先生や友だちが話したことは、これから自分が勉強していくにつれて、だんだんに自分の心にピツタリしたものになってくるだろうと思われる。国民みなが良識をそなえた人間になり、日本人同士が争うようなことが早くなってもらいたいと思うし、また早くそうしなければいけないと思う。この合宿では、大学での勉強では得られないものを短期間にたくさん教えられた。大学の授業もこういうような実際の話や役に立つ話をしてくれたらいいのと思う。高齢者の方が漢詩や古文を引用して話されるのを聞くと、ぼくは意味はよくわからないけれども「いいな」と思う。中学、高校時代にもっと漢文の時間があつたらよかつたのにといつも考えているので、合宿中に古典の講義を受けたことは、これから精神的に落ちついた人間になろうとするのに、大いに役立つのではないかと思っている。

確固とした勉強の基盤を立てたい

熊本大学（教）三年 坂田道子

この合宿教室ははじめての参加でした。

現在の心境は多少の興奮と陶酔の中で、ただ自分にとって、この合宿がいかに有意義なものであったか、ということがわかっているだけです。こういう内容をもつ会に参加したのも、また自分がこういう問題に関心を持たされたのも始めてで、頭の中は整理がつかない状態です。諸先生方のお話や、学生たちの意見を聞きながら、いままでの自分が、どれほど小さく、狭いわくの中に閉じこもり、安易な生活を送ってきたかを思い知らされた。正直いって、私は全然なんの知識もなくこの会に出席した。しかしすべての日程が終わろうとしている現在、まだはつきりしたものはわからぬまでも、生きてゆくことへの目標とでもいうか、これからなすべきこと、考えねばならぬことのきっかけを得たような気がする。女性であることにこだわるわけではないが、自分の周囲を見まわした場合、男女同権といいながら、こんどのような場に直面して、その視野が狭く、不勉強であることを改めて思い知らされた。しかし勉強するにしても、その基盤となるべきものが確固としたものでなければならぬ。男子とはまた違った意味で（これも今後よく検討してみたい）このような内容のものによく触れ、たえず研究してゆく必要があると思った。まだ未熟なので、今回はただ吸収するだけであるが、それを批判検討し、自分のものとして消化するために、今後一層勉強したいと思う。

人間のまごころに触れた気がする

鹿兒島経済大学（経）一年 鮫 島 健 治

いま考えるときもなく頭の中にあるのは、自分が情けなく、非常な悲しみに襲われていることです。りっぱなお話を聞き、私は今までの自分の生活を反省するだけで、そのお話を正確に判断し、批判するだけの余裕や力が自分ないことを切実に感じた。それらを消化するだけの力もない自分が情けなく、大学まで出していただいている父母に対し、済まない気持ちでいっぱいです。

この会に参加し、私ははじめて人間の誠心に触れたような気がして、大きな喜びを感じています。

言いたいことはただ一つ

立教大学（文）二年 石 井 公 子

この合宿に参加して、私の言いたいことはただ一つ「日本に生まれてきて本当によかった」ということです。愛国心を否定し、いまの社会秩序を否定する現代日本の風潮を考え、またそれらの点を外国と対照してみたとき、私はそれをどう解釈していいのか、いままでずいぶん苦しんできました。

愛国心——それは人として生まれた以上ごく自然のものであり、またそうあってしかるべきものだと考えます。しかるに私の周囲には国を思う心を持たない人が多かったようです。しかしいまこうしてこの合宿に参加したとき、国を思って全国から二百名余の人々が集まり、わが国のすばらしい未来を建設すべく熱心に討論されている姿を見て、喜びの涙があふれ出しました。きっと全国には同じような人たちがたくさんおられるに違

ないし、ここに集まったそれらの人たちと心をつないでゆきたいと念願しています。

悲壮感にあふれすぎている

滋賀大学（経）三年 肥田興一

無事合宿を終了できて感慨無量です。当初去年の記録を見せていただき、果たしてそのようなむずかしいことがわかるだろうかと不安でした。去年は安保騒動があり、日本中が非常に動揺し、また学生に対しては学生の本分を深く反省するように求められ、いま考えてみると日本国全体にとっても、また私にとっても非常にいい経験をしたと考えます。それから一年たってこの合宿に参加し、もう一步考えを深める糸口を与えられたようです。

国文研の先生の話される「国民同胞感」や唯物史観排撃のお考えは、まだじゅうぶんに理解して受け入れることは出来ませんが「世界同胞感」的な考えならわかるように思います。

この合宿は東洋、日本の古典のみを扱われたようですが、西洋の古典にも注目し、新しい観点から世界の人々の立ち場を理解するように考えてはどうでしょうか。国文研の先生方は少し悲壮感があふれすぎているように感じられます。

空理空論に陥らぬようにしたい

熊本大学（教）四年 坂本孝一

他に左右されない自分自身の信念を持って生きるには、どうすればよいか、またできるなら信念を持つとこ

ろまで到達したいと考えたことが、この合宿に参加した動機です。しかし、諸先生のお話や班別討論のみなさんの意見を聞いてみると、精神的支柱や信念は、そう簡単には心の底から湧き上がってこないということがはっきりした。信念を持つためには、人の話を批判するまえに、謙虚な気持ちで聞き、よく考えなければならぬということだが、どんなに大切であるかを痛切に感じた。そしてものを考えるさいには空理空論に陥らず、自分の経験を通して、地についた判断を下すことが、いかに大切であるかということもわかった。このことがすなわち自己確立であり、精神的支柱が本当にできあがるみちだと思ふ。今後おおいに努力していきたい。

正しい方向を見出すために真剣に討議しよう

東京大学（教養）一年 下 村 徹 嗣

われわれの班長の加藤さんと班員全部の方に、私はなごやかに楽しく話し合えたことを感謝しています。私は心からの友だちを求めたいと思つてこの合宿に参加したが、その目的を達し得たのではないかと思ふ。私には国民同胞感とか、われわれの精神的支柱は何であるかということとは、はっきりわからないが、お互いに主義主張は違つても、本当に肝胆（かんたん）相照らし合つて話し合うことが一番大切なことだと思つた。孤独に浸つて自分だけの殻に閉じ込められ、物事を考え批判したところで、何の役にも立たないことはわかつたが、他人に自分の心を本当に理解してもらふことは、なかなかむずかしいことだと痛感した。私は自分の考えは、とても他人に理解されるものではないと時にあきらめたこともあったが、今後はじゅうぶん理解してもらえなくとも、努力だけはしてゆきたいと思つている。それから、この合宿でたとえば天皇に対する考え方について、私の考え及ばないような考え方をしておられる人がいることに驚くと同時に、もっと広い視野に立つて物を考えなければならぬことを痛感した。また私と全然違った立ち場の人の意見を聞いても、何もならないと思ふ

へきではなく、全然違った立ち場の人もじゅうぶん話し合う必要があることをつくづく感じた。私たちは何
も論争に勝たなくてもよい。真に正しい方向を見出すために真剣に討議すべきであって、論議のための論議に
終わってはならないと思う。

全学連が学生のすべてではない

日本大学（文理）一年　　千　　葉　　昇

僕はこの合宿に参加して、非常に力を得たという思いでいっぱいです。以前から僕は学生運動に関心を持っ
ており、少なくとも最近の動向を憂えてきた。現在学生運動の最たるものは、ジャーナリズムにおいても、あ
るいはまた、社会一般においても全学連であると考えているに違いはない。事実僕もこの合宿に参加するまでは
そうだった。しかし最近、全学連を理解するにつれ、それが決して学生運動のすべてを代表しているのではな
い、ということに気づいてきたし、それに対して批判的になってきた。全学連のほかに、何かもっと別なこと
を真剣に考えている学生はいないものかと思つてこの合宿に参加した。全学連のような行動をしている学生や
それに賛成している学生はそれほど多くはない、いやそれ以上に進歩した建設的な考えを持っている学生がこ
んなにもここにいることに心を打たれた。こういう学生たちをこの合宿に呼び集めるまでの国文研のみなさん
のご努力はたいへんなものだったろうと思う。こういう機会を僕らに与えてくださったことを深く感謝する。
諸先生のお話を聞き、自分の不勉強がまざまざと指摘されたようで実は心苦しい次第です。僕はまだ一年生
ですから四年生まで、必ず参加を続けたいと決心しています。

総合性と意志と

岡山大学（法文）四年 三宅将之

この合宿四日間を通じて感じ得た最大のものは、個々の事実、知識の習得といったものではなく、この人生における問題点のは握であった。木内先生の世界を包むようなお話にも、事実についての指摘と、それらの事実が木内先生の身体の中で有機的に総合されている姿、そしてその語られるところが、全体として本当に生命にあふれているように思えたこと。そしてそのような態度で物事を見て行くことが、どんなに大切なことかと感じたこと。木内先生、小林先生の言われたことは、言葉というものによって表象される概念に対して、私自身がもう一歩も二歩もつき進んで考えていかななくてはいけないということであり、その必要を身にしみて感じた。また古典に対しては己れをむなしうして接することが、単にうわつらな態度を指さしたり、古典におもねるといふようなことを意味するのではないことを、ますます強く感じた。この感じを実践に移すには、最後に小田村先生の指摘された力強い意志が、どんなにか必要であり、そのような立ち場から自分を磨かなければならないと痛感した。

人生観の焦点が小さすぎた

修猷館高校（高校生）二年 井上慎一

一言でいって、ぼくの見識、人生観を非常に広めてくれたと思っています。合宿に参加することを決めて「国民同胞感の探求」を読んだときは、恐ろしくなりました。しかし全部わからなくても、何かぼく自身にと

って得るところがあればよい、という気持ちでここに来たわけです。合宿に参加する前のぼくを考えてみると、あまりにも人生観の焦点が小さすぎたという気持ちでいっぱいです。諸先生のお話を聞いて本当にそれが感じられました。とくに感激したのは、小林秀雄先生の「実際に体験して勉強していくんだ」という言葉です。本当に真面目に勉強されてきた先生のお人柄がよくあらわれていて、尊敬の念にかられました。古典の重要さもあらためて感じたものの一つです。いままで古典を現代に照らして考えるということは、あまりしなかったのですが、こんど実際に現代の姿と見比べてみて、古典の持つ意味、重要さといったものがわかったような気がします。先生の話聞き班に帰って討論していると、ぼくは黒岩先生のいわれた二合目どころではなく、この合宿で初めてふもとにさしかかったんだということを痛切に感じました。いまから少しずつでも、ふもとから一合目へ、さらに頂上へと努力してゆきたいと思っています。

世界の歩みや政治に目を向けよう

長崎大学(経)二年 西崎道教

合宿の記録を読んでいるうちに古典のことがでていたが、それまで私は日本の古い時代の書物など関心がなかったし、この合宿は右翼的なかなと思ってた。しかし主体性をもって、批判的に聞いていけば、どんなものだったかいい、というくらいの気持ちで参加した。しかし実はそうでなかった。

木内先生のお話を聞いて、先生の日本を愛する情熱をひしひしとその中に感じることができた。また世界はいまこういう状態なんだ、というお話を聞いて、ぼくは現在まで政治への無関心から、判断の基盤というものがなかったが、ここに来て、ほう、そういうものかな、ぼくも世界の歩みとか政治とか政治とかいうものに、これからは目を向けなければいけないことや、また人生について考えなければならぬということなどを、班別

討論などで強く感じた。来年もまた来たいと思う。

真実なものに対処する決意を得た

鹿児島大学(法)三年 村 永 直 美

合宿に初めて参加したが、感想を書くといっても、いま言葉でそれを表現できるほど、この合宿が自分に与えた影響は単純なものではない。この合宿は思想的な面で、一つの統一があるように見受けられるし、そのためでもあるだろうが、いかなる思想の人間であろうと、この合宿に参加し、謙虚な態度さえ失わぬならば、思想を超越し、真の人間の生き方というものについて考えようとするに違いないだろうと感じた。この合宿が世間の一部で、思想的に偏向していると考えられている面もあるかも知れないが、この合宿に参加する機会を得た人々は、心から喜んでいられるであろうと、私は確信する。私自身この合宿に来て、自己の無知と物事に対処するときのあいまいさを、はっきり指摘されたような気持ちでいる。

諸講師と国文研の方々の真剣な態度に対して、学生の無礼さが目立ち、私自身学生の一人として誠に遺憾に思った。とかく私たちは何ごとに対しても批判的でありすぎる、それは私たちだけの責任ではないと考えるが。私はどちらかというところ、この合宿では思想的な面で同調を得るということよりも、自己の生き方を磨くという点に留意したつもりであるが、真実を追求するということのきびしさ、むずかしさを痛感するあまり、それにおそれをなしていた。しかしこの合宿では、その困難さに対処しそれを乗り越えてゆく決意を得た。真実の追求のむずかしさ、きびしさを思うとき、私たちにはもっと真摯な態度が要求されるはずだと痛感する。私は参加者の意見発表を聞いて、それをいたく感じた。

自分の考えを外に表明すべきだ

鹿児島大学（文理）四年 鳥 飼 克 美

私は平素自分の意見を述べることに、いつもためらいを抱いてきた。それは私自身の中にある考えが、漠然として不安定であるという自覚よりも、むしろ私自身の中に形成された考えを、外に表明することによって、その考え方が私にとって存在することの意義を失ってしまうというおそれからでした。しかしながら、それは一つの考えが価値と意義そのものを失うのではなくして、外に対して問いただされることによって、より客観的で確固としたものとなるために、不可欠のものであることがわかってきたような気がします。それは私が班別討論その他の時間に、友だちとかわした議論や話し合いによって、気づくことができたと考えます。意見というものは、内部で真剣に充足させることが必要であると同時に、外に対してその価値を問い存在を主張し、批判を仰ぐことによって、さらに確かめられ、ほんとうのものになって行くのだ、ということはこの合宿で痛切に知ることができたと考えます。

未知の人に隔たりを感じなかった

神戸大学（経営）一年 村 木 貞 之

はじめて合宿に参加し、祖国日本のことを真剣に考える多くの人たちに接して、何が正しいのかということ、心から確信できたように思います。まったく知らなかった人たちと始めて会って、そこに同僚感をもって親しく友情をかわすことができ、何の隔たりも感じなかったことは、ほんとうにすばらしいことでした。今後

日本全体がこの同胞感をもって、いらだたしい対立もなく、一つの道に進んでいくことができたなら、世界に誇るべき生命をもった日本になることができると思います。それにしても、日本民族の偉大な精神の一端をこの合宿で知り、ほんとうに有意義だったと思います。

心を支える「何ものか」が暗示された

鹿児島経済大学二年 養 毛 長 英

私は何か生きるための心の心より所を得たような気がする。木内先生の広く大きな立ち場からものを分析的に、また正確に見ていく鋭いお話と小林先生のあの深いものの方に、新しい人生哲学を学んだように考える。その静的にしてなお奥深く、あらゆる学問を総合し尽くされたような人生観のしからしめるところであらうと、ただただ感じ入るばかりである。のみならず心を支える「何ものか」が漠然とではあるが暗示されたように思う。ベルグソンの存在を知ったことは一つの大きな刺激になった。河先生の確信に生きる勇氣の何たるかを知らされたように感じる。

何はともあれ、人の話を聞き、自分という人間を發展展開して行くことを企画してくださった国文研諸先生方には、全面的な感謝を申し上げたい。勉強の一方法に古典を加えることの必要性も、これまた痛感させられたことである。ただいきなり聖徳太子、松陰などの難文を読まされても、字についてゆくのがやっとなで、行間ににじむものを読む心の余裕がなかったのは、私一人だけだろうか。一考の余地があると思う。もう一つ忘れてならないことは、よき友をたくさん得たことである。これは私の一生をいっそう豊かなものにしてくれるであらう。最後に一言。今後ともかような機会のまた訪ずれんことを。

自分の意見を的確にいうことのむずかしさ

鹿児島大学（文理）四年 羽田光子

今夏の合宿に参加して、昨年感じたことをますます深く心の底まで思い知った。それは班別討論のさいに、他の人の意見を聞いて、自分がそのとき感じたことを、その場で正確な言葉で表現することが、どんなにむずかしいことであるか、ということであった。言葉のもつ意味、概念をはっきり認識し、それを駆使して意見を述べ合うならば、さまざまな対立関係も解消されるように思う。これからその修練がますます必要であると痛感した。

この合宿を通じて、私はなにかたいへんな考え違いをやっているのではないか、と思った場面がある。しかしそれは、まだはっきり「間違っていた」と言えるような段階に至らなかったことを残念に思う。それは戦後使われ出した男女平等という言葉をはき違えて、何でもかでも平等であるというように解釈されているのは誤りであって、女性には女性の生き方があり、こんど生まれてくるときは男に生まれてきたいなどという馬鹿げたことをいう女性がいるが、それはたいへん間違っている、といわれたことである。私はこのお話にもこのすこい反発感ずるとともに、やっぱりそうなのだろうかという二つの思いが交互にわき上がってくるのをどうしようもなかった。この合宿中、女子学生同士で話し合った「女性の生き方」というテーマでの話し合いの方が、何か切実に、自分の身近かに迫ってきたように思う。

帰省してからよく考えてみたい

神戸大学(理)二年 小林 邦 宏

ぼくにはたいへんむずかしく、まだはっきり理解しかねることが大部分なので、ゆっくり謙虚に考えたいと思う。きょうのところでは、各自が同僚感を持ち愛情をもって、相手の立ち場をよく考えて生活していこうという考えには心から賛成します。賛成というより、それはもともともいいことだとぼくも考えます。ここから先が問題なのです。諸先生のおっしゃったことを家に帰ってゆっくり考えて判断します。またぼくたち自然科学を学ぶ者の立ち場というものも、ぼくには大きな問題です。合宿参加以前は自分は少し間違っていたとも思うが、どこがどうなのかどうもはっきりしませんでした。家に帰ってからよく考え、今後より正しい生活をするべく努力します。

学生時代最後の合宿参加を終わって

鹿児島大学(文理)四年 湯 通 堂 義 弘

大学に入学した年の佐賀合宿から、こんどの合宿までのことをいま感慨深く思い出す。思えば全然無知であった私は、無知は無知なりに、何らかの漠然とした思想とか、見方というようなものを持っていたように思う。そして漠然とした思想を漠然としたなりに放置し、またそれが明確なものでないこともそれほど気にせず、に日常の事物に接していたように思う。それは実はせつない加減な判断に基づき生き方ではなかったかと反省させられます。しかし私はこのいいかげんな生活の中でも、日常われわれが接する多くの事物にはそれ

それ重大な意味があり、問題があることを発見した。すなわち人生そのものに関して、真剣な問題意識を持つということです。人が苦悩するということは問題を解決するための苦悩だと思ふ。私どもの日常の生活は、ともすると自己反省の気さえも起こさぬままに、平凡にあっさりと事を流しているように思ふ。私はこの合宿に参加するたびに、このあっさりとし流し去ってしまったている大切なことを、どんなにか自分の心に引きとめ、それを反省する機会を与えられ、また真面目に生きることの苦しさと、喜びとをどれほど味わったことかはかり知れません。私は来年社会に出るが、そのときはこの合宿で骨身にしみたスピリットを呼び戻し、良識ある社会人として生きてゆきたいと思つています。

(一般参加者から)

学生諸君もりっぱだった

大分県 商業 三重野 悌次郎

家庭的事情から、ここに参加することに多少の無理があつたが、それを押し切つて参加させていただいた。いま合宿が終了して、不思議に思われるほどのよろこびを感じています。いなかの安易な生活の中で、ともすれば怠りがちになる自分にとって、この合宿を通じてのつながりが、自分を励ます鞭(むち)となつてくれる予感がします。

初めてお会いする国文研の方々の態度が、いままでの合宿記録を通じて描いていたイメージを少しもそなわず、具体的な記憶となることもよろこびの一つです。学生の諸君もりっぱだったと思います。

やはりまことの友が見出された

熊本県中学校教諭 牧野祐児

三回目の合宿参加であったが、前二回とだいぶ変わった見方をしていて自分自身を発見した。前二回は学生であったが、今回は社会人として参加したためであるかも知れない。四月以来自分をよくみつめる余裕もなく、また日ごろ語り合う友もなく、うやむやのままに社会人としての第一歩をすごし、自分で自分が空虚に流れるのを感じていた。私たちのように子供に接して生活していると、きょう、あすの務めにのみ追われて、広く社会のこゝろを見つめ、考えを深めてゆく時間がきわめて少ない。

強く感じた喜びは、ことしもまた、新しく友人が得られたということ、これは全くうれしいことであつた。日ごろ話し得ないような深みのあることを、じゅうぶんに話し合うことができ、心のなごむのを感じた。

本当に楽しく過ごした

大洋造船株式会社 高橋亨

卒直にいつて、私は本当に楽しく過ごした。われわれ社会人はつね日ごろ、学生たちとは違った感覚で政治経済その他をみている。しかしこの会に参加して、ここに集まった学生諸君が、何かを学び取ろうとして、いかに真剣に議論し合っているかという姿を見て深く心を打たれた。全学連のような行き過ぎた連中ばかりが新聞紙上ににぎわし、この前の三池争議のときなどわれわれはどれほど悲しく思ったことだろう。しかし学生を批判する前にわれわれ社会人も、もっと真剣に考えねばならぬと思つた。それを知らせてくれたのがこの会で

あった。またわれわれ社会人の中にも、学生以上に現在の不安定な社会を心配している人々が多数いると思うので、今後は社会人の参加がふえることを期待したい。最後に若い情熱ある学生諸君を友人に選んでくださったこの会の方々に深く感謝します。

視野を広く思いを深く

神奈川県高校教諭 中村 昭

まず第一にこのような合宿を計画し実現してください。大教協、国文研の諸先生方に深甚なる感謝の意を表します。混迷の時代に、いかに生くべきかの指標を見失い、さまよっている若人の群。祖国の将来を双肩に荷なっている彼らに、真の日本人としてのあり方を考えさせる機縁を作っていただいたことを心から感謝します。

次に学生諸君の意見発表を聞き、謙虚に自らを反省し、真剣に道を求めようとする態度に思わず「しっっかり頼むぜ」と肩をたたきたくなるような深い感動を覚えました。きょうのこの感激を胸に秘めて、どうか日本の精神の再建のためにがんばってください。視野を広く、思いを深く、あすの世界の光明となってください。私も及ばずながら、ともども微力を尽くすことをここにお誓いする次第です。

自分に何か鉄ついで下されたような気がする

神奈川県高校教諭 梶ヶ谷 一郎

教員生活十数年とかく安易な、惰性におちいりやすい傾向のあった自分の心に、何か鉄槌(ついで)を下されたような感じがしてなりません。教育とは魂の触れ合いだといわれた小林先生のお言葉、国民教育がいまなお

おざりにされている日本といわれた小田村先生のお話などから芸術、学問、思想、教育などのすべてが民族精神とのつながりを持っていることを、明らかに知ることの大切さを強く感じました。あるいはまた木内先生の広い、深い日本ならびに世界に対する洞（どう）察力、ものを考える方法、学問する態度は、一朝一夕で出来るとは思われませんが、せめてその考え方の糸口のようなものでも、たぐりえたのではないかという気がします。共産主義は誤りであったという先生のお話も、とくに私の場合には有益な指針となりました。私は自分の歩む一すじの道に自分のすべてをかけて生きていきたいと念じ、教育正常化運動に全力を尽くしたいと思います。

三つの感想

神奈川県高校教諭 亀掛川博正

参加する前に、私は次の三点からこの合宿をみ、直接体験することによって何らかのものを得たいと考えた。第一はもとよりこの合宿の内容である諸講師の講義あるいは班別討論を聞き、意見を交換することであり、第二はこの会を主催した大教協、国文研がいかなる目的を持って行動しているかをつぶさに知りたいということであった。また第三は参加者の大部分を占める学生が、いかにものを考えているか、またこの会に出ることによって、いかなる影響を受け、成果が得られるかを知りたいという点であった。

諸先生の講義の傾向色合いは、昨年参加した学生の話から判断して本年はやや変わっているようであった。小林秀雄氏の講義には深い感銘を受け、氏が日本知識人の良心のよりどころになっていることを感じ、その論旨に強い共感を禁じ得なかった。

国文研会員諸氏の活動については真に敬服にたえない。一昨年来私も何かシットしてはいられない衝動にかけられ、同憂の知己、友人と語り合ったが、何らみるべき活動はできなかった。しかし国文研の方々の熱情的、

真しな活動ぶりを目の前にして、まさに将来の指針を得たという感を深くする。学生諸君は私が考えていた以上に優秀であり、学問の方向を求める志において真剣であった。しかし中には安易な気持ちをもって対処しようとする傾向もみられた。がともかく大部分の学生は一服の清涼剤を得たような感じをもってこの合宿から帰ることと思う。

最後に私自身まだじゅうぶんにこの合宿の成果を整理していないが、現代の日本の中に一すじの光明を見出したような気がする。主催者各位に対し深く謝意を表したい。

十年二十年後の光となろう

会友 熊本県自由文教人連盟 谷 鉄 馬

大教協、国文研の諸先生の献身的運営に衷心から感謝します。

この会は回を重ねるごとに、参加学生の数もふえていることを喜びとし、効果を急がず、地道に今後ともこの合宿を持続していただくならば、必ずや十年二十年後には、この光はやがて日本の中堅たるすべての青年を照らすであらうことを期待いたします。

清明なふんい気であつた

会友 熊本県中学校教諭 古 市 庸 夫

若い大学生らとともに、諸先生方のご指導を謙虚にお受けしたいと思ひました。国文研の諸先生方のお熱心で寛容な合宿運営と相まって、三泊四日のたぐいなく清明なふんい気がありがたく身につけることが出

ました。私は不必要な、あるときは無意味な活動に、自分の一生の相当な時間を空費していることに気づいて驚きました。

学問思索の上で、また職場活動の中で、もっと素材に、もっと切実に、もっと正確に、われわれ自身と日本民族の行く末を見つめたいと思いました。

あわててはいけない、あせてはいけないという人もいます。一応そのとおりでしょう。しかし世界の動きは寸秒も休止することはありません。日本民族を離れ、祖国日本を忘れて何が現実でしょうか。学問思索も、社会活動も現実の真相を見落とし、観念の遊戯に墮してはいけないと思います。

若い世代の人々を大切にすることは大切です。しかしそれが決して彼らを甘やかすことでないことを実感したことをうれしく思いました。

傍観者の態度の卑怯さを意識

鹿児島県高校教諭 白尾達哉

重苦しい緊張感はまだとけない。自分は軽い気持ちでこの合宿に初めて参加した。

二年前に大学を卒業し、鹿児島市内のある高校につとめている当年とって二十四歳の教師だが、自分自身に内包する思想の混乱はいかんと整理しがたい。広い知識と体験を得て自己の思想の完成に努めたい、その一助にでもなればと思つてこの合宿に参加した。

参加してまず感じたのは、講師も司会者も学生も血みどろになり、祖国日本の精神的支柱を求めて打ちこんでいる気構えの真剣さであった。全くその気力に圧倒されてしまう思いがした。そしてその真剣さに支えられて、人間と人間がはだで感じ合っている姿をみ、それを実に尊いと思つた。本当に頭が下って、自分の傍観者

的態度の卑怯（きょう）さを意識した。しかしまた、その真剣さが妥協を許さぬ激しいふんい気となって会場全体に覆っているように思った。

自分はこの合宿で多くのものを学んだと思っている。現在はまだ頭が混乱して整理できないが、きっとこの体験が大きな変化を自分に与えるだろうことを予感する。

あ と が き

この書を今夏の第二次阿蘇合宿教室にやっと間に合わせる事が出来た。原稿は、ご老齢の花田大五郎先生をはじめ、各講師のご協力によって、すでに昨年末までにその一部を用意することが出来たが、編集委員の怠慢でこのように遅れてしまったことをおわびしたい。しかしその間、しばしば編集方針を検討した結果「夜の検討会」や「はしりがきの感想文」に、かなりの紙数をさくことになったことも、あとから考えると一つの収穫であった。

それはともかく、いまこうして「国民同胞感の探求」三部作の最終編を世に送り出そうとするわれわれ編集委員の胸中には、筆舌に尽くせぬ思いが去来している。その無量の思い、切なる願いは、本書をお読みくださるすべての人々の心につながり、ひろがりゆくことをわれわれは祈念熱禱（とう）してやまない。それにしても、第四回（阿蘇）第五回（雲仙）第六回（第二次雲仙）の三回の「合宿教室」のレポートを、こうした形で世に問うことが出来たのは、社会各層の有識者をはじめ、広汎にわたった読者各位のご声援がなくては、とうてい出来ることではなかった。なお本書のカバーは、辻寛一氏（衆議院議員）のご厚意により、日展特選の女流画家、渋谷江津さんがとくに筆をとってくださいましたものである。お二方に深く謝意を表したい。また前二書と同様、理想社の佐々木社長

と井上智行氏に大変なご無理をお願いし、ご協力いただいたことを心から感謝する。

すでに何回か重ねられたこの合宿教室から社会に出ていった人たちの数は、相当数にのぼっている。これらの人たちのことについても、機会があればご紹介したいと思う。学生時代から現代日本の問題点を多角的、総合的に研究したこれらの諸君が、社会にはいつてから歩んだ道は、決して平易なものではなかった。しかし平坦(たん)ではないその道を、社会に出てからも真剣に切り開いて進んでいる姿は、いつか世の心ある人々の目に留まるときがあるに違いない。またそれは、後から続くいまの学生たちにも、きっと大きな指針となるであろう。われわれ編集委員は、それらの人たちのことを、やがてなんらかの形で紹介する日があればと、心ひそかに願っている。

「合宿教室」はこれからも毎年続けられていく。ことしの阿蘇合宿では、本書を資料にして、学生幹部諸君が勇躍班長、副班長の任についてくれると思うと、これまで長い間の合宿運営に当たってきた全会員の労苦も、ここに結実していくような気がする。こんどの合宿では新しい試みも企てられるであろうし、その成果についても、おそらく別の形式で世に問うことになろう。年々その内容が充実していく「合宿教室」の前途に、また若き世代の学生諸君の上に、大きな希望と期待を寄せながら、ここに三とせにわたる編集の筆をおくことにしたい。

昭和三十七年六月三十日

編　集　委　員



一 本書の初編—
(第一編)

B 6 判 第四版以後 500円
365頁 改正定価 90円

国民同胞感の探求

—34年夏阿蘇における大学生との“合宿教室”から—

目次

はしがき

“合宿教室”誕生の背景

一 現代の国民思想について

二 全学連の動きについて

三 全学連にどう対処すべきか

四 時代の断層と取り組んで

“合宿教室”運営のあらまし

一 講義と班別討論の関連性

二 チューターシップ

三 人生観に裏づけされた諸講義

阿蘇“合宿教室”の記録

一 未知の者にここに集う(第一日)

二 緊張する心を講義と討論に(第二日)

三 心の揺らぎと青春の歓喜と(第三日)

四 “時代の断層”をふみ越えて(第四日)

五 国民同胞感の生成へ(第五日)

はしがきの感想文から

あとがき

—写真—

講義

人生・学問・祖国……………川井 修治

学生生活に対する要望……………宝辺 正久

現代と心理戦……………今立 鉄雄

学生運動への疑問点……………植木九州男

社会思想の構造とマルクス主義……………

学問論……………長野 敏一

陶淵明の詩における東洋的人間像……………戸川 尚

わが国固有の人間観の特徴……………津下 正章

日本人のころ……………野口 恒樹

マルクス経済学の生成と近代経済学……………花田大五郎

畏と敬と恥……………石村暢五郎

第二次大戦論……………水野 武夫

歴史なき現代に思う……………中山 優

マッカーサー憲法と国民主権……………木下 彪

平和国家建設の基本的課題……………森 三十郎

班別討論・意見発表会・検討会等……………小田村寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等……………



— 本書の続編 — B 6 判 第三版以後 600円
 (第二編) 433頁 改正定価 100円

続 国民同胞感の探求

— 35年夏大学生との“雲仙合宿教室”から —

目 次

- はしがき
- 現代の問題点
- 一 初の宇宙人・ガガーリン少佐
- 二 ソ連の教育と日本の教育
- 三 全学連と大学自治会
- 付、自治会活動への所感
- “雲仙合宿教室”の目ざしたものの記録
- 一 学生による全体討議(第一日)
- 二 講義から班別討論へ(第二日)
- 三 唯物史観の横行を許さず(第三日)
- 四 経済の諸問題とその研究方法論 (第四日)
- 五 “開かれた日本人”(第五日)
- はしりがきの感想文から
- 十日後に書かれた感想文から
- あとがき
- 写真 —

講 義

- 体験と思想……………夜久 正雄
- 現代の思想的課題……………斎藤 知正
- 新中国建設の原動力……………佐藤慎一郎
- 日本文化の伝統と現代的意義……………黒岩 一郎
- 現代政治の批判と新しい指標……………羽田 重房
- 世界の経済と日本の経済(一)……………木内 信胤
- 良識について……………花田大五郎
- 五日間の生活をともにして……………小田村寅二郎
- 思いのままに訴う……………
- 木下 彪 野口 恒樹
- 水野 武夫 峯 辰次
- 植木九州男 津下 正章
- 班別討論・意見発表会・検討会等

昭和三十七年八月一日 第一刷発行

定価 五〇〇円

千 八〇円

〔続々 国民同胞感の探求〕
— 第三編 —



編者 大学教育有志協議会
国民文化研究会

編集委員代表 小田村寅二郎

東京都港区赤坂青山南町四の二一

東京都新宿区赤城下町四六番地

発行者 佐々木隆彦

東京都新宿区赤城下町四六番地

発行所 株式会社理想社

電話東京三四一局 〇七〇〇六番
振替 東京 七八三〇三番

落丁・乱丁のものは、
お取り替えいたします

印刷 鈴木活版／斗南印刷・製本 大場製本所

